
尋獄 2 (SURGE GARDEN)

砂上 巳水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

尋獄2 (SURGE GARDEN)

【Nコード】

N0916G

【作者名】

砂上 巳水

【あらすじ】

超感覚者。人の身で在りながらそれを超えた感覚。それは何のために生み出されたのか。行方不明だった父から連絡を受け、国内最大級のサファリパーク、紀行園で再会の約束をした関野朝奈。しかしそこに父が現れることはなく、突然謎の灰色の生き物が無数に現れ出した。朝奈は父探すため、生きて帰るために必死に戦うのだ。た。（注）前作、尋獄（BLUCK | DOMAIN）を読んでいたと話が分らないと思います。出来れば前作を読んだあとでお読みください。

<第一章>地獄を尋ねる

尋獄2 (SURGE GARDEN)

<プロローグ>

手術室のような小さな部屋に数人の人間が居る。

「やっと完成した」

「これで、これで私たちは救われる！」

白衣を着た男と女が感激した様子で言った。

「まだ安心は出来ない。様子を見て、それで問題がなければ初めて『完成』だよ。それまでは拘束を解いては駄目だ」

白髪に短い白ひげを生やしたやつれた男が注意する。

「分かっていますよ博士。私だって研究者ですから」

白衣にマスク、白帽子を着ているため外見はさっぱり分からないが、口調から察すれば女性らしき人間がそう言った。

その途端、彼らが喜びの目で見ていた物体の目が見開かれた。

円柱を横に倒したような培養用のカプセルに入っていた『それ』は、カプセルのガラスを突き破ると女性らしき人間の頭をいきなり驚掴みにした。

「ひ、ひいいいいい!？」

女性は考えもしなかった事態に素っ頓狂な声を上げ必死にもがく。だが、『それ』は容赦なく女性の頭を握りつぶした。

「な、何だ!？」

白髪の研究者は目の前のあまりにグロテスクな光景に固まってしまった。

『それ』はゆっくりと起き上がり、周囲をもの珍しげに見回す。そしてこちらを恐怖の目で見る白い集団を視界に入れると、おも

ちやを見つけた幼児のように嬉しそうに飛び掛った。

尋獄2 (SURGE GARDEN)

<第一章> ” 地獄を尋ねる ”

静岡県のとある町に、『紀行園』と呼ばれるサファリパークがある。

ここは国内最大級のサファリパークで、総面積約二十七平方キロメートルという、日本ではかなり巨大な敷地を持っていた。

かつては多くの観光客で栄え圧倒的な人気を誇っていたのだが、近年名を馳せた人工島である『水憐島』や屋内都市『常世国』などの最新設備を持ったスポットの出現によって、今となってはあまり客足は良くなかった。

とは言っても、田舎の動物園や小さなテーマパークよりはまだまだ人気はある。現に今もこうして車で見学したり、歩行ゾーンを歩いている人間も数多くいる。

関野朝奈せきのあさなもその一人だった。

黒に近い茶髪のボブヘア、くつきりとした自然な二重、少しだけ下向きに傾いている大きな目、下唇は少し太めで笑うと笑窪が見えそうな顔。

服装は白いパーカーに、一般的な長さの赤と黒のストライプのスカートと、今時の女の子としてはあまり飾り気がないものを着ている。

高校三年という、受験期真っ只中の現役女子高生である彼女が何故ここにいるかといえば、込み入った事情があった。

彼女の両親は離婚している。関野という名も母方の名前だ。

何が切っ掛けで二人が別れたのか朝奈には分からないが、どうやら母の方に理由があるらしいということだけは知っていた。

朝奈が中学校に入った頃からだろう。いつも何やら良くわからない施設で働いていた母と、研究者である父はすれ違うことも多く殆ど一緒にいることが無くなっていった。

二人が分かれたのは十五年前の事件が切っ掛けだった。

何とかという山荘で大気汚染物質が漏れると言う事件があり、その場には朝奈の父も居た。

父はその事件があつてから人が変わったように母に冷たくなり、母を避けるようになった。

理由はまだ幼かった朝奈には分からなかったが、母が何かを隠していたと言っただけは分かった。

離婚後、今から三年前。父は突然姿を消した。

社会的に有名な地位についていた父の疾走は、マスコミや世間を騒がせた。当時はほぼ毎日のように朝のニュースで父の顔が流れていた。

だが、何事も飽きとはあるものだ。

失踪から三年も経てば誰もそんな昔のことには構わなくなる。いつしか朝奈の父は死亡扱いされ朝奈自身もそう思っていた。

そう、あの電話が掛かってくるまでは――……

『チュラツチャーツテヨォー……』

鬱陶しいような着メロになる。朝奈が好きなマイナー芸人「ロンリーポーカーフェイス」のテーマ曲だ。

この芸人は舞台上上がると一言も喋らず、一人で意味の分からない行動をし続けるという、かなり変な芸質のため人気が無かった。当然テレビに出たことはまだ一度しかない。

そのため殆どの人間が存在を知らず、曲を聴いても一体これは何の曲なのか誰一人分からないことが多かった。この曲を着メロにしている朝奈は相当な物好きだ。

まだ朝の六時前だというのに一体誰が掛けて来たというのだろうか。朝奈は狭いベットから寝ぼけ眼で電話に出た。

「はい、どちら様ですか？」

電話の相手が黙っているので朝奈は聞き返した。

「……どちら様ですか？」

「……朝奈……僕だよ」

「え？ お、お父さん!？」

忘れるはずもない父の声が聞こえたことに驚く朝奈。

幽霊が出る時間でもないし、ちゃんと起きているという自覚もあるから夢でもない。どうやら現実に関父から電話が掛かってきたらしい。

「本当に、お父さん？」

半信半疑で聞き返す。

「ああ、僕だ。元気だったかい？」

「お父さんは死んだと思ってた。何で……何でこれまで連絡してくれなかったの？」

朝奈は目に涙を浮かべながら電話に耳を押し付ける。

「すまなかった。父さんは今、ちよつと極秘の研究機関に在籍して
いてね、何度も電話しようとかこれまで頼んだんだが、中々許可が出
なかったんだよ。本当にごめんね……朝奈」

「極秘の機関？ 許可？ どういうこと？」

「今は詳しくはいえない。今日の朝十時に、紀行園のフリーゾーン
まで着てくれないかい？ そこで全部話すよ。今の僕の状況と……
あれから何があったか」

「紀行園ね！ 昔お父さんと一緒に行つたことがあるあそこでしょ
？ 分かった。そこに行けばいいんだね」

「ああ、来てくれ。待つてるから」

その言葉を最後に電話は切れた。

フリーゾーン 午前 11:06

現在の時刻午前十一時。

太陽の光が燦々と降り注ぐ中。朝奈はフリーゾーンの駐車場内に
ある噴水の淵に座り、ずっと父を待ち続けていた。

あの電話が悪戯でないのなら、父はとつくに現れてもいい時間帯
だ。

「どこにもいない……」

何かあったのだろうか。朝奈は父の身を案じ、気が気でなかった。
フリーゾーンはハート型に道が出来ているこの紀行園の丁度中心
部分、つまりハートを正面から見たときの上の凹み部分にあたる場
所にある。車のコースを進んでいた人間も、歩行コースを進んでい
た人間も、食堂やトイレなども設置されていることから、ここをパ

ーキングエリア感覚で利用することが多い。

そうになると俄然人は多くなり、より一層朝奈は父を探す為に頭をきよるきよると振り回す羽目になった。

そんな朝奈に今、一人の男が近づいていた。

迷いの無い目を浮かべ、初めから彼女に声をかけると、そう決めていたような動きで瞬く間に隣に座る。その気配に朝奈は父が来たと気づき横を向いた。

「よ、君一人？ 良かったら俺と一緒に遊ばない？」
ナンパだった。

朝奈は酷い不意打ちだと思った。

歳は二十四から二十六くらいだろうか。薄い茶色の、頭の中心の毛が長い短髪に、グレーのビジュアル系ジャケット、それと御揃いのズボンを履いている。異常に薄い眉と縦長の目、魔女のような鉤鼻が特徴的だ。

「……あゝ遠慮しときます。私人を待っているのです」

朝奈は不機嫌さも露に露骨に嫌がった。

「何だ、彼氏を待ってたのか。じゃあ仕様がないな。邪魔者はとつとと消えますよ」

意外にもすんなりと男はあきらめ離れていく。別に悪気は無かつたらしい。ただ純粹にナンパをしただけなのだろう。

「悪いことしたかな？」

朝奈は邪険に男を扱い過ぎたことを少し後悔した。

フリーゾーン

東駐車場 午前 11:09

「小林、なんだよ。また振られたのか？」

朝奈をナンパした男に向かって、彼の四人の仲間の一人がそう言った。

ここは駐車場の一角でフリーゾーンの右の端、つまり木々の横、このエリアの入り口付近だ。

ビジュアル系の男、小林は囃し立てる仲間たちにクーラーを気取って言い返した。

「俺は恋人を裂くような卑しい男じゃないのさ」

「よく言うぜ、前のお前の彼女って純一の元カノだろ？」

「元だからいいじゃねえかよ、それに俺にとっても今は元カノじゃない」

ふて腐れたように小林は言い返す。

彼らは地元の高校生の集団だった。

今は三月で春休み。高校生にとっては短くもなく、長くも無いという中途半端な休みがある時期。

彼らの学校はアルバイトを禁じられているため、この時期はとくにやることもなく、友人たちと暇を潰すことしかできないのだ。彼らがこんな朝っぱらからナンパをしているのもそのためだった。別に本気で恋人を作る気など彼らにはない。

まあ、出来ればできたで嬉しいのだろうが、あくまで暇つぶしの遊び。そう考え、彼らはナンパを繰り返していた。

「おい、あれ見ろよ！ 修羅場じゃん？」

ピンク色の無地の長袖に黒っぽいズボンを履いた、細長い体付きの男がエリアの反対側を指差してそう言った。小林がそちらを向くと揉み合っている人間が見える。男二人に女一人の三人だ。どうやら色恋沙汰が原因のケンカらしい。

「あゝ修羅場だな」

小林はただの時間つぶしのつもりでその光景を見つめた。

「……………え!？」

一瞬の出来事に我が目を疑う。

揉み合っていると思っていた三人の内一人が倒れた。

首から夥しい量の血を噴出しながら。

ショッピングモール 午前11:05

朝奈の居る噴水から駐車場を右に二十メートルほど進んだところに、直方形の形をした小さなショッピングモールのような一階建ての建物が建っている。

その前には数多くの屋台が展開されており、焼きそばといった定番メニューもあった。

「すみません、焼きそば二つください」

三十歳ほどの男性が注文をした。男はオレンジの派手なトレーナーに青いズボンといった、ダサイ格好だ。

顔はオデコが広く、二つに分けた耳まである髪の所為で、見事にそれが強調されている。垂れ目気味ということもありそのオデコの迫力は半端ではなかった。

「兄ちゃん、よくここに来るね、今日はあの彼女さんは一緒じゃないのかい？」

「あ、覚えてくれましたか。それが、逸れちゃったんですよ。今探している所なんです。丁度もうすぐ昼時だし、ここで待っていれ

ば合えるかなと思ひまして」

屋台のおっちゃんの気さくな言葉に男、八木健太は情けなそうに答える。

「そうか、駄目だぞ。男はしっかり女の子を守ってあげなくちゃな。知らない間に他の男に取られるぜ！」

「はは、そうですね。今度からはもつと気をつけます」

健太は苦笑いすると焼きそばを受け取り、噴水から見てショッピングモールとし字につながっている広場へと向かった。

「はあ、やっと出来た彼女なのに三度目のデートで振られたら堪らないな。何とか探るか、あいつ何時も携帯を家に忘れるから……。持ち歩いてさえいてくれればこんな苦労はしないのに」

下手したら今日は恋人を探すだけで終わってしまうのではないかと、健太は不安になりつつ広場に腰を下ろした。

猛獣ゾーン 午前 11:08

「はーい、すいません。危険ですのもつと離れてくださいね」

作業服に身を包んだ坊主頭でつぶらな瞳を持つ男、飼育員の三上光智^{みつち}は作った笑顔で柵に近づいた客を注意する。

ここは猛獣ゾーン。紀行園の中でも最大の見せ場だ。

入り口からもつとも遠く、もつとも出口に近いところにあるこのエリアは、車コースでも歩行コースでも一番の人気を持っていた。

車コースでは柵などが無く、そのまま真横を肉食動物が歩く様を見れるのだが、歩行ゾーンは円柱を二つに割ったような柵が間にあるため、あまり動物に近づくことができない。

この影響で注意をしているにも関わらず、多くの客が柵に顔を押し付けるようにしてへし合っている。

「全く、このエリアだけはいつも人が多いんだよな」

三上は草食動物のエリアの考えを考え、溜息を漏らした。

「その坊主頭君、ちよつといい？」

「？」

いきなり見知らぬ女性になれなれしく声を掛けられ、三上は反応に戸惑った。

「なんですか？」

「あれってなんて言う動物なの？ 初めて見るけど」

モデルのような高い背にスリムな体系、きりりとした男のような目つき。そして女性としてはかなり短めのショートヘアといった井出立ちの女性だった。

「私じゃなくてあれよ、あれ」

いつまでも自分を見ている三上を不思議がったのか、女性は丁度通りを歩いているライオンの方を指す。

「え？ ライオンですよね？」

ライオンを知らないのかと、不思議そうに聞き返す三上。

「ライオンを知らないわけないでしょ。その向こうよ。ほら、あの灰色の猿みたいなの。私これまで色々動物園取材してきたけど、あんなに変な猿は見たことがないわ」

——取材？ マスコミ関係の人間か？

三上は気にはなつたが、あえてそこは聞かずに視線を移動させる。

「灰色の猿？ あれ、あんな奴ここに居たっけか。それに猿はこのエリアには来れないはずなのに……」

何故か来れないはずのこの肉食エリアに居る猿を、三上は訝^{いぶか}しがった。

「グギャアアアア、グギャアアアア！」

目を飛び出さんばかりに赤く充血させたその猿は、車用の道路を挟んで反対側にある遠くの柵の上に乗っかっていた。どうやら柵に

飛び乗ったときに足を絡めたらしく、必死にもがいているようだ。
「あれは僕も見ただこと無いです。すいません、どうやら別のエリアから逃げ出してきたみたいですね。今連絡して捕まえさせます」
「何か……不気味な猿ね……」
無線を取り出し、他の部署に連絡を入れたした三上を横目に、女性猿の異常な状態に自分でも分らない、本能的な恐怖を感じていた。

フリーゾーン 噴水前 午前11:10

『チュラツチャーツテヨオーアアヨイヨイヨイ……』
携帯の音が響く。朝奈は当然待っていたとばかりにそれを耳に当てた。

「お父さん？」

「……朝奈かい？」

「今どこにいるのよ？もう一時間も待ってるんだけど」

ふて腐れた感じに言う朝奈。

「……——逃げろ」

「はい？」

「今すぐこの紀行園から逃げるんだ、出来るだけ早く……！」

朝奈の父はかなり緊張したような声でそう言った。気のせいかもしれない。
も荒い。

「ちよっ、何言ってるの？」

「わけは必ず後で話すから、とにかくここから離れるんだ。時間が

無い……多分もうすぐそこにも奴らが現れる！」

「奴ら？ どういうこと？」

「万が一のために助っ人を呼んではみるけど……とても間に合うとは思えない。早く逃げるんだ。いいね」

あまりに真剣な父の様子に思わず朝奈は了解した。

「わ、分かった。とにかくここから出ればいいんだよね？」

「ああ、こんなことになって済まない。僕も予想外だった。朝奈、僕は……」

突然そこで電話が切れた。電池が無くなったのだろうか。

いきなり電話が掛かってきたと思えば、意味の分からない言葉を聞かされ、朝奈は呆然としていた。

父に何かがあったことは確かなのだが、何しろいきなり”逃げろ”だ。動揺しないほうが可笑しい。

別に周囲を見回してもどの観光客も普通にこのサファリパークを楽しんでいる姿しか見えない。

——一体何が危険だっていうの……？

「やっぱり悪戯だった？」

再び父の生存に対する懸念が浮かぶ。

よくよく考えれば、この紀行園で待ち合わせをすることもおかしい。父は自分の家を知っているはずだ。電話番号まで調べ出したのに住所を知らないはずが無いし、大体朝奈は父が失踪してから住処を変えてはいない。

理論的に物事を考えることが癖になっている朝奈は、冷静に現状を分析した。

両親が科学者だった為か、朝奈は普通の一般的な女の子よりは感情に走る事が少ない。二人の影響で理論的な、分析するような思考パターンが頭に染み付いていた。

「あれ？ そういえば……」

『今すぐこの紀行園から逃げるんだ』

「この紀行園？ お父さんにしても、悪戯にしても……電話の相手

「はここに居る？」

朝奈は電話の相手が言った言葉を思い出しそう推測した。

「きゃあああああああ！？」

突然ほのぼのとした雰囲気には場違いな悲鳴がフリーゾーンに鳴り響いた。

ショッピングモールを一番南に見て駐車場の左端、このフリーゾーンの出口付近から聞こえたようだ。

「何？」

朝奈は思考を中断し、声のした方を素早く見る。

すると揉み合う二人の男と倒れている一人の女性が目に入った。

ここからは良く分からないが、女性の周りには赤いものが流れている。まるで血のようだ。

「お、お前、俺の妻に何しやがる！」

自分の伴侶がいきなり見も知れぬ男に噛みつかれ、首から血を流して倒れたのを見た男は、妻の身を案じることも忘れ、相手に掴みかかった。

だが相手の力はかなり強いらしく、男はどんどん押し負けていく。そしてとうとう腰を折り地面に膝をつけるまでになった。

「このっ、何しやがる！？」

それでも男は諦めずに必死に抵抗する。

いつの間にか朝奈の周囲には人だまりが出来、二人を見る野次馬の輪が形成されていた。

朝奈は父の言葉を忘れてはいなかったのだが、ついついそっちに目が向き逃げる気をなくしてしまう。

人垣の隙間から様子を伺った限りでは揉み合っている男の片方が、気のせいか灰色の肌をしていたように見える。

「やだ、通り魔？」

朝奈の横に居た主婦らしき女性が呟いた。

「きゃあああああ！？」

「うわああああああ！？」

「ぎゃあああー！」

この騒ぎで静まり返っていたフリーゾーンに、いきなり無数の悲鳴だけが木霊した。発生源は今自分が目を向けたばかりの所だ。

朝奈はその光景に啞然とした。

つい先ほどまで揉み合っていたはずの二人が、人間とは思えないような動きで次々と周囲の客に襲い掛かっている。

そして一番気がかりなのは妻を殺された男も灰色の体色になり、目を真っ赤に充血させ髪を逆立てていることだ。

「なっ！？」

もう和やかなムードなど毛ほども無い。フリーゾーンはまるでゴジラが攻めてきた時のように大パニックとなった。

朝奈はとにかくここから離れようと噴水の淵から飛び降り、ショッピングモールの中を目指し駐車場を走り出す。

多くの客がお互いを押し合いへし合い必死に同じように掛けている。

二人の狂人——いや、もはやあれを人だと判断する人間は居ないだろう。二匹の悪魔はその群れを嬉しそうに襲っていた。

ショッピングモールの正面扉が先に逃げ込んだ人々によって閉じられる瞬間、朝奈はギリギリで中に入ることができた。動物を扱うという特性上、店のガラスは全て強化ガラスで出来ているという話を事前に父から聞いたことがある。ここならばあの二匹も入って来れないはずだ。朝奈は胸を撫で下ろしながらガラスドアの外を見た。

「グギユアアアアアア！」

身の毛もよだつ声が間近で聞こえる。

「何で増えてんの！？！」

朝奈はびくりと、反射的に体をドアから遠ざけた。

ドアのすぐ向こうには悪魔のような姿になった人間が、いつの間にか二匹どころか七匹近く蠢ぐもいていたのだ。

その下には無数の肉片や血溜まりが形成され、死体が溢れている。

「な、何なの……！？」

朝奈は目の前の光景が信じられず体を震わせた。

その震えに合わせるかのように、真後ろにいた小ぶりの禿の男性が顔を引きつらせて言葉を漏らす。

「まるで地獄だ」

その言葉の通り、今の状態は地獄に来てしまったとしか言えないような有様だった。

紀行園内某所 午前 11:10（今から50秒前）

『トウルルルルル……』

「頼む、出してくれ……！」

病院の手術室のような部屋で白衣を着た白髪の五十代らしき男性が、壁に背を預けて座り電話を掛けていた。

部屋には無数の瓦礫が散乱し、電気は何度も消えたり点いたりを繰り返している。周囲には男性と同じ服を着た人間の死体が転がっており、男性自身も頭から血を流していた。

『トウルルルル……——ガチャ』

電話が繋がった。

「お父さん？」

最愛の娘の声が聞こえる。

「……朝奈かい？」

「今どこにいるのよ？もう一時間も待ってるんだけど」

「……逃げろ」

「はい？」

「今すぐこの紀行園から逃げるんだ、出来るだけ早く！」

白髪の男性はかなり緊張したような声でそう言った。

怪我をしている所為で息も荒い。

「ちよつ、何言つてんの？」

「わけは必ず後で話すから、とにかくここから離れるんだ。時間が無い。多分もうすぐそこにもやつらが現れる……！」

「やつら？ どういうこと？」

「万が一のために助けを呼んではみるけど……とても間に合うとは思えない。早く、逃げるんだ。いいね」

「わ、分かった。とにかくここから出ればいいんでしょ？」

「ああ、こんなことになって済まない。僕も予想外だった朝奈、僕は……」

突然通信が切れた。

「くそ、こんな時に！」

男性は壁を叩く。

「……——イミューニティーだな！ 情報規制か。何て根回しの早さだ。……いや、もうそれ程被害が広まっているということか」

男は娘を自分がこの紀行園に呼んでしまった所為で危険な目に遭わせることになり、絶望した。

だが、こうしている訳にもいかない。すぐに携帯を開くと別の番号に電話を掛け出す。

「この携帯電話を使えば黒服になら繋がるはず」

奇跡的にすぐに相手は出てくれた。

「はい」

若い男の声が聞こえる。

「悟くんかい？」

白髪の男性は確かめるように聞いた。

「高橋博士……？」

「ああ、僕だ。久しぶりだね」

白髪の男性、高橋志郎は懐かしそうにそう言った。

「悟くん……頼む、君にしか頼めない。娘を……朝奈を助けてくれ」

まるで最後の頼みのごとく、志郎は懇願するよつに頼んだ。

<第二章> 修羅の園

<第二章>” 修羅の園”

ショッピングモール 午前11:30

「何なんだよこいつら!？」

ショッピングモールの中、健太はガラスの壁から外に見える悪魔の軍勢を、恐々とした目つきで見つめた。

外では逃げ遅れた客や従業員が手当たり次第に悪魔に襲われ、その数を減らしていく。

あの焼きそばのおっちゃんもその一人だった。

おっちゃんはい先ほど一匹の悪魔に食い殺されてしまったのだ。ちようどこのガラスの向こう、健太の目と鼻の先で。

「まさこ雅子……雅子は無事なのか……?」

おっちゃんの死を目の当たりにした健太は恋人の身を案じ、すぐに携帯に掛けようとしたが、彼女が電話を持ち歩いていないことを思い出した。

「くそっ!」

雅子の無事を知ることが出来ない苛立ちからか、健太は携帯を投げ捨てた。薄型という謳い文句に引かれて買った携帯は案の定脆く、地面に叩き付けられると同時に数個のパーツに別れ粉碎した。

狭いショッピングモールの中に居る所為か、健太だけではなく誰しもが苛立ちや焦り、恐怖を覚えていた。実に頻繁に怒号や鳴き声が屋内に響いている。

そんな彼らの声を聞きながら、朝奈は父との先ほどの会話を思い

出した。

『今すぐこの紀行園から逃げるんだ、出来るだけ早く！』

『わけは必ず後で話すから、とにかくここから離れるんだ。時間が無い。多分もうすぐそこにも奴らが現れる……！』

「……お父さん。これに何か関係してるの？」

父、志郎の言葉は明らかにこの状態を予期していたことを示している。恐らく、奴らとはあの悪魔のような人間たちのことなのだろう。瞬く間に増えていったことを考えれば感染するのもかもしれない。実際先ほど揉み合っていたあの妻を殺された男は、そのすぐ後に悪魔化していた。

「お父さんを探さないと……！」

朝奈の頭では恐怖も十分にあったが、母が志郎の失踪後に罹った病気で死んでいる今、唯一の肉親である父を失う訳にはいけないという気持ちの方が強かった。

間違はなく父、志郎はこの事件に関係している。

『父さんは今、ちよつと極秘の研究機関に在籍していてね』

もしかしたらこれを起こした張本人が父なのかもしれない。

どうしてもそれが真実か嘘か確かめなかった。

朝奈は満員電車の中のような人垣を掻き分け、裏口へと向かった。裏口の付近ではレジや品物を入れておく棚で作られたバリケードが出来ており、入り口付近よりもより多くの人間が密集している。

これではとてもここから出ることなどできそうに無い。

朝奈が困っていると、人が全くいない方向へ歩いていく一人の若者が視界の隅に見えた。ショッピングモールを横長の長方形、入り口をその中心の下と右端、裏口を中心の上と見れば、彼の向かっている方向は丁度左端になる。

——あつちは確か職員用の部屋がある場所だ。人がいないのは電気が消えている所為かな。

出ることも忘れていなかったが、朝奈はその男の動きに興味を引かれ、後を付けその部屋へと入っていった。

暗くてよく見えない。朝奈は壁を伝うようにしてゆっくりと歩いていく。

「これは……確かにここには居たくないね」

部屋の不気味さに腰を引きながらもおっかなびつくり進んでいく。

「誰だ!？」

すると突然横から強い光を浴びせられた。

「うぎゃっ!」

朝奈は片手で目を隠すようにしてその光を遮る。

「……人間か」

懐中電灯をこちらに向けたまま、若者は安心したように呟いた。

「ここで何してるの?」

光に照らされたまま朝奈は聞く。

「関係ないだろ。あつちに行ってくれ。俺は一人になりたいんだよ」
迷惑そうに手を振りながら若者は言った。それで朝奈が立ち去ると思ったのだろう。だが、朝奈はしばらく黙ったままそこに立ち続けると、不意に若者が予期しなかった事を口走った。

「武器を探してたんだ……? カッター、包丁、ライター……モッブまで?」

「な、何で知ってたんだよ、お前いつから見てた!? 全部向こうの部屋に置いてるんだぞ!」

男は不気味な物を見るような目つきで朝奈を見た。

「気にしないで。感覚が鋭いの。それよりもここから出る気なんですよ?」

「だから何で分かるんだよ!？」

またも自分の行動を見透かされ男はたじろいだ。

「だって、何度も窓を割ろうとしたみたいじゃん。無駄だったばいけど」

「……お前……エスパーか？」

「だったら良いんだけどね」

朝奈は少しだけ微笑みながらそう言った。

「——はあ、俺は鈴木健太。お前は？」

健太は朝奈をここから遠ざけることを諦めたように言った。二又のような髪が揺れオデコが光る。

「関野朝奈。よろしくね」

朝奈も自己紹介を返した。

「何でここから出ようとしてたの、ここの方が安全なの？」

「恋人と連絡がつかないんだよ。このショッピングモールには居ないし、外の死体も悪魔も一通り窓やガラスの壁から見ただけ……俺の恋人、雅子って言うんだけど、雅子らしき人間のものはなかった——っていうかそれは分かんないのか？」

「だって私、超能力者じゃないし」

朝奈は真面目な顔で言い返す。

「……まあ、何でもいいけどさ。とにかく俺はここから出るから、邪魔しないでくれ。包丁で脅せばあの人たちも扉を開けてくれるだろう」

健太は隣の部屋から鞆を持ってくると、それに片手を入れ歩きだした。鞆の中で包丁を握っているのかもしれない。

「え」と健太さん、ちよつと待って」

部屋から一直線に裏口へ以降と大またに歩いていた健太を、いきなり朝奈が呼び止めた。

「何だ？」

「ここ、もう一個出口が在るみたい。こっち来て……！」

嬉しそうに歩き出す朝奈。健太は半信半疑のまま取り合えずそれに付いていった。

先ほどの暗い部屋の隣にある小さな倉庫のような場所で朝奈は止

まる。

「ほら、ここ。何か小窓みたいなのが有るでしょ？」

朝奈は床のマットをどかしながらその下を指差した。そこには確かに緊急用の出口と思われる四角い扉が合った。飛行機の貨物室へ機内から行く為の扉に似ている。

「本当だ……何でこんな所に？」

まるで見られたく無いように隠されていた扉を目にし、健太は驚いた。

「私もちよつと用事があるの。健太さん、一緒に行くね」

朝奈はすいすいとその扉を開け下に下りていく。

「お、おい！」

何故そこに扉があるのが分かったのか？ という疑問もうかんだが、それよりも朝奈も外に出る気だということに健太は驚かされた。聞く間もなく朝奈は先へ先へと進んでいく。

「遅しい女だな」

少しでも降りることに躊躇したことを悔いながら、健太もそれに続いていった。

紀行園正面入り口前 午前11:55

山と森に囲まれた紀行園の入り口の前は、縦横それぞれ二百メートルの広場と国道に繋がる一本の大道路しかない。

今、その広場と道路に無数の人溜まりがあった。

細菌テロという名目の元、マスコミも民間人も周囲五キロには近づくことが許されず、この人溜まりに居る人間は警察と政府の人間

ただだ。五キロ離れた地点でも警察の封鎖がなされるという、徹底的な行動振りのため、ここに関係者以外が立ち入ることはありえない。

彼らは大掛かりなテントを無数に門の前に設置した。俗に対策本部と言う場所だ。

その中心、入り口の正面にあるテントの中、警察服を着た恰幅のいい中年の男が忙しそうに命令を出している。一応木製の長机とパイプ椅子が設置されてはいるのだが、とても座る暇など無いらしく、男は立ったまま歳にしては童顔な髪のない顔で口を動かし続けた。今回のこの事件の総指揮を務める宮川義高警部だった。彼はあくまで本庁から人員が来るまでの代理であり、すぐに指揮権を失うことになっていたが。

「紀行園の全体封鎖は終わったか！ 誰一人中から出すなよ。上からの情報で細菌テロが起きたらしいからな！」

まだ事態が良く分かっていない部下に何度も同じ指令を伝える。

「宮川警部、二十歳ほどの男性、柵をよじ登って森から逃走しようとしたところを射殺しました」

隣の長机に席を置いている若い警察官が、淡々とした口調で無線機から流れた内容を伝えた。

「また死人が出たか。おい、ちゃんと拡声器で園から出ないように言っているんだよな？ なんてこうも藁々人が逃げ出してくるんだ？ それにどうやってあの柵を生身の人間がよじ登ってんだ？」

「分かりません。もしかしたら猛獣がパニックに乗じて自由になったのかもしれませんが。上はまだ何もするなと言っているんですか？」

若い警官は眉を寄せ不審下に訪ねる。

「ああ、勝手な行動は控え、ただ細菌の感染者が出ないようにしろの一点張りだ。——全く、その所為で何人の罪も無い民間人を撃ち殺す嵌めになったことか。今頃紀行園の柵の周りの森は死体だらけだってのに」

「先ほど無線連絡で来るといつていた専門家の到着も、まだまだか

かりそうですし、当分は私たちの仕事は民間人を撃つことだけですね」

若い警官は短い髪を掻きながら悲しそうに言った。

「まったく、何から何まで……こんな釈然としない事件には初め合
うな」

急に曇ってきた空をテントの隙間から見上げると、宮川警部は物
思いげに腕を組んだ。

地下通路 午後12:05

「どうやら行き止まりみたいだね」

朝奈は暗い地下通路のなかで呟いた。

「崩れてる……？」

健太は懐中電灯を使い、隅々まで通路を塞いでいる瓦礫の山を照
らしてみたが、どこにも通れそうなところは無い。完全に道が塞が
れていた。

「何だ、これもあの悪魔らの仕業か？」

「これは違うと思う」

まだ隙間を探し続ける健太を他所（よそ）に、朝奈は何故かその意見を否
定した。

「何でそう思うんだよ？」

「あつ……そこに上に行ける梯子（はし）があるみたい。健太さん、私じゃ
届かないから引っ張って！」

「梯子？」

自分の問いがスルーされたことで少し眉間に皺を刻みつつも、健

太は右の壁に懐中電灯の光を当てた。すると確かに折りたたみ式の梯子が天井から伸びており、地上に出る為のハッチのようなものもある。それは硬いことは硬かったが、頻繁に手入れをされているのか思っていたよりもすんなり下ろせた。

健太は後ろに居る朝奈を見つめる。

何故光を当てていないのに朝奈は梯子を見つけることが出来たのか、健太には理解できなかった。

先刻の自分の準備品のことも然り、隠し扉のこともしかり、どう考えても朝奈は何か普通とは違う感覚を持っている。健太はやはり朝奈が超能力者なのでは無いかと本気で考えた。はつきり言って健太は幽霊や超能力、UFOなどを本気で信じている部類の人間だ。超能力者と名乗る胡散臭い人間にも健康の相談に行ったことがあるほどである。だからそれらを信じていない人間よりは自然にそういった単語が頭に浮かぶ。

「なあ、お前やつぱり超能力者だろ」

大真面目な顔で健太はそう言った。

「馬鹿なこと言っていないで、健太さん。私先に上がるからスカートの中覗かないでよ」

ふざけた感じで朝奈は茶化す。

「だ、誰が覗くか！ 俺には美人の恋人がいるんだぞ！」

朝奈の狙い通り、健太は超能力から話を反らした。

小さく笑いながら、朝奈は降りたときと同じようにスラスラと梯子を上つていき、慌てて目を伏せた健太を他所に外に出た。

「……ここには悪魔は居ないみたいだね」

素早く慎重に周囲に目を走らせ、安全かどうかを確認すると、朝奈は息を大きく吐いた。

どうやらここはフリーゾーンからそれ程離れていない、職員用の通路のようだ。歩いてきた方向から考えると、ハート型の道を真上から見たときの左の盛り上がった所だろう。

足元には短い芝生が生い茂っており、周りに高い木や草が少ない

ためか、辺りを良く見渡すことができる。左方向には一般客用の道路と、柵に囲まれた歩道が百メートルほど先に見え、右方向には僅かな林を挟んで五百メートルほど離れた位置に、小さくフリーゾーンがあるのが分かる。

一般道路の方には猿のような悪魔が二、三匹歩いていたが、この距離ではこちらに気づくことは無いはずだ。

「外に出たはいいが、まずどこに向かう？」

背後のハッチを閉めながら健太が聞いてきた。

「何が起きているのかは分からないけど、こんな状態だし生きている人はみんなどこかに隠れていると思う。この紀行園で人が隠れる所といたら、フリーゾーンと職員用の建物だけだね。まずは職員用の建物の方に行ってみよう」

「そうだな」

健太は朝奈の意見に従うと、年上の意地を見せるように率先して職員用エリアへ向かって歩き出した。

職員用エリアは紀行園の一番南、つまり紀行園の出入り口付近にある。扉の右と左に大きく建っているのがその建物だ。

朝奈は悪魔の襲撃に用心しながらも、健太の後を追う形で道路に沿った細い職員用の通路を歩き続けた。

紀行園前 5 km 南封鎖地点

午後 12:15

政府上層部から連絡を受けた警察の対応は、不自然なほど迅速だった。

紀行園の周囲五キロ地点は事件発生から一時間後には既に警察による封鎖線が引かれ、嗅ぎ付けたマスコミ関係者や野次馬のどのような干渉も一切許すことはなかった。

そのためこれらの地点では、これ以上進めないことに不平不満を持った数多くの人間がこつた返している。

道路を通ろうとしたトラックの運転手。

実家に帰ろうとした旅行者。

事件を聞きつけて集まった報道陣と野次馬。

その多様さは数えてもキリが無い。

ここ、紀行園の正面入り口へと続く大道路と、公道をＴ字路にながるような場所である南封鎖地点でも、それは変わらなかった。右の森の中や左の岩場にまで、無数の人間が溢れ右往左往している。

Ｔ字路である分余計に人は多い。

一応警察は道路を利用する人間を考慮して、紀行園の私道側へと僅かにさがって封鎖をしているのだが、人の壁が人の壁を呼び殆どＴ字路は機能していなかった。

「はいはい、下がって下がって！」

「危ないからそんなに押さない。——ほらそこお！」

「君、もつと離れなさい！」

「奥さん、ちよつ、足踏んでるってっ！ あれ、聞こえてるよね？ 何でまだ踏んでんの？」

警官たちはこれ以上先へ進めないように、彼らを食い止めることで必死だった。

そんな中、今二台の黒いバイクが警官の誘導の下、人垣を掻き分

け封鎖線の向こう側——紀行園の私道へと入った。

「すみません、待っていてくださいね。今上司を呼びますから」

若い警官がバイクに乗ったままの二人に一言入れると、奥の小さなテントの中からこの場の代表を連れてくる。

「すみません。お待たせしました。政府の使いとのことですが……イミューニティー機関でしたっけ？」

「はい」

先頭のバイクに乗った黒い服を着た男が返事をする。

その顔はヘルメットを被っているため分からないが、声から推測すればあまり歳はとっていないようだ。

「部下が書類を確認したところ、確かに政府高官のサインでした。どうぞお通りください。紀行園入り口前の対策本部にも連絡しておきます」

その言葉を聞くと二台の黒いバイクは無言で先へと進んでいった。その後ろ姿を見ながら現場指揮の警官は不思議がる。

「こんな時にあんな格好で……しかもバイクで駆けつけるとは、変わった連中だな」

それを横で聞いていたのか、先ほど二台を誘導した警官が口を出してきた。

「しかもあのバイクは本当なら公道は走れないんですけどね」

「何だ、お前バイクに詳しいのか」

「ええまあ、プライベートで乗っているんで。でも、あのバイクは中々お目にかかることは出来ませんよ。あれは僕が見たところ、間違いなく2500年物のCBR1000RRレースベース車ですよ」

「レース用のバイクなのか。全く、インテリの考えることは分からんな」

その言葉を最後に現場指揮の警官は無駄な会話を止め、テントの中へと戻っていきこうとした。

しかしまたすぐに別の警官に呼び止められる。

「警部、政府の使いだそうです。え、イミューニティー機関とか」
「またか、一体何人来るんだ。一度にまとめてきて欲しいものだよ」
苦笑いしながら現場指揮の警官は、丁度誘導されてきた大型の四輪駆動車を見る。

先ほどの二人とは違い、今度は紺色の自衛隊服のようなものを着た屈強な男が中から出てきた。

「はい、イミューニティーさんですね。先にもうお二人来ていますよ。書類は確認済みです。通ってください」

警官はさつさと指揮に戻りたくすぐに車を通そうとした。

だが、何故か目の前の男は車内に戻ろうとはしない。

「待て、先に二人来ているだろ？」

突然不思議そうに軍服の男は聞いてきた。

「ええ、黒い服に黒いバイクと何やら全身黒尽くめで」

それを聞いた軍服の男は急いで車の中に頭だけ入れると、何やら相談を始めた。

「石井さん。今回の作戦に黒服を雇ったという連絡はありましたか？」

恐る恐るといった様子で聞く軍服の男。その目線の先には黒髪をオールバックに肩まで伸ばした、能面のような顔を持つ女性が長い足を組んで座っていた。

「いや、私は聞いていないぞ？ まさか、ディエス・イレの雇った人間か？」

無表情のまま能面の女性は言う。

「——— すぐに対策本部に拘束させます。まだ門を通っては居ないはずですから！」

軍服の男は女性のご機嫌を伺うように、急いで指揮を任されている警官を引っ張り、テントの中へと入っていった。

それを車の窓から眺めると、女性は冷たい眼差しで呟いた。

「ディエス・イレめ」

「いいか、不審な黒いバイクが二台こちらに向かっていているらしい。到着しだい取り押さえるぞ。用意しろ」

宮川警部は「この忙しい時に！」と文句たらたらの様子で部下に銃を構えさせ、テントの後方百メートルほどの位置に、大道路を横切るように横一列に警官を配置した。

それに合わせるかのように、丁度遠くの方に二台のバイクが走ってくるのが見える。よほどスピードをだしているのか、その姿は見る見るうちに大きくなっていった。

宮川警部は部下に拡声器で止まるように言わせたが、バイクは一向に止まる気配が無い。

「くそ、仕方がない。撃て！」

これまで、紀行園から逃げ出してきた灰色の人間を何人も射殺していたため、警部は感覚がおかしくなっているのか、簡単に射殺命令をだした。

同じく何の疑問もなくその指示に従う部下たち。

急な射撃を先頭のバイクはまるで予期してたかのようにかわしたが、後方のバイクには何発か銃弾が命中した。搭乗者には当たらなかったようだが、あれではすぐにバイクは転倒するだろう。

宮川警部もそう考えた。だが――

あろうことか後方のバイクの搭乗者は、前方のバイクが横につけると同時に、そちらに飛び移ったのだ。

信じられないような度胸だと宮川は思った。

二人を乗せた黒いバイクは、警官隊を避けるように右横の林の中に入っていくと、そのまま林の中急な坂道を駆け上がり、道路から三、四メートルもの高い位置に移動した。

そして警官たちが何をする気なのか見つめた瞬間、バイクは勢い良く飛び出し、紀行園の門の上を通り過ぎた。

「な、何てやつらだ……！」

宮川は驚愕の目つきでその正面入口を見つめ続けた。

草食獣ゾーン 午後12:17

歩き出してから十二分。

朝奈と健太は草食獣ゾーンに差し掛かっていた。

といっても道路上ではなく、歩行者用の柵を挟んで反対側の通路だが。

先ほど地下から出た場所は触れ合いゾーンと言って、猿や兎などの小型悪魔しか居なかったが、ここは大型の悪魔や人間の悪魔が数多くうつっていた。

「一般道路を歩かないで正解だったぜ、もしあっちを歩いてたら今頃囲まれて集団リンチだ」

首下を震わせながら、健太は身を低くして悪魔の様子を伺った。鹿の悪魔、ハイエナの悪魔、牛の悪魔——……多くの動物が悪魔化していた。その下には、それを超える数の無数の死体が転がってい

る。

「何で……こんなことになったんだろうね……」

その光景を朝奈は寂しそうに見つめた。明るく振舞ってはいたが、やはり彼女も怖くて仕様がなのだろう。僅かに手が小刻みに揺れている。

その様子を見た健太が心配そうに声を掛けた。

「……やっぱり、お前は戻った方がいいんじゃないか？　今ならまだ近いし、送ってあげるけど」

だが、朝奈は僅かに微笑んで言葉を返す。

「大丈夫、こう見えても私強いんだから。心配しないで」

「なら……いいけどよ」

明らかに無理をしているようだったが、本人がいいと言っているのだ。健太は少し考えたものの、それ以上何も言わなかった。

「ん？」

健太は視線を朝奈から前に戻した瞬間、不吉な姿を捉えた。

飛び出さんばかりの赤く充血した大きな目、黄色い歯、逆立った全身の毛——そして灰色の皮膚。元々は飼育員だったのだろうが、今や見る影もなくなっている男が道の先に立っていた。

「あつ——……」

朝奈は突然の悪魔の登場に固まる。

悪魔は両手を肘を曲げたまま左右に開くと、高らかに鳴き声を上げた。

「ギユウウアアアアアアー！」

「ま、まずい！」

慌てて後ろに向かって走り出す健太と朝奈。

だが、悪魔の走る速さは二人よりも早く、瞬く間にその距離を詰めてくる。しかも先ほどの鳴き声で一般道を闊歩していた悪魔たちまでこちらに気づいてしまった。それぞれ身の毛もよだつ不快な大声を上げながら歩行者用の柵を飛び越えたり破ろうと激しく暴れ出す。

「健太さん急いで！」

朝奈は恐怖から前を走っている健太に叫んだ。

だが、何故か健太は突然立ち止まった。

「な、健太さん！？」

朝奈は前に進みたくても健太が邪魔で進めない。かなり焦った表情で健太を見た。そして、何故彼が止まったのかすぐに理解した。

目の前にゴリラの悪魔が立ち塞がっていたのだ。

確かにゴリラならあの柵を上って、こちら側に來ることができる。いとも簡単に。

「そんな！？」

朝奈は血の気が引くのを感じた。

「ギユウオオオオウ！」

悪魔どもは嬉しそうに呼応しながら、どんどん近づいてくる。このままでは間違いなく二人とも死んでしまうだろう。

「健太さん、フリーゾーンの給仕室から取ってきた包丁は？ あれを貸して！」

朝奈はそれでも生きる希望を捨てず健太に呼びかけた。

だが健太は恐怖から、放心したように悪魔を見たまま動けなくなっていた。

それを見た朝奈は奪い取るように健太のかばんを引っ張ると、中から包丁を取り出した。

「はぁ、はぁっ……！」

左右の悪魔に潤んだ目を走らせる。

じりじり……じりじり……と二匹の悪魔は接近して来る。彼らの距離はもう二メートルも無い。

包丁を両手で持ち悪魔に向けてはいたが、朝奈は腰を抜かしたのか、それ以上腕を動かせずにただ見開かれた目で悪魔を見ることができなかった。

「ゴオオオオアアアアア！」

悪魔が二人に跳びかかろうとした直前、太い大地を割くような大

きな声が鳴り響いた。

その声はかなり近いところから聞こえた。

「な、何!？」

今度は一体なんだと言った様子で朝奈は怯える。

バキ、バキ、という音を鳴らし「それ」は左の林の中から現れた。人間を二倍にしたような胴体と、その胴体を中心に巨大なローマ字のMを書くような太い両腕。腕の肘は蝙蝠の羽のように尖り、手は縦横一メートルはあるかというような物凄い大きさだった。手と手の間でも人間の手の形ではなく、四本の指の下——人間で言えば、手のひらの中心に親指があるという変わった形だ。腕の全長だけ見れば胴体よりも長く、肘は頭よりも上の位置にある。

逆に足は打って変って小さく、多少太いものの、一般的な人間の大きさほどしかなかった。ただし逆間接なのを省けば。

そしてもつとも印象的なのがその頭だ。

歯茎が無いかのように全てをむき出しにした歯、眼球を縁取るように目の周りを囲んでいる丸い黒色の溝、そしてその中にある充血した白目と緑に近い茶位色の瞳。極めつけは蛇のように縦横無尽に浮かんで蠢く二メートルはありそうな長い無数の黒髪だった。

> i 1 1 8 1 — 2 2 4 <

全身を赤に近い灰色に染めた、その赤鬼のような怪物を見ると、飼育員の悪魔も、ゴリラの悪魔もまるで子犬のように震えて一歩一歩下がっていく。

「こ、こいつは一体!？」

健太はその突然現れた赤鬼のあまりの不気味さと、周囲の空気を凍らせるような圧迫感に座り込んでしまった。

「健太さん…… — 今しかないっ、逃げよう！」

朝奈は健太を無理やり立たせると、赤鬼が二匹の悪魔に注意を取られている合間に、一般道の方へと走り出した。

この赤鬼の登場の所為か、一般道には既に悪魔の姿は一匹もない。今なら何とか逃げられるはずだ。

赤鬼は自分の姿を見たことで怯えたときに吼える犬のように鳴き続けるゴリラの悪魔を、ギョロリと睨み付けた。

そしてその左腕を振った瞬間、もうゴリラの悪魔の声は聞こえることはなかった。

首から——いや、腰から上が爆弾で吹き飛ばされたように消えていたからだ。

「ギョウアアアウ!？」

飼育員の悪魔はそれを見ると、しり込みしながら後ろに下がっていく。

だが、赤鬼は軽く飛び上がると、一瞬でその悪魔の背後へと回った。

悪魔は赤鬼に片手で鷲掴みにされると、肉まんを思いつきり握り締めた時のように飛散した。

「うっ、うわあああ！ な、何なんだよあいつは!？」

走りながら後ろの光景を見ていた健太はあまりの恐怖に体が硬直することを通りこし、気絶しそうになった。だが、雅子を助けたいという強い思いのおかげで何とか意識を繋ぎとめると、先を走っている朝奈の後を必死に追う。

「ゴウウウウウ……」

赤鬼は柵に向かってちよろちよと走っている二人を見つけると、小さく唸りながら駆け出した。

幸い足が小さい所為かその速度はそれ程速く無いが、朝奈と健太は柵の前についてからそれを登るという動作が入るため、徐々に赤鬼との距離は近づいていく。

「おい、早く登れって!」

健太は汗だらけの顔で、先に半円柱状の柵を登っている朝奈に怒鳴った。

朝奈は何とか柵の頂上に着くと、既に赤鬼がかなり近いところまで接近していることを知る。

「健太さん、早く！もうそこまで来てる！」

「くそおお！」

健太は朝奈から伸ばされた手を掴み取ると、その力を借りて一気に柵をよじ登った。二人は間を置かずしてそのまま一般道路に飛び降りる。と、同時に柵の前に到着した赤鬼は、難なく柵を紙を引きちぎるように破り、こちら側の道路へと出てきた。

「どんだけすげー力だよ！」

驚愕の目で赤鬼を見つめる健太。

自分たちよりも素早い悪魔を一瞬で二匹も殺した相手だ、こんなに近い所からではとても逃げ切れるとは思えない。今度こそ朝奈は死を覚悟した。

怒りか、憎しみか、羨みか。

赤鬼は人間には理解出来ない表情を作り、片手を高く持ち上げる。あれを叩き付けられれば二人とも絶対に即死は免れない。何しろ悪魔を握り潰すほどの強力なのだ。

「お父さん……！」

朝奈は父のことを思い、両目をつぶった。

何かに引つ張られた。

目まぐるしく景色が回転する視界の中で、黒いバイクと手が見える。

「掴まれ！」

朝奈は突然現れた真つ黒な扶桑をした男に、バイクの後ろへと乗せられたのだ。

「——え……！？」

いきなりの予期しなかった状況に頭が真つ白になる朝奈。バイクは赤鬼から少し離れた位置、一般道から紀行園の外側に向かって草原へ入った所で止まった。

朝奈は何かを聞こうとしたが、バイクの運転手はそれに構うことなくあらん方向に言葉を発する。

「翠^{すい}、そっちの男を頼んだぞ！ このデカイ奴は俺が撒くから！」

「分かった。出来るだけ私から遠ざけるよ」

いつの間にか健太を赤鬼の攻撃から引つ張るようにして救出していた人間が答えた。先ほどまで今自分が座っている位置に居たのか、足元には飛び降りた時に出来たような摩擦跡が見える。

服装はバイクの男と同じものだったが、そのスタイルのいいライオンからは女性だと言ったことが分かった。顔はヘルメットで見えないものの、透き通るような声がとても魅力的だ。

「掴まってる」

バイクの男は朝奈にそう指示すると、方手で足首から細いナイフを抜き取り、赤鬼目掛けて投げつけた。そのナイフは寸分の狂いもなく赤鬼の眉間に刺さる。

「ゴオオオアアアア！」

その攻撃に怒りを覚えたのか、赤鬼は耳を劈くような大声で一鳴きすると、こちらに向かって突撃しだした。

「行くぞ！」

それを横目にバイクの男はハンドルを強く握り締め、紀行園の入

り口の方に向かってバイクを走らせる。

赤鬼は翠と呼ばれた女性と健太には構うことなく、朝奈の乗ったバイクを追って来た。しかし最初こそ後ろに着いていたものの、数分後にはこのバイクが早すぎるのか、赤鬼が遅いのか、その恐ろしい姿は消えていた。

背後には柵と草原しか見えない。

「……しまった、もう撒いたか。——あとで翠に殺されるな」

男は小さく呟くと、バイクを一般道路の歩行者用の柵の横に止めた。

煩いエンジン音が消え周囲は静かになる。この辺りは今は悪魔が居ないらしく、シーンと静まり返っていた。

「大丈夫だった？」

心配そうに男が聞いてくる。

「だ、大丈夫」

朝奈は実際のところ追って来た赤鬼の顔を見て死ぬかと思ったが、強がってこう答えた。

安心したように朝奈を見ると、男はヘルメットを外した。

セミショートの長さの緩やかな癖毛の黒髪、男にしては大きな目と長い睫、そして僅かだけ一般的な男性よりは太い眉毛。二十代前半と思われる整った顔だった。百七十センチの身長と合わせると、モデルのようにも見える。

「あの、ありがとう。助けてくれて」

朝奈は男がどう見てもこういった場に慣れているように落ち着いているので、やや不信心を持ちながらも礼を言った。

「気にしなくていいよ。俺は——……巳名^{しいなせつ}截だ。よろしく」

声は優しいのだが、あまり感情を感じさせないような暗い冷たい雰囲気^{きふうき}で男は名乗った。

<第三章>紀行園の園長

<第三章>” 紀行園の園長 ”

草食獣ゾーン 午後12:30

「な、ちょっと待て!？ 何で高橋志郎を探すんだよ!」

黒服の女性、各務翠は携帯電話に向かつて怒鳴りつけた。
かがみずい

百七十センチの高身長に、スタイルのよい体系、クリリとした大きな二つの目。

髪型は紐を解けば肩の下までであるであろう長い髪を内前髪以外後ろに束ねた、シニヨンといたいでたちだ。

「いや、ほら……さっき俺が助けた女の子が居ただろ？ あれ、何か運がいいことに博士の娘だったらしい」

電話の相手が答える。

「じゃあ、さつさとその子連れて戻ればいいじゃん。私たちの仕事は彼女を無事に紀行園から出すことだけだろ。何余計なことをしようとしてんだよ、馬鹿」

怒りの籠った表情で翠は言った。

「いや……馬鹿は言いすぎだろ」

「あんたの給料、後で分けて貰うからな。全く、ホントだったら今頃は海辺でのんびりしてたっていうのに」

「仕方ないだろ。キツネに、まだ新人の間はコンビを組んで行動しろって言われてんだから。俺だって好きでお前を呼んだ訳じゃないよ」

「あゝあ、早く一人前になりたい。そうしたらいつまでもこんな奴と一緒に行動することは無いのにさ」

「……俺は博士の娘と入り口から見て左の建物を探す。お前は右の方を頼む。赤鬼が悪魔をけちらしたからすぐに行けるだろ？　じゃあな」

「ちよつ、勝手に決めるな！」

翠は大声を上げたが、既に電話は切れていた。

プー、プー、プーと電子音になる。

「あいつ、覚えてるよ……！」

そのまま携帯を握り締め、片手で左に在る柵を殴りつける。柵は大きく歪んで元には戻らなかった。

健太はその背後で「何だこの怖い女は？」とずっと静かにしている。

「おい、行くぞ」

突然翠にそう言われ、健太は聞き返した。

「は？　行くつてどこに？」

「いいから着いて来い。あんた、さっき恋人を探してるって言ってただろ。探しに行くんだよ」

翠は眉間に皺を寄せ健太を睨んだ。

「——わ、分かった」

その悪魔も縮みあがるような睨みに逆らえる人間は居ない。健太は素直に頷いた。

ここは正面入り口から出ている二つに分かれた道の左側、つまり入り口の北西方向にある建物だ。

見た目は五階建てのマンションのようだが、中はこの紀行園を管理するための設備や監視室、管理室などのマンションとはかけ離れた作りになっている。

紀行園の奥へ入っていくためのものと、帰るための二本の道を挟んで向かい側には全く同じような建物が立っており、そこは翠と健太が調べるようになっていた。

今、截はその左側の建物の下の芝生の上にバイクを止め、入り口の門からし字に繋がっている壁に寄りかかっている。

従業員の物だろうか。バイクの横には数台の船の形をしたバスや一般車が置かれていた。

「ふう。仲間がもう一方の建物を探してくれる。俺たちはこのままこの中に入ろう」

電話を切ると、截はため息を吐きながらそう言った。

「ごめん、無理言って……」

朝奈は本当に済まなそうに項垂たれた。

その顔を見ると、截は文句を言えなくなる。

截も最初は翠と同様に志郎を助ける気は無かった。新人とはいえ、曲がりなりにも黒服の人間だ。依頼された仕事の達成を危険にしまで、余計な事はするべきではない。

だが、あまりにも朝奈が必死に頼むのと、志郎が自分の知り合いということもあり、個人的にも身を案じていたため、最終的には折れたのだ。

截と志郎は三年前の富山樹海事件、今では富山集団神隠し、毒ガス発生大量死事件などと呼ばれている事件のさなか出会った。

その時は截は今とは違う名だったが、この黒服に入るときにその名はは無理やり捨てさせられた。

今では已名截以外の何者でもない。

この事件の実態は実はB L U C K D O M A I Nと呼ばれる、地下深くの領域からとある寄生体が湧き出たことによる生物災害だったのだが、政府はそれを隠し上記のようなガス事件として隠蔽した。截はこの事件で社会的に死んだこととなり、黒服に入ること政府機関であるイミューニティーの干渉を退けた。

だが、截は本来ならば生きては黒服には入れなかったはずだ。彼が生き残れたのは志郎のおかげだった。

截が樹海をさ迷っている時に志郎が悪魔との戦い方、生き残る方法など色々大切なことを教えてくれたから今、こうしてここを歩いているのだ。

だから截は志郎に恩がある。

あの時志郎に会っていなかったら、截は悪魔との戦い方を知らないまま殺されていただろう。正直な気持ち、截は朝奈に言われなくても志郎を助けたかった。

「そんなに済まなそうにしないでいいよ。俺が自分で決めたことだ。さ、行こう」

截は朝奈を元気付けるように笑いかけると、先に建物の入り口へ向かって歩き出した。朝奈は黙ってそれに続く。

入り口の前で止まると、截は真剣な顔でこちらを振り向いた。

「中に入る前に言っておくことがあるんだ」

朝奈は截の様子が伝わったのか、緊張した顔で視線を合わせた。

「さっきも話したけど、俺は傭兵みたいなものなんだ。君のお父さんに君を助けるように依頼されてここに来た」

「……うん、分かってる」

朝奈は頷く。

「これは……俺の口から言っているのか分かんないけど、高橋博士は恐らくこの紀行園を地獄にした連中と関わっている。さっき入り口を越えようとしたときに警察の攻撃を受けたから。博士が国の人間ならあいつらが俺を攻撃してくる訳が無い。どういことか分かるよね？」

「お父さんはテロリストってこと？」

朝奈は何度か浮かんでいた懸念を口に出す。

「脅されて無理やり命令を聞いているということもありえるし、自分の意思で行動しているのかもしれない。ただ、政府の人間で無いことは確かだ」

「私、それでも助けたいと思うよ。家族だから」

「……博士を助ければ、君も一緒に国から追われることになる。本当にいいんだな」

「うん」

朝奈は即答した。

截は朝奈の意志を確認すると前を向いた。入口の自動ドアの前に立ち、それを開ける。

「……もう一つ言っておくけど、俺だけで悪魔を殺していくのは無理だ。君にも手伝ってもらおう」

「何をすればいいの？」

朝奈は少しも怯えることなく聞いた。決意の籠った力のある目で、その姿を見て、截はある女性を思い出した。

『悟君、いいよ。私やつて見る』

『私こう見えても高校時代陸上部だったから、走るのには自身があるんだ。心配しないで』

「どうしたの？」

入り口の前に突っ立ったまま自分を見つめる截を、朝奈は不思議がった。

「もしかして私に惚れた？」

悪戯する子供のような笑顔を作り朝奈が聞いてくる。

「ばっ、そんなわけないだろ。ちよっと昔のことを思い出してただけだよ」

「ふふ。で、私は何をすればいいの？」

朝奈は笑顔のまま聞いてきた。

截は真面目な表情に戻ると、やや躊躇って言った。

「おとこ 罔だよ」

「え、お、罔！？」

朝奈はまさかそんなことをやらされるとは思ってもいなかったの
で、かなり驚いた。

「私を助けることが仕事じゃなかったの？ 罔って……メチャクチ
ヤ危険じゃん！」

「君が罔をすることで悪魔を倒しやすくなるんだ。自分だけ楽しんで
隠れていようと思ったたら大間違いだよ」

截は殆ど無表情のまま冷静に言う。

「ガランッ！」

急に後ろの方で何かが地面に転がった音が聞こえた。

截が素早く振り返ると、丁度一匹の人間の悪魔が先ほどバイクを
止めた所に居る姿が見えた。どうやらさっきの音は空き缶が悪魔に
弾かれた音らしい。

「きゃあ！？」

朝奈は油断していた為、思いつきり驚いた。

「ギユウウアアアア！」

悪魔は大きく鳴くと、そのまま朝奈の上に押し掛かるべく高く飛
び掛る。鋭い爪が、歯が、朝奈の眼前に迫った。

だが、それは成功しなかった。

截が間一髪で悪魔の腹を蹴り飛ばしたのだ。

悪魔は弾き飛ばされるようにバイクのよこに転がった。

「下がってる！」

截は叫びながら両手を腰の後ろ側に当てる。そして、右手で白い
柄のナイフを、左手で黒い柄のナイフを抜いた。

黒い柄のナイフの形状は、拳銃のグリップを少しだけ伸ばしてナ
イフ向けにしたような柄に、縦幅三十センチ近くはありそうな刃が

付いているという形だ。刃の根元部分は中心に穴の開いた半円形の銅色鍔が左右から挟んでいる。この刃は実際に相手を切断する正面部の一センチのみ銀色で、残りの部分はダークグレーだった。

一方、白い柄のナイフは刃の部分の禍々しさが若干抜けた形となっている。グリップ周囲に黒柄ナイフとの大差はなく、違いといえば、鍔の色が白になり、中心の穴が十字架になっていることだった。

黒柄ナイフは截が樹海の事件で今の上司、キツネと呼ばれる男から貰ったもので、言わばまがい物だ。黒服と呼ばれる截の組織ではメンバーのナイフは全てオーダーメイド、つまりメンバーになった時にその人間に合わせて陽介・タチフィールドという男に作られる。この白柄ナイフは截が黒服に入った時に作られた、真正正銘の截専用ナイフだった。

截はその二本のナイフを前方に構えると、起き上がった悪魔を睨みつけた。

「ギユウウウウウ……」

先ほど蹴飛ばされたためか、やや用心しながらゆっくりと悪魔は近づいてくる。

朝奈はその恐ろしい姿見ると、截が本当にこんな化け物に勝てるのか心配になった。

しかし截は全く表情を変えずじつと悪魔を視界に捕らえ続けている。

ダンッ！

悪魔が再び大地を蹴った。今度は飛び掛るのではなく、人間のように腕を振り、足を伸ばし走ってくる。截の眼前に辿り着くと、悪魔はそのまま右手を強烈な速度で振り下ろした。

しかし、截はその攻撃を分かっていたかのように、あっさり身をしゃがませかわすと、二本のナイフで悪魔の胸を刺し抜いた。悪魔が突撃してきた勢いで建物内の地面に取れる截。二人は二メートルほど床を滑ると動かなくなった。

「截さん……？」

恐る恐る建物の中に入る朝奈。截がやられたのかと思い、両手を握り合わせ、ゆっくりと覗き込むように二人を見た。

おびただ 夥しい血が流れ、建物の床に小さな池を形成している。

「そんな……！」

朝奈は悪魔の死体をどかそうと震える手を伸ばした。

ガシッ！

その瞬間、いきなり自分の手を死体が掴んだ。

「うぎゃ！？」

思わず朝奈は悲鳴を上げる。

「——悪魔に触るな、感染する」

掴んだのは截だった。

「せ、截さん……良かった……！」

「ふう……」

截は悪魔の死体を蹴飛ばして横に吹き飛ばすと、何事もなかったように立ち上がった。

「もう、この階には悪魔はいないな。さっさと博士を探そう」

「何で分かるの？」

「ちよつと特別な感覚があつてね」

截はやや声を低くして言った。

それを聞いた朝奈が驚く。

「截さんも、超感覚者なの？」

「俺も？」

朝奈の言葉に逆に截が驚いた。

截には生まれつき、第六感というか、何というか、高橋博士が絶対危機回避感と名づけた特殊な感覚がある。

これは自分の命の危険を察知できるというものだ。

この感覚のおかげで悪魔の動きを読んだり、近くに居ることを知ることが出来るのだ。

——この子にもそんな感覚があるのか？

今まで自分以外にそんな変な人間を見たことがない截は、不思議

そうに朝奈を見た。

「私、お父さんから聞くまで理解してなかったんだけど……過去の出来事がある程度分かるの」

「過去……サイコメトリーみたいに？」

「超感覚は周囲の微小変異を察する感覚のことだから、ちよつと違うけど……まあ、効果的には似たようなものだよね」

朝奈は顎に指を当てながらそう言った。

「私の場合は……信じられないかもしれないけど、過去に起きた出来事の名残、微小変異の跡を察することが出来るみたいなんだ」

「名残……つまり人が動いた、歩いた、とかのことで生じる、変化の軌跡みたいなもののこと？」

「うーん、まあそんなところかな」

「博士は、俺に超感覚者のことを詳しくは教えてくれなかった。朝奈さんは知ってるの？」

「私も詳しくは知らない。ただ、お父さんはお母さんに関係があるって言ってた」

「お母さん？」

截はその言葉を不思議がった。

「君のお母さんもそうだったの？」

「いや、お母さんは普通の人だよ。もちろんお父さんもね」

「お母さんは何を？」

「もう大分前に離婚してるから、今は何をしてるか分かんないや」

「あつ——……ごめん。嫌なことを聞いたな。今はこんなこと話してる場合じゃない。早く探そう」

截は朝奈が辛そうな顔を作ったもので話を止めた。

「両親の離婚か——……」

『入学してすぐの頃に両親が離婚したんです。それで学費のことや住む家のことでいろいろと忙しくて……』

截は自分の過去を思い出し、一瞬だけ暗い気分になったものの、それを顔には出さずに歩き出した。

紀行園正面入り口 午後12:50

青に近い灰色、紺の軍服を纏った三人が紀行園の中へ入ろうとしていた。

イミユニティー、つまり「国家非確認生物対策機関」の人間だ。

先頭は日焼けをしているのか頭の先まで褐色な男だった。頭が若禿げしている所為か、髪を剃った黒人のようにも見える。

次に歩いているのが背が高く体格のいい三十代ほどの男だ。先ほど截と翠を撃つ様に警察に命令したのもこの男だった。物凄く短いオカッパのような髪型は、町を歩けば嫌でも目だつだろう。

そして一番最後を歩いているのが黒髪オールバックの能面のような顔を持つ女性だった。歳は三十代くらいだろうか。

化粧の所為で年齢は若く見えるが、歴戦の猛者のようなオーラを纏っている為、誰も彼女をお嬢さん扱いはいしない。寧ろ、年上の先輩のように扱ってくる。

それは明らかに年上である宮川警部が、不気味さを感じさせるような敬語で接するほどだった。

「っち、対イグマ細胞を紀行園の周囲に散布するのに、ここまで手

間取ってしまうとは思わなかった。急ぐぞ、あの黒服が何かをする前に」

能面顔の女性が冷たい声でオカツパ男に言う。

「は、はい。石井さん！」

オカツパ男はどもりながら答えた。

職員用エリア（左） 午後12:50

「幾ら職員用のエリアとはいえ、ここまで人間が居ないのは変だな……」

截は歩きながらそう言った。

今、截と朝奈は建物の五階の廊下に居る。

一階からここまで風漬^{しづみつぶ}しに博士を探してきたのだが、志郎どころか逃げ込んだ一般人の姿すら全く見えなかった。唯一目に付いたのは悪魔だけだ。それも既に死んでいる悪魔だけ。

これはあまりに不自然な状況だ。截は不審に思ったのか、翠に電話を入れた。

「あ、翠。今どこだ？」

「丁度右側の建物の中に入ったところだよ。どうした？」

「今左職員用の建物の中なんだけど、変なんだ。人が一人もいない。それにどういふ訳か悪魔の死体がそこら中にある」

「人が居ない？ どういうことだよ」

「分からない。でも悪魔の死体があるから素人の仕業じゃないみた

いだ。イミユニティーかな？」

「それは無いよ。あいつら——丁度今門から出てきた。おつヤバツ、コツチに来るっ……隠れないと！　また後でな」

「え、おい！？」

截はいきなり電話を切られうるたえた。

急いで窓の外を確認すると、確かに正面入り口の所に数人の人影が見える。

「イミユニティー……！」

朝奈を庇いなが三人も相手にするのは流石にきつい。截は人間相手の戦いは得意じゃないということもあり、一端裏口から建物を出ることを考えた。

「朝奈さん、ちょっとまずいことにな——……」

截は周囲を見回したが、どこにも朝奈の姿は見えない。

「くそ、こんな時に……！」

イミユニティーだけでなく得たいの知れない存在がこの建物の中に居るのだ。朝奈が一人で出歩くことは危険極まりない。

截は急いで朝奈を探す為、走りだした。

「行つたな。運が良いことに向こうに走ってくれたわ」

その様子を、四角く出っ張った壁の後ろから一人の中年の女性が覗いていた。

女性の腕は朝奈の首に回っており、手のひらで口を押さえている。朝奈は必死に女性から逃げ出そうともがいたが、この華奢な体のどこからそんな力が出るのか、幾ら暴れても女性は腕を解かなかつ

た。

そのまま朝奈を引きずるように引つ張りながら、女性は廊下の奥の小さな部屋の鍵を開けそこに入った。もちろん中から再び鍵を閉める。

ここは先ほど截が調べたが、鍵が掛かっていたため入るのを諦めた場所だ。また朝奈を探しにこの階に来て、まさかこの中に居ると思わないだろう。

「いいかい、大声を出したら殺すよ！」

女性は西洋の短剣のようなアンティークのナイフを朝奈に点き付け、そう言った。体型に合わない赤いドレスをきているためか、動くのがかなり辛そうだ。

「あつ、貴方は誰なの？」

ナイフの輝きに怯えた目を向けながら朝奈は聞く。

「ふん、わたしやーここの園長さんだよ」

「あつ……！」

朝奈はその女性の顔をよく見てみた。確かに紀行園のパンフレットに載っていた顔だ。

ライオンの鬘のような長い髪、異常に薄い眉、そして唇は薄いのに大きな口、間違いなくこの紀行園の園長、大西幸子だった。

< 第四章 > ” 長首麒麟 ”

< 第四章 > ” アウドムラ 長首麒麟 ”

大西はナイフを朝奈の真つ白な腕に当てると、それを軽く引いた。すぐに其処からは赤い液体が漏れ出し筋のような線を浮かばせる。

「な、何すんの!？」

朝奈は思わず手を引いた。

「ふん、喚くんじやないよ。ちよつと血を借りるだけだ」

高校の校長室のような部屋の中、大西はその中心まで歩くと、そこにあつたテーブルと絨毯じゅうたんを退かした。下からは朝奈と健太がショッピングモールから脱出した時のような、丸いハッチが出てくる。ただしこれはかなり小さく、どう見ても赤子でない限り、人が通れそうにはなかった。

「あんたが誰か知らないがね、どうやらあの黒服はあんたを守りたいらしい。誰が雇つたんだか知らないが、黒服にここの研究情報を渡して堪るか。あんたには悪いけど、これも世直しのためだ。生贄におなり」

そう言うつと、大西は朝奈の血をナイフからハッチの下へと落とした。

朝奈は大西の意図が分ならず戸惑う。

「ふふん。この建物の地下にはね、『あるもの』を生み出す過程で生まれた化け物が居るのさ。そいつとこの小型ハッチは繋がっている。悪いけど、そいつに今あんたの血を与えた。これでそいつはあんたを死ぬまで追いかけてくるだろう」

「そんな、何で……!？」

「あの黒服やイミユニティーの目を、私が情報を持って逃げるまで

反らすためさ。幸い水憐島でも生物災害が発生しているらしいからね。ここに来ているイミューニティーはごく少数だ。今なら逃げられる」

「水憐島？ あなたはテロリストなの？」

「テロリストね……平和と人類に悪影響を与えてる存在をテロリストというのなら、どつちかと言えば黒服やイミューニティーの方がその意味にあっているけど。まあ、社会的にはあたしゃーテロリストだよ」

「まさか、この紀行園の悪魔たちも？」

朝奈は若干先ほどよりも強い調子で聞いた。

「はははっは、これは事故さ！ 全く予想外のね。どこのテロリストが自分たちのアジトの一つでテロを起こすんだい？」

「アジト？」

「そうさ、ここはあたしらディエス・イレの最重要施設の一つ『紀行園』列記としたアジトさ」

大西は心底面白そうに笑った。

「ふふん。あゝそろそろあたしゃー行くよ。じゃあ、精々逃げ回るんだね」

「行くつて、今紀行園は警察に囲まれてるんじゃない。どうやっても逃げれないよ」

「ここはアジトなんだよ？ いざと言う時の備えもあるのさ。こんな風にね」

大西は含み笑いをしながら右側の壁に掛かっている絵を外す。するとそこに扉のようなものが出てきた。

大西はそのまま扉を開け、反対側へと行こうとする。

「なっ、待って！」

朝奈は叫んだ。

「何だい、一度血を垂らした以上、あたしには『あれ』を止められないよ？」

「そんなことは……今はいい。高橋志郎って知ってるの？」

もしも父がテログループの人間ならば、間違いなく大西は志郎を知っているだろう。これまで父がテログループの人間だという確証がなかった朝奈は、まだ父がそうでない可能性も信じていた。

「高橋志郎？ ああ、あのダンディーな博士かい。もちろん知ってるよ。うちの研究員だ。三年前にスカウトしてここに連れてきたね」

「……そう」

「何だい、あんた博士の知り合いかい？」

朝奈の様子を不思議に思ったのか、大西は尋ねるように聞く。

その時、激しい音と共に、大きく建物が揺れた。

朝奈はそのもの凄いい振動に倒れ込む。

「くそ、ちよつと長く話しすぎたね！ これ以上ここに居たらあたしまであれに殺される。あんたのお話もここまでだよ。それじゃー、精々頑張るんだね」

大西は揺れる部屋の中を何とか進むと、隠し扉を開けその中に入っていた。

「……——っ待って！」

朝奈はすぐに走ってその扉を開けようとしたが、反対側から鍵が掛かっているのか全くビクともしない。

「もうっ！」

仕方なく近くに落ちていた大西の西洋ナイフを拾い、部屋に入った時と同じ扉から廊下に出た。

大西の言っていた『あれ』が何かは分からないが、これほどの揺れを起こすような化け物だ。遭遇したら間違いなく自分は助からないだろう。

「截さんー！」

朝奈は截を何度か呼んでみたが、返事はない。下の階に居るのか、この建物を出たのか。とにかく近くには居ないようだ。

こうなったら自分だけで逃げるしかない。朝奈はナイフを握り締め階段の方に走りだした。

「ジュラアアアアイイー!!」

「こ、今度は何!?」

遙か下の方から聞こえた奇妙な鳴き声に思わず立ち止まった。

「今の声が……大西さんが言ってた奴?」

得体の知れない化け物に対する恐怖が湧き上がってくる。聞こえてきた声から推測すると、どうやら化け物はまだ随分下の階に居るようだ。これなら同一階段さえ通らなければ何とか逃げ切れる。そう朝奈は思った。

意を決して走り出す。

だがその瞬間、真後ろの、つい今まで自分が立ち止まっていた場所の床が吹き飛んだ。あと一歩走り出すのが遅れていたら死んでいただろう。

「なっ!?」

朝奈は激しく鐘のように鳴り打つ心臓の音を聞きながら、背後の何かを見た。手榴弾を爆発させた後のような大量の土煙が蔓延するなかで、それは悠々とこちらを振り向く。

「き、麒麟?」

それは動物園には必ず居る、あの首の長い愛らしい動物——麒麟だった。

といっても首だけだったが。

歯茎が見えるまで歯をむき出しにし、目を真っ赤に血走らせたその灰色の麒麟の首は、どう見てももう愛らしくはない。首だけといえは生首のように聞こえるかもしれないが、別にそういうことではなく、地面の下から首だけが床を突き破り、この五階に飛び出しているのだ。どうやら体を遙か下に残し、首だけが伸びているようだ。

「冗談でしょ……?」

朝奈は当然驚いた。

麒麟の首は朝奈を見つけると再び大きく鳴く。

「ジュルアアアアア!」

それを攻撃前の威嚇だと捕らえた朝奈は、攻撃が来る前に走り出し、下の階へと繋がっている階段まで逃げた。後ろを向いても、まだ麒麟の首はこちらを睨んだまま動いては居ない。朝奈は安心し、階段を駆け下りようとした。

だが、その瞬間。今度は階段の下の折れ曲がり地点の壁が爆発したように崩れ、そこから麒麟の首が飛び出してきた。
「うそっ!？」

幸い朝奈にその頭突きが命中することはなかったが、おかげで階段は崩れ落ちてしまう。

素早く先ほどの場所に目を向けてもまだひとつめの麒麟の首はこちらを睨んでいる。

「何個首があるのよ!」

朝奈は全身から冷や汗を噴出しつつ、引き戻って行く麒麟の首を踏み台にして四階へと走り降りた。

全速力で走り回っている間も休む間もなく、無数の麒麟の首が朝奈目掛けて攻撃してくる。

窓を割り、地面を突き破り、壁を粉碎して。

どの部屋に隠れても、どんなに狭い場所に向かっても。

ありとあらゆる場所から麒麟の首はその頭を伸ばし朝奈を殺すべく暴れ回った。

いつの間にか、その数はもはや五つにまでなっていた。

だんだんと朝奈も体力の関係もあり、逃げるのが辛くなってくる。

「はあ、はあっ、このままじゃ持たない……!」

この長首麒麟は血を大西から与えられたことで朝奈を追ってきているようだ。と考えれば、臭いを頼りにしていると考えるのが妥当だろう。朝奈も当然そのことに気がついた。

「臭いを消さなきゃ——……確か、香水が有ったはず……!」

腰に掛けた手鞆を漁り、中から香水を取り出す。朝奈は間を置かずして、一気にそれを自分に噴射した。

甘い果物のような香りが広がり、僅かに長首麒麟の動きに戸惑いのようなものが見える。

その隙を逃さず朝奈は女子トイレへと駆け込んだ。女子トイレならば洗剤などの臭いもあり、しばらくは時間を稼げると考えたのだ。そのまま一番奥の個室に入り丸くなる。

「はあ、はあ、はあっ——そうだ……！ 截さんから借りた予備の電話があつたんだった」

朝奈はパーカーのポケットから、この建物に来る前に貰っていた截の携帯電話を取り出した。当然すぐに電話を掛ける。

「截さんっ、お願い出て——……！」

ガチャッと電子音が聞こえた。

「朝奈さんか!？」

截は走っている途中なのか、かなり激しく呼吸をしながら電話に出た。

「截さん、お願い助けて！ 今どこにいるの？」

「まだ建物の一階だよ、今イミユニティーの人間から追われている。君はどこにいるんだ？」

「今四階だけど、変な麒麟の首に襲われているの、どうすればいい!？」

「麒麟の首？」

「何かあちこつちから飛び出してきて……首がいつぱい有るみたい。最初は下から声が聞こえたみたいだったから、多分截さんの近くに本体があると思う」

「……なんとか探して見る。それまで隠れてる。——あと、その首に十秒以上触れるな。悪魔もそうだけど十秒以上触れていると感染するから」

「分かった。どれくらいかかる？ こっちはそんなに長く隠れられそうにないよ」

「——五分、五分だけ待ってくれ。その間に何とかイミユニティーを撒いて、麒麟の本体を倒すから！」

「五分ね！ 出来るだけやってみる」

朝奈は電話を切ると、大西の持っていた西洋風のナイフを握り締めた。

じつとりとした汗が全身に広がり服と肌を密着させる。

強く握っている所為か、恐怖から手が震える。

個室で見える範囲は限られているはずなのに、視線は定まらず左右へと絶えず動いている。

「五分……五分……」

朝奈は連続して迫り来る死の恐怖に、緊張の極限状態になっていた。

まだ数十秒しか経っていないはずなのに、もう何分もこうしているような気がする。

「はぁ、はぁ……はぁ……」

——いくら香水を付けていても血の臭いが消える訳じゃない。そろそろ来るかも……！

朝奈は自分の傷口を見ながらそう思った。

考えの通り、「ガンッ」という音が聞こえトイレの入り口が開いた。長首麒麟が頭を覗かせているのかもしれない。恐らくこの音はトイレの扉を頭で押し開けている音だろう。

ガンッ！

ガンッ！

バンッ！

順番に入り口に近い方から扉が開く音と、頭を叩き付ける音が聞こえる。このままではかなりまずい状態だ。

——バンッ！

ついに朝奈の隠れている隣の個室までやってきた。もう後がない。

——神様……！

ガバンッ！

鍵を掛けていたにも拘らず、あっさりと扉は麒麟首の頭突きの勢いで開け放たれてしまった。

黄色い斑模様が見る影も無くなった灰色の巨大な顔と、血走り飛び出た大きな目が個室に入ってきて来る。

その醜い大きな目が朝奈の姿を捉えた。

「あああああつ！」

その瞬間、まだ麒麟が頭突きをする前に、朝奈はナイフを長首麒麟の鼻頭に突き刺した。

いよいよ獲物を追い詰め止めをさせると感じていた麒麟の怪物は、思わぬ反撃と痛みに驚き頭を引つ込ませる。

朝奈はその僅かな隙間を利用して個室の外に飛び出した。

全速力で走りトイレから出る。

と同時に三本の麒麟の首が、窓や床を突き破り朝奈の前を塞ぐように飛び出してきた。

「……………くっ！」

これでは通れる訳がない。朝奈は急ブレーキを掛けると体の向きを反転させた。

すると待つてましたとばかりに、先ほどトイレの中に首を突っ込んできた麒麟の頭が、正面から急接近してきた。一本道の廊下で挟み撃ちに遭ってしまった形だ。下に行くにも上に行くにも、階段は麒麟の首の後ろにある。ここから逃げるにはどちらかの麒麟を越えて行くしかない。だが、それはあまりにも危険すぎる行動だった。

「——あつ！」

朝奈の目に何かが止まった。穴だ。先ほどトイレに隠れる前に麒麟の首が飛び出してきた穴が、三体の麒麟首の一手前にある。あれを通れば上手く下に逃れられるかもしれない。

どっち道このままでは死ぬのだ。やってみる価値はある。朝奈は覚悟を決めると、三体の麒麟首目掛け走り出した。

「ジュルウルラアアア！」

三本それぞれの首が、雄叫びを上げて頭を突き出してくる。

その速度は速く、このままでは朝奈よりも先に穴を通り越しそうだ。そうなれば、朝奈は麒麟首が邪魔で穴を通れなくなってしまう。

朝奈は腰に挿した健太の鞆から取った包丁を抜き取ると、それを躊躇なく真ん中の麒麟首目掛けて投げた。

志郎から護身術くらいは習っているが、朝奈に投ナイフ技術などはない。これはただの賭けだった。

だが運がいいことにナイフは麒麟首の片目に命中した。

真ん中の麒麟首は朝奈の狙った通り、左右の麒麟首を妨害しその速度を遅らせる。

「やったー！」

その気を逃すべく朝奈は穴の前まで駆け抜けると、細い体を活かしてそれを通り抜けた。この時だけは自分の貧相なスタイルにも感謝したことだろう。

「これで、三階。あと少しで……一階だ……！」

電話をしてからもう二分は経ったと思うが、まだ麒麟首の動きに変化は無い。

截はどうやら政府の人間と交戦しているらしい。もしかしたら五分では長首麒麟を倒せないかもしれない。朝奈の中で自分で長首麒麟を倒すという考えが浮かんた。

「先に地下に着けたら私の勝ち、着けなかったら負けか。ここまで逃げたんだし、最後まで自分で決着をつけてやる！」

天井からUターンするように現れた五本の麒麟首を確認すると、朝奈は再び走りだした。

先ほどまでのように下から突き上げるのとは違い、上に上げた首をUターンさせて攻撃してくる為、自然と麒麟首は動きが遅く放漫になる。

——なんか下に行くほど攻撃がされ難くなるみたい。もしかしたら、本体の近くに行けば攻撃は届かないのかも。これなら本当に下に着ければ私の勝ちっばいな。

度重なる攻撃に慣れたことと、先ほどよりも麒麟首の攻撃がゆるくなってきたため、朝奈は僅かに元気を取り戻した。

「どうだ？ 黒服は殺したか？」

能面顔の女性、石井春奈いしいはるなはあっさりとした調子で電話の相手に聞いた。

こうして定期的に部下と連絡を取り合うことで、お互いの無事を確かめているのだ。

彼女は部下二人に紀行園正面入り口から左の建物を調べさせ、自分分は右の建物に来ていた。

通常ならばイミユニティーの人間は三人一組から五人一組で行動する。それは悪魔と戦う際に囃、援護、止めと役割分担をしているからだ。

だが、今この部隊はその戦法を取らなかった。

彼女が類まれなる実力を持っているということもあるが、大きな理由は相手が人間だからだ。相手が人間ならば、態々（わざわざ）一人相手にそれ程の人員を裂く必要はない。

「何、まだ？ こちらは二人だろ。何を手間取っている。さっさと殺せ。次に連絡を取る時勝利の知らせがなければ……お前たち二人、永遠に出世出来なくなると思え」

冷酷な言葉を発すると、相手の返事を待つこと無く石井は電話を切った。

「さて……——隠れているのは分かっている。さっさと出て来い。私は面倒くさい真似が嫌いなんだ」

間を置かずして大きく声を発する。

だが、こんなことを言われて隠れてくる人間が出てくる訳が無い。当然、翠も健太も姿を見せなかった。

二人は今、西側職員用建物の一階ロビー、その大階段の後ろに隠れている。正面から姿が見えることはないが、このまま石井が探し回れば時間を置かずして二人は見つかることは明らかだ。

石井の姿を階段の影から覗き見ると、翠は舌打ちした。

「ち、よりによって能面女か。普通こういう災害発生初期の任務は下っ端が来るのに……なんであれが来てるんだ？」

「知ってるのか？」

健太が男口調で話す翠に恐る恐る聞いた。

「ああ、あいつはイミューニティー総合監察官……そうだな、一般的な会社で言えば、部長クラスの人間だよ」

「ヤバイ相手なのかよ？」

「さあね。実力的にはそれなりに良いらしいけど、会ったのは初めてだからな。まあ、弱くないことだけは確かだよ」

「くそ、早く探さなきゃいけないって時に」

「仕様がないだろ。あいつは冷徹で有名だ。見つければ一般市民だろうと殺される」

その言葉に健太はぞっとした。

「この分じゃ、截の方も苦労してそうだな」

翠は溜息をつく、窓から見えている向かいの建物に視線を向けた。

曲がり曲がった。

白い壁を挟む様に両側に扉が見える。

だが、どちらの扉も鍵が掛かっているのか全く開ける事が出来ない。

「くそ、行き止まりか！」

截は焦った。

イミュニティーと遭遇する危険を冒してまで、朝奈を探すために一階へ降りてきた截だったが、案の定朝奈は見つからず、二人の屈強な男と鉢合わせしてしまった。

二対一はまずいと咄嗟に逃げ出したものの、何故か男達は執拗に自分を追ってくる。

朝奈から助けを求められたこともあり、あまりこんなことに時間を費やしている暇はない。

截はなんとかイミュニティーの二人を撒こうとしたが、とうとうこうして袋小路に追い詰められてしまったのだ。

廊下の曲がり角から、褐色に日焼けした若禿げの男がナイフを構えながら歩いてくる。

——ちっ………！

截も二本のナイフを抜いた。

褐色男は截が若者ということもあり、やや余裕があるように大股で近づいてくる。だが、決してその足取りに油断はない。曲りなりにもプロだ。

二人の間の距離は一センチも無いところまで狭まった。

截の基本的な戦い型は待つ、つまり「柔」を中心とする。

元々あまり筋肉質ではない截は、相手の攻撃を受け止めたり、弾いたりすることには向いていない。もちろん黒服の訓練でそれなりに鍛えてはいる為、普通の一般男性よりは全然筋肉はあるのだが、生まれ持った体質の限界というものはある。

特に目の前に居るような、筋肉むき出しの大男が相手の場合は力ではとても適いそうにはなかった。

だから截は待ちを主体とし、自分の「感覚」を活かして攻撃することが多かった。つまりカウンター攻撃を得意とするのだ。

悪魔や自分よりも力の強い相手からの攻撃は、手や腰や腕を使って逸らし、受け流し、巧みに外す。

そしてその隙に相手を攻撃するというのが、いつものパターンだった。

しかし、今回ばかりはそうはいかない。

どうやら相手の男も「待ち」が基本の戦い方をするらしい。ずっと様子を伺うように、動くことなく截を睨み付けている。

今の状態を簡単に言えば、拮抗状態ということだ。

こうなってしまうては、すぐに戦闘を終えることは出来なくなる。

「朝奈……くそっ……！」

截は朝奈のことを思い、気が気でなかった。

「きゃあっ！」

朝奈は間一髪で、麒麟の叩き付ける様な首の攻撃を横にかわした。その勢いで目の前に在った階段を転げ落ちる。だが苦痛に苦しむ間も無く麒麟首は追撃を繰り出してきた。

朝奈は痛みを我慢し何とか立つと、そのまま2階へと降りる。

「はあ、はあっ……はあ……あと、一階……！」

普通ならば一階まで階段は続いているから、そのまま走り降りればいいのだが、そうは行かなかった。

麒麟首が階段を塞ぐように飛び出していたからだ。

廊下を挟んで二つある階段に、それぞれ二本ずつ麒麟首が立ちふさがっている。これを突破することは不可能に近い。

——でも、まだ出口はある……！

朝奈はそう考えると、これまで麒麟首が上に行く為に開けた穴を探した。

地下から上に首を伸ばすには、必ず階のどこかに穴を開ける必要がある。それを通れば下の階に降りられると思っただのだ。

「あ、あつた！」

廊下のだ真ん中に穴を見つけると、朝奈は喜びながらそれに飛び降りようとした。

だが、すくつと下に落ちていくはずの足が、何故か柔らかいものを踏んでいる。朝奈は驚きながら視線を下に向けた。

そこには下から塞ぐようにして押し付けられている、灰色の塊があった。麒麟首の首だ。

上の階ならば首を限界まで伸ばしている為、ただ攻撃を繰り出すことしか出来ない。しかし、下の階に行けば行くほど、攻撃を出し難くなるものの、首の長さに余裕が生まれる。長首麒麟はそれを利用して自分の首で穴を塞いでいたのだった。

「これじゃ——逃げられない!?」

階段も、穴も塞がれ、朝奈は完全に二階に幽閉されたことになる。もはや下に行く方法はない。

その姿を確認すると、五本の麒麟首は悠々と朝奈に接近して来た。
「——うつ！」

朝奈は廊下から真横、右の部屋に入ると鍵を掛け閉じこもった。しかし壁や床をブチ破って現れるような化け物だ。数十秒持つかどうか怪しい。

「どうしよう……どうしよう……！」

何とかしてどれかの首を退かさなければ、下に行くことは出来ない。朝奈は頭をフルに回転させ現状の打開策を練った。

一番確実な方法は首のどれかを倒せばいいのだが、こんな小さなお洒落だけが取り得の様な西洋風ナイフでは、とてもそんなことは不可能だ。

ここは二階だしあまり高くないから窓から逃げるということも考えたが、先ほど外に数匹の悪魔が歩いているのが横目に見えた。

窓から下に降りれば、その瞬間に囲まれて食べられてしまうだろう。こうなるともはや首を退かすしかない。

時間は刻一刻と無くなっていく。朝奈は必死に考えた。

バキッ！

その時、とうとう部屋の扉が破られた。真正面から三本の麒麟首が猛進してくる。

朝奈はそれをコンマ数秒の差でかわすと、部屋から飛び出した。勢いのまま階段の真ん前まで一気に走っていく。背後からは二本の麒麟首が、伸びた首を引っ込めるように接近し、自分を攻撃しようと狙っている。

階段を塞いでいる二本の首の目の前まで来ると、朝奈はそこで自分の腕を深くナイフで切り裂いた。

鮮血が飛び散り、階段から飛び出している二本の首の根元が赤く染まる。

そのまま朝奈は、麒麟首が階段のある場所の凹んだくぼみに顔を覗かせる前に、三階へと上った。

直後二本の首が角から現れた。

「そこ」には獲物の臭いが大量に感じられる。首を戻すような動きの為、目は前を向いており、それが朝奈本体なのか飛び散った血なのか、麒麟首には区別できない。

自分の首の根元にある獲物を攻撃するには、九十度直角に首を曲げる必要がある。麒麟首の骨格でそんなことが出来る訳が無い。

一端攻撃位置を変えるために、長首麒麟は首を引っ込ませた。
「今だ！」

朝奈は上の階段の中腹から飛び降りるように、一階への階段に着地した。同時に背後から麒麟首が上に向かって突き出される。あと一秒飛び出すのが遅かったら直撃していただろう。

「これで1階……後は本体を探すだけだ」

長首麒麟の本体が地下にあると、あれだけ首を振り回せばその天井は無事な状態ではないはずだ。間違いなく、大きな穴が開いているだろう。

朝奈はその穴を探すため、限界に近い体力を振り絞って駆け出した。

もはや麒麟首は首を曲げられないのか攻撃してこない。朝奈の行動を邪魔するものは何一つなかった。

「あつた！」

朝奈は体育館のような部屋に入った瞬間、それを見つけた。

天井に向かって伸びている五本の首、そして大きな穴の開いた床の下には、無数の細い足を生やした麒麟の体があった。

それぞれ右を向いた足が前に進むとするため、どうやら円形に回転するようにしか歩くことが出来ないらしい。なんの鎖などの束縛もされていないのは、それが分かっているからだろう。

「ジュラアアアアイイイ！」

長首麒麟は全ての首を元の長さに戻すと、大きく鳴いた。伸びたままでは角度の問題から攻撃できなかったのだが、どうやら首を戻すことでそれをできる様に調整したらしい。

五本全ての首が恐ろしい目つきで朝奈を睨みつけてきた。

「さっきの赤い奴に比べたら、全然怖くないよ」

朝奈は恐怖感が麻痺してしまったかのように呟くと、ナイフを前に構えた。

ダダダダ……

背後から誰かが走ってくる音が聞こえた。

朝奈がナイフを向けながらそちらを向くと、截が息切れしながら立っていた。

「……はあ、はあ……よかった！ 無事だったか」

「截さん！ イミユニティーとかの人たちはどうしたの？」

「ああ。はあ、はあ……二人とも部屋に閉じ込めてるよ。しばらく出て来ることはない」

「そう、良かった」

朝奈は截の登場で一層やる気がでてきた。

「ここからは俺の仕事だ。朝奈さんは、マッチかライターと油を探してもらえないか」

「……あいつを燃やすのね。分かった」

あれほど大きな怪物だとナイフで殺すのは不可能だ。

朝奈は截の考えを瞬時に悟った。急いで必要な道具を探しに部屋から出て行く。

截は長首麒麟に向き直ると、二本のナイフを引き抜き、向かい合った。

「はあ、はあ……さあ、やるか」

倉庫、会議室、ロビー。朝奈は数多くの部屋を走り回った。

ライターはすなりと見つけることができたが、どこにも油などはない。恐らくここの職員はフリーゾーンか、紀行園の外で食事をしているのだろう。給仕室にもコーヒーを入れるためのポットしかなかった以上、この建物の中で油類を手に入れることはかなり困難だ。

朝奈はロビーで立ち止まり考えた。

「フリーゾーンまで戻れば油はあると思うけど、そんな時間は無いし……」

視線を意味も無く周囲に走らせていると、あるものが目に入る。

「車？」

電気自動車でない車があれば、その中にはオイルがある。タンクに穴を開ければ簡単に取り出すことが出来るはずだ。

朝奈は外に出ようとしたが、大きな問題に気がついた。

建物の外には悪魔が数匹徘徊しているのだ。今の朝奈の力では、正面から戦って生き延びることは出来ない。

慎重に、かつ迅速に、悪魔に気づかれることなくオイルを取るという、かなりデリケートな作業が必要とされる。

「何とかしてバレずにオイルをとらないと……！」

軽い準備の後、冷や汗を流しつつも、朝奈はゆっくりと外へ繋がる自動ドアに近づいた。

自動ドアの開く音が鳴る。

その場でしゃがむ様に身を低くし、じつと辺りの様子を伺った。どうやらまだ悪魔は気づいていないらしい。こちらを見ている者は居ない。

小さな溜息を吐いた後、朝奈はその低い姿勢のまま一昔前の泥棒のように、チョコチョコ歩いて建物の前にある大型の車の横まで辿り着いた。

給仕室から持ってきていた掃除用の蓋付きバケツを横に置き、その中へ繋げたホースを車の下に忍ばせる。そしてオイルを流す為のパイプにナイフで穴を開けた。

幸いにもタンクいっぱいに入っていたのか、オイルは勢い良く流れ出てくる。これならば満杯とは行かないまでも、ある程度の量はバケツに溜まるだろう。

後は時間との勝負だけだ。

ジャリッ――

車の正面に一体の悪魔が近寄ってきた。朝奈の気配を感じているのか、鼻をスンスン言わせている。

「あつ！ さつき思いつきり香水付けたんだつた！」

悪魔は回り込むように車の右側面へと歩き出した。これはかなりまずい状況だ。

まだオイルは殆ど溜まっていない。今の量では到底あの長首麒麟を仕留めることなど出来ないだろう。

朝奈はそーつと物音を立てないように車の下へと滑り込んだ。

——気づきませんように……！

狭い隙間から悪魔の足が見える。そしてそれはすぐに真横、バケツの前までやってきた。

今の朝奈には気配を伝える為の要素が数多くある。

香水、汗、腕の出血。

一応、腕の傷口はハンカチで縛っているので今は血が止まっているが、臭いだけはどうしようもない。悪魔は何かを確信するようにその醜い頭を車の下へと覗かせた。

恋人のように見つめ合う一人の女性と、一匹の化け物。まるで美女と野獣のような素晴らしい絵図だ。唯一の問題は、片方が片方を食いたがっていることだけだろう。

「ギユウウアアアア！」

歓喜の雄叫びを上げると、悪魔は激しく両腕を車の下に伸ばし出した。

「あわわわわ！」

朝奈は腰をくねらせ、何とか反対側から逃れようとする。だが、今度は仲間の声を聞きつけた別の悪魔が反対側にやってきた。そして同じように両腕を伸ばしてくる。この獲物は自分の物だと主張するように。

「ギユルルラアアアア！」

「きゃあああああつー！？」

激しく揺れる車。朝奈はその下で出来るだけ体を縮込ませながら、無我夢中で悪魔の四本の腕から逃げ続けた。

「怖い、怖いよ……！！」

截に助けを求めようにも、今彼は長首麒麟の本体を相手にしている。ここに来れる訳がない。幾ら怖がっていても、自分自身の力で乗り越えるしかなかった。

悪魔が暴れた所為でバケツが倒れ中のオイルがこぼれる。大分溜まっていたオイルの全てがこれで無駄になってしまった。

ガッシッ！

右側の悪魔の片腕が朝奈の白いパーカーを掴んだ。とうとう捕ま
ってしまったのだ。

「いやあああ！？」

朝奈は必死に手を離そうとしたが、悪魔の力は物凄い。いつの間
にかパーカーは破れ、ボロボロになってしまった。

だが、その所為でパーカーのポケットにしまっていたライターが
地面に転がり落ちた。それは丁度朝奈の目の前で止まった。

「あ！？」

幸いなことに、オイルは朝奈の居る車の下には流れてきていない。
一か八かの賭けのつもりで朝奈はライターを手を取った。

「もう——どうにでもなれえー！」

「ボウッ」という音と共に火の蛇が生まれ、悪魔の足元にその体
を絡みつかせる。

「ギユウアウアア！？」

右側の悪魔は一瞬で火達磨になった。

突然もの凄い炎が立ち上がったのだ。左側の悪魔もそれに驚き、
逃げるように遠くへ走っていった。

今しか生き残るチャンスはない。朝奈は車の下から這い出ると、
その大型車の中に乗り込んだ。そして奇跡的に鍵のかかっていたそ
の車のエンジンを入れる。

運転手が車に乗ろうとしたところで悪魔に襲われたのかどうか知
らないが、朝奈にとってはこれ以上ない幸運な出来事だ。

朝奈はそのまま車を建物の自動ドアの前まで動かし、入り口を塞
ぐように横に停車させた。

素人運転だったが、車が大きかったこともありそれはぴったりと
入り口を塞ぐことができた。これで悪魔も中に入っては来れないだ
ろう。後はオイルを急いで取るだけだ。

ダッシュで再び給仕室まで走りバケツを取つてくると、急いでオ
イルをそのの中に入れた。もうかなりの時間が経っている。截の身

が無事かどうかも怪しい。

朝奈は体力の限界にあるにも関わらず、バケツを抱えて力の限り走った。

すぐに先ほどの大きな部屋の入り口が見えてくる。

「截さん！」

朝奈は倒れこむようにその部屋へと入った。

「……………」

するとそこには元気に走り回っている截と、首が二本なくなりおびただしい血を垂れ流している長首麒麟が居た。

「はあ、はあ——…あ、朝奈さん。やっときたか。早くあいつに油をかけてくれ……！ 流石に体力的にまずい」

截は息切れをしながらそう言った。

「ど、どうやってあの首を？」

「ああ、隠れながら反撃したり、罾とか地形を利用したり色々……」

「——それよりいいから早く油を！」

「あ、う、うん！」

「俺があいつの前に飛び出すから、その時に思いっきりバケツの中身をぶちまけるんだ。頼んだぞ！」

「任せて」

截は癖毛の髪を風に靡かせながら、一直線に長首麒麟の前まで走り出した。

「ジユラアアアイイイ！」

截に大切な首を二本も斬られていた長首麒麟は、怒りに満ちた目で残り三本の首を総動員し、頭突きを繰り返してきた。

ゴムのように伸び縮みする材質は、伸ばせば伸ばすほど体積の関係で細くなっていく。そしてそれはこの麒麟首も例外ではない。

縮まっていたときは密度が高いため切れ難かった麒麟首も、伸びた状態では密度が大きく下がる。つまり切れやすくなるのだ。截はそれを狙って二本の首を切り落としていた。

迫り来る麒麟首を感覚を活かしてかわし、その内の一本を白柄ナ

イフで切り上げる。切断とまではいかなかったものの、それは深い傷を与えた。

今の特攻は完全に一回限りの技だ。人間の身で正面から怪物とやりあい続けることはできない。これまで壁や床を活かして隠れながら戦っていた截がここまで強引な行動をとったのは、全て朝奈のためだった。

敢えて自分を仕留められる状況を作り出すことで、長首麒麟の注目を一心に引き付けたのだ。

切り上げたと同時に倒れこんだ截に向かって、上から四本の麒麟首が振り下ろされようとしている。

「朝奈っー！」

截は叫んだ。

バシャァー！

バケツ一杯のオイルが一階から地下にある長首麒麟の本体へと掛けられた。長首麒麟は不思議そうにその液体を見ている。

「さようなら」

朝奈はそれを冷たい目で見ると、ライターで火を点けた紙を投げ落とした。

「ジュアアアアアアアアア！」

フライパンの上でのた打ち回るウナギのように、長首麒麟はもがき回る。しかし円を描く様にしか歩けない足の所為で、地下の炎熱地獄から逃れることは出来なかった。無論、オイルは長首麒麟の本体に掛かっているから例えまともに歩けても意味は無いのだが。

しばらくした後、長首麒麟は焦げた魚のような臭いを発しながら動かなくなった。

「……やっ たな」

截があまり口を広げずに朝奈に微笑む。

その微笑を見て、朝奈もやっと終わったと悟り床の上に座り込んだ。

「ん？」

黒い服が、朝奈の背に掛かった。警察の特殊部隊の服と、カジユアルなジャケットを混ぜたような服だ。

後ろを向くと、截が視線を泳がせながら立っていた。

上着を脱いだ所為で、上半身の服装が変わっている。それは黒いロングTシャツに、薄い灰色の防弾チョッキを着たような格好だった。

朝奈が何か光るものに気を取られると、截の首元に銀色の十字架のネックレスが輝いているのが見えた。

「あ、ほら。そのカツコで歩き回るのは嫌だろ？」

朝奈のパーカーは悪魔に引きちぎられボロボロになっている。しかも所々中に着ていた服にまで爪が届いていたらしく、下着が見えていた。

「きゃっ!？」

朝奈は急いで截の黒服の上着を纏うと、顔を赤くして両手を前に交差させた。

「……— 見ろ、地下室だ。もしかしたら、博士もあそこに居るかもしれない」

截は変な空気を紛らわす為に下に指を指した。

まだ燃え続けている長首麒麟の死体の横、丁度二人から見て真正面の地下の壁に、小さな扉があった。

「あれは？」

朝奈は期待感と不安交じりの声で聞く。

「多分、研究室だな」

截も何時ものような冷たい雰囲気に戻り、それを見つめた。

<第五章>超感覚者計画

<第五章>”超感覚者計画”

職員用建物（右） 午後1：10

「——おい、悪魔だ」

翠は右横の窓から外を歩いている悪魔を見つけた。窓は既に何度か体当たりをされていたようで、ヒビだらけだ。

「あれを利用するぞ。私が走り出したら離れず着いて来い」

「え、利用ってどうやってだよ？」

「いいから黙って言うことを聞け」

「はあ？ どういうことか説明しろよ！」

健太は翠の命令口調に苛立ち、ついケンカ腰になった。

その直後、翠の下腕部によって首を階段の後ろに押さえつけられる。

「がつ！？」

「いいか、私の言うことを聞かないならここであんたを殺す。勘違いしてるみたいだから言つとくけど、私は民間人がどうなるうと知ったことじゃないんだよ。今私があんたの恋人を探しに来てるのは截のためだ。あいつにあんたのことを頼まれたからな」

「……——へっ、恋人のお願いを聞いてるって訳か……？」

「恋人？ はは、何言ってるの。私にあいつへの恋愛感情は無いし、あいつにも私への恋愛感情は無い。私とあいつの関係は……敢えて言うとすれば、お互い自分自身ってとこかな」

「自分自身……？」

「とにかく、私の言うことを聞かないのならここで私があんたを殺す。黙って言うことを聞いてろ」

「……お前なんかに殺されるかよ」

「ふふ、言っても分かんないと思うけど、私は後衛なんだ。白兵戦だけなら私の実力は截よりも上。あんたなんかすぐに瞬殺できるから」

翠は含み笑いをしながらそう言った。

「そこか、隠れてないで出て来い。黒服ならイミューニティーの人間一人どうってことないだろ？」

話し声に気づいた石井が階段に向かって呼びかける。

「——さあ、やるぞ！」

翠は健太に声を掛け腕の裾から細長いナイフを抜くと、それを右の窓に向かって投げた。それは丁度ヒビの中心を貫き綺麗にガラスを粉砕する。

「ギューアアアア！」

同時に外に居た悪魔が建物の中に侵入してきた。

翠と健太は階段の後ろを左に向かって走り、悪魔の視界から消える。すると当然悪魔の目には石井が真っ直ぐに写り込んだ。

「つち、ずる賢い奴だな！」

石井は舌打ちすると、懷からドスのような形のナイフを取り出し、悪魔と向き合った。その隙に翠らは裏口へと向う。

「こんなとこであいつとやり合っても何の得もないからな」

翠は鋭い目つきで自分の後ろ姿を睨み付ける石井を鼻で笑うと、裏口へ続いている廊下の扉を開けようとした。

「ゴオオオウウアアアア！」

刹那、先ほど悪魔が飛び込んできた窓と同じ方向から、あの「赤鬼」が二階までの全ての壁を粉砕して飛び込んできた。

あまりに強い勢いのため窓の前で止まりきれずに、階段が左からと真ん中まで破壊される。

「なっ——！？」

翠と健太はあまりに意外な赤鬼の登場に、言葉を失った。

太い大きな両腕で床を踏みしめ、長い無数の黒紙を蠢かせながら、赤鬼は視線を二人に向けた。

「お……おいつ……！？」

健太は頭が真っ白になった様子で翠の方を向く。

「くそっ、裏口から逃げてもこいつを撒けるとは思えない。正面入り口に走るぞ、截のバイクを借りる！」

「借りるって、あの二人はどうするんだよ！？」

「こいつは私たちを追ってくるから大丈夫だよ、来るぞ——走れっ！」

「畜生！」

二人は方向を百八十度反転させると、石井のいる正面入り口に向かって走り出した。入り口の前に居た石井は突然階段の左横から現れた赤鬼の凄まじい迫力に驚く。近くに居た先ほどの悪魔は赤鬼の発する威圧感に押され、瞬く間に外に逃げていった。

「何だこれは！？ いや、まさかこれが例の——……？」

「ゴウルルウウ……」

赤鬼は小型のティラノサウルスのように、しのしと両腕で大地を踏みしめ、石井に近づいて来る。

「急げ！」

翠と健太は入り口を駆け抜けけると、二本の道路を挟んだ位置にある建物の前、截のバイクを目指して走り続けた。

「あ、お前ら待てっ！」

石井も二人の後を追うように足を動かす。

そしてその三人の背後を、赤鬼が尋常でない気配を撒き散らしながら追いかけた。

「うぬあああああ！」

恐怖を振り払うかのように叫びながら、健太は両手両足を高速で前後に振り、死ぬ気で走り続ける。

先に辿りついた翠は合鍵でバイクのエンジンを入れると、やっと追いついた健太に向かって叫んだ。

「何してる愚図、さっさと乗れ！」

「分かってるよ！」

健太は青白い顔で答える。走った所為か二又のような前髪が横に広がり、七三分けのような髪型になっていた。

健太が乗ったことを確認すると、翠はハンドルを強く握り締め、間近まで来た石井に向かい声を発した。

「じゃあな能面、うまく逃げろよ！」

「お前っ！」

石井はバイクに手を伸ばしたが、その前に翠はアクセルを入れた為、その手は宙を掴んだ。

「ゴオオオオオオ！」

すぐ背後には赤鬼が迫っている。

「くっ！」

石井はナイフの柄を壁に叩き付けると、左側職員用建物の入り口へと駆け込んだ。入り口の前には大型車が横向きに止めてあったが、幸いなことにその扉は鍵が掛かっていない。少し手間取ったものの、石井は赤鬼に追いつかれることなくその中へと入っていった。

「あれ？ 赤鬼の奴能面を追って行ったな……まあ截なら何とかするか」

翠はミラーで建物の中へ向かっていく赤鬼を発見し、冷や汗を流した。

「おい、止めるよ。雅子を探すんじゃないのかよ！」

健太が走り続けるバイクの上で大声を上げる。

「あの建物に人は居そうになかった。そんなに心配なら後で截に確かめさせるから心配すんな。私らは他の場所を探そう」

「他ってどこだよ」

「フリーゾーンだよ」

「フリーゾーンは見たから。どこにも居なかった」

「あんたのことだから一般客用の場所しか探してないんだろ？ フリーゾーンにはショッピングモールの後ろに大きな職員用の建物があるんだ。といっても林の中に隠れるように立っているから、周りから見えることは無いんだけどね」

「じゃあ、そこに雅子が居る可能性があるのか？」

「ショッピングモールに逃げ込めなかった人間が隠れている可能性なら高いさ」

翠は関心なさそうに言った。

截のことが心配だったから。

だが、自分が行ってもそもそもあの化け物を殺す準備が出来ていない以上、何の意味も無い。だから赤鬼を殺す道具をそろえる為に、翠はフリーゾーンに行く必要があった。

「截、死ぬなよ」

翠は小さく呟くと、バイクを加速させた。

職員用建物（左） 午後1：08

「じゃあ、いいか。開けるよ」

截は地下室のドアのノブを握った。その真後ろでは、火柱を立ち上がらせながら長首麒麟が燃えている。

朝奈は火を気にしつつ静かに頷いた。

「あれ？ 開かないな」

「截は何度も手に力を込めてみたが、扉はビクともしない。鍵が掛かっているようだ。」

「截さん。そこに電卓みたいのが埋まつてるけど、暗証番号を入れるんじゃない？」

扉の左横の壁にある機器を見つけ、朝奈がそう言った。

「暗証番号か、まいったな。これじゃ開けられない。君の話だところはデイエス・イレの研究所だ。中には何か重要な情報があると思うんだけどな」

「私に任せて」

「ん？」

朝奈は片手をその機器に当てると、ゆっくりと目をつぶった。

広い部屋がある。この地下室だ。

左手には金属製のコンテナのようなものがあり、中からは何度も何かを叩き付けるような音が聞こえる。恐らく長首麒麟が入っているのだろう。

右手には何も無く、一面真っ白な壁で被われている。 unnecessaryものは一切置いていないといった様子だ。

そして部屋の正面には一つだけ扉があり、そこに一人の女性が立っていた。

ライオンの鬘のような長い髪、異常に薄い眉、そして唇は薄いのに大きな口、紀行園の園長、大西幸子だ。

大西は扉横にくっ付いている機器に指を這わせると、慣れた手つきで番号を押し出した。

一……九……三……八……

「分かった」

朝奈は感覚で知った番号を素早く機器に入力した。高い電子音と共に扉が開く。

「すごいな。君の感覚はどれくらい前の軌跡まで読み取れるんだ？」

「んゝ場合によるからね。すぐく前のことが分かる時もあるし、数分前のことしか分からない時もある。截さんだって何時も敏感に感覚が働く訳じゃないでしょ？」

「まあね。俺も遠くの悪魔を感じれる時や、近くの悪魔を感じれない時もある。微小変化を読み取れるかどうかは運見たいなものかな」

「きつとそうだろうね。風みたいに強く吹いていると分かるけど、弱く吹いていないと風があるかどうか分からないのと同じだよ」

「なるほど。例えばうまいな」

「へへ、私頭がいいから」

「そんなことを言っていると、自己催眠にかかって一種の陶醉状態になるぞ」

「難しいこと言うね」

朝奈は複雑な表情を作りながら扉を開けた。

中は電気が点いており、教室並みの広さがあった。長首麒麟の死体がある部屋と同様に、天井までの高さが三メートル以上もある。

また、中央には大きな手術台の様なものがあり、それを囲むようにしてデスクやパソコン、二人が見たことも無い機器が多数設置されていた。

奥はカーテンが掛かっている為どうなっているのかは分からないが、どうやら誰も居ないようだ。

「誰も居ないな」

截は白柄ナイフを鞘に収めると、情報収集をする為デスクや手術

台を調べだした。

「朝奈さんも色々と見てみてくれ。何か博士に関係する資料があるかもしれない」

「分かった」

二人は緊張した様子で手当たり次第に周囲を探索した。

「ん、何これ……^{バシン} B A S N 計画？」

偶然手に取ったファイルが目止まる。

「見せてくれ」

截は朝奈の横に立つと、それを覗き込むように見た。

「Being Appended Sense Net Project……超感覚者計画……」

「どうのこと？」

朝奈はそれを信じられないものを見るように見つめた。

Being Appended Sense Net Project

通称 ^{バシン} B A S N 計画について

追加情報報告

報告者：鳥島宗助

文章：渋谷 次太郎

我らディエス・イレの諜報部員、タヌキこと鳥島宗助の報告によると、数十年前から突発的に出現するようになった超感覚者たちには、

ある共通点があることが分かった。

あまり数が多いわけではない超感覚者の、それもイミュニティーの隠蔽工作によってこれまで中々得ることが出来なかった情報を、漸くタヌキが遂に持ち帰ることに成功したのだ。

我々の間でも噂されていたことだが、超感覚者の両親の多くが離婚、仲違いしているという情報は既に皆ご承知の限りだろう。

では何故そのような現象が起きていたのか。答えは実に単純明白だ。その結婚に愛が無いからである。

タヌキの持ち帰った情報によれば、どうやら超感覚者の母親の殆どがとある研究機関の人間、もしくはそれに関係する施設の職員だという恐るべき事実が分かった。

そう、憎くきイミュニティーである。

彼女たちは機関から指令を受け、超感覚者を作り出す為の体質に合った男性の下へと嫁いだ。妊娠の過程で何かをしたのか、子を授かる前に既に自分に何かをしたのかは定かではないが、通常の胎児とは異なった妊娠をしたと云う事だけは確かだ。

一体イミュニティーが何のためにこのような人道に反する行いをしたのか、その真の理由は未だ不明である。

タヌキの実力を持ってしてもその真実は知ることが出来なかった。恐らくその本当の理由を知っているのはイミュニティーの上層部、そう六角行成に近い人間だけだろう。

我々は真実を明らかにするためにも、イミュニティーの非人道的な行いを社会に知らしめる為にも、黙過この調査を続行するつもりだ。何か情報を掴んだ場合は直ちに私渋谷に知らせて頂きたい。

では諸君。

デイエス・イレに幸あれ。

追伸　：タヌキは現在イミュニティーへ潜伏してはいない。よって

この紙を同志に見せることは構わないが、イミューニティーの目にだけはつかないようにして欲しい。我々が事実を知っていることを隠すためにも。また、付属の紙に我々が掴んだ超感覚者の名簿を乗せている。興味があれば見るとよい。

「なっ……」

朝奈と截は絶句した。

自分たちの母がイミューニティーに関わっていたこと、そして自分たちが何かの計画の為に利用されていたということ。

とてもここに書いてある内容は信じる事が出来ない。

いや、信じたくは無い。頭の中はショックでパンク寸前だ。

紙を持つ朝奈の手が震える。

「……名簿を見てみよう」

截は自分の口を塞ぐように手の平を当てると、クリップで止めてある二枚目の紙を前に捲った。

B A S N 名簿

(＊現状で情報を得れた人間のみ)

田中一郎 30歳 …… 西野美香 30歳 …… 篠原厳輔 24歳 ……

……………

深井浩也 18歳、舛田途蔵 27歳 …… 沖田悠樹 20歳

沖田敏 20歳 ……

関野朝奈 18歳 …… 福与香奈 20歳 ……

—————

「私の名前もある！」

朝奈は思わず叫んだ。

—————

…………… 五十嵐十子 33歳 …… 高齒真一 31歳 ……

曲直悟 享年19歳 飛山鋭 享年24歳 安田咲粕 22歳

…………… 神代裁 享年27歳 ……

…………… 鈴野明人 享年19歳 ……

—————

截はそこで目を動かすことを止めた。取り付かれたようにじっと一つの名前を見ている。

もう二度と目にするには無いと思っていたあの名前。自分を闇から救ってくれた存在。

大切な、自分の友人。

いや、親友と呼べる人間。

鈴野の名前が其処にあった。

「鈴野……」

三年前の事件を思い出す。

截の親友の一人、鈴野は——……悪魔化したため、截が自らの手で殺した相手だった。

両目を奪われていたはずなのに、彼はこちらの位置がまるで見えているかのごとく、執拗に追って来た。他の悪魔ではあれほどこちらの位置を正確に掴めることは無かった。当時の截はその理由を深く考えている余裕は無かったが、今この名簿で目にしたことであるがはつきりと理解できた。

そう、鈴野は超感覚者だった。

「そうか。あれは……そういうことだったのか」

截は親友の心臓をナイフで貫いた感触を思い出し、目頭が熱くなつた。

「これが本当なら、イミユニティーはずっと前から私たちを監視してたってことだね。何か……怖いな。知らない中に誰かが私をじっと見てたなんて」

朝奈は自分の腕で体を抱きながらそう言った。

「——いや、それは無いよ。俺たちの……監視をしている存在がいたとすれば、それは母親だろうな。一番身近で怪しまれることなく体調、精神面、全ての面で俺達を観察できる」

「お母さんが……」

朝奈は母親の顔を思い浮かべ悲しくなった。

——好きな人に振られた時に慰めてくれたのも、友達とケンカしたときに相談にのってくれたのも、全て演技だったの？

これまでの母に対するイメージや思い出が総崩れしていく。

「産む切っ掛けがイミユニティーの命令だってことだけが普通の親子とは違うけど、自分の身を痛めて産んだ子だ。君を大切に思っていない訳は無いよ」

截は朝奈の心情を感じ慰めるように言った。

しかし朝奈はかなり感情的な様子で食って掛かる。

「でも、私たちを騙してたことは事実でしょ！？ 截さんは平気な

の？」

「それは、シヨックには違いないさ。けど、俺は母さんの優しさも良いところちゃんと知っているから。好きで騙してたんじゃないと思う。きつと何か理由があるんだよ」

「幾ら理由があるからって……酷いよ、こんなの。まるで私たちがモルモットみたいじゃん！」

「朝奈……」

截は紙を握り締める朝奈の様子を黙って見つめた。

黒服の正式なメンバーとなった截から見れば、イミューニティーが母親にどんな脅しや命令をしたかも容易に想像できるし、母の考えや気持ちも理解できる。

しかし朝奈にはそんな考え方が出来る知識も経験もない。きつと今説明をしても理解は得れないだろう。

截は黙っていることしか出来なかった。

扉の上に開いたガラスの窓から中の様子が見える。その中では二人の男がロープで縛られていた。

「お前たち、二人掛かりで良いぞまだな」

眉間の筋肉をピクピクと動かしながら、石井はとある部屋の前に立っていた。

そこは事務室のような狭い部屋で、ロビーから左の扉を進んだ廊下の先、突き当たりの少し前にある部屋だ。

部屋の前には長いモップが廊下を横切るように設置され、扉が開かないように細工してある。

石井はそのモップを怒りを込めて蹴り飛ばすと、扉を開けた。

ロープを乱暴に外された褐色の男は、悪魔を目にしたような目つきで石井を見上げると、怯えたように言いわけを始めた。

「す、すいません！ 石井さん。ちょっと油断してしまいました……」

「油断？ 私が自ら選抜したお前がか？ それは私の目が節穴ということを意味しているのだろうな」

「い、いえ、違います」

「ふん」

石井は片足を上げると、勢い良く褐色の男の片腕を踏みつけた。

「あぎやあううう！？」

ぐりぐりとネジを締めるように、石井はその力を強めていく。

「それで、その相手の黒服はどんな奴だった？」

足をそのまま退かすことなく石井は聞いた。

「せつ、セミシヨートの癖毛の黒髪に……二本の大型ナイフを持っていました……うぐっ！」

「セミシヨートの癖毛？」

石井は何か思い当たることがあるのか、斜め右下に目を伏せ片手を顎に当てる。

「最初は……私たちが押していたのですが、途中から黒服の奴が変な手を使い出しまして……」

もはや痛みで喋れなくなっている褐色の男に代わって後ろに立つたオカッパの男が説明を続けた。

「ふん、大方、手が消えたとか言うんだろう？」

「な、何故分かったんです？ はい、確かに途中から、まるでナイフの攻撃が見えなくなりもう分けが分からなくなりました」

「やはりそうか。セミシヨートの癖毛、それにこの手口。ならば、相手は『キツネ』か？」

「キツネ？」

オカッパの男は突然石井が良く分からない言葉を口にしたので戸惑った。

「黒服のエリートだ。その腕が消えるというのは、あいつの編み出した独自の近接格闘戦術、部分囷だろうな」

「何ですかその部分囷とやらは？」

「自分の体を一つのチームと考えて、身体で戦法を行う技だ。例えば左腕を囷にして注意を引き付け、その隙にノーマークの右腕で攻撃するとか。ある意味、手品のミスディレクションに近い」

「そんなこと出来るんですか？」

「出来るからお前はここでのびてたんだろうが。相手があのキツネならばお前らでは分が悪いのも当然だ。——仕方がない。黒服の削除は後回しだ。まずは指令通り、デイエス・イレの生存者の捕獲を優先する」

「分かりました……」

石井から何もされなかったので、オカッパの男はお仕置きを免れた子供のように喜んだ。

「キツネか……何故水憐島ではなくここに？——……まあいい、いずれはつきりするだろう。おい、今ロビーに赤い化け物がいる。あいつがこの建物を崩す前にさっさと脱出するぞ」

「は、はい！」

オカッパの男は急いで床に倒れている褐色の男を起こすと、どんな裏口へ向かって歩いていく石井の後を追った。

截は急に横を向くと腰の白柄ナイフに手を当てた。

「どうしたの截さん？」

朝奈はその様子を不審に思い尋ねる。

「何かがこの建物の中に入って来た。多分赤鬼だ」

只でさえ長首麒麟の攻撃でいつ倒れるかどうか分からないのに、あの赤鬼に暴れたらもうこの建物は持たないだろう。出来るだけ早くここを出る必要がある。

截は朝奈にそれを言おうとした。

「ごほっ……！」

突然どこからか咳が聞こえた。

入り口と部屋の反対にあるカーテンの方からのようだ。

截は音も無く近づくと、右手でナイフを引き抜きながら左手でカーテンを勢い良く開けた。

「扉？」

朝奈がその向こうにあったものを見て呟いた。

截は目で朝奈に確認をとると、その扉をゆっくりと慎重に開ける。
「誰だ？」

そこは中心にある椅子を省けば、殆ど何も置かれていないただ広いだけの部屋だった。こちらの入り口から見て右側には別の入り口があり、扉が開いている。だが暗くて中はよく見えない。

部屋の中で唯一のオブジェクトである椅子の上には、一人の人間がやつれた様子でこちらを見ていた。

「あなたは？」

截は男が動けないと判断してナイフを収めながら聞いた。

「私は……この紀行園の園長だよ。君たちの方こそ何者だ？ 見たところ一般人には見えんが」

「僕は黒服の者です。——あなたはデイエス・イレの人間ですか？」

截は男が園長と名乗ったのでそう考えた。

「デイエス・イレ？ 黒服？ 何を言っている……？」

——なに？

男の反応に戸惑う截。

「あなた、本当に園長？ 私さっき園長って名乗ってる女の人にあつたけど？」

朝奈はパンフレットで大西の顔を見ていることもあり、かなり疑

いを持った様子で聞いた。

「……ああ、それは幸子のことだろう。あれは私の妻だ。私をこんなところに押し込んで……園長の座を奪い取ったのさ」

「何でそんなことを？」

「私があいつのやることに反対したからだよ。知らない中に良く分からん連中と手を組み、紀行園の地下にこんな研究施設をわんさか作りだしたからな。一体何のつもりなんだか。もうかれこれ五年はここに閉じ込められていることになる。何が、いつか自分のやっていることを分かってくれるだ！何年たっても理解できんよ」

截は現在の男の状態を理解した。

恐らくこの紀行園の園長である大西幸子は、独自の伝手か何かでデイエス・イレの人間と知り合い、この紀行園をアジトとして提供したのだろう。それを夫であるこの男に反対され、殺すことも出来ずに監禁していたらしい。

「今ロープを解きます。一緒に逃げましょう」

截は男に近寄ろうとした。

だがその瞬間、何かが頬をかすめ後ろの壁に刺さった。

「勝手な真似をするんじゃないよ」

右から、男の横にある扉から、大西と屈強な男が現れたのだ。截の頬を斬ったのはその男が投げたナイフだった。

「大西さん！」

朝奈は嫌悪感も露にその顔を睨みつける。

「ふん、お嬢ちゃん良く生きてたね。大したもんだよ」

大西は朝奈が生きてたことが気に食わないとでもいうように、思いつきり目を細めた。

<第五章>超感覚者計画（後書き）

何か今作はホラーって感じがしませんよね……。
もっとホラーっぽくなるようにこれからの話では調整してみます。

鈴野が超感覚者だということと、截の部分図は見直すとなんか嘘臭い感じがしないでもないのでもしそう思った方がいましたらお気軽に教えてください。修正します。いなければこのままで行くので。

<第六章>一人ぼっち

<第六章>”一人ぼっち”

「あなたが園長ですか。——誤解しているようですが、僕はディエス・イレの依頼でここに来ているんですよ。ナイフを収めてくれませんか」

截はすぐに攻撃に対処できるように、身を僅かに屈ませながらそう言った。

大西は胡散臭いものを見るような目で聞き返す。

「あたしらの依頼だって？ 誰のだい」

「高橋博士です」

「ほう……あの男か。一体何を依頼した？」

高橋志郎の名に興味を惹かれたのか、大西は先ほどよりも真剣に截の方へ耳を向けた。

「ここにいる娘の朝奈さんの救助です。それ以外は何も無い」

「娘？ この子が？ 何でこの紀行園にいるんだい」

「大西さん、実は博士から娘にのみ自分の生存を知らせたいという要望がありまして、私が許可しました」

大西の問いに、その隣に立っている男が答えた。

男はスポーツ狩りの茶髪の頭に角ばった顔を持ち、紀行園の従業員服を着ている。

「……娘を助けに来たんだってんなら、もう用は済んでいるはずだろ。それをこんな所に立ち入って何をこそこやっている？ 本当は博士からあれを奪取するように言われているんじゃないかい？」

「あれ？」

朝奈が聞き返した。

「ワザとらしく聞き返すんじゃないよ。あんたが父親に呼ばれたのは、あれの情報を横流しする為だったんだろ？」

「だからあれって何！？」

「何だい、本当に知らないのかい？ …… まあ、受け取るだけの役目なら何も知らないのも当然か。あれってのは博士がこの紀行園で作っていた不死の怪物さ。あたしらはそれを作り出す為に、三年前富山樹海からES細胞の権威だった博士を誘拐したのさ」

「あの事件の間に？ どうやって誘拐した」

「截は事件の当事者だ。」

あの場にデイエス・イレの人間が一人しか居なかったことを知っている。だから一体誰が志郎を誘拐したのか気になった。

「あんたのお仲間のキツネが連れて来たんだよ」

「キツネが！？」

—— あの時デイエス・イレの仕事も受けていたのか……！

截はキツネの顔を思い浮かべ胸糞が悪くなった。

「私たちはそれを取る気なんかない。ただ、お父さんを…… 高橋志郎を助けたいだけなの」

朝奈は訴えかけるように言った。しかし大西は高笑いしながら言葉を返す。

「あはっははっ。お嬢さん、演技が上手いね。あんたたちが本当にあれを奪う気が無いのなら、なんであれはずっとあんたたちを追っているんだい？ おかしいだろう。あんたらが構わなきゃここまで追ってくるわけが無い」

「私たちを追ってる？ 何を言ってるの」

「まだ嘯くのかい！ ふふん、まあいい。今更力ずくであれを回収することなんか無理の極みだからね。データーを取りたいなら好きにすればいい。ただ、あたしらの邪魔だけはするんじゃないよ！」

朝奈はその言葉から何かに気づいた。

「…… ねえ、もしかして『あれ』って赤鬼のこ……」

ドゴオオオオオオオン！

轟音が響いた。

天井が崩れ、何も無い部屋に無数の瓦礫が溢れ出す。
おびただ

夥しい土煙のさなか、誰かの悲鳴と化け物の叫ぶ声が聞こえた。

「うああああああ！？」

「ゴオオオオウウウ！」

天井を破壊してこの地下室に降り立った赤鬼に、大西の夫が捕ま
ったのだ。

「あ、あんたあー！？」

大西は最愛の夫が一撃で悪魔を瞬殺できるような怪物に捕まり、
先ほどまでの大きな態度はどこへやら、唇を震わせて叫んだ。

赤鬼は片手で掴んだ男を顔に近づけると、その首元にむき出しの
歯を当てがう。

「なっ、何なんだこれは！？ 幸子——助けてくれ！」

大西の夫は泣き叫んだが、赤鬼はそれに一切構わずその歯に力を
込めた。

「ああぐうぐうあああー！」

動脈を切り裂かれ、肉を抉られ、あっという間に男の首元は血で
真っ赤に染まる。顔を背ける間もなく、その体はすぐに動かなくな
った。

「あんた……！」

大西は放心状態でその姿を見つめた。

男が死んだと思ったのだろう。だが、赤鬼が唾液か何かを大量に
傷口から注入した途端、男は再び意識を取り戻した。

「ううう…… 幸子？」

赤鬼は男を大西らのいる方へ放り投げた。

大西とその部下は急いで男の体を起こすと、赤鬼から遠ざけるよ
うに部屋の右の入り口へと逃げ込んだ。

朝奈は男の様子が何か不可解だったことに気づき声を掛ける。

「大西さん、ちょっと待ってその人もしかして感染——……」

だが大西は朝奈に構うことなく、扉の向こうへ消え、あろうことが鍵を掛けた。

「くそ！ 朝奈さん、俺たちも逃げよう」

截は朝奈の手を引くと、後ろの扉から部屋を出ようとする。しかし先ほど赤鬼が落ちてきた時に生じた瓦礫の所為でそれは塞がってしまった。

それを見た朝奈はパニック気味で叫ぶ。

「どうしよう截さん、出れない！」

「大西達が逃げた扉から逃げるしかないな。こうなったら、赤鬼にあそこを壊させよう」

「壊させるってどうやって？」

「俺が扉の前に立ってあいつに攻撃させるんだ。直前で避ければ扉は壊れる」

「そんな無茶な——」

「無茶でもやるしかない。朝奈さんは扉が壊れたらすぐに中に入つて逃げてくれ。俺もすぐに続くから」

「はあ、分かった」

朝奈は度重なるピンチに溜息を吐き、暗い顔で頷いた。

「さあ、来たぞ！」

截の声と同時に赤鬼の大きな拳が迫りかかってくる。二人はそれを何とか避けると、右の扉へと走った。

当然赤鬼もそちらの方に体の向きを変える。

截は入り口の正面に立ち、朝奈はその左側の瓦礫の後ろに隠れた。

「ゴオオオオオオ！」

赤鬼は大きく雄叫びを上げると、その腕を截に目掛けて振り下ろす。だが截は難なくそれをかわした。

おかげで赤鬼の四本の爪はしっかりと扉を粉碎し、脱出の為の道を作り出した。

「今だ！」

截が身を伏せたまま叫ぶ。

朝奈はその瞬間を狙って駆け出し、扉のあった位置の向こう側に逃げ込むと、一気に全力で走った。

誰も追ってくる気配を感じない。赤鬼の大きさではこの廊下は通れないようだ。朝奈はあることに気がついた。

「あれ？ 截さんは……」

何故か赤鬼だけでなく、截まで自分を追ってこない。思わず、足が止まった。

嫌な考えが浮かび、血の気が引く。朝奈は引き返そうとした。

だがその瞬間、今自分が走ってきた廊下の天井が崩れ落ちた。

先ほどの赤鬼の攻撃の衝撃の影響か、向こうの部屋で何かがあった所為かは定かではないが、これではとても部屋に戻ることは出来ない。

つまりそれは、截がどこにも逃げられないことを意味していた。

「う、嘘っ！？」

あの赤鬼と一対一で、しかもそれほど広くない部屋で截が勝てるわけが無い。このままでは間違いなく死ぬだろう。

「そうだ、あの赤鬼が落ちてきた穴からロープを落とせば助けられるかも」

自分が穴の上に着くまで截が生きている保障は無かったが、とにかく今はそれに賭けるしかない。朝奈は廊下の先へと再び走り出した。

しばらく進むと行き当たりにもぶつかり、そこには梯子のようなものが在った。

走ってきた距離から考えれば、それ程職員用建物から離れてはいない筈だ。ここからなら何とか間に合う可能性もある。

大西は朝奈たちがここを追ってくるとは考えなかったらしい。梯子の上のハッチに鍵は掛かっていなかった。

ハッチを開け上に出るとそこは建物の中だった。

部屋の雰囲気や間取りは先ほどまで自分が居た地下室とほぼ同じだ。

「ここはもしかして、右の職員用建物の中？」

朝奈は進んだ距離と建物の内観からそう考えた。だとすればすぐに左の職員用建物まで戻ることが出来る。

「急がなきゃ……！」

構造がほぼ同じであるため、朝奈は迷うことなくロビーまで行くことができた。

左側の窓から階段の中ほどまでが破壊されていたが、多分赤鬼がやったのだろうと構わずに、朝奈は足を進めた。

悪魔が居る可能性も考えず、勢い良く建物の正面出入口を開き外に出る。

そのまま向かいの建物まで一気に走ろうとした。

しかし、向かいの建物はその瞬間を狙ったように、いきなり崩れ落ちた。

長首麒麟による穴の数々、赤鬼による破壊の影響、崩れる要因はありすぎるほどだ。

建物は爆破解体されたように、綺麗に跡形も無く崩壊した。

「そっ、そんなっ！？」

赤鬼はともかく、これでは截の生存は絶望的だ。朝奈はその場に座り込んだ。

自分の命の恩人であり、勇気付けてもくれた頼れる相手。信頼できる存在。

微かにだが好意まで持ちかけていた截が、死んだ。

「截さん……」

この広い紀行園の中で截を失った今、朝奈はたった一人で父を探さなくてはいけなくなった。最初は一人で探す気だったとはいえ、截の存在は大きい。彼が居なくなったことで、朝奈は恐怖に押しつぶされそうになった。

自分が父を探してくれと頼んだりしなければ、きっと截は死ぬことはなかった。そんな後悔の念も浮かぶ。

ここは職員用建物の前の、道路の上。いつ悪魔が出現してもおかしくはない。だが、朝奈は座り込んだまま、そこから動くことはなかった。ただ啞然と土煙の舞う向かいの瓦礫の山を見ている。

『……ヨイヨイロコイザナンカァー……』

いつの間にか携帯電話の着信が鳴っていた。朝奈は自分の携帯電話を取り出して見たが、アンテナは全て切れている。だとしたら截から貰った電話の方だろうか。

「截さん、着メロ同じ……」

『……オレッチニヤァ……』

朝奈は電話に出た。

「はい？」

「……あんた誰、截は？」

「え、私は関野朝奈。截さんは……」

「ああ、さっき截が助けた女の子か。ほら私、あの時一緒に居た截の仲間だよ」

「あ……あの時の……」

朝奈はスタイルのいい黒服の女性の姿を思い出した。

「それで截は？」

「截さんは……建物の下敷きになって……」

朝奈は嗚咽まじり言った。

「なっ、何だって？」

「すいません……私を逃がす為に、赤鬼の注意を引いた所為でそうなったんです。すいません……」

黒服の女性は黙っている。

それを悲しんでいるのだと考えた朝奈は、本当に申し訳がなくなり再び謝った。

「……すいません」

だが女性は意外とあっさりした様子で声を発した。

「あいつのことだ、そう簡単には死なないよ。そんな柔な人間じゃない。——あんたは今どこにいるの？」

「あ、はい。右の職員用建物の前です」

「そうか。今私は健太とショッピングゾーンに入るための、地下通路の入り口前に居るから。ここまで来い。本当は迎えに行くべきだけど、バイクのオイルが切れちゃってさ、出来るか？」

「私が、一人で？」

「当たり前だろ。今更この紀行園の中はどこにいても危険なんだ。隠れるくらいだったらこつちまで来い。いいな」

「え？ ちよつ——……」

『ツーツー』

電話は既に切れていた。

本来ならば、守るべき任務の対象をこんな危険な状態で放っておくのはおかしいのだが、最初の会話を思い出せばどうやら女性は截に無理やり連れてこられたようだ。任務の達成は彼女にとってはそれ程重要ではないのだろう。朝奈は女性の言葉をそう受け止めるた。截が死んではないという言葉を聞き少しだけ気力が戻ってくる。截の生死を確認する為にも、父の生死を確認する為にも、ここで項垂れている訳にはいかない。

朝奈は決意を新たに立ち上がった。

「……截さん、私行くね」

そして崩壊した建物に向かって声を掛け、歩き出した。

草食獣ゾーン 午後1:50

あれから朝奈は隠れたり逃げたりしつつ、ゆっくりと草食獣ゾーンを進んでいた。だが、現在はこれ以上進むことが出来なくなり果てていた。

百メートルほど先に、三頭の牛の悪魔が職員用通路を塞ぐようにして横になっているのだ。

歩行ルートを通ろうにも、柵があるため入り口に戻らないと入れないし、一般車道や左手の草原は悪魔が何体も歩いているため論外だ。遠回りに猛獣ゾーンを歩くことも考えたが、猛獣ゾーンには悪魔化しなくても人間より強い動物が山のようにいる。とても通る気にはなれない。

朝奈が待ち合わせ地点に行くにはこの道が一番安全度が高い道だった。

「あの三匹の牛を倒すしかないか。截さんは罨を使ったり、隠れたりして戦うって言うてたよね。どうしよっかな」

朝奈は截の言葉を思い出し、何か使えるものはないかと周囲に目を走らせ、あるものを見つけた。

それは自分の足元にあるベニヤ板だった。通路のこの部分だけ道が補修中だったようで、しっかりと歩けるように三枚のベニヤ板が道の上に置かれている。

朝奈はそれを見るとニヤリと微笑んだ。

すぐにそのベニヤを道から退かし、右側の林の枝などを使って罨を作り始める。

「よし、後は運しだいか……！」

全て作り終わると、朝奈は両の手を硬く握り合わせた。

「ギユウウアアア！」

間近まで来たのを感じたのか、三体の牛の悪魔は横たえていた体を起こし、雄叫びを上げて朝奈に突進を始めた。

縦に列を成し走り、職員用通路や土の上の大地を振動させている。それを確認すると、朝奈は一目散に先ほど罨を作った場所まで逃げ出した。

牛との距離はその間もどんどん縮んでいく。

後ハメートル……六……三……二……もう、一メートルもない。

朝奈の背中に牛の凶悪な黄色い角が刺さろうとした。

截から貰った黒服の背中部分が大きく凹む。

「……………」

刹那、朝奈は転がるように左の林の中に逃げ込んだ。

獲物が移動したため、先頭の牛の悪魔はそのまま先へと走り、通路の下にあった細長い板を踏んだ。

その途端、前方から無数の鋭い枝が飛び出し、頭の全面をそれに射抜かれた。

「やった！」

朝奈は林の中でガッツポーズをする。

今牛の悪魔を仕留めた罨は地雷のようなものだ。

ベニヤ板上のナイフで開けた穴に、鋭く尖らせた枝を無数に垂直に通す。そしてその面の端に別のベニヤ板の二分の一を、約四十五度の角度になるように穴と穴を紐で通しくっ付ける。そしてその枝の無い方を浮くように、つまり枝を立てた方の裏側を地面にくっ付けるようにして置けば完成だ。

この枝の無い方を悪魔が踏めば、テコの原理で倒れていた枝つき板が飛び上がり、踏んだ相手へと刺さる。

朝奈はこれを二つほど通路の上に置いていた。

地雷を踏んだ牛の悪魔は暴れながら体を回転させ、前足でもう一つの罠まで踏んだ。そのため今度は頭の側面へと枝の刃が突き刺さり、自分で自分に止めを刺し倒れた。

これで残りの悪魔牛は二匹だ。

林の中を逃げる朝奈の背に、再び牛の悪魔の角が迫る。だが、前に大きくジャンプした朝奈に突撃しようとした瞬間、首の下に紐のようなものが引っかった。悪魔牛の剛力により大きく紐は引っ張られる。

すると紐を引っ張った牛の背後を走っていた牛の頭の上に、ベニヤ板がギロチンのように落ちてきてた。

ざっくりとその悪魔牛の首は飛ぶ。

この罠はそれ程複雑な仕掛けではなく、まず二本の木の幹にナイフで大きく切れ目を入れ、そこに引っかかるようにして道の途中に落ちていたロープを張った。そしてそのロープを別の二本の木の幹に、長方形を作るように持つてきて、一度巻きつけてからそれぞれ上の枝に掛けた。あとはその先に端面を鋭く削ったベニヤ板結びつけ、枝の上に乗せるように置いただけ。これで前方のロープが引っ張られれば後ろのベニヤが落ちてくることになる。

実は朝奈は自分で紐を引いて悪魔を倒す予定だったが、逃げるのに夢中でそんな暇は無く、運がいいことにかつてに悪魔牛がロープを引き、他の悪魔牛を仕留めてくれたのだ。

「あと一匹！」

朝奈はナイフを取り出した。

最後の罠は土の中に細長い穴を無数に掘ったもので、ここを牛悪魔が通れば足を取られ見動きが取れなくなるという考えだ。そうなれば後はただナイフを使って倒せばいい。

ナイフを構えながらその穴々の上を飛び越えると、朝奈は牛悪魔

と向かい合うように立ち止まった。

「ギョオオオウウー！」

一匹だけとなった牛悪魔は猛烈な勢いで朝奈に突進してくる。そしてすぐに穴々の上に差し掛かった。

だが朝奈の計画とは違い、牛の悪魔はその穴を馬鹿力で強引に粉碎し、足を取られることはなかった。

「うげっ!？」

もはや何の罠も仕掛けてはいない。朝奈はどきもを抜かした。

牛の体当たりが直撃する前になんとかそれを避けたものの、かわし続けることはあまりに難しい。

悪魔牛が再度反転してこちらに突撃してくるまでの短い間に、朝奈は必死に策をめぐらせた。

正面から戦うのは論外であるし、かといってあの速度で走る悪魔牛の背後や側面を攻撃することも至難の業だ。ならば動きをどうにかして止めるしかない。動きさえ止まれば勝つことが出来る。

朝奈はそこで二体の悪魔牛の死体を利用することを考えた。

体を反転させる悪魔牛を横目に、先ほど倒した悪魔牛の死骸の前まで一気に走り出す。

二体の死骸の間に差し掛かった瞬間、最後の悪魔牛の大地を踏み鳴らす音を真後ろに感じ、朝奈は横に飛んだ。

その直後、悪魔牛は死骸に足を取られ、頭から一回転するように大きく転んだ。首が折れても可笑しくないほどの勢いだ。

朝奈は決死の表情で素早く立ち上がると、起き上がるうとしている悪魔牛の頭に、一気にナイフを突き刺した。

悪魔牛は元々今の転倒で首の骨が折れていたのか、大した抵抗も出来ずに、痙攣の後あっさりと息を引き取った。

「ふう」

朝奈は深呼吸をするとナイフを引き抜く。

この西洋短剣風ナイフは既に大分死亡や油がついているはずなのに、殆ど切れ味が落ちてはいない。ディエス・イレの幹部が使って

いたナイフだ。恐らく何か特殊な加工をされているらしかった。
「さあ、急ごう」

朝奈は自分に気合を入れるように呟くと走り出した。

地下通路出入り口前 午後2：22

「遅いぞ、死んだかと思った」

朝奈が地下へと通じるハッチの前に着いた途端、翠は不機嫌そうに言った。

「ごめん。悪魔があちこちに居て、見つからない様に来るのが大変だったんだ」

疲れたような顔で答える朝奈。

「良く一人で来れたな」

「へへ、私は健太さんよりも度胸があるからね」

感心するように言った健太に対し、朝奈は自慢げに答えた。

「どういう意味だよ、それ」

健太はややふて腐れたように朝奈を睨んだが、翠が言葉を発したためそれ以上は何も言わなかった。

「ペチャクチャ喋るな。悪魔が寄ってくる。早く下に降りるぞ」

「え、フリーゾーンの後ろにある職員用建物に行くんじゃないの？」

電話で連絡を取り合った際に行き先を聞いていた朝奈は、不思議がった。

「フリーゾーンは人がたくさん居る所為で悪魔が集まっているから。このまま一般道路や職員用通路を通るのは危険だ。地下を通る方がいい」

「うーん、確かにそうだね、分かった」

朝奈は親しげに答えた。

「じゃあ行くよ」

躊躇うことなく地下へ降りていく翠。

全員が下に降りたのを確認すると、翠は正面にある崩れた道を見た。

「……崩れてる。多分ディエス・イレの連中が、地下通路から中間職員用建物へ行かせ無いように爆破したんだな」

「じゃあ、やっぱりフリーゾーンから行くしかないな。雅子が心配だ。急ごうぜ」

頭の中が恋人の無事の是非で一杯の健太は、殆どその崩れた道の先を気にせず、歩き出した。

「せっかちな奴だな」

「そうだね、急ごう」

呆れるように言う翠と同時に、ふざけた感じで朝奈も呟いた。

二人は不思議そうに向き合った。

しばらくして、翠は頭を掻きながら視線を反らすと、無言で歩き出した。

「誰もいないな。よし、上に出るぞ」

翠はハッチの隙間から給仕室の中を確認すると、下の地下通路にいる二人に小声で呼びかけた。

「悪魔はまだ入ってきてないみたいだね」

部屋に出た朝奈が周囲を見回して言う。

「向こうのほうから話し声がするな。言ってみよう」

翠は用心しながら売買エリアへと足を踏み出した。そして無言になる。

「……どういうことだよ？」

健太が意外な室内の状態に対し、驚きの言葉を放った。

品物が並んだ棚は全て窓際に寄せられ、中心には武器を構えた無数の生存者が、輪を描く様に座っている。そして、その中心にはまるで英雄のように四人の男子高校生が座っていた。

「あ！」

朝奈はその一人を見て驚く。

その男は朝に自分をナンパしたあの少年だった。

<第七章>思い込みの英雄

<第七章>思い込みの英雄

今朝、朝奈をナンパした男の名は小林喜一。

頭の中心が盛り上がった茶色の短髪に、グレーのビジュアル系ジャケット、それと御揃いのズボンといった井出立ちだ。異常に薄い眉と縦長の目、魔女のような鉤鼻が特徴的である。

実年齢は十七歳なのだが、二十代中ほどのような大人びた外見のため、多くの人間は彼を高校生だとは判断しないだろう。

彼は今、紀行園フリーゾーン、シヨッピングモールの中心に仲間と共に座っていた。そしてその周囲を輪を描くように二十人近い人間が取り巻いている。

朝奈らは状況が理解できず、ただその集団をじっと見ていた。

朝奈たちに気がついたのか、集団の端に座っていた背の低いYシヤツ姿の男性が声をかけてきた。

「何だ、お前ら？ どこから入った？」

それに釣られて他の人間も三人を見る。

別に隠す必要もない。朝奈は素直に地下通路のことを話した。ただし、父を探しているのではなく悪魔から逃げるために地下通路に入ったことにして。

「そうか、君たちも大変だったな。さ、コッチに来て一緒に座ろう」
Yシヤツの男は同情するような目つきで朝奈の手を引っ張ると、輪の中に引き入れた。

健太は怪訝な表情で付近に座り込んでいた中年の女性に聞く。

「あの、皆さん何をしてるんですか？」

「ああ、作戦会議みたいなことをしてたんですよ」

「作戦会議？」

「そう。もうこんなことになってから三時間半も経っていますし、助けも来ないみたいなので、あの子たちが中心になって脱出の計画を立てているんです」

「彼らまだみんな若者ですよ、何で皆さん彼らをリーダーのように扱っているんですか？」

健太は思ったことを率直に聞いた。

「ああ、そう思いますよね。実は先ほど、気の狂った一人の男性が外に外に走り出したんです。その所為で悪魔が一匹入ってきてしまったんですが、あの四人の子がそれを退治してくれたんですよ」

「なるほど、それを讃えて皆さん彼らに従っているんですね」

「別に従っているわけではないですけど、まあ、かなり頼りにはしていますよ」

中年の女性は笑顔で答えた。

「遅いじゃないか、イミユニティーなら欲しがるかもな。うちには入らないけど」

翠がつまらない物を見るような目を四人の若者の方へ向けた。

「何で入らないんだよ、若いからか？」

健太は翠の言葉に疑問を持つ。

「年齢なんか関係ない。実際私はあんたが小学校に通ってた頃から黒服にいるしな。そういう問題じゃないんだよ」

「じゃあどうい問題なんだよ」

「黒服は……特別なんだ。ただ闇雲に人員を増やせばいいってものじゃない。政府からもテログループからも頼りにされる存在、圧倒的に生存力が強い人間じゃないと勤まらないんだよ。ただ一回悪魔を倒せたただけの子供なんか全然対象外だ」

「ふーん、エリートってことか？」

「化け物ってことだよ」

翠は何故か首元を黒服の上から押さえながらそう言った。

「あっ君、朝にあった子だよ」

朝奈が集団の中に座っていると、突然小林に声を掛けられた。目に掛かるボブヘアの前髪を手でずらしながら、先ほど聞いた内容を思い出す。

「ああ、そうだね。悪魔を倒したんだって？」

「まあな。俺、昔から空手とか水泳とか得意でさ、運動神経が良いんだ。あんな化け物なんか目じゃないぜ」

「へー凄いんだね」

「それ程でもないさ。あ、そうだ丁度今これからどうやって正面入り口まで行くか話し合ってたんだ。君、何か良い案ない？」

「入り口までか……」

入り口までは地下通路を通ればかなりの時間短縮が出来るだろうが、この人数が移動するとなれば話は別だ。あの狭い道をこの大人数でたらたら歩いていたら、すぐに悪魔の餌になってしまいうだろう。だとしたら一番良い方法は一つしかない。朝奈はそれを口にした。

「んーやつぱり表に止めてある車を使うのが一番良いんじゃない？安全だし速いし」

「車……でもな、表には悪魔がわんさか居るんだよな。あいつらをどうにかしないとそれは厳しいぜ」

「そうだね。でも君は強いんだから戦って倒しちゃえば？」

本気で言っているのではなく冗談のつもりで朝奈はそう言った。

しかし小林は大真面目の表情でそれを受け止める。

「戦うか。確かにもうこうなったらそれしか無いかもな。俺たちなら出来るかもしれない。……いや、俺達にしか出来ないんだ」

「え？ ちょっと……？」

急に立ち上がった小林を見て朝奈は驚いた。

ビジュアル系の服を整えながら大きく息を吸うと、小林は部屋の奥まで聞こえるような大声で声を発した。

「皆さん。俺、決めました。このままここに居ても助けが来る見込みも無い以上、いずれ悪魔にやられます。だったら、みんなで協力して反撃しましょう。悪魔をみんな倒すんです！」

それを聞いていた彼の仲間が賛同する。

「小林、お前がそう思うのなら俺も頑張るぜ！ さっきだって悪魔を倒せたんだ。きつと上手くいくさ」

「よっしゃー！ やってやる！」

それらの言葉に触発されるように他の男性たちも雄叫びを上げだした。

「おゝみんなやる気だな。翠、俺達も頑張ろうぜ！」

集団から少し離れた場所に立っていた健太も、小林の言葉に影響されてそう言った。

「馬鹿じゃないの？」

だが翠はそんな健太を冷たくあしらった。

液体窒素の中に沈められたように固まる健太。二又の前髪もボンドで額に貼り付けたように揺れない。

「悪魔の集団と戦うなんて訓練を受けた人間でも苦勞するのに。それをマグレで悪魔を倒しただけのガキとその他多数で倒すなんて愚の骨頂だよ。前言撤回だな、イミユニティーだってあいつらはいらないだろ」

「ひ、酷い言いようだな」

「生き残るために大切なのは冷静な判断力と危険判断能力だ。あいつらにはそれが無い。ただ腕っ節に自身があるだけの人間なんかそこから中に居る。——大体、あんたは恋人を探すんじゃないのか？」

「もちろん探すつて！ でもこの人たちも放つて置けないだろ？ お前の相棒だつてここに居れば助けるつて言うんじゃないか？」

「截が……？ あははっ、そんなこと言うわけ無いだろ。あんたはあいつを平和主義者だとも思つてんの？ あいつはそんな奴じゃない。目の前で人が殺されかけてれば無意識に助けることもあるけど、あいつも私も優先するのは任務と自分の感情だよ」

「じゃあ、なんであいつは俺の恋人探しを助けるようにお前に言ったんだよ！」

健太はもはや小声ではなく叫ぶように言った。

「ちよつと煩いぞ。あいつはあんたの好きな人間と離れる悲しみに共感しただけだ。あんたが探しているのが家族や友人だったのなら、助けたりなんかしないさ」

「はああ!？」

「はあ、恋人を探すって言ってたんだから、それ以上はあんたにとつてもどうでもいいことだろ。こいつらがどうなろうと私には関係ない。必要なものを集めたらすぐに出発するぞ」

「……それでも人間かよ」

「言つただろ、私らは化け物さ」

冷たい目で笑うと、翠は給仕室へと消えた。

ショッピングモール 午後3：15

ショッピングモールに居る生存者の面々は、それぞれが包丁やら鉄パイプやらモップなど、色々な武器を加工していた。悪魔との戦いに備えての行動だ。

朝奈はそんな彼らを心配そうな目で見る。

素人の朝奈から見てもこの行動は無謀としか言いようが無い。このまま戦いになれば恐らく殆どの人間が死ぬか、悪魔の仲間になってしまうだろう。

朝奈は何度か小林に思いとどまるように説得を試みたが、戦いを怖がっている女性の言い訳だと思われたらしく、殆ど相手にされなかった。

「どうすればいいの……？」

困った表情で小さく呟く朝奈。

そのまま裏口付近の壁際に寄りかかって呆然としていたら、翠が近づいてきた。

「あまり役に立ちそうなものは無かったけど、無いよりましだな。

朝奈、行くぞ」

「え、行くって？」

「この紀行園の中心にある中央職員用建物へだよ。父親を探すんだろ？」

「それは、分かってるけど……この人たちはどうするの？」

「何だ、お前まで健太と同じようなセリフを吐くのか。死にたい馬鹿どもなんか構う必要はないだろ。私たちは私たちの目的を達成すればいい」

翠は本当に興味なさそうに後ろで動いている生存者の集団を見回した。

小林たちに着いていけば、ほぼ間違いなくここに居る人間は全員死ぬだろう。助けられる可能性があるのにそれを放っておくことなんて出来ない。朝奈はそういった罪悪感からここに留まることを考えた。

「人が死ぬって分かっているのに、放って置くことなんて出来ないよ。私はここに残る。翠さんは先へ行きたいのなら行っていいいよ」

「無理だな。はつきり言うけど、私と截は本当ならここに来るはずじゃなかったんだ。バイオハザードの発生した水憐島へ上司の援護に行くはずだった。それをあなたの父親が截に電話したせいで、急遽コッチに着たんだ。あなたは何故私らが事件発生からこんな早くここに来れたのか考えなかったのか？　ここは水憐島と同県内だ。つまり私たちは寄り道でこの仕事をしているんだよ。出来ればささとあなたと父親を助けて本来の仕事へ戻りたいのさ」

「だ、だったらなおさら私がここに残るんだから協力してくれればいいじゃん。私だけよりその方がずっと早く中央へ行けるよ！」

「あんたがここに残るっていうのなら私は力ずくでも引つ張つていくよ。言つとくけど私はこう見えてもそこらの格闘家よりはずっと強いからね」

翠の態度や截の信頼している様子から見れば、あながちそのセリフは嘘とは思えない。朝奈は僅かに怯んだが、ここに残っている人間を見捨てることも出来ない。今出来る最善の策を頭の中で高速に考えた。

「……分かった。翠さん、私だって一番生きて欲しいのはお父さんだよ。この人たちは……仕方ないけど見捨てるしかないね……」
悲しそうに言う朝奈。

「そうだ。人間は自分が一番大切なんだ、他の事なんて放っておけばいい。こつから中央職員エリアへ行こうと思つたけど、この様子じゃこのショッピングモールの周囲は悪魔だらけだな。一端バイクの所まで戻ろう。こいつらが悪魔の注意を引き付けてるから、後ろの建物まで苦も無く行けるはずだ。オイルも手に入れたことだしな」
「……うん」

朝奈は素直に頷いた。

二人は他の人間に気づかれないうちに給仕室まで行くと、地下通路へのハッチを空けた。

万が一悪魔が居ることも考え、翠が先に下りていく。

「よし、悪魔は居ないな。健太を呼んで来い」

翠は命令するような口調でそう言った。

だが、朝奈は降りることも、健太を呼ぶ子ともせずそのまま静かにハッチを閉じた。

「なっ、お前!？」

翠は当然驚いた。

「私は……確かに自分の命や家族の命が一番大切だけど、死に掛ける人を見捨てることなんて出来ないよ。自分の命が全てだったら、そもそも救急隊も消防士も居ないしね」

朝奈は悲しそうな顔で笑うとハッチを完全に閉め、付近にあった

重いダンボールをその上に乗せた。

「くそっ！」

翠は素早く梯子を上ってハッチを押し開けようとしたが、当然のことには開かない。

「あの馬鹿……！」

いつもの翠ならばこんな真似をされたら迷わず「勝手に死ね」と相手を見捨てるのだが、何故か今回だけはそういう考えは浮かばなかった。

仕事だからか、朝奈に情が移ったのか、截の頼みだからか、真実は分からない。

だが、死なせたくないという気持ちがあることは確かだ。

翠は怒りながら拳を握り締めると、急いでバイクを置いている場所を目指し、地下通路の中を走りだした。

シヨップینگモール正面入り口付近の窓際。

「あれ、翠は？」

一人で近づいてきた朝奈を見て健太は不思議そうに聞いた。

朝奈はふざけるようにそれに応じる。

「我が俣っ子なら地下に閉じ込めてお仕置き中だよ。多分、私たちの運が良かったならまた会えるかもね」

その言葉になんとなく何があつたかを悟る健太。

「そうか……」

「それで、小林さん達は？」

「ああ、おじさんもおばさんも若造も、みんな武器を持って戦う準備は満タンさ。一つだけ問題点を上げれば、みんな気持ちだけが先

回りして腰が引いてるってとこかな」

「まあ、いくら戦う気になってるっていつても、実際にその時が近づいてくるとやっぱり怖いからね」

「そうだな。一部の連中は別だけど……」

健太は苦笑いを浮かべ、小林ら高校生の集団のいる右斜め前へと目を向けた。

「方場、いいか。俺がまずドアを開けるだろ。そうしたらお前が一口气に一番近い車まで走ってそれに乗り込むんだ。なに、サッカー部だったお前に悪魔が追いつけるわけねえよ。そしたらその車で悪魔どもをシヨッピングモールから遠ざけてくれ。その隙に、俺と木下で他の車にみんなを誘導するからさ」

「おう、分かった。単騎駆けだな。大役じゃん」

方場は「やってやるぞ」といった顔で話を続ける小林を見た。

「俺は何すんの？」

何も言われていない仲間の一人が小林に聞く。

「おお、藤森は武器を構えて最後尾を守ってくれ。万が一悪魔が裏口から入ってくることもあるからな」

「分かった。よっしゃー……なんか燃えてきた！俺たちマジかっこよくねえ？」

「その息だ。みんな、俺たちでここに居る人たちを救ってやろう！」

小林は洋画のヒーローのようにかっこつけて言った。

本来ならば三十代以上の大人たちがこの場を仕切るのが普通だ。

しかし小林たちのやる気と周囲の空気に押され、彼らは皆その意見に反対しようとはしなかった。

日本人は一般的な国々と比べて異常に自己主張が少ない。他者との調和を望み敢えて言葉を使わず、場の雰囲気や空気で行動の流れを決める。

それはそれでいい面も多数あるのだが、こういった命に関わる場合ではあまり優れた特性ではなかった。例えもつと良い方法を考えても、この方法はまずいのではないかと思っても、場の空気がその

言葉を発することを許さない。見えない圧力が、無言の壁がそこにはある。だから彼らの浅はかな考えに反対する者がいても、それを行動に起こすものは居なかった。

だがそんな中、朝奈は何かして小林らに悪魔の情報を伝えようと、健太に頼んで発言してもらった。自分や彼らよりも年上の健太の言葉なら説得力があると思ったからだ。健太は最初こそ嫌がったものの、みんなを助けるために仕方がなく了承した。

「あゝ小林君、君の考えは凄くいいね。でもさ、俺さっきまで外に居ただろ？ 俺の経験を踏まえたうえならもつといい良い作戦を君なら考えられると思うんだ」

小林を立てるように言う健太。

「ああ、そうでしたね。地下通路を通って来たんでしたっけ」

小林は興味深そうに言った。

「そうだよ。それでさ、見た感じなんだけど、何か悪魔に十秒以上触れると感染して奴らの仲間になってしまっらしい。だからあいつらに長く触れているのはまずいみたいだ」

「そうなんですか、十秒……長いっすね。それなら別に注意しなくてもいんじゃないですか」

明るく答える小林の仲間の方場。

思わぬ答えにたじろぎながらも健太は言葉を続ける。

「あ、あと悪魔は火が苦手みたいだ。燃えている車には近づかなかったから……」

「生き物はみんな火が苦手ですよ。でも、ありがとうございました。参考にします」

小林は熟練が素人を見るような顔でそう言った。

その顔を見てなにか無性に悔しくなる健太。まるで話の分らない自分を小林が立てたようになってる。

「……仕方がないね。健太さん、私たちで罠や攻撃を考えよう。実際に悪魔と接近すれば彼らも考えを改めると思うし、その時にもう一度説明すればいいよ」

朝奈はがっかりするように言った。

「何してんだ？」

ショッピングモールの正面入り口前にやってきた朝奈と健太を見て、小林は不思議そうにそう言った。

二人の手に大量のペットボトルロケットが入ったダンボールがあったからだ。

「気にしないで」

朝奈はそのダンボールを下に置き、中身を出しながら答えた。

「気にしないわけ無いだろ、何してんだよ」

「ミサイルをセットしてるの」

「ミサイル？」

「これ、火炎瓶の上半分を組み合わせたペットボトルロケットなんだ。ほら、ここに紐があるでしょ？これが上半分の火炎瓶に繋がっていて、火をつけてから発射すれば相手に当たった後に爆発して結構使えるんだよ」

「へーよくそんなの作れたな、ちゃんと飛ぶのか？」

「私はこういうものに詳しい家庭で育ったからね。大丈夫だよ」

「……そうか。じゃあ、これは俺たちが使うよ。君らは危ないから他の人たちと一緒に逃げてくれ」

「はい？」

朝奈は小林のこの言葉に驚いた。

「悪魔と戦ったことのある俺らと比べて、君らは実際に悪魔を目にすれば疎んじやう可能性があるからな。俺たちに任せて車まで行ってくれ」

「あのな、俺も朝奈ちゃんも悪魔と遭遇してるんだ。大丈夫だよ」

健太はかなりイラ尽きた様子でそう言った。

「いいから、いいから」

しかし小林は全く耳を貸そうとはしない。これには流石に朝奈も頭にきた。

「小林さん、これを作ったのは私たちだから。あなたが使う権利はないよ。私たちに構わなくていいから他の人を逃がすことに専念して」

「そういうわけにもいかないだろ。俺は誰一人死なせる気は無い。これは遊びじゃないんだ。頼むから言うことを聞いてくれ」

朝奈の言葉に呆れたように言葉を返す小林。

「痛てっ、な、何すんだよ！」

健太は頭の線が切れたのか、急に小林を壁に押し付けると耳元で話し出した。

「いいか、お前が言ったようにこれは遊びじゃないんだよ。くだらないヒーローゴッコは止める。言っとくが、さっきお前らが話してた計画は最悪だぞ。あれじゃ間違いなくここにいる人間は全滅する」

「何だよ……俺たちがかつこいいから嫉妬してんのか？ 誰もお前らの言うことなんか聞かないぜ」

「だからこうして二人で努力してんだろ。俺たちのやることに構うな。分かったか？」

健太は腕の力を強めた。

小林は健太の腹に膝蹴りを食らわそうとしたが、健太はそれを片腕で叩き落とすところ言い放った。

「俺も空手をやっててね。こう見えても県大会で優勝したこともあるんだ。お前、散々自慢してたけど、今の實力じゃ俺の居た道場の小学生にも負けるぜ」

「何だこの野郎……！」

「さっさと向こうに行け」

健太は彼の仲間の居る方へと小林の背中を強く押した。

「ってーな、この野郎！」

それに対し数度悪態をついたものの、小林はそれ以上こちらに構うことはなかった。

「……ちよっとやりすぎじゃない？　一応あの人たちもみんなの為に行動してるんだし」

朝奈はそうは言ったものの、僅かにすっきりとした顔をしていた。

「どうした小林。何かあったのか？」

一人喚きながら部屋を中心に歩いてきた小林を見て、方場は訝しがった。

「何でもねえよ。ジョンマクレーン気取りの馬鹿が二人居ただけだ。

——それよりもみんな準備は出来たのか？」

小林は話を反らすように尋ねる。

「ああ、全員武器を持って待機してるぜ。いつでも外に飛び出せる」

「そうか。よし、じゃあいよいよ本番だな。やるぞお前ら！」

「おうっ！」

方場はひつつめ顔を引き締め頷いた。他の仲間もそれに続く。

小林はそれを合図にするように周囲を見回すと、声を張り上げた。

「みなさん、時間です。これから作戦の実行をしますので心してください」

他の面々は鬼気迫る青白い顔でじっと小林を見守っている。

「本音を言えば、こうなる前に救助隊に助けて貰いたかったのですが、それはもはやかなわないことです。こうなつては生き残る方法の一つしかありません。僕たちは自ら悪魔と戦い、道を開きましょう」

「それではまず俺が先行しますから、みなさん後に続いてください」
小林の言葉が終わると同時に方場が叫んだ。その足のまま、正面入り口のほうまで歩いていく。

入り口の左右には朝奈と健太がなにやらしゃがんで色々と動き回っていたが、方場はそれには構わずガラスから外の様子を伺った。
ショッピングモールの正面から道路上のワゴン車までは大体二十

メートル程度ある。幸いにも悪魔は近くには居なかった。車の後方約三十メートルに数匹居る程度だ。

「――よしっ、やってやる！」

方場は片手をグーにもう片手をパーにし、それを打ち合わせ気合を入れると、ゆっくりと正面入り口を開けた。その後ろでは鶏冠頭の小林と坊主頭の下下が神妙な表情で待機している。

音を立てないようにチョビチョビ進むと、運良く悪魔に気づかれることなくワゴン車の前まで到着すした。鍵はショッピングモールの生存者から貰っているので問題はない。

窓を挟むようにして遠くの悪魔を気にしながら方場は鍵を開けその中へ入った。

「よし、さすが俺。後はエンジンを入れて悪魔どもを追っ払うだけだ」

方場は呟きながらエンジンを居れギアを引いた。猛獣が唸るようなエンジンの煩い音が、フリーゾーンに響き渡る。

「ギユウアア!？」

その音で、駐車場に居た全ての悪魔が一斉にワゴン車を見つめた。その数はざっと二十四匹以上はいる。

「ははははっ、引きまくってやるぜ！」

方場は大声を上げながら近くの悪魔に向かってアクセルを踏んだ。ドッカンッという鈍い音が響き、続けざまに悪魔が宙を飛ぶ。その光景に方場は有頂天になった。

「よし、今だ！ みんな行くぞ！」

小林を先頭にショッピングモールの中から多くの人間が飛び出し、近くの車へと向かう。悪魔に襲撃された所為で鍵の掛かっていない、また扉の開いている車は無数にあった。車まで辿りつければ逃げることができる。

「何か、意外と上手くいきそうだな」

走る人々や悪魔を跳ねるワゴン車を見て、健太は朝奈にそう言った。

しかし朝奈は不安そうな顔で答える。

「それならそれで良いんだけど……そう上手く行くとは思えないよ」
方場は悪魔を跳ねている間に、ボンネットの上に何か飛び乗った音を聞いた。恐らく悪魔だろう。それを振り落とす為にワゴン車に急回転をかけようと試みた。

「ギユウウアアア！」

だが、その前に灰色の腕がフロントの窓を突き破り、方場の頭を驚掴みにした。

「うえあああああ！？」

もの凄い力でこめかみを挟まれ方場は、痛みから大きく叫ぶ。
スピードを出しすぎていたためと、思わずアクセルを力いっぱい踏んでしまっていたため、ワゴン車は近くの車に乗り上げるように横転した。

「か、方場ー！？」

ショッピングモールの入り口付近でその様子を見ていた小林は、仲間の予想だになかった突然の死に驚いた。

「おい、車がやられたぞ！？」

「どうするのよ！？」

「うわああー悪魔が来る！」

作戦の序盤から計画が総崩れした所為でフリーゾーンの中は一気にパニックになった。

「小林、どうすんだよ！」

坊主頭の木下はさすがのように小林の服を掴む。しかし小林は口を大きく開けてただ黙ってこの惨状を見るだけだった。

「ギュルルル——……」

そんな二人の前に一匹の悪魔が近づいて来る。

「おいいいい！？ 小林、悪魔が来たぞ、どうにかしろ！」

「ど、どうにかってお前がやれよ！」

小林と木下は先ほどまでの勢いと態度はどこへやら、完全に怖気づいている。

悪魔は舌なめずりしながら正面にいた小林に飛び掛った。

「ぎゃあああああああ！」

二人は迫り来る死の恐怖に絶叫を上げた。

シュツ、バンツ！

その瞬間、なにやら冷たいものを撒き散らして飛ぶ物体が、悪魔の腹に強く衝突した。同時に赤く燃え上がる液体がそこから飛散する。

「ギユアアアウウ!?」

一瞬で火に包まれた悪魔は、のたうち回りながらそこから離れていった。

「早く中に入って！」

朝奈は小林と木下をショッピングモールの中に引き込むと、次の火炎ペットボトルロケットの火をつけた。

「おい、クソガキ、お前らは逃げてくる人間を中に入れる！俺たちで悪魔を遠ざけるからよ！」

健太は勇ましい声を上げながらペットボトルロケットを撃ち続ける。

「え？ あ……うう？」

「早くしろ馬鹿！」

健太に殴られ小林は自分の人格をなくしたように、慌てて逃げ戻ってくる人々をショッピングモールの中に入れる。

朝奈と健太の二人は必死に撃ち続けているものの、その間も多くの人間が悪魔に食い殺されていった。

「早く、早く、早く——……！」

朝奈は自分に言い聞かせるように、また逃げる人々に呼びかけるようにこの言葉を繰り返す。

「——朝奈、もうロケットが無い！」

健太は最後のロケットを撃ちながら叫んだ。別に大声で話す必要は無いのだが、朝奈も負けじと叫ぶように言い返す。

「もう生き残ってる人は居ない、扉を閉めよう！」

二人はほぼ同時に入り口の扉を閉めた。その直後、激しく無数の悪魔がその扉にぶち当たる。

「くっおおおお！？」

健太は用意していた鎖を素早く扉の取っ手に巻き付けると、すぐに後ろに下がった。ガラスを挟んで悪魔が激しく扉をたたき続けているが、強化ガラスのためかやはり割ることは出来ないようだ。

「はぁ、はぁ……なんとか乗り切ったな」

健太は息切れしつつも、悪魔から決して視線を逸らさずに朝奈へと声をかけた。

「でも……だいぶ死んじゃったね」

朝奈はシヨップینگモール内に残った面々の顔を見て小さく呟いた。

無事にここへ戻ってこれたのは二十人中七人しか居ない。

皆が武器を加工しているときに、何度もここから出ることを思いとどまるように言ったり、悪魔の詳細を話したり、出来る努力は精一杯した。

しかし、その頑張りも虚しく多くの人間が死んでしまったのだ。

「……俺の所為だ……」

小林は壁に頂垂れ、泣きながらそう言った。その横では坊主頭の木下が同じようにしゃがんでいる。どうやら先ほどまでこの場をリードしていた高校生の集団は彼ら以外全員死んでしまったらしい。

「俺が……悪いんだ。俺が調子に乗って外に出ようなんて言わなけりゃ……」

それを聞いた瞬間、生存者の五十代らしき男性が目を血走らせて小林に近づき、その首元を掴んだ。

「どうしてくれるんだ！ お前の所為で俺の娘は——……この野郎！」

その男性は小林を地面に押し付けると、馬乗りになり何度も何度もその顔を殴った。健太や他の生存者は一切止める気もなくそれを見ている。

「もう、止めなよ！」

朝奈は見えていられなくなり、男を小林から遠ざけるように後ろから引つ張った。朝奈の力は決して強くはないが、男もそんな気無くしたのか、それ以上拳を出すことは無かった。

「取り合えず、みんなもう一度話し合いましう。ここでいがみ合っついても意味がないですし」

品のよさそうな三十代ほどの女性が男をなだめるように言う。

「……そうだな。どうするか相談しよう」

それに相打ちを打つように健太が言葉を続けた。

早朝の電車の中のようなスカスカしたショッピングモールで、八人の男女が輪を描いて座っている。

その中の一人がゆつくりと言葉を放った。

「正直に言うけど助けは来ません。警察の人たちはウィルスステロのような話だと聞いているみたいで中に入れないんです」

朝奈は截から聞いた内容をそのまま話した。

「じゃあ、やつぱり自分たちで逃げるしかないのね」

先ほどの品のよさそうな女性が残念そうに言う。マフラーのようなパーマがかなり印象的な女性だ。

それに対し、木下が心配そうに聞いた。

「逃げるってとどうやってだよ、外は悪魔だらけなんだろう？」

「給仕室にある地下通路なら、取り合えずこのショッピングモールからは出れるよ。後は歩いて紀行園の出入り口に行くしかないけど」

「歩いてだつて？ 冗談じゃない。俺は絶対に御免だ！」

M字の髪型を持つ男性が叫んだ。先ほど小林を殴った男だ。

「いや、朝奈。それは無理だよ。さっき確認のつもりでハッチの所まで行ったら、下から悪魔の声が聞こえてきた。多分、地下通路はもう通れない」

「そう……じゃあもうここで悪魔をどうにかするしかないね」

朝奈はため息をつきながらそう言った。

「どうにかするって——戦う気なの？ さっきの二の舞になるわよ」
品の良いパーマの女性が怪訝そうに言う。

「私を信じてくれるなら……一つだけいい案があるんです。でも、これはかなり危険です。一歩間違えば全員死ぬかもしれません」

「そんな話なら俺は反対だな」

M字頭の男性はそっぽを向くように言った。しかし朝奈はそれには構わず作戦を話し始める。

それを聞き終わると、誰もが驚いた。

「本気でそんな真似するのかよ、上手くいくわけがねえよ」

健太は目を発射しそうなくらい見開いてそう言った。童顔の男性、木下、M字頭の男性も同じ意見のようだ。しかしパーマの女性は彼らとは違いのりのりだった。

「そういった思い切りのいい話は大好きよ。朝奈ちゃんだっけ？

どうせ死ぬのなら戦うべきよね。私は大賛成よ」

「ありがとうございます。えーと——」

「あ、私は美智子。専業主婦です。よろしくね」

美智子は死ぬ気になった所為か、妙にハイテンションでそう言った。

しかしこれでは二体二だ。このままでは実行に移すことは出来ない。朝奈の案が実行出来そうにないので木下らは安心した。

だがそこで、意外な人物が突然声を発した。

「俺は……朝奈さんに賛成だよ」

小林は殴られ腫れた顔だったが、これまでの様にかっこつけてい

る顔でもなく、調子に乗っている顔でもなく、決意の籠った男らしい顔でそう言い放った。

<第八章>生存者VS悪魔

<第八章>生存者VS悪魔

ショッピングモール 午後4:29

ショッピングモールの裏手は林が生い茂っているため、見渡しはそれ程よくはないが、それでも悪魔が何匹かいるということだけは分かる。

窓から外の様子を見ると、M字頭の男性、池田は小声で呟いた。

「やつぱり裏にも結構居るな。……作戦通りやるしかないか」

「まっマジでやるのか？」

小林の仲間の木下が気弱な声を上げる。それを聞いた小林は叱るように言った。

「もう生き残るにはこれしかねーよ。怖いのはみんな同じだ。朝奈さんみたいな女の子が頑張ってるのに、俺たち大の男がこんな情けない声を出していると笑われるぞ」

「……分かったよ」

木下は本心では反対だったようだが、場の空気に負けそれ以上文句を言うことは無かった。

朝奈、健太、美智子、小林、木下、池田の六人は今裏口の前にいる。そして彼らの周りには彼らを囲むようにして、数個の商品棚が檻のように立てられていた。別に誰かに閉じ込められたわけではなく、これはバリケードだ。悪魔から身を守るための。

朝奈が考えた作戦を一まとめに説明すれば、こういうことになる。まず、ショッピングモールのガス栓を全開にして室内に可燃性のガスを満たす。そして悪魔を中に引き入れ、ある程度の数が入った

ら、もしくは自分たちがガスで気を失いそうになったら、間近の裏口から逃げ火をつける。

何故すぐに逃げ出さないのかと言えば、理由は二つあった。

一つは裏口の悪魔が正面入り口方向へ消えるまで逃げたくても逃げられないという点だ。そしてもう一つは外の悪魔が十分中に入らなければ、この作戦の意味がない。つまり外に居る約二十匹の悪魔の大半を自分たちを囲にして引き入れる必要があるという点だ。

だから彼らはバリケードを築き、こうして裏口の前に屯している。「バリケードは完成した。ガス栓も開けた。後は悪魔を引き入れるだけだ。誰がやる？」

健太は自分がやりたくないためにワザと自分から誰かに聞くように言った。しかし当然誰も手を上げない。

「おつ、俺は無理だ。きつ、きつと入り口を開けた瞬間に緊張して動けなくなる！」

池田が視線を向けたため木下はどもりながらそう言った。それに對し、池田は責めるように言葉を発する。

「お前ら二人のどつちかがやるのが妥当だろうが、お前らの所為でこんな事態になったんだぞ。朝奈ちゃんは今から俺たちが生き残るために必要だ。俺はこの歳だから、扉からここに戻るまでに絶対に悪魔に追いつかれる。だったら残った面子で適当なのはお前らしかないだろ。現役高校生だしな」

「ふざけんなよ！ 自分が年上だからって俺たちに危険な役目を押し付けんじゃねえよ」

「誰が押し付けてんだ。俺が一番合理的なことを言ったただけだぞ。」

お前らガキみたいに感情的なことはいらない」

「はあ！？ 嘘付け、明らかに感情が籠ってんだろ！ そんなに俺たちが憎いのかよ。あんたらだってあの時は反対しなかったくせに！」

木下は半場泣きながら叫んだ。

このままでは一向に先へ進まないと朝奈は思ったものの、それで

も手を上げられない自分を軽蔑した。

美智子は揉めあう木下と池田を呆れた表情で見ると、面倒くさそうに手を上げようとしたが、それより早く別の人間が手を上げた。

「……俺がやる」

ぼそりとそう言ったのは小林だった。気のせいだろうが鶏冠頭が縮こまっているように見える。

「小林さん……」

朝奈は全ての罪を自分が背負っているかのように暗い顔の小林を見て、哀れに思った。

小林は確かにミスを犯した。深く考えずに行動した。その所為で多くの人間が死んだのは事実だ。

だが、それは決して小林だけの所為ではない。池田や他の人間、小林の仲間、多くの人間が彼をはやし立てたことが原因でもある。

小林はただ作戦を立てただけだ。みんなを助けるために、生きるために、決意を持って行動した。例えば考えは甘かろうとその誠意ある気持ちだけは確かだ。

そんな小林を池田が責めるのはお門違いと言うやつだろう。二人の罪は大差ない。

朝奈は小林を思い留めさせようとした。

「小林くん、無理しなくてもいいよ。あれは君だけの所為じゃないんだから」

朝奈の言葉が届いたのか、小林はこちらを振り向いた。

だが、他の人間はそれを許さない。小林がやらなくなれば自分がその役をやるのではないかといった恐怖、小林に対する憤りといった感情が交差し、獲物を囲んだ狼のように集団で小林を追いつめた。「何言ってるんだよ朝奈！ こいつが一番適當だろ。こいつ以外誰がやるんだよ」

健太が押し付けるように言う。

「そつだ。朝奈ちゃん、同情することはない。これでこいつも罪を償えるんだ。万々歳だろ」

獲物を逃がさないように言う池田。

「そつ、そつだよ。俺は小林に従っただけだ。悪いのは小林だよ。俺じゃない！」

終いには友人であつたはずの木下までが、小林を攻め立てた。

朝奈はその様子を見て驚く。

「みんな……」

だが、確かに誰かが犠牲に為らなくてはいけない事は避けようが無い。朝奈は小林を引き止める言葉が浮かばなかった。自分も手を上げなかったという恥の気持ちも加わり、棚を退かして入り口までとぼとぼ歩いていく小林の、その小さな後ろ姿を見ることがしか出来ない。

「……ごめん」

ただそう謝るしかなかった。

「朝奈ちゃん。こんな状態じゃしょうがないよ。今更どうしようもない」

落ち込む朝奈の肩を美智子が優しく叩く。

「美智子さんは……良く手を上げられましたね。凄いです」

「そう思う？ 私はただ自棄になつてただけよ。旦那が目の前で食い殺されるのを見たからね。正直もうどうでもいいの」

自分を慰めてくれたと思つていた美智子がさりと怖いことを言つたので、朝奈は返事に困つた。

「そんなに気にしないで。今は自分が生き残ることが第一でしょ。」

私とは違つてあなたにはまだ生きる意志があるみたいだし」

「美智子さん……」

「ほら、小林くんが正面入り口まで着いたわよ。そろそろ悪魔に備えなさい」

「はい」

朝奈は頷いたものの、心なしか元気が無かつた。

小林は暗いショッピングモールの中から外の景色を見た。駐車上の上を徘徊する悪魔。噴水の上で直視できないようなものをしゃぶ

っている悪魔、しゃがんでは何か赤い物体をしきりに口へ運んでいる悪魔。

悪魔、悪魔、悪魔、悪魔、悪魔、悪魔、悪魔、悪魔、悪魔、悪魔、悪魔、悪魔……

美しい休憩場だったフリーゾーンはもはや、血と肉の散らばる悪魔の籠かごの中と化していた。これからこの扉を開け悪魔を引き入れると考えるとゾツとする。気が高ぶっていたとはいえ、さつきはよく外に出れたものだ。小林は自分の足が震えるのを感じた。

悪魔に対する恐怖からか、友人に裏切られた悲しみからか、小林の頭の中は絶望で一杯だった。

自暴自棄になりながら扉に手をかけると、ガラスの扉の向こうにまだ燃えている一台の車が目に入った。方場が乗っていたワゴン車だ。

「方場——……ごめんな。俺の所為で……俺もすぐ行くから……」

小林は空ろな目で呟くと鎖を外し、両手で扉を大きく開け放った。そして悪魔を引き付けるために叫ぶ。

「うわあああああああ——！」

それは雄叫びというよりは深い悲しみに満ちた叫びだった。小林自身の目にも涙が溜まっている。一斉にこちらを向く悪魔の群団。

「小林君、戻って！」

朝奈は小林の身を案じ、大きな声で呼びかけた。だが、小林は生きる気をなくしたように入り口前にずっと突っ立っている。

「小林君！」

その瞬間、小林がこちらにやってきた。自分の足ではない。悪魔に体当たりをされ吹き飛んできたのだ。

「ぐふうふうふう！？」

痛みから小林は呻き声を上げる。

「健太さん、早く棚を空けて！ 小林君を入れないと！」

朝奈は健太に向かって叫んだが、健太は棚と棚を繋いでいる鎖の拘束を強めた。

「もう無理だ！ 悪魔が中に入ってきた！」

小林の後ろに立つ悪魔を見て健太は大声を上げる。

「……ううっ……」

小林は呻き声を上げたまま、真正面に立つ悪魔を見た。

その悪魔に続いて次々と悪魔がシヨッピングモールの中に入ってくる。

「ギユウウアアアア！」

悪魔たちは嬉しそうに鳴くと、小林に覆いかぶさり、その黄色い歯を突きたて始めた。

「うあああああ！？ うわああああああつ！」

小林の悲惨な、壮絶な痛みと恐怖に苦しむ断末魔が聞こえる。朝奈はあまりの光景にピクリとも動けなくなった。

色白の頬に小林の体から跳ねた赤い水滴が付着する。

「……小林君……！」

口を赤く塗りたくった悪魔たちが顔を上げると、もはや小林は居なかった。

そこに居たのは、いや、あったのは、白い骨を覗かせているただの赤い肉と脂肪の塊だ。

朝奈は悲しみと驚きと恐怖から気を失いかけた。

「——っすっかりして！ 来るわよ！」

倒れそうになった朝奈を支えると、美智子は正面を見据える。

悪魔たちはその剛力でバリケードの棚々を次々に殴り、引つかいたりしてきた。棚と棚と壁の手摺はポール用の鎖で結んでいて、そのため取れることはないが、このままでは棚自体が持たなくなる。

「池田さん、裏口の様子はどうか！？」

健太は汗だらだら顔で呼びかけた。

「——っ畜生まだ二、三匹居る！」

健太以上の湿った顔で答える池田。

「ひいひいひいひいひいひい！？」

そして木下はもっぱら叫んでいるだけだった。

ギシギシと音を立て割れ目や傷が入っていく棚。

「今どれくらい悪魔が入ってるんだ？ ガスと緊張で意識が遠くなつて来たぞ！？」

「大体十二つとこね、裏口も含めてあと八匹近く外にいるわ！」
焦りまくりの池田の問いに、美智子は冷静に答えた。

「うなあああああ！」

突然木下の右手が、棚の裏板を突き破って飛び出した悪魔の手に掴まれた。必死にその手を剥がそうともがく木下。

だが、悪魔の手は一ミリも離れようとはしない。このままでは木下は感染してしまうだろう。バリケードと背面の壁に囲まれたこの狭い場所で木下が悪魔になれば、朝奈らに勝ち目はない。

「このっ！」

朝奈は大西の物だった西洋風ナイフをその悪魔の腕に突き立てようとしたり。その瞬間、今度は別の悪魔の手が棚を突き破り朝奈のナイフを握っている手を掴んだ。

「ギュッアアアウウアア！」

「キャッ！？」

朝奈は無我夢中で暴れたが、全く悪魔の手は離れようとはしない。このままではもうすぐ木下が十秒感染をしてしまう。

「たっ、助けてくれええー！」

木下は「ムンクの叫び」のような表情で絶叫を上げた。その様子に気づいた健太は、悪魔の手に瓶の先を割ったものを垂直に叩き付ける。

「ギュウアア！？」

悪魔はガラスの刃が肉を裂く痛みには怯み、木下の手を離れた。
「はあうううー！」

木下はゴキブリのような動きで裏口に背を付けると、自分の手をまじまじと見つめる。その腕は灰色く変色……してはおらず、赤く腫れていた。どうやら感染は免れたらしい。

「やっ！」

同じように悪魔の手に掴まれていた朝奈はナイフで倒すことを諦めたのか、突然思いつきりしゃがみ、勢い良く立ち上がった。しゃがむことで腕の関節の曲がる方向を下に向け、急に立ち上がることでその腕にダメージを与えたのだ。

通常とは逆方向に曲げさせられた悪魔の腕は間接が外れたらしく、ガクンと力が抜けた。その隙に朝奈は自分の手を悪魔の腕から遠ざけた。

「——おい、まだなのか!？」

健太が裏口をチラ見しながら言う。

その行為に促されるように背後の裏口の窓から外を見た池田は、喜ぶように叫んだ。

「悪魔どもが居なくなってるぜ! さつさと逃げよう!」

「まだ全部中に入っていないみたいだけど……確かにもう限界みたいだね。みんな出よう!」

ボロボロとなった柵の様子を片目に、朝奈は池田の意見に応じた。「ねえ、あれ何よ?」

その時、たった一人冷静に悪魔の集団を見ていた美智子が、二匹の悪魔を指差して朝奈に呼びかけた。

朝奈がそちらに目を向けると、不可解な姿をしている悪魔が視界に入る。

血管だらけの灰色の皮膚に、眼球の殆どが飛び出した血走った目、唇が無くなり歯茎と歯が直に見えるようになった大きな口、逆立った全身の毛は言うまでも無く、通常の人間の物とは全く逆に曲がった腕と足の関節。さらには額から突き出るように盛り上がった頭蓋骨の一部。

仰向けの状態で四つんばいになったような変な形の悪魔が、二匹もいつの間にかショッピングモールの中に入ってきていた。

「な、何あれ?」

朝奈はあまりにも奇妙なその二匹の悪魔の姿に嫌悪感を抱く。

「とにかく、急いでここから出た方がいいことは確かみたいだわ」

死ぬことに対する恐怖をなくしたようなことを言っていたが、やはり本心では怖いのか、あの四つ足の悪魔を目にして恐怖が戻ってきたのか、身震いしながら美智子はそう言った。

「ギョルルルアアア！」

二匹の変な悪魔の力は四足で突撃してくる分、普通の悪魔よりも強いらしく、柵は一回の体当たりでその大部分が粉碎した。

「もうバリケードが破れる！ 急げ！」

池田が真っ先にそう叫びながら逃げていく。当然、朝奈らもそれに続いて裏口から出た。

ショッピングモールの後ろは一面林が生い茂っており、その中心に小さな道がぽつんとあった。まるでショッピングモールでその道を隠していたようだ。

十メートルほど離れた位置までくると、健太が持っていたタバコに火をつけ、それを後ろに大きく振りかぶって裏口の方へと投げた。

「伏せろ！」

健太が叫ぶと同時にタバコは裏口の前まで到着する。そして、天地を揺るがすような大きな爆音が響いた。

ショッピングモールが吹き飛んだのだ。

朝奈らは鼓膜を破らないように耳を塞ぎながら地面に身を沈める。数十秒後、瓦礫や火の粉が降り注ぐ中、健太は勝ち誇った顔で立ち上がり、ショッピングモールの跡地を眺めた。そこであるものが瓦礫の中に見える。丁度裏口があったところの真ん前といった場所だ。

「やったぜ！ ……ん？ 何だあれ」

「——さっきの四足悪魔だぞ！ あいつ、爆発の直前で中から脱出したんだな！」

木下は近くの木の後ろから両目だけを覗かせ、言葉を発した。

「……二匹もいる！」

朝奈はその瓦礫の上で立ち上がる影が二つあることに気づき、後ずさった。

「畜生、逃げるぞ——……！」

池田が走り出しながら叫んだ。その次に木下、美智子、健太、朝奈の順で残りの面々も逃げ出す。

「ギョウウウウエエアア……」

二匹の四足悪魔は朝奈らの気配を感じたのか、爆発のダメージも全く無い様子で元気に走り出した。

「速い！」

木々の間を走りながら背後の様子を見ていた朝奈は、四足悪魔の速度に驚く。

最初はテレビのリモコンほどの大きさに見えていた悪魔が、もう植木鉢くらいの大きさに見えているのだ。かなりの速度といえるだろう。

「——しめた、建物だ！」

先頭を走っていた池田は林の先に三階建ての小さな建物が見えたことに喜んだ。しかしその喜びはすぐに無駄になる。

「そんなっ、ふざけんなよ！」

木下は段々と見えてきた建物の全様にがっかりした。

林に隠されるようにひっそりと建っているその建物の周りには、動物避けの為か大きな金属製の柵が張り巡らされていたのだ。しかも高圧電流注意といった看板までついている。入り口の扉には鎖つきの鍵が掛かっているらしく、力ずくではどう考えても中に入れそうにはなかった。

五人は建物の前で止まるしかなかった。

「……こっちだ！」

健太が入り口左の横道へと走りながら呼びかけた。朝奈がそちらに目を向けると、大きな駐車場のようなのが見える。

あそこならばいくらか時間を稼げるかもしれない。他に隠れられそうな場所はどこにも無いので、彼らは躊躇なくその中へと入っていった。

丁度正方形の形をしたようなその五百平方メートルほどの駐車上

の中は、職員が建物の中から出ていないのか多くの車がいまだに止められている。

朝奈らは建物の入り口付近までやってきた悪魔を見ると、それぞれ急いで身を隠した。

なんとかショッピングモールから脱出は出来たものの、多くの悪魔を倒せたものの、結果としてはピンチになっていることに変わりはない。いくらあのままショッピングモールにいればいずれ悪魔が入ってくるとはいえ、これでは危険度は大差ない。いや、寧ろ上がったといえるだろう。

「これじゃあ小林くんのこと……悪く言えないね」

目の前を通り過ぎて行く四足悪魔の足を車の下から見つつ、朝奈は自分をさげすんだ。

顔を前に向けると、歩く悪魔を挟んで向かいの車の下に隠れている池田と目が合う。池田は緊張の所為か体をぶるぶると震わせて縮こまっていた。

そのまま視線を左に向けると、二つ先の車の下に健太が隠れているのが見える。木下と美智子は遠くに隠れているらしく、朝奈からは確認出来ないが、どうやらまだ無事らしい。叫び声がきこえないからそれは確かだ。

朝奈は生き残る方法を必死に考えた。

出入り口はここに入ってきた一つしかないとはいえ、辺りは林だ。別に道を通る必要も無い。逃げれる方向は無数にある。真後ろがその林という位置に居る朝奈は一人だけなら悪魔の隙についてフリーゾーンまで戻ることも可能だろう。

だが、朝奈はそうすることはなかった。罪悪感がそれを止めたのだ。自分の作戦でこういう事態になっている以上、ここで自分だけ

が逃げるのはあまりに無責任だ。その罪悪感から、朝奈はこの駐車場に身を留めた。

二匹の四足悪魔のうち片方は丁度出入り口から見て右端、建物の側面と繋がっているコンクリートの壁までやってきていた。逆間接の両腕両足を交互に動かしながら鼻を地面に擦り付ける。そしてその際に壁の前にあった、大きな青いゴミ箱に灰色の肩が当たった。

「ひっ!？」

その瞬間、何故かそこから小さい悲鳴が聞こえる。怪しんだ四足の悪魔は片手を横薙ぎにしてそのゴミ箱を押し倒した。するとそのゴミ箱の蓋が落ちると同時に、中から木下が恐怖に引きつった表情で頭を覗かせる。

「ギョルウルル」

四足悪魔は舌なめずりをすると、その中に自分の両手をつっ込んだ。

「ひいひいひいひい!？」

木下は力の限り暴れてその腕から逃れようとしたが、何しろ体の殆どがゴミ箱の中に埋まっているのだ。傍から見れば磯巾着が二本の触手を上に振り回しているようにしか見えない。

当然、その抵抗は四足悪魔にとっては抵抗ではなく、木下はあつと言つ間にゴミ箱の中から引きずり出されてしまった。

一瞬夕焼けに細めていた目を大きく開いた瞬間、木下の視界を赤黒い口内と黄色い歯が多い尽くした。

「あぎゅうああああ!？」

サイレンのような壮絶な悲鳴が駐車場に響く。

健太は四足悪魔がガツガツと木下を食べている光景をモロに見てしまった。健太の居る位置からはあの青いゴミ箱の場所がはっきりと見えてしまうのだ。

「……………くそつたつれ……………!」

近くに居る時は姿を隠せる車の下でも、遠くからでは簡単にその姿が分かる。特に四足歩行のあの悪魔には。

健太は木下を食べている悪魔がこちらを向く前に場所を移動させることにした。

そろり、そろりと匍匐^{ほふく}前進しながら、朝奈と池田がいる方へと車の下を進む。周囲に目を凝らしたが、今はどこにも悪魔の姿はない。健太は隣の車の下へ移るために、一端今居る車の下から出た。

そのまま匍匐^{ほふく}蟹歩きと名づけられるような動きで静かに距離を稼いでいく。そして次の車の前に差し掛かった瞬間、自分が身を伏せている周囲の地面の色が濃くなった。影が出来たのだ。

「ギユアアウウウウ？」

おぞましい声が車の上から聞こえる。考える間もなく、健太は手を高速連動させ車の下へと急いだ。だが、あの状態で間に合うわけが無い。両足を四足悪魔にしっかりと掴まれてしまった。

「うああああああ、離せ、離せー！？」

バタ足のように足を上下に動かしてみたが、悪魔の腕は全く離れない。どんどん健太を車の下から引つ張っていく。

幸いジーパン部分を掴まれているため十秒感染する危険はないが、数秒経てば命を失う危険に直面することになるのは確実だ。健太は無我夢中で足を動かし続けた。

「健太さん！」

その光景を別の車の下から見た朝奈は、ナイフを握り締めると外に飛び出した。

健太と四足悪魔に走りよる途中でタイヤを背面に括り付けている車があったので、そのタイヤを取り悪魔に投げつけた。

朝奈の力では殆ど放ったとしか言えない様な攻撃だったのだが、どうつやら当たり所が良かったらしく、四足悪魔は「キャフン！」といって盛大に体勢を崩した。

「ふおうううう！」

この隙に健太は変な声を出しながら立ち上がり、悪魔から遠ざかる。

「ギユウウアアア！」

その所為で今度は悪魔の近くにいた朝奈の身が危なくなつた。

四足の筋力を生かしながら飛び掛ってくる悪魔。

朝奈はそれが直撃する前に、反対方向へと走り出した。すると目の前に健太と朝奈を囚にして林に逃げようと駆けだしていた池田が見える。五十代の池田と二十前の朝奈では例え男女といえどもその速度の優劣は分かりきっていた。朝奈はすぐに池田の隣に並んだ。

「こ、こつちに来るんじゃねえ！」

池田は細かく息切れをしながら朝奈を睨み付ける。

「そんなこと言っても他に逃げれる場所無いじゃん！」

朝奈も同じように睨み返した。

すぐ後ろに四足悪魔の鳴き声が聞こえる。朝奈は牛悪魔の時の経験から瞬時に真横へ飛んだ。もちろん池田を引ばつてだ。そしてその直後四足悪魔が二人の居た位置を通り過ぎていった。飛び掛る勢いが強すぎのか止まれなかつたようだ。

「池田さん、今の内に隠れよう！」

朝奈は付近の車の下へ入ろうとしたが、今度は真正面から木下を殺した四足悪魔が走ってきた。同時に真後ろからは先ほどの悪魔がこちらに向かつて戻ってくる。

「くうおおおお！」

池田は怯えて朝奈にしがみ付いた。

それに対し朝奈はどつくように池田の胸を強く押す。その所為で池田は背後の車の側面に仰け反るように背を付けた。

丁度その瞬間、二人の間を二匹の四足悪魔が交差する。二匹はお互いの頭をぶつけ合い抱き合うように転がった。

「今だ！」

朝奈は必死の形相でそこから離れた。当然池田も後に着いて来る。だが、そう何度も上手くことが運ぶわけが無い。池田は背後から四足悪魔に押し掛かれ倒れこんだ。その気配に後ろを向いた瞬間、朝奈にも別の悪魔が覆いかぶさる。

「きゃああああ！」

自分の首元に噛み付こうとする悪魔の頭を、朝奈は必死に遠ざけた。しかしそれでは十秒感染の危険が襲い掛かってくる。

朝奈が悪魔に触れてから一秒、二秒、三秒……六、七、八、九

……

十秒が経つ直前、走ってきた美智子のドロップキックによって四足悪魔は吹き飛んだ。その頭は朝奈の真横の車のガラスを突き抜け、血だらけになっている。

美智子の助けで素早く起き上がると、池田は痙攣しながら悪魔に首をしゃぶられていた。周囲は赤い血だらけだ。

「——うっ!？」

その光景に体の力が抜ける朝奈。

「今のうちよ!」

美智子はそんな朝奈の手を引っ張ると、池田の亡骸には構うことなく走り出した。そして健太を見つけ一緒に車の陰に隠れる。

「もう二人もやられたぞ! どうすんだ朝奈!？」

健太は恐怖と怒りの伴った顔で朝奈を揺さぶった。だが朝奈は何もいい案が浮かばないのか、震えながら下を向いている。

「少しは自分の頭で考えたら!？」

美智子は朝奈のことを考え冷たい声で健太を一睨みした。健太はその言葉でようやく冷静になる。

「あ——……悪い」

この結果は別に朝奈の所為ではない。健太が朝奈に当たるのは八つ当たりというものだ。

三人を探して段々と近づいてくる二匹の悪魔。その姿を車の窓を通して見ると、美智子はぼそつと呟いた。

「とても逃げ切れそうにないわね」

そしてショッピングモールから持ち込んでいた草刈用の鎌を取り出す。

「おい、お前戦う気なのか？」

「だって、逃げられないんだからそうするしかないじゃない。あな

たはただ黙って死にたいの？ 私はどうせ死ぬなら旦那の敵を取ってから死んでやるわよ」

「で、でもよ……！」

「男の癖にうじうじしないでよ。みつともない！」

「だ、誰がうじうじしてんだよ！ 俺だってやるときはやるさ！」

健太は顔を赤く膨らませながら包丁を取り出した。

「美智子さん……」

朝奈は暗い顔で美智子を見つめる。

「大丈夫よ。あの悪魔に主婦の火事場の底力をみせてやるわ！」

本心ではやはり怖いのだろうか、美智子の足は震え、唇は紫になっていた。

朝奈はそんな美智子の様子に自分だけが怖いのではないと思い直し、池田と木下の死の罪悪感を一時的に忘れナイフを構えた。

「来たぞ！」

健太が隠れている車の窓から反対側を見て小さく叫ぶ。

こちらにきた四足悪魔は一匹だけだ。どうやらもう一匹はまだ車のガラスから逃れられずに暴れているらしい。相手が一匹だけなら倒せるかもしれない。

三人は悪魔が車の影から姿を見せた時を見計らって突撃した。

朝奈の西洋風ナイフが、健太の包丁が、美智子の鎌が、それぞれ四足悪魔の肉を抉り貫く。悪魔は三人の勢いに押され、向かいの車のボンネットに背中を強打した。

「これで止めだ！」

健太が包丁を引き抜きそれを悪魔の頭へと移動させる。そしてその切っ先は、悪魔の耳を掠^{かす}っただけに終わった。間一髪で四足悪魔が頭を反らしたのだ。

「があああ！？」

健太はそのまま四足悪魔に腕を噛まれ痛みの声を上げる。朝奈と美智子は急いで追撃を繰り出そうと試みたが一步遅く、灰色の腕によって思いつきり突き放されてしまった。それと同時に四足悪魔は

口の力だけで健太を投げ飛ばす。

数メートル先の地面に転がった健太の下腕部は大量の血を流し歯形を残して一部分が消えていた。

「ギョルルルアアア！」

四足悪魔は一番近くに倒れていた美智子に近づいていく。

「や、止めて！」

朝奈は車のフロントに強打した傷みに顔を歪め、必死に叫んだ。

美智子は自分を何度も助けてくれた。

慰めてくれた。

短い間だったが、心から信頼できた相手だ。

そんな美智子が死ぬのを見過ごすことなど出来る筈がない。

四足悪魔が美智子の腕を掴み彼女を持ち上げた瞬間、朝奈は地面を蹴り、悪魔目掛けてナイフを斬りつけた。それとほぼ同時に健太も包丁を突き出す。

四足悪魔は攻撃を避けようとしたが、美智子が強く腕を掴み引つ張ったためそれは実現しなかった。

朝奈と健太の刃はその瞬間、しっかりと悪魔の胸を貫いた。

灰色の化け物は血走った目で二人を睨み付け、右手で殴りかかるような動きを見せたが、その前に力尽き地面に沈んだ。

「や、やったぜ！」

健太が歓声をあげる。朝奈も胸に手を当てて取り合えず安堵した。もう一匹同じ化け物が居るが、まだ車のガラスに引かかっているようだ。あれならば逃げ切れるだろう。

「ちよつと——……何よ、これ!？」

美智子は喜びの声……ではなく奇妙な感想を言った。

「そんな!？」

朝奈は美智子に目を向けた瞬間、何が起きたのか悟った。美智子の腕が灰色に変色し出しているのだ。その範囲は徐々に全身へと広がっていく。もはやどうしようもない。

「美智子さん……!」

朝奈は涙を飲んでナイフを振り上げた。だが美智子と目が合ってしまう、そのまま固まってしまう。

「わ、私感染したのね……嫌よ、嫌！ 死ぬことは怖くなかったけど、化け物になってなりたくない！ 朝奈ちゃん、助けて……！」
美智子は大粒の涙を流しながら懇願した。

朝奈は何度も掲げたナイフを振り下ろそうとしたが、どうしても出来ない。健太も同じようだ。例え化け物になると分かっているとしても美智子の目はまだ人間だ。しかも泣いている女性である。心では分かっているとしても体は止まってしまうらしい。

その間も見ろ見る中に美智子は灰色く染まっていく。それはとうとう顔の部分にまで達していた。

朝奈は涙を流しながら美智子がそれ以外のモノになるのを待つ。悪魔になった瞬間に殺す気だったのだ。

しかし、朝奈がそれを実現することはなかった。

突然美智子の首が切り落とされたからだ。それもまだ人間の状態で。

「馬鹿じゃないの？ なんでさっさと殺さないんだよ」

いつの間に来ていたのだろうか、美智子の真後ろに冷たい目をした翠が立っていた。その手には警棒の刀バージョンのようなメートルはありそうな刃が握られている。

それは拳銃のようなグリップに、しを二つ重ねたような鍰が付き、その先から折りたたみ式の長い刃が延びているものだった。

<第八章>生存者VS悪魔（後書き）

今回はかなり展開に悩んだ末の投稿ですが、今だにあまり納得できてはいません。ですが、先の展開を考えるとこれ以外の展開は思い浮かばないので投稿しました。

面白い話を書くのは難しいですね・・・。

<第九章>大口人間

<第九章>大口人間

頭では分かっている。悪魔になってしまつては倒すことが困難になり、こちらにも死の危険が付きまとう。

それでも朝奈は美智子を殺すことが出来なかった。

助けを求めていたから。

まだ人間だったから。

泣いていたから。

どうしても体が動かなかった。

だが、翠はあっさりと、まるでマナ板の上に置いている肉を切断するように、美智子の首を刎ねた。

冷酷に。

機械的に。

無表情で。

生存することを第一優先事項と考えれば、翠の行動は全く間違つてはいない。寧ろ正しいと言える。

朝奈もそれが分かっているからこそ、何も言えずに顔を伏せていた。

「まったく、一般人に構うからこんな危険な目に遭うんだ。今度私にさっきのような真似をしてみる。背中にナイフを突き刺してやる」朝奈に地下通路へ行くハッチを塞がれたことを言っているのだろう。翠は今にも切りかかりそうな雰囲気ですう言った。

「翠さん……今までどうしてたの？」

朝奈は大勢の人間を死に追いやってしまった後悔の気持ちを押し隠し、静かに聞いた。

「遠くからずつとお前らを見てたよ。截のバイクが有ったおかげで早く戻ってこれたからな」

「ずつと？ 何でもつと早く助けてくれなかったの！？」

「自分で私を遠ざけておいてよく言うよ。あんたがどうするか興味があつたから……ちよつと見物させてもらったのさ」

翠はケロツとしたように言った。

「おい、ふざけんなよ！ お前がもつと早く来てればこんなに人が死なないですんだのに！」

美智子の悲しい死体を見ながら健太が叫んだ。

「これだけの死者を出したのは私の所為じゃない。これはおあんたらが招いた結果だ。あんたらを信じたおかげでこの人たちは死んだ。さんざん助けるだの何だのと言っていたが、これじゃあんたらがいない方が良かったかもな」

「何だと！？」

「あんたらは一般市民の計画があまりにつたないと思って行動したんだろ。けどな、あんたらの計画が優れているっていう保障もなかった。実際あのショッピングモールに居た人間は全滅してしまつたようだし」

翠は馬鹿にしたように二人を見つめる。

「くだらない優しさや正義感からあんな行動をしたんだろうが、私から見れば滑稽でしかないよ。自分ではそう思っていないかもしれないけど、あんたらは心から生存者を助けたいと思つたわけじゃない。悪魔の情報を知っている自分たちがそれを伝えなくてはならないという義務感、見捨てていくことの罪悪感、そう、結局は自分がそれに耐えられなかったから彼らを助けようとしただけ。本当に彼らを助けたいと思つたんじゃない」

「そんなこと……」

朝奈が否定しようとする。

「違つと言えるか？ 所詮「優しさ」なんてものは錯覚に過ぎない。怪我をしている人間を目にしたら多くの人間が彼らを助けるだろう」

が、それは決して優しさなんて理念だけの存在のことじゃない。助けてあげているという自己満足、怪我を見ていたくないという共感恐怖、放っておくわけにはいけないという罪悪感、理由は無数にあるが、辞書に載っている意味の優しさとは全く違う。どれも自分のための行動だ。お前らが彼らを助けようとした気持ちに一切そんな感情が無かったと言えるか？」

「それは……」

朝奈は言えなかった。実際に何度も罪悪感を感じて行動していたから。

「それでもお前がいれば、助かる人間が居たかもしれないのは事実だろ？」

健太が責任を擦り付けるように翠に言う。

「さあな。居たかもしれないし、変わらないかもしれない。絶対に正しい策なんてないんだ。生存者の計画もあり、お前らの作戦もあり。自分の方がいい案を考えたと思ってても失敗することもある。全ては終わってからにしか分からない。今更そんなことを考えても意味は無いんだよ」

この言葉を聞き、それ以上健太は文句を言うことが出来なかった。「話は終わりだ。さつさと中央職員用エリアへ行くぞ」

誰も何も言わないので翠は先へ歩き出す。

美智子を殺す前に倒したのか、歩いていく途中に車のガラスに埋まっていた悪魔の首無し死体が横たわっている。

朝奈と健太は言い換えせない悔しさで一杯だったものの、仕方がなく建物の門の前まで進んだ。

門には相変わらず鎖付きの鍵が掛かっており、とても入れそうにはない。勿論、建物を囲んでいる高圧電流の流れた柵もしっかりと機能しているようだ。

「まいったな。鋼鉄製の鍵だ。これじゃどうしようもない」

団子頭の前髪を耳に寄せながら、翠はため息をついた。

「他に道はないの？」

朝奈が聞く。

「探してみよう。あまり私から離れるなよ。いちいち助けに行く気はないからな」

「……分かった」

翠の性格を大体理解した朝奈は素直に了解した。

三人でしばらく建物の周囲を搜索してみたが、裏口や非常口のようなものはいくらも見つからない。朝奈は木の上から中に入れないか実際に登ってみたりもしたが、とても柵の向こう側まで届きそうにはなかった。だが、しばらくそこに居るうちにあることに気がついた。

「……あれ？」

木の上から遠くの方に何かが見える。

それは大型のバスだった。猛獣を閉じ込めておく檻のような塗装をしたそのバスは、丁度今居る場所を建物の南と考えれば真西の位置にあたる場所に止まっている。

何故朝奈がそんなバスに注意を引き付けられたかといえば、答えは簡単だ。そのバスが建物の西側の柵を突き破っていたのだ。

あのバスが開けた穴を通れば柵の内側に入れるかもしれない。朝奈はその旨を二人に伝えた。

「西側か……はぁー、猛獣ゾーンを通らなくちゃいけないのかよ」

健太が頭を抱えながら下を向く。それを見た翠は無感情な様子でこう言い放った。

「建物の柵を伝って行きたいが、駐車場の壁が邪魔をしている所為でそれは不可能だ。それにあの柵の穴の手前にも壁がある。多分、一般道からずっと続いてるんだろ？な。だったら猛獣ゾーンを通るしかないだろ。覚悟を決めろ」

「分かったよ」

健太は落胆しながら頷いた。

疲れを知らないかのように歩き出す翠を、朝奈がふと何かを思い出したように呼び止めた。

「翠さん、あれから截さんから連絡は？」

「全く無いな。電話が壊れたのか無くしたのか、まあそんなところろっ」

「死んでいるって思ったりはしないの？」

「その可能性もあるさ。だけど……その時は私には分かるから心配しなくていい」

「どういうこと？」

翠の発言を朝奈は不思議がった。

「……時間がないから短くまとめるけど、私の体にはあいつの臓器が入ってるんだ。あいつの体にも私の臓器が入っている」

「え？」

「私と截は初仕事の時にイカれた上司の所為で二人揃って死に掛けてね。その治療の時にお互いの足りない臓器を、お互いの臓器とES細胞で補完したのさ。ES細胞の作用か、截の細胞の作用か、その時からごく僅かだけ截の存在を感じることが出来るようになったんだ。だから今あいつが生きてるかどうかはすぐに分かる。心配することは無いよ」

「だから、截さんのことを自分自身のようなものだって言ってたの？」

「まあ、もちろんこのことも大きいけど、それだけじゃない。黒服で行動を共にするってことは生死をお互いに預けあうってことだ。お互いの全てを知っておかないといざという時に苦労する。だから私と截はお互いのことを知り尽くしてるよ。癖から黒子の位置までな。あいつを自分自身って例えたのはそういうことだ」

「そうなんだ……」

「なんだよ、その変な顔は？」

朝奈の表情を見て翠は眉を寄せる。

「べ、別に何でもないよ！ もう行こう。いつまた悪魔が現れるかも分かんないし」

朝奈は急に態度を変え歩き出した。

「……変な奴」

翠は訝しがったが、たいして深くは考えずにその後を追った。

中央職員用エリア

??? 午後4：35

中央職員用エリアのとある廊下。
薄い茶髪のロングヘアーに藍色のトップス、長いラフそうなズボン、三十代程の外見、どう見ても一般客にしか見えない女性が歩いていた。

何故彼女がこんな所にいるかと言えば、その理由は簡単だ。

今から約五時間前、この紀行園が地獄と化した直後の頃、猛獣ゾーンの悪魔から逃げ切りこの建物へと隠れた彼女だったが、逃げ込んだ場所が悪かったらしく迷ってしまったのだ。

「最悪——」

廊下の天井に付いた、チカチカと点灯を繰り返す蛍光灯の光を見ながら、彼女はぶるつと身震いした。迷った最初の頃はすぐに出れると思っていた彼女だったが、この建物の構造がおかしいのか、歩けば歩くほど余計に迷ってしまっている。もはや外に出たいという気持ちが全く失せるほど彼女は疲れていた。

「さつきから階段を下りてばかりだし、なんでサファリパークの建物にこんなに地下室があるのかねえ……」

そう言いつつも、他に道が無いためそのまま飾り気の無い薄暗い廊下を歩き続けていると、突然前方に大きな扉が見えた。

既にここは職員用エリア内であるため、今更関係者以外立ち入り禁止という札が付いていることは無いが、変わりにその扉には見慣れない文字が書いてあった。英文の下に日本語の訳もある。

D I E S ・ I R A
ディエス・イレ

怒りの日、その日はダビデとシビラの予言の通り、世界が灰燼かいじんに帰す日。

審判者が現れ全てが厳しく裁かれる時、その恐ろしさは計り知れない恐怖をもたらすだろう。

「変なの、隠れた新手の新興宗教かしら？」

彼女は意味が分からず首をかしげた。

多少不気味さを感じてはいたが、迷いに迷ってやっとここまで来たのだ。今更引き返す気にはならない。彼女はそのまま扉を開けた。
「何これ？」

そしてそのまま部屋の異常さに開いた口が塞がらなくなった。

縦に十メートル、横に八メートルほどのこの部屋の中は、壁や床が崩れ、まるで大地震直後のような景色を作っており、中にあった多くの機械や机などはその殆どが原型を留めてはいなかった。一瞬だけ見れば埋立地のようにも見える。悪魔や人間の死体もいくつかあったが、そんなものはここまでの道のりでも何度か目にしているからそれ程気にならない。彼女が大いに驚いたのは天井の大穴だった。まるでそこから何かが上へと上がっていったように、巨大な爪跡が残っている。これほど大きな爪跡を残せる生物なんてとても彼

女には想像が付かない。

「誰だ!？」

驚いている彼女に向かって突然正面から声が聞こえた。

彼女が急いで前を向くと、どこに隠れていたのか、先ほどまで姿の無かった見知らぬ男が立っている。短い白髪と顎鬚、やせ細りくぼんだ頬、下唇の大きな口、汚れただけの白衣、まるで医者のような井出だ。

「あ、私は智崎雅子といいます。悪魔から逃げてる間に迷ってしまった」

彼女、雅子は男の剣幕にしどろもどろに答えた。

「一般客か。いきなり怒鳴って悪かったね。僕は……高橋志郎だ。よろしく」

志郎は安心したようにそう言うと、右手に持っていたナイフを雅子の目に止まらないように腰に挟んだ。

「あの、高橋さん。ここは一体何なんですか？」

「志郎でいいよ。ここはね、極秘の研究所だ。世間には決して公表できないような生物関係のね」

「研究所？」

「多分もう遭遇しているだろうけど、灰色の悪魔みたいな人間を見なかったかい？ ああいう生物の研究だよ」

「え!？ じゃあ、あれはあなたたちが作ったんですか!？」

「……まあ似たようなものだね」

「あなたたちが……あなたたちがこの惨事を引き起こしたのね!」

雅子は志郎を睨みながら後ろに下がっていく。

「おいおい、僕は別に君に何もしないよ。好きでここに居るわけじゃないんだから」

「……ちよつとまって？ あなた、どこかで見たことあると思ったら……もしかしてあの高橋志郎？」

「あのつて言うのが何を指しているのか知らないけど、ES細胞の権威として世界的な章を取っている人間を思い浮かべているのなら、

それは正しいね」

「だいぶ前のニュースで見たわ。あなたは死んだって……」

「この研究所の連中に捕まっていたんだよ。不本意な研究をさせられるためにね」

「……そうだったの」

雅子は驚きと同情が混じったような顔でそう言った。先ほどまでのような警戒心は相手の正体を知ったことで僅かに無くなったようだ。志郎もそれを見逃さなかった。

「智崎さん。僕はこの紀行園から脱出したいと思っている。協力してくれるかい？」

「脱出？ 普通に正面入り口から出れば良いんじゃないの？」

「これだけ死者が出ているのに全く警察が助けにこないんだ。普通に入入り口にいても多分門を開けてはくれないよ」

志郎はため息をついた。

「だから最後の手段を使う。この研究所の連中は研究しているものがものだから、こういった事態にも備えていたはずだ。どこかにきつと秘密の出口があると思う。それを探すんだ。僕もさつきからずっと資料やパソコンを探ってる。君も手を貸してくれ」

志郎の言っていることは嘘の様には思えないし、他に方法も無い以上出来る選択は一つしかない。

「……分かったわ」

雅子はまだ志郎に対する警戒心を解いてはいなかったものの、そう返事をした。

「……う——？」

截は自分の頬を誰かに叩かれた痛みを感じ、目を覚ました。

定まらない視線を動かしそのまま正面を向くと、三人の紺色の軍用戦闘服を着ている人間が目に入る。

「イミュニティー……ん！？」

截は急いで腰のナイフを抜こうとしたが、それはかなわなかった。腕、いやそれだけではない。全身の殆どが硬い紐で、パイプ椅子に括り付けられていたのだ。丁度瓦礫のど真ん中にポツンと置いてある椅子に座っている形になる。

「お目覚めか？」

三人の中心に立っていたオールバックの黒髪の女性が見下すように聞いてきた。その顔は能面のように無表情だ。

「……誰だ？」

截は圧倒的不利なこの状況にも関わらず、冷静にそう言った。

「私はイミュニティー総合監察官、石井春奈だ。お前は誰だ。キツネかと思っただが……違うみたいだな」

「……僕はそのキツネの部下ですよ。一体僕に何の用があつてこんなことを？」

截は目で自分の拘束された体を指した。

「別にお前には何の用も無い。ただ赤鬼が飛び出した跡の瓦礫を捜索していたらお前がのびているのを見つけたただけだ」

「じゃあ、開放してください。僕は高橋志郎とその娘を救出しに來ただけだ。あなたたちとやり合う気はない」

「高橋志郎？ あの有名な博士のことか？ 確か、六角行成が会いたがっていた……どういうことだ。生きていたのか？」

石井は本心から不思議そうに聞いた。

「え？」

——まさか……イミュニティーは博士の生存を知らなかったのか？

截はその事実に驚く。

「……なるほど、ディエス・イレに拉致されていたということか。道理である富山樹海で死体が見つからなかったわけだ」

「恐らくあなたたちの目的はディエス・イレの人間の確保とでしょう？　高橋博士は正式なメンバーじゃない。殆ど組織の秘密を知らない彼なら放つて追いてもいいはずだ」

「確かに私たちの仕事はその推測で合っているが、手柄を前にして放っておくわけがないだろう。高橋志郎が居るのなら、是非にも手に入れるべきだ。六角行成のためにもな」

石井は嘲るように截を見て笑った。

——くそっ！

このままでは不利にしかない。截はそこで芝居を打つことにした。

「……分かった。どうしてもというのなら博士は渡します。変わりにその娘だけは僕に確保させてください。本来はその娘の救出が任務だった。高橋博士の救助は僕にとってもオマケの点数稼ぎに過ぎない。博士から娘救出の代金を頂ければ、僕からは何の文句も無い」
日頃からキツネの嘘や騙し方を見ている截は、俳優顔負けの迫真の演技でそう言った。

「娘だけか。さてどうするかな」

腕を組み何かを考える素振りをする石井。

「石井さん、こいつの話なんて聞く必要な無いですよ。さっさと殺しちまえばいい」

褐色の男がちょっと前に石井に踏みつけられていた腕を擦りながら截を睨む。すると石井は男の耳元に口を近づけ小声で話した。
「この男の実力は確かだ。お前らが二人がかりでやられるほどなんだからな。どうせならその腕を利用させてもらおう」

「利用って、一体何にですか？」

石井の意図が分からないというように小声で聞き返す褐色の男。

「私たちの本当の目的……赤鬼の捕獲にだよ。ディエス・イレの粹

を集めて作られた不死の化け物だ。我々だけで上手くいくとは思えない。なるべく早く捕獲しなければ、あれはこの紀行園の壁を破って逃げてしまうぞ」

「確かに……そうですね」

「それに、さっきの高橋志郎の生存を聞いて確信した。私は個人的にあいつに、キツネについて聞きたいことがある」

「聞きたいこと？」

「お前には関係ない。深く詮索するな」

石井は体を褐色の男から遠ざけると截に向き直った。

「ふふ、運がよかったな、キツネのコピーくん。お前に提案がある」
「何ですか？」

截は緊張した様子で聞く。この石井の言葉によって自分の生死が分かれるからだ。それが分かっているからか、石井は間を大きく溜めてから楽しそうにこう言い放った。

「手を組もう」

中央職員用エリア

最上階 午後5：02

「あんた、大丈夫かい？ もうすぐ紀行園から出られるからね。何とか我慢しておくれ」

大西は涙目で夫、文雄のやせ細った細い顔をさすった。長年閉じ

込められた所為で、文雄の長い灰色の髪は柳のように垂れている。その影響で表情は見えないが、なにやらしきりに唸り声のようなものをあげていた。

「あ——ううう……」

大西はそれを傷の痛みから来るものと判断し、そのまま文雄を椅子の上に休ませると、ゆっくりと立ち上がり後ろを振り返った。

サラリーマンが汗水流して働くような無数のデスクがあるこの部屋の隅で、場違いな作業服の格好をした数人の男が立っている。もちろん大西の部下、つまりディエス・イレの人間だ。

「情報削除は済んだのかい？」

夫に対する顔とは打って変ったような冷酷な瞳で、大西は彼らを見回した。

「はい、全て終わっております。あとはもう脱出するだけです」

スポーツ狩りの男がすぐに返事をする。

「そうかい、良くやった高宮。だが、脱出の前にやっておきたいことがる」

「何でしょうか？」

「あの黒服の若造がああも高橋志郎に固執してたことが気になる。

志郎は赤鬼の製作主任だ。イミュニティーや黒服に渡ってはまずい。奴らの手に渡る前に捕獲するか出来ないならば……殺せ」

「分かりました。あれを使っても良いでしょうか？」

「あれか、どうせ失敗作だ。好きにしる。あ、散布するのなら紀行園中に撒いておけ。時間稼ぎにもなる」

「はい、ではディエス・イレの、いや、『東郷大儀』さんのために」
スポーツ狩りの男、高宮は短く大西にお辞儀をすると駆け出していく。

猛獣ゾーン 午後5:15

「——っ……？」

職員用通路を歩いていた朝奈は、この猛獣ゾーンに差し掛かった途端に何かを感じた。

ノイズ交じりの景色の中、過去に起きたであろうイメージが浮かんでくる。

その映像は最初は薄く、段々とはっきりとしてきた。

ジージャン姿の男が歩いている。猛獣ゾーンの生存者だろうか。一体今までどこに身を伏せていたのか綺麗な汚れの無い身なりをしている。

男は悪魔の影に気をつけながら慎重に先へ先へと進んで行く。どうやら正面出入り口へ向かっているらしい。

男の前に突然黒い影が現れた。

男は悪魔かと焦りながら顔を前に向けたが、すぐに安心するように笑顔になった。影は人間のものだったからだ。

「あんたも生き残りか？」

男は嬉しそうに正面に立っている従業員服の人間に聞く。

するとその人間は無言で近付き、いきなり男を殴り飛ばした。そして倒れた男に馬乗りになる。

「な、何しやる！？」

「これも世直しの為だ。悪く思うな」

作業服の人間は素早く男の腕に何かを注射した。

「はあっ？——がっ！？」

いきなり苦しみ出す男。

作業服の人間はその様子を確認すると飛び下がった。

「こんな状況下でこれを散布するのは初めてだからな。上手くいけばいいが。せめて大西さんが逃げ切るまで時間を稼げいでくれよ」
そのまま祈るように苦しむ男を見つめる。

苦しんでいた男の顎が「バクン！」と裂けた。いや、顎だけではない。首から下、腹筋の間近にまでその裂け目は広がっていく。普通なら大怪我といえる状態だが不思議なことに血液は全く出てはいない。

その裂け目に徐々に白い鮫のような歯が生えてくる。まるで鼻の下から腹の上に大きな口があるようだ。

そうして大きな口が形成されると同時に、男の皮膚はどんどん紫色に変色していき、さらに腹から三本の槍のような触手が飛び出してきた。

「どうやら成功みたいだな。さつさとずらかるか」

作業服の人間はほっとしたように胸を撫で下ろした。

「ジュウウウウッア！」

しかしその瞬間、大口人間とかした男の全身から、タンポポの種のようなふわっとした胞子が無数に周囲に飛散した。それは当然作業服の男の周りにも飛び散る。

「しまった！」

油断していた作業服の男はその胞子を思いっきり吸ってしまった。
「ぐううううう！？」

すぐに強烈な苦しみが全身に走り、目の前の化物同様、口が割れる。

「くそおおお……ジュウアアア！」

そして、作業服の男も大口男と化してしまった。

「どうしたんだ？ いきなり立ち止まって？」

頭を抱えている朝奈を見て、不思議そうに健太が聞いた。

「……何か、この先に変なのが居るみたい」

朝奈は目を開けると、今見た事実を急いで二人に話した。

それを聞いた翠は面倒臭そうに頭を掻く。

「デイエス・イレの生物兵器だな。くそ、あいつら面倒な真似をしやがって……」

「生物兵器？」

朝奈が聞きなれない言葉に聞き返す。

「医療関係の技術にイグマ細胞を使っているイミユニティーと違って、デイエス・イレはテログループだから、兵器としての研究に力を注いでいるんだ。より有効な感染方法、より強い化け物を作ろうとな。今の話から察すると……この先に居る大口男とやはら悪魔と違って、どうやら空気感染能力を持ってるっぽいな。厄介な相手だ」
「でも、ここを通る以上、避けて進むことは出来ないよ。幸い先に情報を得れたんだから、逆にそれを利用しようよ」

「何かいい案があるのか？」

「……見た感じだと、タンポポ孢子をずっと出し続けることは出来ないみたいだった。多分、一度出してから次の孢子を出すまで十秒間くらいの休憩期間があると思う。その隙なら感染しないで倒せるかも」

「十秒間くらいって……まるで悪魔の十秒感染の遠距離版みたいだな」

健太が思いついたように言う。

「それなら何とかなりそうだ。先に知れてよかった。截もそうだと超感覚者ってのはホント役に立つ」

翠はニヤリと笑った。

< 第十章 > ” 狂獅子 ”

< 第十章 > ” 狂獅子 （バアル） ”

猛獣ゾーン

午後 5 : 0 5 （今から 1 0 分前）

ディエス・イレの人間たちは幹部大西の命令で、紀行園のあちこちに大口人間を生み出す為の生物兵器をばら撒いていた。

ばら撒くといっても生存者に注射したり、悪魔化していない動物に注射するだけなのだ。

もちろん、今の紀行園でそう簡単に生存者が見つかる筈も無い。そんな時は彼らは自分自身に注射を打ち込むことで大口人間化し、大西を逃がす為の障害になった。

普通なら考えられない行動だが、彼らにとっては自分の命よりも大西を逃がす、つまりディエス・イレの重要情報をイミュニティーに渡さないことの方が大切だったのだ。

そのおかげで悪魔と比べて数はかなり少ないものの、今紀行園には多くの大口生物が誕生していた。

一般道を我が物顔で悠々と歩いているこのライオンもその仲間だ。このライオンは大口男が放ったタンポポ胞子を吸い込み、感染した。

これだけ聞けば、多くの人間はただの感染ライオンだと考えるだろう。だが実際は違う。

このライオンは大口生物に感染する前に既にイグマ細胞に感染し、悪魔化が進行している途中だった。

通常このような場合はより多く感染していた方の化け物に姿が定着するのだが、このライオンの場合だけは違ったらしい。

体内でイグマ細胞と大口生物の細胞が突然変異により組み合わせり、全く新しい二つの生態機能を持ったハイブリットの化け物となったのだ。

つまりそれは十秒感染能力、タンポポ孢子による空気感染能力の、二つの感染機能を持つていることを意味している。人間からみれば最悪の脅威以外の何者でもない存在だった。

鼻の下からお腹の上にまで開いた巨大な口、わき腹や尻尾の付近から伸びた槍のような無数の触手、そして全身の黄色に近い灰色の皮膚には、タンポポ孢子を出す為の無数の穴が開いており、目は見開かれ瞳が無いかのよう黄色く濁っている。

大きさも通常のライオンの二倍はあるのではないかと思えるような体躯で、まさにおぞましいとしか言えないような外見だった。

今、普通なら遠くから見ることすら避けたいくなるようなこの混合ライオンの前に、突然何かが飛び出した。

「ギユウウオオオ！」

それは三匹のトラの悪魔だった。

いや、それだけではない。

トラの悪魔の後方にはチーターや狼の悪魔など、この猛獣ゾーンの殆どの肉食動物の悪魔が集まっている。どうやら悪魔でも大口生物でもない混合ライオンに、敵対心というか、異質感というか、とにかく自分たちとは別の生物だという感情を抱いているらしい。

「ギユウウオオオオオ！」

大きな威嚇の後にそれらの化け物は一斉に混合ライオンへと飛び掛った。

「じゃあ、いいか。もう一度確認するぞ」

「うん」

翠の言葉に朝奈が頷く。

「朝奈の話から考えると、大口男とやらは十秒間隔で感染能力のあるタンポポ胞子を周囲に射出し、正面には三本の槍のような触手と大きな口が付いている。このことから、真正面から攻撃するのはあまり良い策とは言えない」

翠は一呼吸置く。

「だから奴らを倒すには後ろからの攻撃、なおかつ遠距離からの攻撃が一番効果的だ。けど遠距離攻撃の武器が無い現状だとそれは不可能に近いから、実際の所は十秒の間隔の合間に背後を突くという方法しかない」

「どうやって相手の後ろを取るんだ？」

健太が聞いた。

「囷役に前面を引き付けさせ、その隙に留め役が背後から攻める。このメンバーで言えば、囷が健太、止めが私かな」

「ちょっ——……なんで俺が囷なんだよ。大体朝奈は何もしないのか？」

「朝奈には全体の様子を把握してもらい、司令塔の仕事をしてもらう。これまでの様子から考えると一番朝奈がその役目に適してる」

「お前が囷の方が良いだろ？ 俺は嫌だぜ！？」

「別になんか変わってやってもいいけど、そうしたらお前が十秒感染の胞子の合間を縫って大口男に止めを刺すんだぞ。とても出来るようには見えないな。いや、下手したら敵が一匹増えそうだ」

翠は馬鹿にしたような目で健太を見下した。

「ぐっ……！」

健太は翠のその言葉に何も言えなくなった。

「文句がないならこれで行くぞ。さっさと用意しろ」

「っち、分かったよ」

それから数分後、三人は大口人間の間近まで来た。

「……あれか、本当に朝奈の話の通りだな」

翠は一般道の先を歩いている、二匹の大口男を遠目に見て呟いた。何故彼らが一般道を歩いているのかと言えば、職員用通路をそれ以上先に勧めなくなったからだ。

中央職員用エリアの西口へと繋がる道路に近くにつれ、道は狭まっ
つていき、最終的には行き止まりになっていた。

建物の中を通ればすぐに西口にいけるため、通常わざわざこの職員用通路を通る人間はいない。

恐らく道の開発中に打ち切りになり、西口の壁が作られたのだろう。道が無くなった先は高速道路などでよく目にするような土の壁が急斜面を作っていた。その側面、つまり一般道から見てもそれは同様の常態だ。猛獣ゾーンは他のエリアよりも低い位置にあるため当然の状態と言える。

「じゃあ、行くぜ……！」

健太は包丁を取り出すと、覚悟を決めたようにそう言った。大分この地獄にも慣れてきたのか、土壇場になってやっぱり嫌だと言うような事は無い。

「ジュワッ！」

大口男たちは健太に気がつく、すぐに腹から突き出た触手を伸ばしてきた。大した長さは無いものの、絡みつくようなものではなく先が槍の様に尖っているため、直撃すれば無事では済まないだろう。

「うおっ!？」

健太はバックステップでそれをかわすと、大口男の背を朝奈らに向かせるため、相手を中心にして円を描くように走り出した。

一匹の大口男はまんまと健太の方を向いたものの、何故分かったのか、もう片方は車の陰に隠れている朝奈と翠の方へ向かってきた。
「——っち、役に立たない奴だ」

翠は健太の方を睨んで舌打ちすると、腰から折りたたんだ状態の黒柄刀を取り出し、その刃を伸ばした。

「ちょ、俺はどうすればいいんだ!？」

自分を追ってきた大口男の周囲を逃げ回りながら健太が叫ぶ。

「知るか」

翠は興味なさそうに感情の籠らない機械のような声でそう言っていると自分たちに迫り来る大口男を見上げる。それと同時に朝奈は後ろに下がった。

「ジュアアアア!」

大口男の触手が翠の鼻の頭に当たる。だが翠はその瞬間、手に持った黒柄刀を一薙ぎしてその触手を弾いた。

「こうなったら私がこいつを引き付ける。お前は健太の方へ行け!」

「でも、翠さんは? いくらなんでも正面で戦い続けるのは無理でしょ!？」

「それでも截、キツネのいるチームの後衛を張っているんだ。こんな相手何でもない」

力強く言う翠。

「……気をつけてね……!」

翠の言葉に僅かだけ強がっているような響きを感じたものの、朝奈は大口男の背面へと向かいだした。

大口男は横を通り過ぎようとした朝奈へ触手を伸ばそうとしたが、すぐに翠の黒柄刀に叩き落とされる。その隙に朝奈は大口男の後ろへと回った。

最初に翠を倒した方が良く、僅かにしか機能していない脳みそ

で判断したのか、大口男は朝奈が通り過ぎると同時に翠へ猛烈な触手の攻撃を繰り出してきた。

「ちっ！」

翠はそれを弾いたりかわしたりしながら必死にしのいでいるが、触手の奇妙な動きと三本という数にすぐに手に余るようになっていった。生身の人間がここまで真正面から触手を防げるのはかなり凄い技術だろう。朝奈や健太なら最初の一撃すら恐らく防ぐ術は無い。さすが黒服の人間と言いたい所だが、翠は触手に夢中にあるあまり、あることを見逃していた。そう、大口人間の腕だ。

大口男は翠が触手に気を取られている間に徐々に、徐々にその距離を詰めていき、とうとう翠の目の前まで来ていた。

翠がそれに気づいた頃には既に遅く、大口男の二本の腕は翠の両肩をしっかりと握り締めていた。

「あつ——！」

驚く翠。

身動きを封じられれば、人間など大口男にとって只の食料以外の何者でもない。簡単にその命を奪われてしまう。

しかし、大口男の触手が翠の体を貫くことはなかった。

捕まる直前に翠が黒柄刀をその触手に絡めていたからだ。

「舐めんなよ！」

翠は大口人間の黄色い眼球を、もがきながら強く睨み付けた。

すると今度は大口男の全身に無数の小さな穴が開き始める。タンポポ胞子を出す気なのだ。

身動きの取れない翠にとってこれ以上ない危機と言えるだろう。

「や、やばい！」

翠は咄嗟に黒柄刀を離すと、それを足の裏で思いつきり押し、その勢いで大口男の束縛から離れた。

黒柄刀は触手を巻きつけたまま大口男の口を貫いたが、急所をそれていたらしく、大口男は元氣に行動を継続する。

離れた途端に、周囲には無数の、タンポポの種に似た胞子がばら

撒かれた。遠くから見ても無く、その付近だけ白い霧が掛かったように霞む。

翠は口を押さえ、その胞子の感染範囲の外へと飛び出した。

タンポポ胞子は朝奈の話だと、例え口を押さえても耳や鼻穴の隙間などから侵入してくることが分かっている。

僅かに「感染したか？」と恐怖感が浮かんだが、どうやらそれはギリギリで免れたらしい。翠は黒柄刀を蹴らなかった時のことと思うとゾツとした。

「このタンポポ野郎……！」

自分が殺されかけたことで翠の頭には血が上っていた。武器が大口男に刺さったままだというのに、全く恐れることなく胞子が消えるのを待つ。

「ジュルルル」

胞子が消え、大口男が唸り声をあげたその時には、既に翠は大口男の方へと突撃を始めていた。

「次に胞子を出せるまでのこの十秒間で殺してやる！」

怒りの表情で拾ったばかりの雑誌にライターで火をつけ、大口男の巨大な口内へと投げ入れる。

大口男は突っ込んできた翠に触手をお見舞いする気だったようだが、意表をつかれ見事にそれを啜ってしまった。

痛みと暑さに意識を奪われ一瞬翠のことを忘れる。触手も力なくしなりと垂れた。

翠はその間に大口男の懷まで入ると、ベルトに装備していたシークレットナイフを引き抜き、素早く大口男の眉間に刺した。

大口男の全身からその瞬間に力が抜ける。そう死んだのだ。

「ふう」

翠は黒柄刀を引き抜くと刃を折りたたみ、先ほどの状態で固まっている大口男の頭にまわし蹴りを食らわし吹き飛ばした。既に生命活動をしていなかった相手なのだが、よほど先ほど危機になったことが悔しかったのか、翠は蹴り終わると満足そうに艶やかな笑み

を浮かべた。

一方朝奈と健太は二人で元気に大口男の周囲の道路を走り回っていた。別に鬼ごっこを楽しんでいるわけではない。幾ら動いても大口男の背後に回りこめないために、必然的に走り回るしかなかったのだ。

「はぁ……はぁっ、はぁ……このっアホ、いい加減止まれよ！」

健太が息切れしながら背後の大口男に罵詈雑言を吐く。

朝奈も同じような気持ちを抱きつつ策を練った。

相手を倒すには後ろに回りこむしか方法がないのだ。このまま走り回っていても意味がない。

朝奈はこれまでの悪魔との戦闘経験から、周りの物を利用することが自分のとって一番の武器になることを悟っていた。

「何か……何か無いの……！？」

走りながら周囲を探索する。

だが、ある物といえば道端にあるスクラップの車や、人の死体とその荷物ぐらいなものだ。とても利用できるとは思えない。

如果说ええば、あとは歩行者ゾーンを囲っている半円柱状の柵くらいだろうか。

「ここにあるのものと、柵を利用するしかないか」

苦肉の策を思いついた朝奈は、健太と大口人間を柵の方へと走りながら誘導していく。

「おい！？」

朝奈の考えが分からない健太は、何考えてんだというように朝奈の方を見た。

「――上に上がって！」

朝奈は間近で聞こえた健太の声に煩そうに片耳を押さえると、柵を走ってきた勢いで上りだす。

赤鬼の時のように反対側に降りるつもりだと思った健太は、納得したように自分も登った。

しかし頂上に差し掛かった所で朝奈はまだ上っている健太に構わず職員用通路の方、ではなく元の一般道の方へと飛び降りた。丁度健太と大口人間を空中で跨いだ感じた。

「はあっ！？」

健太は朝奈の意図がさらに分からなくなり、柵の上で固まっている。その健太に大口人間は好機とばかりに触手を伸ばしてきた。

「うわわっ！」

網目に引っ掛けている足の付近に突然触手が迫って来たため、健太は仕方がなく頂上まで慌てて上った。

「俺を囷にして逃げやがったのか！？」

健太の頭にそういった考えが浮かぶ。

尚も迫ってくる大口男の触手。

健太は柵の頂上から急いで職員用通路の方へと降りようとした。

走り回っていた途中に何度かタンポポ胞子の飛散があったが、最後の飛散からもう十秒以上経っている。大口男は出そうと思えばいつでもタンポポ胞子を発射できた。

飛び降りようとする健太を逃がさないために、全身の穴を広げ胞子発射の準備をする。そして、一気にその穴々に力を込めた。

「畜生！」

健太は大口男のその動きを見て感染すると思い目を伏せた。

しかし、何故かタンポポ胞子は発射されない。

健太が目を開けると大口男はがっくりと崩れ落ちていた。

「大丈夫？」

大口男の後頭部からナイフを引き抜いた朝奈が心配そうに聞く。

「はぁ、俺を囷にして逃げたのかと思っただぞ」

「囧にはしたよ。だってそうしないとこれの背後に回れないじゃん」
「それはそうだろうけどさ、事前に教えるよ。俺マジで死ぬかと思
ったんだからな」

「はは、健太さんて臆病だね」

「笑うな！」

楽しそうに笑う朝奈を健太が怒鳴りつけた。

「ガオオオオオウウウ！」

「！？」

突然聞こえた恐ろしい鳴き声に、健太と朝奈は驚いて柵の上から
落ちた。一般道に背中を強く打ち付ける。

「な、何だ今の声！？ 赤鬼か？」

背中を摩りながら、健太は道の先へ視線を移動させた。

停車している車や道がカーブしている所為で全く何が起きている
のか分からないが、それ程離れた場所ではないようだ。

二人が心配そうに遠くを見ていると、翠が後ろから歩いてきた。

「今の声は何だ？」

「分からない。ここからは様子が見えないから」

朝奈が問いに答える。

「……行ってみよう。何が居ようとどっち道この先へは行かない
といけないんだ」

翠は緊張した顔つきでそう言った。

三人はその光景を見た瞬間、ここに来たことを後悔した。

無数の猛獣悪魔の死体の山頂に、夕日をバックにして一匹の生物が立っているのを目にしたからだ。

そう、それはあの混合ライオンだった。

数多くの猛獣悪魔との戦闘の後にも関わらず、殆ど無傷の状態で美味しそうに何かを食べている。

「……おい、何だあの大口ライオンは……？」

「虎を食べてる……！」

健太と朝奈は混合ライオンの発する気配に気おされ呆然とした。

唯一冷静さを失わなかった翠は、冷や汗を流しながら二人に呼びかける。

「……一端戻るぞ。あれは赤鬼ほどじゃないけどかなりまずい相手だ。何の準備もしていない状態で戦っても勝てない」

「そ、そうだね。戻ろう……！」

朝奈が頷いたその時だった。

混合ライオンの頭がグルンとこちらを向いた。

朝奈、翠、健太の視線と混合ライオンの視線がしばし交差する。

「ガオオオオオオオオ！」

三人は一目散に逃げ出した。

混合ライオンはどんどん距離を詰めてくる。

「くそっ、截のバイクをフリーゾーンに置いて来るんじゃないかった
！」

翠が今更なことを言った。

「だから猛獣ゾーンには来たくないって言ったんだ！」

「健太さん耳元で煩い！」

叫ぶ健太に朝奈が怒鳴り返す。

「はぁ、はぁ……勘弁してくれって、嘘!？」

健太が走りながら追っ手を振り返ると、目の前に鬣をなびかせた、顎から胸に掛けて大きな口を開いた混合ライオンの顔があった。

まさに目と鼻の先といった距離だ。

「避けるっ！」

刹那、翠が大声で叫ぶ。

朝奈は道路の歩行者ゾーン側に、翠と健太は草原側にそれぞれ身を転がした。

混合ライオンは僅かに進んだ所で体を反転させると、一番近かった朝奈のほうへ視線を向ける。

「な!？」

当然、朝奈は恐怖した。

そのまま混合ライオンは朝奈に向かって跳躍し、その鋭い爪を振り下ろす。

朝奈の後ろの柵は今の混合ライオンの一撃で大きく繰り裂かれ、垂れ幕のように隙間を作った。

「ぎゃあっ!?!？」

間一髪でそれをかわしたものの、朝奈は混合ライオンの体に押され歩行者ゾーンの中へと倒れるように入ってしまう。

「まずい!」

それを見た翠は舌打ちし、朝奈と混合ライオンの方へ駆け出した。赤鬼や混合ライオンならいざ知らず、朝奈がああ柵を自力で破れるわけが無い。それはつまり朝奈が歩行者ゾーンという名の、逃げ場のない檻の中に閉じ込められてしまったことを意味していた。

朝奈の後を追うように自然と混合ライオンもその中へ入ってくる。

「ちよつと……何でこんな……!？」

朝奈は逃げ場のない現状にパニックを起こしながら、混合ライオンと反対の方向へ走り出した。

「ガウウウオオオオ!」

混合ライオンは当然その後を追ってくる。

それは絶望的な出来レースが始まった瞬間だった。

半円柱状の歩行者ゾーンという名の檻の中を、必死に逃げ惑う朝奈。

汗は滝のように流れ、服は崩れ、足腰が悲鳴をあげる。それでも立ち止まることは出来ない。

止まることは死に直結しているのだから。

「朝奈、フリーゾーンまで何とか逃げろ、あそこまで行けば柵の中から出れる！」

翠は朝奈と並走するように一般道を走りながら叫んだ。

「ふ、フリーゾーン！？　そこまで持つわけないじゃん！」

「その柵の中なら狭すぎてライオンも速く走れない筈だ、頑張れ！」
「頑張れっつ——……」

朝奈は抗議しようとしたが、翠の姿はいつの間にか消えていた。
「もう！」

泣きたくなったが、仕方がなく朝奈は走り続けた。

「ガウオオオオオ！」

混合ライオンは触手や鬣を柵のあちらこちらに引っ掛けながら、目の前を逃げる朝奈を追いかける。

その距離は僅か五メートルほどしかなかったが、翠の予測通り狭さが邪魔し、中々縮まることはなかった。

だがそれはあくまで今の状態だ。

朝奈は限界が近づいていた。

体力、精神あらゆる面での疲労が溜まっている。

今はまだ混合ライオンとの距離を維持できているものの、あと数分後にはどうなっているか分からない。

——何か手を打たないと！

朝奈がそう考えるのは当然の結果だった。

この状態では混合ライオンを倒すことは無理だ。だとしたら何とかして動きを止めるか、遅らせるしかない。

しかし一般道ならまだしも、何もないこの歩行ゾーンではそれすらも難しい仕事だろう。敢えてあるものを言えば人間の死体くらいなものだ。

「——っどうすればいいの！？」

打つ手がない状況に朝奈は愕然とした。

「あっ！？」

考え事をしていた所為で、死体の一つに足を取られ転んでしまう。それを見た混合ライオンは一気に朝奈に飛び掛った。

「うあああつ！」

朝奈は振り下ろされた混合ライオンの爪を、死体を前に押し出すことで防いだ。致命傷は避けれたがそれでも掠った肩に赤い三本の線が浮かび上がり、血を滴らせる。

混合ライオンはすかさず、今度は逆の手を朝奈に振り下ろした。

「朝奈！」

その一撃が命中する直前、一本の包丁が混合ライオンの尻を貫き動きを止めた。

「健太さん！？」

声の主に気づき驚く朝奈。

「今だ、逃げろ！」

「うん！」

朝奈は立ち上がると、再び混合ライオンから離れるように走り出した。

「ガウウウウウウ！」

混合ライオンは後ろを振り返ろうとしたが狭い柵の中の所為でそれは出来なかった。

その姿を見てほっと胸を撫で下ろす健太。どうやら翠の考えが合っていたことを知って安心したらしい。

それが命取りだった。

混合ライオンは尻尾の周囲から槍のような触手を突き出すと、その全てを健太目掛けて射出したのだ。

三本の触手は全て健太の体に命中した。

一本目は右足に、二本目は横腹に、三本目は肩に、それぞれ突き刺さった。

「うぐうあああああ！」

あまりの痛みに大声で叫ぶ健太。反射的に涙すら浮かんでいる。その声は数十メートル先の朝奈にも聞こえていた。

ただ事ではないその様子に立ち止まる朝奈。

背後に全く混合ライオンの気配が無いことと、今の健太の声を聞いて嫌な予感が頭に走る。

場所は丁度フリーゾーンの入口の目の前までできていたのだが、あんな声を聞いてしまつては先へ進むことなど出来ない。朝奈は引き返そうとした。

だがその瞬間にカーブから混合ライオンの姿が現れた。
何があつたのかは知らないが尻尾の周囲が赤く汚れている。
その色は嫌に不吉なものに見えた。

「乗れ！」

フリーゾーンに朝奈が到着すると同時に、いつの間に追い越していたのか、翠が目の前にバイクをつけ叫んだ。

朝奈が翠の細い腰を掴むと、追つて来ていた混合ライオンが丁度歩行ゾーンの柵から飛び出す。

「くそっ！」

翠は急いでアクセルを入れた。

タイヤが急回転し地面を蹴る。

唸るエンジンが生き物のように聞こえる。

バイクが発進するとすぐに混合ライオンも後に続く。

翠と朝奈を乗せたバイクは加速し、猛獣ゾーンへと一般道を戻り始めた。

「健太さんは……？」

「後だ」

気になつて仕様がなかったことを聞いた朝奈を、翠はあっさりと切り捨てた。

「くそ、やっぱりついて来るな。朝奈、しっかり掴まれよ、全速を出すから！」

「え、全速って！？ 確かこのバイクってレース用——」

翠はアクセルを全開にした。

「きやあああああ——！」

いきなり強いGが掛かり、朝奈は振り落とされそうになったが、何とか腕に力を込め翠にしがみ付いた。

「ガウウオオオオ！」

既に時速七十キロは出てると思われるスピードにも関わらず、混合ライオンもしっかりと後に続いている。

「くそ、車が邪魔だ！」

翠は一般道のあちらこちらに停車している車に邪魔され思うように速度を上げられない。本来なら時速二百キロ以上の出力を持つこのバイクの性能も、今は発揮することが出来なかった。

バイクは猛獣ゾーンを通り過ぎ、草食獣ゾーンへと差し掛かっている。ゾーンの区切りの門は全て開いているため、問題なくバイクはエリア移動した。

「翠さん、真後ろに來てる！」

「分かってるよ！」

翠は混合ライオンが真後ろに來た瞬間、ハンドルを切り、目の前の車を避けた。車と混合ライオンを衝突させようとしたのだ。

「幾らあの化け物でも、この速度で車に当たれば無事では済まないはず……」

しかしその考えは無残にも、すぐに間違いだと気づかされた。

混合ライオンは確かに車と衝突したが、一向に止まることなく車を吹き飛ばし続走した。ただ、やはりダメージはあるのかその額からは血が流れている。

その姿を朝奈はサイドミラーから目撃した。

「翠さん、もしかしたら今と同じこと何度か続ければ、ライオンを止められるかもしれない」

「簡単に言ってくれるな。こっちも命がけなんだぞ？」

翠は溜息をついたが、朝奈の意見には賛成なのか三十センチほど先の車に向かってバイクを傾けた。

その軌跡を追うように混合ライオンも同じ道筋を走り出す。

バイクが曲がる、混合ライオンが衝突する、車が吹き飛ぶ、混合ライオンの頭から流血する。

その繰り返しだ。

何度か繰り返し返すと、さすがにダメージが溜まったのか、混合ライオンの動きも鈍くなってきた。

「おい、大分あいつも遅くなってきたやな。逃げ切れそうだなぞ」
翠が嬉しそうに言う。

「でも、何か様子が変じゃない？」

朝奈は心配そうに後ろを振り返った。

「ガールルルウウウ……」

混合ライオンは低い声で唸ると、突然姿を消した。走るのを止めたのだ。

「諦めたのか……？」

翠が怪訝そうに速度を落としてミラーから背後を確認する。

「あれほどしつこく追ってきたのに、簡単に諦めるとは思えないけど……」

「まあ、何はともあれチャンスには違いない。今の内に健太を回収して中央職員エリアへ入ろう」

「うん」

二人はそのまま何事も無く猛獣ゾーンへ戻ってきた。

左右が壁に囲まれた中央職員エリアへ続く道の入り口が見えてくる。

「ガアアアアアア！」

その瞬間、横からいきなり混合ライオンが飛び出してきた。中央

エリアを飛び越えてショートカットしたらしい。

「なっ！？」

予想だになかった事態に驚く二人。

混合ライオンが道の先を塞ぐように立っているため、翠は咄嗟にバイクを倒しブレーキを踏んだ。

高い音が鳴り響き、タイヤと地面が火花を打つ。

バイクは二人を振り落とし、しばらく滑ると歩行ゾーンの柵にめり込んだ。

そのまま二人は転がるように地面に体を打ちつけ、混合ライオンの目の前で止まった。

「うああ……！」

全身の痛みと眼前に立っている混合ライオンの恐怖に、頭の中が真っ白になる朝奈。

足元に大量の混合ライオンの涎が滴っている。

自分は食われるんだ。

朝奈は直感でそう感じた。

「く……あつ……！」

荒い吐息しか漏れない。

翠は混合ライオンの口が朝奈に近づいているのを理解していたが、全身の痛みとバイクから振り下ろされた時の衝撃が抜け気つていないため、体中がしびれ動けなかった。

「はあ、はあ……！」

匍匐前進のような格好で、朝奈は無意識の中に混合ライオンから遠ざかるうとした。

しかし、朝奈の前方に大きな足が下ろされ道の先が塞がれる。もちろん混合ライオンのものだ。

朝奈が上を向くと、腹の上まで裂けた大きな口、黄色い歯、腹から突き出たうねうねと唸る無数の触手が目に入る。

そのあまりのグロテスクさに、生理的な不快感、吐き気、いや、嫌悪感を朝奈は抱いた。

そして、その嫌悪感の塊は朝奈に覆いかぶさるように口を近づけてくる。

「いや、翠さん！」

朝奈は三メートルほど横に倒れている翠の方を見たが、自分同様に動けそうに無い。

徐々に視界が暗くなってくる。

——誰か助けて、翠さん、截さん！

朝奈の頭は混合ライオンの口に包まれた。

バキューンッ！

銃声が鳴り響いた。

口真似でもスピーカーからでもない。本物の銃声だ。

「ガオオオアアア！？」

どうやらその弾丸は混合ライオンの左の瞳を貫いたらしい。朝奈は頭がすっぽりと多い尽くされたと思った瞬間、突然混合ライオンが苦しみながら顔を離したことに驚いた。

誰が銃を使ったのかは知らないが、このチャンスを逃す手はない。しびれる体を何とか起こし、混合ライオンの下から抜け出す。その際に混合ライオンの顔が良く見えた。

片目には小さな注射器、いや麻酔銃の銃弾が刺さっている。猛獣が逃げ出した時などに備えてあったものだろうか。

バキューーン！！

再び鳴り響く銃声。

「起きろ！」

朝奈は同じように起き上がっていた翠に肩を無理やり組まれ、二人三脚のように、一般道をフリーゾーン方向に走り出した。

真後ろでは眉間にさらにもう一本の麻酔弾が刺さり苦しんでいる

混合ライオンが見える。その体は小さな無数の穴が浮き出ている。

「急げ、タンポポ胞子が来るぞ！」

その穴を見て翠は怯えたように叫んだ。

ぶわつと広がる霞のような胞子。その範囲は一般的な大口男の比ではない。半径十メートル近い、かなりの広範囲だ。

「……っ！」

朝奈は体中の痛みを無視し、全速力で前にダイブした。

そしてその直後、数十センチメートル後ろが白く染まる。もちろんタンポポ胞子だ。

「大丈夫！？ 早くこっちに！」

翠と朝奈が立ち上がるよりも早く、目の前に突然手が刺し伸ばされた。二人が顔を上げると知らない女性と男性が立っている。

女性の方はモデルのような高い背にスリムな体系、きりりとした男のような目つき。そして女性としてはかなり短めのショートヘアといった井出立ちで、男性の方は飼育員の服装に坊主頭でつぶらな瞳といった井出立ちだ。

朝奈と翠は二人の手を借りて立ち上がると、一緒に走り出した。

「もう一発！」

男性が麻酔銃を構え混合ライオンに三発目の弾丸を命中させる。

「三上、もういいから行くよ！」

女性が尚も迎撃をしようとする男性、三上を呆れながら止めた。

「ガウルルル……」

混合ライオンは度重なる車との衝突のダメージと、三発の麻酔銃の所為で大分その速度を落としたものの、尚も執拗に四人を追いかけてくる。

「早く中央職員用エリアへ！」

「分かってる！」

朝奈の呟きに女性はイラだった様子で答えた。

左右が壁で囲まれた中央エリアへの道に入り、一直線に走り続ける四人。

だが、幾ら混合ライオンが弱っているとはいえ、流石に逃げ切れることは出来なかった。混合ライオンは 中央エリア直行道路の中腹ほどで四人に追いついたのだ。

「くそ、おとなしく寝てろよ!」

三上が麻酔銃を掲げながら叫ぶ。

その弾が発射されるよりも早く混合ライオンは三上を片腕で吹き飛ばした。

「おぐふああ!??」

道路の壁に叩きつけられる三上。死んではいないが気を失ったようだ。

「逃げるのは無理だ。ここで殺るしかない……!」

それを見た翠は女性の肩を振りほどくと、腰から黒柄刀抜き、刃を伸ばした。まだ痺れは完全に抜けきつてはいないものの、ある程度動けるくらいには回復したらしい。

「殺るって——あんな化け物相手に勝てるわけ無いでしょ、何考えてんのよ!??」

「煩い、下がってろ」

驚く女性を翠は無理やぐいつと後ろに押しやった。

「朝奈、何か良い案は無い?」

そのまま横で何かを考えるように立っている朝奈に顔の向きを変える。

朝奈は翠の覚悟を理解し、周囲を見渡した。

職員用道路の所為か、先ほどの歩行者ゾーンよりも何も無い。本当にただ左右に壁があるだけの場所だ。

何も答える事が出来ない朝奈。

「……そうか。私が時間を稼いでいる間に何か思いつけよ。出来ない」と父親に合えずにお別れだ」

そう言つと、唸りながらこちらに近づいてくる混合ライオンに翠は向き直った。

「截の馬鹿……私、先に死にそうだぞ」

混合ライオンの醜い頭を睨みつけながら、翠は誰にも聞こえないような声でボソツと呟いた。

「ガオオオオオオオオオ！」

決着を着ける前のライバル同士があげる雄叫び、そんな大声を出しながら、混合ライオンは地面を強く蹴った。

狙いはもちろん眼前の翠だ。

振り下ろされる足を何とかかわし、翠は混合ライオンの真下へ飛び込む。

死角からの攻撃を狙ったのだ。

しかし翠が黒柄刀を突き上げようとすると、混合ライオンのわき腹から飛び出した無数の触手が妨害を初め、どうしても防戦一方になってしまう。

「くそっ！」

仕方が無く下からの攻撃を諦めると、翠は再び相手の正面へと飛び出した。

翠が身を削りながら辛うじて攻撃を避けている様子を見ながら、朝奈は流行る気持ちを抑えて必死に考えを巡らした。

幾ら翠が凄腕といっても人間の数倍の筋力、体力をもつ化け物の攻撃を真正面から避け続けることなど出来るわけが無い。もっても数十秒だ。実際翠の服装や体は刻一刻とボロボロになっていっている。

「何か、何か無いの!？」

どれだけ頭を酷使しようとも何も浮かばない。朝奈は焦りに焦った。

後ろに逃げてもすぐに追いつかれることは目に見えているし、正面からこのまま戦っても勝てる気がしない。ということは何かを利用するしかないのだが、周囲には壁以外の何物も存在しない。

この残り僅かな時間で現状の打開策を練るのは、ゴリラに空を飛べと言っているようなものだ。

「何か……」

朝奈は何度もこのセリフを繰り返しながら周囲を見続けた。

一緒に立っていた女性から見てその様子は半狂乱にも見える。

「落ち着いて、焦っても何にもならないでしょ」

落ち着ける訳が無いことは分かっていたが、少しでも朝奈をリラックスさせる為に女性はそう言った。

朝奈が女性の顔を見ると自分も危険な状態にも関わらず心配そうにこちらを見ていることが分かる。

「……うん」

その女性の言葉に僅かに冷静さを取り戻した朝奈は、一度深呼吸をしてから再び周囲を良く見てみた。

目の前には翠と混合ライオン。遙か後ろには中央職員エリアの入り口。左右にはコンクリートの壁。

「ん？」

先ほどは分からなかったが、朝奈は右の壁の前に三つの白い袋のようなものがリアカーの上に置いてあることに気がついた。

急いで駆け寄って見てみると、養分補給用肥料と書かれている。

「これだ！」

朝奈はそれを見てピンと来た。

「こつちに来てください！ え〜と……」

「もとみか本美香よ。どうしたの？」

女性、本は怪訝そうな顔で近寄ってくる。

「これで助かるかもしれません。手伝ってください！」

何故こんなもので助かることになるのか理解不能だったが、本は朝奈の切羽詰った様子を見て文句を言わず頷いた。

「分かったわ」

黒服は破け、白い肌は裂け、傷だらけになりながらも翠は必死に混合ライオンの攻撃を避けていた。

いつの間にかシニランに結んでいた黒髪は解け、長い綺麗なその

全容を風に靡かせている。

「はあ、はあ……さすがにもう限界だ……」

翠は自分たちの死を悟った。

「翠さん、下がって！」

だが、突然朝奈の声が聞こえ、翠は咄嗟に後ろに飛びのき、混合ライオンの爪をかわした。

それと同時に朝奈と本が、肥料の詰まった袋を混合ライオンに投げる。

「ガアアア！？」

しかしそれは難なく爪によって切り裂かれ、無残にも中身の粉を周囲に撒き散らした。

「ああ、失敗した！」

本が残念そうに叫ぶ。

「うっん、これで良いの！」

だが朝奈は笑顔でそう言った。その手にはライターとポケットティッシュが握られている。

翠がある程度離れたのを確認すると、朝奈はポケットティッシュに火をつけそれを思いっきり混合ライオンの方へと投げた。

「伏せて！」

同時に大声で翠と本に呼びかける。

瞬間、何の前触れも無く大爆発が起き、あたり一面は火に包まれた。

「ガオオオオアアアアー！？」

巨大な火球のような形の炎に包まれ、混合ライオンはたまらず悲痛な声で泣叫ぶ。

「な、何なのよ！？」

本は訳が分からず呆然とした。

「粉塵爆発だよ。あの肥料可燃性って書いてあったから」

「粉塵爆発？」

朝奈の言葉を聞き返す本。

「空気中に浮遊している、小麦粉みたいな可燃性の粉に引火して爆発を引き起こす現象のこと」

「よく思いついたわね」

感心するように本は息を吐いた。

辺りの壁や地面一帯を破壊しながら転がり回り、振動を起こしている混合ライオン。

しばらくそれが続くと突然動きを止め静かになった。

「殺せたのか？」

二人には一切構わず、翠は息も絶え絶えの様子で立ち上る炎を見つめ呟いた。長い黒髪が炎の火を浴びて美しい艶を放っている。

混合ライオンは全く動かずに道路に寝転がっていた。

その前足は吹き飛び、前進の皮膚も黒くこげ、どうやら完全に死んだらしい。爆発の直前に僅かにタンポポ胞子を出していたのが粉塵爆発の効果を上げたようだ。

「これでようやく父親に合えそうだな」

「……そうだね」

翠の言葉に朝奈は神妙な表情で頷いた。

<第十一章>中央エリア

<第十一章>”中央エリア”

「早く、急いで！」

朝奈は自分の後方を走る面々に呼びかけた。

「急かすなよ、こんな状態で早く走れるわけ無いだろ！」

それに対し、三上がイラだった様子で答える。

現在の彼らの居場所は中央職員用エリアの中、つまり屋内だ。翠、三上、本が二本の太い枝と上着で作った簡易タンカーに健太を乗せ運び、朝奈は治療場所を探している。

混合ライオンとの戦闘後に健太を見つけた彼らは、そのあまりの凄惨な姿に慌てて彼を中央エリアへと運び出した。

右足、左の脇腹、右肩。

健太が混合ライオンに貫かれたこの場所は、大量の血液を今この瞬間も無造作に垂れ流している。

まさに一刻を争う状態だ。

「あつた、あそこ！」

朝奈はロビーから右にある廊下の突き当たりに、医療室と書かれたプレートを発見した。

「急ぐぞ、これ以上の出血は流石にまずい」

健太の青く薄くなった顔色を見ながら、翠が急かす。

医療室につくとすぐに健太の治療が始まった。

幸いにも今この場所には微かとはいえ、医療の知識を持っている人間が三人いる。朝奈、翠、三上だ。

朝奈は父志郎の影響、翠は黒服で学んだ知識、三上は飼育員としての経験から、それなりの対処法は知っている。

誰が何を言うとも無く、朝奈はお湯を沸かしに行き、翠は針やら

包帯やらを取り出した。

「これは……助かりそうに無いぜ……」

健太の体をベットに押さえつけると、その傷の凄まじさに思わず声が漏れる三上。

「黙って押さええてろ！」

翠は三上に一喝すると、熱湯で消毒した針と糸で健太の傷を縫い始めた。

「くそつ、深いな……！」

「はぁ……はぁ、くつ……がぁ！」

翠の腕が動く度に健太の口から辛そうな喘ぎ声が発せられ、体が大きく跳ね上がる。その度に、三上と本は健太を固定しなければならず、苦勞した。

「健太さん、頑張つて！」

次第に熱を失っていく体温を掴んだ手から感じ、朝奈は半泣きになって健太に呼びかけた。

青白い健太のその顔は大粒の汗が流れ落ち、唇もこれでもかというくらい紫色になっている。まるで既に死人であるかのようだ。

しばらくして翠は作業をしていた手を止めた。朝奈が不思議そうに顔を向けると黙って首を左右に振る。もう助けられないということらしい。

「そんな、まだ生きてるのに!？」

朝奈は翠に食って掛かろうとしたが、どこからそんな力が出たのか、健太が腕を強く引いたためベットに覆いかぶさるように転んでしまった。

自然と健太の顔が目の前に来る。

「健太さん……」

朝奈は潤んだ目で健太の顔を見た。

「そんな顔で見るなよ。惚れちゃうぞ」

朝奈の顔を見て、健太はふざけるように力なく微笑んだ。

「健太さんには雅子さんって言う彼女がいるでしょ？」

「ああ、そうだな。……結局、合えなかったけど。あいつまだ生きていてくれるかな。あの世で再開なんて嬉しくないし」

「健太さんの恋人だもん、簡単に死ぬわけ無いじゃん。きっとこの建物のどこかに隠れてるよ」

「……朝奈、俺が死んだら代わりにあいつを探してくれよ。約束してくれ……あいつは俺の全てなんだ」

健太は朝奈の腕を一層強く掴みそう言った。死にかけているにも拘らず、その言葉を放った瞬間だけは目が力強く光った。

「頼む」

神頼みのように言う健太。

朝奈はその健太の思いを満足させるために、強く手を握り返ししつかりと答えた。

「心配しないで。必ず……必ず雅子さんを見つけてあげるから。絶対に見つかる前に逃げたりしない」

「ありがとう……朝奈……」

満足そうに微笑んだ健太の目から、どんどん光が抜けていく。まるで先ほどの強い眼差しが嘘のようだ。

「健太さん……！」

「雅子に、伝えてくれ。こんなこと、人前で言うのは抵抗あるけど……」

朝奈はそれを聞いてしまったらもう最後ののような気がした。

もうこれ以上健太と話すことは出来ない。

生きている顔を見ることが出来ない。

これに答えてしまったら、本当に健太が死んでしまう気がする。

だから朝奈はそれに応じることはなかった。

しかし健太は構わずに言葉を続ける。

「愛して、るって……」

途端に朝奈を掴んでいた健太の手から力が抜けた。暖かかった腕が冷たい感触に変化する。

まるでゴム人形のように。

初めから生きていなかったように。

自然すぎるほどあっさりと、健太の手は朝奈の手からすべり落ちた。

「健太さん……」

自分の手の平の空虚感を噛み締めながら、朝奈は静かに瞼を濡らした。

中央職員エリア、監視カメラ室。

今建物に入ってきたばかりの五人を見て、大西は人間離れた怒りの表情を浮かべた。

「あの小娘……まだ生きてたのかい。てっきり赤鬼に殺されたと思ってたのに」

「もう時間も無い。急がなければ脱出用通路が爆破時刻に達してしまいますよ。この際、あんな一般人は放って置きましょう」

スポーツ狩りの男、高宮が言った。

「いや、駄目よ。不穏な分子は排除するに越したことは無いわ。高宮、あんが残った仲間を連れてこの建物を死守しなさい。あいつらがここに來たつてことは、イミユニティーの奴らもそのうち來るからね。脱出はあたしと夫の文雄だけでいい」

「……分かりました。赤鬼はどうしますか？ あれは——……」

「この際しようがないわ。あれはイミユニティーにくれてやるわよ。なに、後で取り返せばいいでしょ」

「本気で言っているんですか、赤鬼を失うことはディエス・イレの存続そのものにも関わって來るんですよ!？」

「ふふん、あんたら下っ端は命令さえ聞いていればいいの。わたしから幹部の言うことに逆らうんじゃないよ」

脅すように大西は高宮を睨んだ。

「……残ったメンバー全てに大口化用の注射器を持たせ、建物中に待機させます。あなたと文雄さんはすぐに逃げてください」

「それでいい。じゃあ、後は頼んだわね。行くわよ、あんた」

大西は涎を垂れ流しながら上を見つめている文雄を担ぐと、我が物顔で部屋を出て行った。

その姿を見送ると、高宮は唾を飛ばすように呟く。

表情は先ほどまでのような商売笑顔とは違い、憎しみに満ちていた。

「あんたの考えは分かっている。東郷大儀さんの手からディエス・イレを乗っ取る気なんだろ。そんなことさせてたまるか。俺たちはあんたに忠誠を誓ったんじゃない。東郷さんのためにこの組織にいるんだ」

憎々しげに扉を睨みつけると、高宮は携帯電話を取り出した。

「……あ、鳥島さん、実は———と言う事で……はい、そうです。よろしくお願いします」

短く何かを頼むと、高宮は素早く電話を切ってほくそえんだ。

「これで赤鬼は大丈夫だ。あとは大西の処理だが……まあ、文雄の様子を見れば問題はないな。あの馬鹿女の驚く顔が目につく。はははっ！」

気が狂ったように大きく叫ぶと、高宮は監視カメラに向き直った。そこには医療室の面々が映っている。

「さて、命令は命令だ。どうせもう逃げられないし、俺の最後の仕事をしようか」

高宮は画面の朝奈を見つめた。

医療室の中は暗いムードで包まれていた。

ベットに横たわる健太の亡骸。

それに多い尽くすように身を伏せている朝奈。

神妙な顔つきで朝奈を見守る本と三上。

いつまでもベットから離れようとしないうちに朝奈たちに痺れを切らした翠は、眉間に皺を寄せて彼らに呼びかけた。

「おい、もう行くぞ。そいつは死んだんだ。いい加減離れろ」

しかし朝奈は離れない。黙ったまま翠の言葉が聞こえないかのように、じつとベットのシーツを掴んでいる。

「この……！」

頭に血が上った翠は朝奈の首本を掴むと、思いつきり引つ張った。当然、朝奈は医療室の床に倒れこんでしまう。

「さっさと行くぞ。誰の為に高橋志郎を探していると思ってる」

倒れこんだ朝奈に謝ることも無く、怒鳴りつける翠。

「翠さんには私の気持ちなんて分からないよ」

「ああ、分かんないな」

「私の所為で、何人もの人が死んじゃった。小林さん、美智子さん、フリーゾーンの人たち……それに健太さんまで。みんな私の所為で……」

朝奈の目は再び潤み出した。

「そんな感情なんか捨てろ、少し前にも言っただろ。優しさなんて幻だ。健太や美智子はあるたのことを本心から思っていたわけじゃないし、あんたのその悲しみも只の自己満足だよ」

「私を助けようとして死んだんだよ？ 何でそんなことが言えるの……！？」

朝奈は顔を上げ、濡れた目で翠を睨んだ。

確かに自分は罪悪感からフリーゾーンの人たちを助けようとした。しかしそれだけかと言えはそうでもない。助けたい気持ち、死んで欲しくない気持ちもあった。決して建前であんな行動を取ったわけではない。その気持ちは健太も小林でも一緒だったはずだ。

「翠さんは……偏ってるよ。どうしてそんな風に考えるようになったのか知らないけど、優しさは幻なんかじゃない。それは科学的に見ればいろんな言い方は出来るよ。翠さんが言っていたように罪悪感、共感恐怖とか……。でも、それはあくまで一つの見方でしかないんだよ。私は本心からあの人たちを助けたいと思った。健太さんも、きつと私を助けようとした時同じ気持ちだったと思う」

「自己満足だな。他人のことを考えていると思っけていても、結局は自分のことしか考えてないんだ。無意識の内に自分の損得を計算してる。それが人間ってものだよ」

「私はそうは思わない。善悪にしろ感情にしろそういう風に二分化したくない。確かに翠さんの言っているようなこともあるかもしれない。でも、それだけじゃない。感情ってガラスの上に置いた水滴みたいなものだと思う。どこかに偏っても別のどこかにも広がっている。例え罪悪感からの行動でもちゃんとそこには優しさがあるんだよ。どれほど化学的に感情を分析しようとも、それを感じた本人が優しさと思っけていればそれは優しさなんだと思う」

自分なりに思うことがあつたらしい。この言葉を聞いた途端、翠は僅かに動揺した。

だがそのまま納得するのが嫌なのか唇を尖らせて言い返した。

「……やっぱり自己満足じゃないか」

「そうだね」

朝奈は涙を拭い微笑んだ。

五人はその後健太の死体を外に持ち出し、火葬した。朝奈は翠が時間がないと反対すると思ったが、先ほどの問答が影響したのか、大した反対も無く作業を終えた。

「で、今更だけどあんたら中央職員用エリアに何の用があったんだ？　こんなに事件発生から時間が経ってるのに態々（わざわざ）来るなんて……」

中央職員用エリアのロビーに戻った途端、何かを探るように三上が朝奈たちに質問した。

朝奈はそこで自分と翠のことをかいつまんで話した。

「ふーん、そんな組織があったのね。知らなかったわ」

話を聞き終わると、何故か本は嬉しそうになった。朝奈と翠はそんな彼女に怪訝な目を向ける。

「あ、私——新聞社の人間なの。レポーターって奴よ」

「ああ、マスコミの人間か。残念だったな。幾らこの情報を世間に流そうとしても、イミユニティーから圧力が掛かるから公表なんか出来ないぞ」

本のセリフを聞いて嘲るように翠が笑った。

「そんなことは考えてるわよ。私だって馬鹿じゃない。海外の情報局を利用したりとか色々とはあるわ。最近の情報ネットワークは凄いいから簡単に公表できると思う」

「ふん、まあ、頑張れ」

同じような人間を何度か見て裏を知っている翠は、あまり興味がなさそうにそう言った。

「それで、本さんと三上さんは何でここに？」

先ほどの質問を聞き返す朝奈。

「俺たちは別に好き好んでここに来たんじゃねーよ。猿の悪魔の集団に追いかけて、偶然ここに逃げるしかなかったんだ」

——猿の悪魔……草食獣ゾーンにいた赤鬼を恐れて逃げてきたのかな？

朝奈は赤鬼の姿を思い出しそう考えた。

「んで、ここに閉じこもってそろそろ大丈夫かなって外に出たら、あんたらと遭遇したってわけ。とんだ災難だよ」

「そうだったんだ。おかげで私たちは助かったけど」

朝奈は無理に明るく笑った。

「おい、無駄話はいいい加減止める。もう本当に急いだ方がいい」

突然翠が全員に呼びかけた。

「午後六時四分。そろそろ事件発生から七時間だ。いつ連中が逃げても可笑しくない」

「そうだね。あの大西さんの性格だと、私たちが生きてるって知ったら何をしてくるかも分からない。出来るだけ早くお父さんを探そう」

朝奈が頷いた。

「三上とモトミチはどうする？」

「本、美智だから。あなたの発音だと、何か江戸時代の人間の名前みたいに聞こえるんだけど。――……さっきの話から察するに、普通に紀行園から出ることは出来ないんでしょう？ だったら私はあなたたちと一緒に行動するわ」

「俺もそうするよ」

翠の問いに二人とも一緒に行動することを示した。

「そうか、だったら二手に分かれよう。その方が効率がいい。隠し出口か高橋志郎を見つけたら連絡し合おう。私とモトミチは地下の有無とこの階を調べる。朝奈と三上は上を調べてくれ」

「分かった」

全員が頷き、それを見た翠は気合を入れるように叫んだ。

「よし、じゃあ、始めるぞ」

草食獣ゾーン 午後6:07

草食獣ゾーンの一般道路上。

車が炎上し、穴や引つかき傷だらけのこの場所に今一匹の生き物と四人の人間が居た。

「くそ、こいつ傷が再生してくぞ。どうなってるんだ……!？」

赤鬼に刺さっているパイプ。その周囲の傷を見て、截は叫んだ。

「普通に攻撃しても効果は無い。こいつは不死身なんだ」

能面こと石井が応じる。

「不死身!? だったらどうする気だったんです?」

「幾ら不死身といえども所詮はイグマ細胞の産物、抗イグマ剤を直接体内に打ち込めば、動きを止められるはずだ」

「そうか、ってことは俺の仕事だな。それをこっちに渡してください」

截は黙って石井から注射器のようなものを受け取った。

今の布陣は截が前衛、石井が中衛、褐色男とオカツパ男が後衛とあったものだ。当然抗イグマ剤を打つのは截の仕事となる。

「ゴオオオオオオオオオ!」

赤鬼は胸に刺さったパイプを引き抜くと、大きく鳴いた。柵の上に倒れていた体を起こし、截を睨みつける。

「万全時の巨狼並みの筋力に異常な再生能力か。厄介な相手だ」

真横の潰れた車を見て截は呟いた。

「おい、一端引くぞ。この先に昼に罠を作っておいた。そこにおびき寄せる。いくらお前でも、動きを止めていないあれに注射を打ち込むのは無理だろ」

正面から赤鬼の注意を引こうとしていた截を止めるように、石井が呼びかけた。

「確かに、それはちょっと厳しいな」

「こつちだ！」

石井たちは紀行園の中心、林の中へと走っていく。

ここは猿や鹿などが生息しているエリアだったが、現在は赤鬼が徘徊ルートとして使っているため、どの生物も悪魔もいなかった。

「逃げるには丁度いい」

截は溜めていた息を放出すると、すぐに三人を追って後に続いた。これによって、紀行園の生存者の全てが一点、中央職員用エリアへと集まりつつあるが、幸か不幸か、誰一人そのことは知らなかった。

「また大口男がいる！」

朝奈は廊下の前方、自分たちに向かって走ってきた三匹の大口男を見て叫んだ。

「——さっきみたいに迂回するぞ。相手してたらきりがないからな！」

三上は言葉を発すると同時に廊下の壁にある扉を開き、その中へ駆け込んだ。二人は中に入るとすぐに扉を閉め、戸棚などで扉を塞ぎにかかった。

この部屋は二本の廊下の間にあるため、閉じ込められるようなことにはならず、入ってきた入り口と向かいの扉を通れば簡単に先へ進むことが出来る。

この地形を利用し、朝奈と三上は今いる場所まで何とか二階中の悪魔猿や、デイエス・イレの人間が変化した大口男の襲撃から上手く逃れていた。

「しかし、こうも化け物どもに気を使つてたら全然建物の探索なんかできねーな。朝奈さん、なんか見つけた？」

扉横の壁に座り込むと、休憩するように三上が朝奈に話しかけてきた。

「何も変わったものは見なかったけど……多分、次の最上階に行けば何かあると思うよ。一階で確認した地図が正しければ園長室とかもあるみたいだし」

「園長室ね。何度か入ったことあるけど、特に変なもんは無かったぜ？」

「隠し扉とかがある可能性があるの。実際、入り口近くの職員用建物にはあつたから」

「そんなもんがあるとは俺は信じられねーけど、まあ、頑張つてくれ」

「随分人事だね」

「まあな、俺って自己中心的な人間だから。さっきのあんたのセリフに文句を言うつもりはないけど、殆どの人間はこうだと思つぜ」

「でも、ライオンの化け物に殺されかけたとき助けてくれたじゃん。本当に自己中心的だったらあの時は助けないで逃げると思うよ」

「ぶはは、お前お人良し過ぎ。あの時は麻酔銃で倒せると思つたんだよ。あいつが居ると居ないとじゃ、その先の俺の生存率が大分変わるからな」

三上は心から可笑しそうに笑った。

「今お前と行動を共にしてるのも、ただ逃げ道を見つけたいだけだから。言つとくけど、俺あの翠とかいう怪しい女が居なかったらお前を襲つてたかもしれないぜ。変な仲間意識は持つなよ」

「……冷たいね」

「普通だって」

三上は再び笑った。

「さあ、もう行こうぜ。そろそろ息切れからも回復しただろ」

朝奈は静かに立ち上がると向かいの扉に耳を当て、悪魔らの行動音が聞こえないか確かめた。そして何も居ないことを確信すると、ゆっくりと扉を開けた。

「うっ——!?」

その瞬間、電流のように何かの映像が頭の中に流れ込んでくる。

廊下、丁度朝奈が扉を開けたその先の廊下から、見慣れない男が歩いてきた。

グネグネと、かなり急な角度で曲がった長髪癖毛の髪型に、スーツを着ている。歳は四十代から五十代だろうか。かなり整った部類にはいる顔付だ。

男はこの部屋の扉を開け中に入った。

「あ、東郷さん！」

部屋の中に居た志郎が驚いて声を上げる。怯えているというよりはどこかその声は嬉しそうだ。スーツの男、東郷は笑顔で志郎を見た。

「やあ、博士。研究に飽きたか？ 珍しいな。こんな所に居るなんて」

「はは、ちょっと生き抜きただけですよ。よくここが分かりましたね」

「タヌキに聞いたんだよ。白衣姿の白髪の男性が一人で休憩室に籠ってるってな。上に来る時は白衣を脱がないと怪しまれるぞ。いくらディエス・イレの人間だらけの中央エリアとはいえ、少しは一般の従業員も居るんだからな」

「すいません、つい忘れていました」

志郎は自分の姿に今気づいたのか、慌てて謝った。

「それで、研究の方はどうなんだ？　もう大分終盤に進んでいると聞いているが」

「はい、ほぼ完成と言ってもいいくらいのレベルになっていますよ。後は小さな問題だけです」

「小さな問題？」

「実は、あれを投与した人間は確かに不老不死の肉体を得れるのですが、反作用の所為で突発的な暴走状態になってしまふんです。それさえ何とかなれば完成なんですが」

「暴走状態か、確かにそれは面倒だな。仲間が傷つく姿は見たくない。暴走状態になった人間はどうした？」

「手に負えなかったので処分しました。あ、心配しないで下さい。イミユニティーの捕虜ですから同士たちは無事ですよ」

「それならいい。しつかり完成させてくれよ。本番で暴走したら、流石にお前らも処分は出来ないだろ」

「確かに、本番の処分はデイエス・イレの壊滅を意味しますからね。何とかやり遂げて見せます」

「ああ、頼んだぞ。俺は博士に期待してるからな」

「いえ、ここに始めて来た時とは違って、僕もちゃんと東郷さんの目的も理念も理解しています。期待に損なうことは決して致しませんよ」

「ふん、その言葉信じるぞ」

東郷は優しい教師のような目で志郎に笑いかけると、部屋から出て行った。

志郎はその後姿を尊敬するような目でじっと見ていた。

「はあ、はあ……お父さん？」

感覚による情報理解を終えた後、朝奈はその映像の意味を理解出来なかった。

まるで志郎がディエス・イレに入ったことを嫌がっていないように見えたから。

嬉しそうにしていたから。

「お、おい……大丈夫か？」

顔を悪くし壁に寄りかかった朝奈を見て、三上は不安げに聞いた。

「……だ、大丈夫。ちよつと眩暈がしただけ。行こう」

朝奈はショックを隠すように歩き出した。

——お父さんが、本当にテロリストになんかなるはずがない。あれは——……きつと演技だよ。絶対にお父さんは……

「テロリストになんか、ならない……！」

無意識のうちに口から言葉が漏れる。

「本当に大丈夫か？ 悪魔に感染してるぽつかたと言えよな。すぐに逃げるからよ」

「大丈夫だって！」

朝奈は半場自分に言い聞かせるように大声を出すと、ふらふらと歩き出した。

そのまま覚束ない足取りで階段を上り、三階に來ると、運がいいことに悪魔の姿も大口男の姿もなかった。こんなショックを受けている状態で悪魔に遭遇すれば、きつと朝奈は簡単にやられてしまうだろう。それほど朝奈の受けた衝撃は大きかった。

階段の先は二階の間取りとは違い、一階と同じように大きな空間になっていた。ソファーや小さなバーのような物まである。園長や紀行園の上位の人間の為の娯楽施設か、客用の待合室といった所だろうか。その空間の先にはただ一つだけ扉があり、園長室と書いてある名札が掛かっている。正確には階段を上がってすぐの場所に職員用の仕事部屋のようなものがあつたが、重要なものがあるとは思

えなかった。二人は其処を無視して園長室へと向かった。

歩きながら、朝奈の脳内には再び過去の映像が流れる。

「園長、計画は上手くいつているのか？」

東郷は丸いすに腰掛けながらテーブルに置いてあるグラスを取り、そう聞いた。

「はい、東郷さん。順調ですよ。シシュフォスが完成すればいつでも計画を実行出来ます。大口人間なんて失敗作も途中で生まれましたが、既にバイオハザード用の生物兵器は完成して別のアジトに送っています。シシュフォスが完成次第、いつでもばら撒くことができますよ」

「そうか。じゃあ、本当にあとはシシュフォスだけだな。まあ、あの高橋博士の腕は確かだ。心配する必要はないだろう。計画が実行されれば、この紀行園は用済みとなる。お前もそろそろ荷物をまとめておけ」

「はい？ 用済みとは？」

「イミユニティーに攻撃を仕掛けるんだぞ。直ぐにここも足が着く。いつまでも普通のサファリパークでは通せないだろ。お前には長年この園長として勤めてもらったが、それももう終わりだ。後は俺の部下として計画成功の為に別のアジトへ移動してくれ。今までよく頑張ってくれたな」

「そんな……！」

大西は愕然とした。自分の名誉も地位も全て失ってしまうことになるのだから。ディエス・イレの理念にも、イミユニティーに天罰をするという目標にも、大西は興味が無かった。

彼女がディエス・イレに入り、紀行園をアジトとして提供した理由は一つだけ。そう、金が入るからだ。

停滞気味だった紀行園の所有者としては、ディエス・イレからの献金はまさに最高の果実だった。ただ場所を提供するだけで多額の資金を得ることが出来る。そのために彼女は夫の文雄を幽閉し、自ら園長としてディエス・イレの人間となった。

その全てを失うことになる。大西にとってそれは恐怖以外の何物でもなかった。

「どうした？」

暗い顔をした大西を訝しがるように、東郷は尋ねた。

ここで反対などすれば自分の命が危うくなる。大西は引きつった笑顔を浮かべ、素直に了承した。

「分かりました。計画の成功のためにも、私が必ずシシュフォスを完成させますよ」

「ふふふ、ま、実際に研究するのは志郎だがな。ワイン、上手かったぞ」

東郷はグラスを置くと、上機嫌で階段を下りていった。

「何か手を打たないと……このままではあたしの全てが無くなってしまふ。そんなの絶対に許せないわ」

たった一人この空間に残った大西は、青い顔でグラスを一気に飲み干した。

「開けるぞ」

返事も聞かずに三上は勢い良く園長室の扉を開いた。

大西と東郷のやり取りに意識を取られていた朝奈は、何の供えもなく部屋に突然踏み込むことになり、一瞬たじろいだ。

ぱっと見れば一般的な社長室のようだが、部屋の中は赤色の花瓶やら人形やらが無数に置いてあり、かなりの悪趣味さが伺える。

「来たか」

二人が中に踏み込むと同時に、部屋の中心の机の奥に座っていた高宮が振り向いた。

狂気を含んだ笑みを浮かべながら。

<第十二章> 東郷大儀

<第十二章>” 東郷大儀^{とうこうたいぎ}”

「良くここまでこれたな」

「お前がテログループの人間か？」

高宮の言葉を見無視し、三上は質問した。

「ああそうだ、俺は高宮正治。ディエス・イレ紀行團の中央取締役」
「大西さんは？」

朝奈は高宮が何故たった一人でここに残っていたのか疑問に思った。

「あの女は既に地下へ行ったよ。今から追っても追いつくことは出来ないぞ。ふふ、まあ追いつけないほうがお前らにとってはいい結果になるかもしれないがな」

「どういうことだよ？」

三上が聞いた。

「大西の夫はシシュフォス、つまり赤鬼の体液を注入されている。これは赤鬼に感染しているということを示しているんだよ。いつでも大本の赤鬼ほどの怪物にはなれないがな」

「あなた、それを知って大西さんを行かせたの？ 何で……仲間だったんじゃないの？」

当然の疑問を持つ朝奈。

「仲間だったさ。だがあの女は俺たちのリーダー、東郷大儀さんを裏切ろうとした。東郷さんを見捨て、彼が居ないのを良いことにこのディエス・イレの支配を企^{たくら}んだ。許せるわけがないだろ？」

「東郷？」

朝奈は先ほど感覚で見た映像を思い出した。長い癖毛の凜々しい顔つきの男のことを。

「俺たちデイエス・イレは、元々イミユニティーが引き起こした事故や実験の被害者の集まりだった。テログループとは違う正真正銘の民間団体だ。発足当時は俺たちもちゃんと抗議活動を行い、イミユニティーの悪事を暴こうとしていたが、その度に妨害に遭い、多くの仲間が影で殺された。何度も、何度も……」

悲しい過去を思い出しているのか、高宮は拳を握り締めた。

「誰もが諦めかけた。ただの民間団体が国家権力に勝てるわけがないと。そんな時に現れたのが東郷さんだ。彼はいくつか合った反イミユニティー団体を一つにまとめ上げ、デイエス・イレとして強大な力を持った組織を作り出した。国家権力に影響されない強いグループとして」

「じゃあ、デイエス・イレはイミユニティーを倒すために活動しているんだ」

「そうだ。俺たちは東郷さんの立てた『完全な自由』という理想の下に行動している。イミユニティーの支配から逃れるために、完全平等の世界を作り出すために、そして黒服の……」

「黒服？ 黒服がどうしたの？」

朝奈はいきなり黒服の話が出てきたため、疑問に思った。

「黒服は——いや、ただの民間人のお前に言っても分かるまい。今の話は忘れる」

高宮は「話し過ぎた」とでも言うように、手を振った。

「国に対して戦ってんなら俺らには関係ないだろ。隠し出口を教えしてくれよ。俺たちもお前らと同じイミユニティーの被害者だろ？ 助けてくれよ」

三上は親しげに高宮に呼びかけた。助かると確信しているためか、その表情は明るい。

だが高宮は醜く口元を歪めると、三上の望みを真っ向から否定した。

「ふははは、何でお前らを助けなければいけないんだ？ 昔から一緒に戦ってきた同志でもあるまいし。お前らはこの紀行園から出すわけにはいかない。デイエス・イレの情報がイミュニティーに漏れることは僅かな因子でもあつてはならない。俺が逃げずにここに残っていたのは、何も文雄が赤鬼化するからだけではない。お前らを始末するためだ」

「な、なんだつて!？」

笑みを浮かべて立ち上がった高宮に恐怖し、三上と朝奈は一步退いた。

「あの黒服の二人に何を頼まれているかも分からないしな。まあ、確かに悪い気はするが、これも運命だと諦める。観念してここで死ね」

高宮は自分の懷から二本の注射器を取り出した。

「これがなんだか分かるか？ 生物兵器だよ。もっとも失敗作だがな。この場所はいずれイミュニティーに隅から隅まで調べられる事になる。だから失敗作くらいしか使用できないが……まあ、お前たち相手には問題ないだろう」

そのまま注射器を構え、高宮は二人に突進した。

朝奈と三上は直ぐにそれを避け、部屋の入り口前から窓際へと移動した。

「ふふふ、避けたつもりか？ 俺は入り口を押さえたかったただけだ。お前たちにこれを打ち込むつもりは無い。打ち込むのは、俺自身にだ」

高宮は注射器を二本とも自分の首に刺した。

「な、イカしてんのか!？」

驚きの声を上げる三上。

「ぐううつ—— かあつ！ これは、お前たちがこれまで見てきた大口男になるための注射だ。だが、普通とは違い二本刺した。普通の大口男はこの状態になるまで……三十分以上は掛かるが……くつ、二本打ち込むことでその時間を省くことが出来る。見ろ……こ、こ

れがあ…… ああ…… 大口男の感染進行形……だ」

高宮は耳を劈くような悲鳴をあげると、体を変化させ始めた。肌は赤紫色になり、顎の下から腹の上まで大きな口を形成し、腹からは三本の槍のような触手を突き出す。だが、変化はそれだけでは終わらずさらに進行していった。

二本の足はそれぞれ膨らみ、くっつくように一つに合わさりだし、腕はゴリラのもの用に長くなり地面に向かって垂れ落ちた。

目や耳、鼻などの部位は全て消え、顎の下までだった巨大な口は頭の頂上まで裂け、体の上半身は全て縦長の口で出来ているように錯覚させられる。

また、首がなくなつたせいで三角形のような姿を演出していた。一見すれば紫のグロテスクな円錐形プリンが扉の前に置いてあるようだ。

> i 4 7 0 2 — 2 2 4 <

「ジャアアアアア！」

戦闘開始だとしても言うようにプリン状の高宮は大きく鳴き、それと同時に大量のタンポポ孢子が部屋の中に拡散した。

「こ、こんな密閉された場所で!？」

朝奈はタンポポ孢子に驚いたが既に遅かった。

部屋の中はあつと言う間に白い霧に覆われてしまったのだ。

二人はその状況に恐怖した。

中央職員エリア地下2階 午後6：19

大西は自分で歩こうとしない文雄を汗だくになりながら背負い、何とか道を歩き続けていた。

「はあ、はあ、あと二階。全く、やっぱり一人くらい部下を連れてくるんだったわ」

今更後悔しても遅いのだが、年老いた女が自分よりも大きな男を担いで長々と歩くことは厳しい。大西の足通りは遅かった。

コンクリート製の壁に手を付きながら前を見ると、見慣れた門が目に入る。

DIES・IRA
ディエス・イレ

怒りの日、その日はダビデとシビラの予言の通り世界が灰燼^{かいじん}に帰す日。

審判者が現れ全てが厳しく裁かれる時、その恐ろしさは計り知れない恐怖をもたらすだろう。

「ふふん、何がダビデとシビラだよ。東郷め、どうせあの二人のことを言っているんだろうが、あたしからすりゃー……ダビデはシビラの隠れ蓑でしかないわ。そんなことにすら気づけないから、あんたはこんな目に遭うんだよ。所詮はあんたもあの二人が書いたストーリーの登場人物でしかないってことか」

扉にかかれた文字を見て、大西はどこかに居るであろう東郷に向かって一人毒づいた。

「よいしょっと、ふう、あと少しだよ。あんた、頑張りなあ」

「あううー」

大西が呼びかけたが、相変わらず文雄は奇妙な返事をするだけだった。気の所為かその顔は僅かに赤色を帯びてきている。

「まったく、頭でも打ったのかね。無事に脱出できたら直ぐに脳外科医にでも連れて行こうかい」

夫の異常な状態に呆れるような溜息をつくとき、大西は扉を開け中に入った。

そのまま瓦礫の山や天井の大穴には目もくれず、先へと進んでいく。そうしてさらに別の部屋に入った所で大西はあることに気がついた。

「あ、ここは超感覚者研究室か。しまった、ここの情報も処分しなきゃいけないじゃないか。あんた、ちょっと待っててね」

文雄を付近のデスクに寄りかからせると、大西はパソコンの電源を入れた。

部屋の中には先ほどの大穴のある場所とは違い手術台のようなものは無く、オープンほどの小さな金属機器や机が並んでいるだけの状態だ。

「あれ、おかしいわね？ データーが全て抜き取られてる。一体誰が……」

「僕だよ」

突然大西の背後から声が聞こえた。

「な！？」

大西は心臓発作を起こしたような顔で一瞬驚いたあと、背後を高速で振り返った。

一体いつの間に背後に回ったのか、そこには高橋志郎が立っていた。

「な、何だ…… お前さんかい。やっぱり生きてたんだね」

「大西さんも元気そうで何よりですね」

静かに微笑む志郎。

「娘とやらがお前を探していたよ。多分今頃、上で探しているんじゃないかい？」

「朝奈が……！？ どうして…… 帰ってなかったのか」

志郎はその事実心底意外そうな顔をした。

「その様子からみると、お前が黒服を雇ったってというのは本当らしいね」

「え、ええ。娘を紀行園から逃がそうと思ったので。少し前から連絡を取り合っていた黒服の者に頼んだのですが。まさか、彼は死んだんですか！？」

「さあね、赤鬼と一緒に職員用建物の下敷きになったらしいが、あなたの娘が生きているのなら心配ないんじゃないかい」

「赤鬼と？ 赤鬼はどうなったんです？」

「あれは無事だよ。元気に紀行園中を徘徊している」

「そうですか……」

志郎はほっとしたように胸を撫で下ろした。

「今は赤鬼を取り戻すのは無理だが、後で準備を整えてから必ず取り返す。だから今は逃げようじゃないか。お前も着いて来な」

「はい、分かりました」

志郎は素直に頷いた。

「それで、非常用の隠し出口はどこにあるんですか？」

「最下層だよ。最下層の動力室のタンクの後ろから、秘密の地下道路に出ることができる」

大西はあっさりと白状した。

これは至極当然の結果と言えるだろう。大西にとって志郎は味方だ。たとえその娘が黒服とつるんでいようと、志郎自身は完全にデイエス・イレの人間である以上、自分に敵対するはずがない。そう確信していたのだ。

「そうですか、それが分かれば十分です。死んでください」

「は？」

大西が振り向いた瞬間、志郎はナイフを振り上げていた。

「なっ!？」

咄嗟に体勢を崩し後ろに仰け反る大西。それが幸となり志郎の攻撃は外れた。

「な、何するんだい!？」

わけが分からず驚愕の目で志郎を見つめる大西。

「何って、デイエス・イレのためですよ。僕を甘く見ないでください。僕はあなたの秘密を知ってしまった」

「ひ、秘密？ 何言ってるんだよ!？」

「隠しても無駄です。おかしいと思ったんですよ。何故あれほど完成に近かった赤鬼が突然暴走したのか。疑いはありましたが、先ほどここのPCから監視カメラの映像を見て確信に変わりました。バイオハザードが起きれば誰も監視カメラの映像を見ないとでも考えたんでしょうが、残念でしたね。ここで隠し通路を探している間に僕は偶然見てしまったんです。あなたが赤鬼の調整槽に細工する瞬間を」

「——むう……!」

「前々から僕は思っていた。あなたはイミューニティーを倒すためにここに居るわけじゃない。金、ただそれだけのためだね。でもまさかこんな事態を引き起こすとは思ってもよらなかったよ」

いつの間にか志郎の口調は敬語では無くなっていた。

「——ふふん、東郷に感化されたか？ 志郎、お前は誘拐されてここに来たはずだったのに、随分あいつの肩を持つじゃないかい!」

「確かに、僕は東郷さんのことは嫌いじゃない。彼の考え方は非常

に共感できる。まあ、少々行き過ぎてゐる所もあるけどね」

「東郷のためにあたしを殺すのかい？」

「違う！　あなたの所為で死んだ人たちのためだよ。ディエス・イレの人間、一般客、多くの人間があなたの赤鬼への細工が原因で死んだ。たとえ赤鬼の暴走でイグマ細胞の流出が起きたとはいっても、元々の原因はあなただ。だから僕は彼らのためにも、あなたを生かしておくわけにはいかない。それに……今ここであなたを逃がせば東郷さんの命も危なくなるからね」

「ふん、理想主義者め！　あたしを殺すって？　やって見る！」

大西は強気でそう言ったものの、足は震えていた。

「……こんな無防備な人間に攻撃するのは本当は嫌だけど、これも後の世のためだ。さようなら、大西さん」

勢い良くナイフを振り下ろす志郎。

「ちいっ！」

大西は自分の死を悟った。

「ゴイイイイイイイ！」

その瞬間、突然志郎のナイフを何かが弾いた。

文雄だ。

「な、まさか！　シシュフォスの分化液を入れられていたのか！？　意外な展開に焦る志郎。」

「あ、あああんたっ——！？」

だが、それ以上に大西もパニックを起こしていた。

最愛の夫が突然奇妙な雄叫びを上げ、変形し出したのだ。驚かないほうがおかしいだろう。

文雄の体は赤く変色し、その両腕は猫の足のように前に伸び、地面を支える格好を取った。それと同時に二足歩行をしていた両足は蝙蝠の羽を思わすような形となつて、前足と横一列に平行に並び、Mの字に左右に広がった。まるで赤鬼の腕と足の大きさを逆にした

形のようだ。

さらに髪は蛇の様にクネクネとうねり、そこら中に伸び広がりだしている。赤鬼よりは垂直方向に伸びているが、不気味という点では何も変わらない。

「あんた——……そんな……うう！」

大西は文雄がまるで赤鬼の失敗作のような化け物に変化し、自分の目の前に立ち上がった姿を見て、思わず逃げ出した。

「くそっ！」

志郎も直ぐにその後を追いつ出す。

「ゴイイーアアア！」

自分から逃げるように走り出した二人を見て、イグマ細胞を持つ赤鬼の本能がそれを許すはずはない。短い腕と長い足を交互に動かして、蛙のような足取りで文雄は二人目掛けて駆け出した。

中央エリア南 森林 午後6：25

「はあ……はあっ、罨はまだなんですか！？」

罨は背後から聞こえる赤鬼の雄叫びの迫力に、背筋に汗を流しながら聞いた。

密集した林の中を走っているため中々速度が出ず、赤鬼との距離は殆ど離れてはいない。その事が罨に恐怖感を与えていた。

「あと少しだ、中央職員用エリアの裏まで走り続ける。あそこの電線を利用して罨を作ってる。あそこまで逃げ延びれば私たちの勝ちだ」

恐怖感を抱いていないのじゃないかと疑問をもたれるような無表情で、石井はそう言った。実際は截同様、赤鬼の威圧感に恐怖しているというのに、能面のような顔がそう見せているらしい。

「い、石井さん！ 隼人がいません！」

截の後ろを走っていたオカッパの男が、いつの間にか姿の見えなくなっていた褐色の仲間のことに気づき、叫んだ。

「放っておけ、どうせやられたただけだ」

全く興味ないように言う石井。

「そ、そんな！」

「じゃあ、お前が戻って探しにいけ。それが出来ないのなら諦めろ」
オカッパの男にとって褐色の男、隼人は親友のようなものだったのだが、この状態でたった一人で来た道を戻るとは自殺行為のようなものだ。歯を噛み締め、仕方が無くオカッパの男は仲間の生存を諦めた。

その頃。自分の生存が否定されたにも拘らず、隼人はまだ生きていた。だが、そういえるのも今だけだろう。今彼の目と鼻の先には赤鬼が立っているのだから。

「くっ……来るなああ！！」

ナイフを目の前に振りながら後ずさりする隼人。しかし赤鬼はそんな抵抗など目に入らないようにのしのしと歩を進める。

「うっ——おおおおおおお！」

隼人は窮鼠猫を噛むといった状態を期待して、死ぬ気で赤鬼に向かって走り出した。両手で力強く大型のナイフを掲げ、目を見開いて向かいに立っている化け物に殺気を飛ばす。

隼人のナイフはしっかりと赤鬼の心臓を貫いた。イミユニティーの人間なだけありその狙いは寸分の狂いも無い。

だが赤鬼は歯茎が無いかのようなむき出しの歯を大きく開け、黒色の溝に包まれた充血した茶色の瞳で一睨みすると、何事も無かつ

たようにその太いM字に広がった腕の一方で隼人を突き飛ばした。

「ういいああ!？」

赤鬼からしてみればただ押しただけの突きだったのだが、隼人にとってはハンマーで殴られたことに等しい。隼人は後ろの木に激突すると、赤鬼の拳があつた部位を押さえ地面に尻を着いた。

「グウウオオオ——」

ゆっくりと隼人に歩み寄る赤鬼。その表情は憎しみも、怒りも、何も籠つてはおらず、ただ本能のままに獲物を漁っているといった様子だ。

「はあ、はあ……」

隼人は見下すように前に立った赤鬼を見上げた。

そして、その瞬間。

バツシュツという音と共に、土の上に褐色の死体が一つ生まれた。

中央職用エリア 午後6：26

「あつた! 翠さん、これじゃないかしら。地下への入り口って」
中央職用エリア一階の奥。紀行園の入り口を南と見て、丁度西の位置にある非常用階段の裏。そこで本は指紋認識装置のようなものを見つけた。

直ぐに翠が階段の横から顔を覗かせる。

「良く見つけたな、モトミチ。普通こんな場所に指紋認識があるなんてありえない。ここで間違いないだろう」

「直ぐに朝奈さんたちに電話しましょう」

「ああ、そうだな。……ん？　ちよつと待って、今何か聞こえなかった？」

「えっ、別に何も聞こえないわよ？」

「オオオオオオオオ——……」

「あ、な、何か聞こえた！」

本は遠くの方で何かが叫んでいる声を聞いた。

「——っ赤鬼だ……！　こっちに向かつてるみたいだな。くそ、何でよりによって私たちのいる方に来るんだよ」

「赤鬼？」

「モトミチ、朝奈に連絡したら直ぐに下に逃げる。今の内に使えそうなものを集めておけ」

「わ、分かった」

本は赤鬼が何なのか分からなかったが、翠の慌てようからかなり危険な化け物だと判断した。

「——出ない……悪魔にやられたか！？」

何度もコールしても繋がらない電話を諦め、翠は顔を曇らせ携帯電話をしまった。

「指紋でここを開けることは出来ない。こうなったら朝奈の感覚でマスターコードを入力するしかないな。おい、モトミチっ、上に行くぞ！」

「え、使えそうな物を集めるんじゃないの？」

「そんな暇はなくなつた。いいから来い！」

翠は本の腕を引っ張ると、急いで階段を上り始めた。

ここがもし一般的な若者の部屋ほどの大きさしかなかったのなら、二人ともタンポポ胞子によって人間としての形を失うことになっていただろう。

だが、幸いなことに自己顕示力の強い大西は園長室にかなりの間取りを使っていた。高校の教室を二つ繋げたほどの大きさと言えば、分かりやすいだろうか。

部屋の入り口前の床にイソギンチャクのような足を密着させ、体と地面を固定しながら永遠とタンポポ胞子を出し続ける大口男LV2の姿を見ながら、朝奈は窓際に三上と共にへばり付いていた。

この位置ならばギリギリで胞子の拡散エリアの範囲外となる。

「あいつ……なんで十秒以上たってんのに胞子を止めないんだよ！？」

「さつきこの人は大口男の進化形みたいなことを言ってた。だから多分移動能力を失う代わりに感染能力に特化したんだと思う。そのために入り口の前で注射を打ったらしいね」

「冷静な分析なんていらないから何とかしろっ！　このままじゃ何時かは感染しちまうぞ！」

自分で考えもせずに三上は朝奈に怒鳴りつけた。

「……分かった。水持ってる？　持ってたら貸して」

「水？　水なんかどうすんだよ！」

「私に頼んだんだから言うこと聞いてよ」

朝奈は若干怒った様子で言った。

「ほらよ」

健太は鞆から一本のペットボトルを取り出す。

朝奈は自分の腕の傷口に撒いていたハンカチを四つに裂くと、それにペットボトルの水を掛け、濡らし始めた。

「何してんだ？」

「あの大口プリンを倒すには今の武器じゃ接近戦でやるしかないから、耳と鼻と口をこれで塞ぐの。ほら、三上さんもやって。私一人

に戦わせる気？」

朝奈はペットボトルを突き出しながらそう言った。

「本当に大丈夫なのか。こんなもんで感染を防げるのかよ」

「長くは無理だろうけど、短い間なら大丈夫だと思う」

両耳に小さな濡れたハンカチを積み、口と鼻をマスクのような格好に濡れたハンカチで覆うと、朝奈が自信ありげに答えた。

「はあ、仕方ねーな」

三上はため息をつく、同じような格好に自分もなった。

「あの大口プリン、動けないから畏戦法も効かないし、正面を向いているから背中への攻撃も出来ない。けど前からの攻撃はあの三本の鋭い触手が邪魔してくるから……正面も攻撃できそうにないね」

「後ろさえ向いてくれりゃー、動けないから只のサンドバックでしかねえのにな」

「こうなったら、左右から攻撃しよう。いくら動けないと言っても体の向きを右左にねじることくらいは可能だと思う。……三上さん、左から近づいてあいつの注意を引き付けて、その間に私が右から止めを刺すから」

「了解」

三上は覚悟を決めたのか、珍しく素直に了解した。

大西のものと思われる大きな机を倒し、盾のように自分の前に構え、チョコビチョコビと大口プリンに向かって進んでいく。

「机があるから素直に引き受けたのか」

朝奈は三上のズルイというか賢い策に感心しながら、自分も右に歩き出した。

「ジュウウアアア……」

タンポポ胞子をばら撒き、二人に注意を向ける大口プリン。目が無い体でどうやって位置を調べているのか知らないが、その様子からはかなり正確に特定できているようだ。

三本の触手が三上の押している机に連続して刺突を繰り返した。だが大西が高い机を買っていたのか、内部に金属が入っていた所為

か、中々机は壊れない。

「どうだ、朝奈!？」

三上は自分が大口プリンの注意を引き付けられたことを確信し、そう聞いた。

答えれば大口プリンの注意が自分に向いてしまう。朝奈は三上の言葉に構うことなく相手の右に忍び寄ると、西洋風ナイフを一気にその背に殴り落とした。

「ジュウウォオオオ!？」

脊髄に強烈な痛みを感じた高宮もとい大口プリンは、苦痛の雄叫びを上げると触手を朝奈の方へ打ち付けてきた。

「——っ!」

朝奈はそれを窓際の方へ逃げてかわした。

「オオオオオオ……」

大口プリンはそれ以上攻撃することは無く悔しそうに身をもだえさせると、一瞬ピクリと動いた後に死んだ。

「随分あっけなかったな」

三上が拍子抜けしたような表情で朝奈を見る。

「……たぶん、この人は時間稼ぎをしたかったんだと思う。一応殺意も合ったと思うけど……」

「時間稼ぎ？」

「大西さんが逃げるまでの時間稼ぎか、それとも……」

「それとも何だよ」

三上はわけが分からないといった様子で聞く。

「ゴオオオオオオオオオ!」

「な、何だ!？」

「この声っ!？」

突然建物の付近から響いた声に、二人ともどきもを抜かした。

大口プリンが死んだおかげで胞子は既に消えている。朝奈はハンカチを金繰り捨てると、窓から外を見た。

「——截さん!」

窓の外、中央職員用建物の真南の方向に赤鬼から逃げるように截と二人の人間が走っているのが見えた。

大分暗くなってきた所為ではつきりとは見えないが、朝奈は先頭の人物を截だと確信した。

「良かった……本当に生きてたんだ！」

その生存に対する安堵の気持ちと喜びが溢れてくる。

「お、おい何だよあの赤い奴!？」

だがその安心感も直ぐに緊張感へと変わった。三上の言葉で截の背後に赤鬼の姿を見つけたからだ。

「……………何とかしなきゃ！」

このままでは今度こそ截が殺される。朝奈は截を助けるために園長室を飛び出した。

「ちょ、待てって！」

三上も慌ててその後を追う。だが自分の前に置いていた机につまずいて転んでしまった。

「痛って!？」

その衝撃で机の中から鍵のようなものが出てくる。

「何だこの鍵？ あ、おい、置いてくな！ あゝ取り合えず取っとくか」

三上は念のためにそれを懐に入れると、既に先へ進んでいる朝奈を急いで追いかけた。

二階の廊下、数対の大口プリンの所為で先へ進めなくなっていた翠と本も、赤鬼の声が間近から聞こえたことに気がついた。

「くそ、もうここまでやって来たか！」

「急ぎましょう」

背後を通れば襲われることが無いことに先ほど気がついた二人は、まるでパズル迷路のように大口プリンの隙間を抜けて行く。

「そういえばモトミチ。三上の持っていた麻酔銃は？」

「え、もう使わないと思ったからさっきの医療室に置いて来たわよ？」

「馬鹿、何で置いて来るんだよ！ あれは相手の動きを鈍らせるのに役に立つ。くそ、お前朝奈に指紋認識装置のことを教えに行け、私は麻酔銃を取りに戻る」

「え、私一人で！？」

「甘えるな、赤鬼が来てる今、こっちも死活問題なんだよ。早く行け！」

「わ、分かった」

本は翠の剣幕に押され走り出した。それを確認すると翠も急いで今来た道を戻りだす。

「間に合え……！」

ただ焦りの表情だけがその顔に浮かんでいた。

「避ける！」

截はオカッパの男を押し倒しながら叫んだ。

その直後二人が立っていた地面の土を、赤鬼の大爪が抉り取る。

截、石井、オカッパの男の三人は、とうとう中央職員用エリアの目の前まで到着していた。

オカッパの男を立たせると截は赤鬼と向き直った。

「キツネもどき！ 二分だけ耐えろ。その間に罠を起動させる」

石井が截に向かって叫ぶ。

「二分？ 手動の罠なんですか！？」

「ああ、死んでもいいから時間だけは稼げ」

截はそれには答えなかったが、石井は無言で柵の前についている何かの機器をいじり出した。

「二分か。はあ、仕方が無いな」

赤鬼相手に二分間も、何の罠も為しに戦闘行動を取ることなど自殺に等しい。截はこの為に石井が自分と手を組んだということに気づいた。

白柄ナイフと、黒柄ナイフ。

二本の特殊ナイフを掲げ、截は目の前に立ちふさがる赤鬼と視線を合わせる。

「オカッパの男も同じようにナイフを構えた。截とは違ってその腰は引き気味だ。」

「ゴオオオオオオオオオ！」

赤鬼が押しつぶさんばかりの大声を二人の目の前であげる。

「行くぞ……！」

截はその瞬間勢い良く駆け出した。

<第十三章>” 赤鬼”

<第十三章>” 赤鬼”
シシユフオス

「ゴオオオウウウウ！」

赤鬼は高らかに大声をあげると、その人外の太い拳を截目掛けてミサイルのごとく振り下ろした。それも常人には反応出来ないような速度で。

この一撃をまともに受ければ例え頑丈な象ですら即死の危険がある。人間なら体の原型すら止めないかもしれない。

だが截は「感覚」により事前に相手の脅威を知ることが出来た。赤鬼の腕が伸ばされた直後、既に截の姿はその場から消えていた。相手の攻撃を察知した截は、それと同時にカウンターをかけるように懷に飛び込んでいたのだ。

「食らえ！」

二本のナイフを流れるさざ波のように緩やかに動かし、瞬く間に無数の切り傷を赤鬼の体に刻んでいく。赤鬼が避けられたことに気がついて第二の攻撃を繰り出すまでには、その傷の数はかなりのものになっていた。

最初截は注射をこの隙に打てばいいと思ったが、斬撃を浴びせているのは刹那の時間だ。こんな一瞬では到底注射器の中身を注入することなど出来ない。注射を打ち込む間を作るためにもまずは赤鬼を弱らせることが必要だと考えた。

「——はあ、はあ……どうだ！？」

一端赤鬼から離れ木の影に隠れると、截は一息ついた。身体的に圧倒的に自分を凌駕している赤鬼を倒すには、正面衝突では不可能に近い。だから截はヒットアンドアウェーという方法を

取った。

隙を見つけ、攻撃し、素早く離れるという行動を繰り返す。殆どのイグマ細胞を活用して作られた化け物相手に通じる戦法だ。

赤鬼もイグマ細胞によって作られた存在である以上、この戦法はかなり効果的にダメージを与えることが出来た。

そう、少なくとも一時的には。

「くそ、やっぱり駄目か！」

木の影から片目を鋭く覗かせ、截はがっかりした。赤鬼の腹に自分がつけた無数の傷があつと言う間に再生し、その痕を消したからだ。

「落胆するな、俺たちは時間稼ぎさえしてればいいんだ。無理に傷を負わせる必要なんてない」

林の中、正面に数メートル進んだ位置にいるオカッパの男が、截を落着かせるように言った。

「傷を負わせようとしなくてどうやって時間稼ぎをするんですか？ただ周囲をうるちよろしても赤鬼の動きは止められない」

無表情で言葉を返す截。

「へっ、少しは落ち着け。おまえらナグルファルは個の能力が高い分、どうも戦闘したがる傾向があるな。イミユニティーの戦いつて奴をみせてやる」

オカッパの男は自信ありげに微笑むと、赤鬼の注意を引くべく駆け出した。

先ほどから截の姿を探していた赤鬼は、目の前を横切つていったオカッパ男を截だと思い込み、問答無用で追いかけ始める。

オカッパ男は木の合間を縫うように走り回り、巧みに赤鬼の速度を上げさせないように工夫した。そのまま徐々に徐々に中央エリアから離れていく。一端罨から遠のかせて時間を稼ぐ気らしい。確かに罨の近くで戦闘しながら時間を稼ぐよりは、罨失敗の危険度は下がる。

それを見た截は思わず感嘆の声を上げた。

「やるな」

「感心してないでお前も後を追え。伊藤だけだと直ぐにやられるぞ」
電流柵の前でなにやら工作活動をしている石井が後ろを向いたまま冷たい声で命令する。

截は石井を一人だけこの場に残していくことにやや躊躇した。

「一人で逃げるかもしれない」、「自分がいない隙に朝奈や志郎の元へ行くかもしれない」という懸念が浮かんだから。

そんな截の心情を詠んだのか、石井は冷静にこう言った。

「心配するな。私の目的は本当に赤鬼の奪取とデイエス・イレの生存者の捕獲だけ。お前の仕事に干渉はしない。たとえ高橋志郎が赤鬼を作った人間だとしても、赤鬼本体があれば奴の利用価値はないからな。デイエス・イレの人間の生存が確認出来ない現状でお前を裏切るような真似はしない。なにせ赤鬼を倒せなくなってしまう」

「それを信じると？」

「どうするかはお前の自由だ」

石井は相変わらず後ろを向いたままそう言った。

「……分かりました。今は取り合えず信用しますよ。僕としても先ほどの取引を守って貰いたいですからね」

「取引……赤鬼を渡す代わりに志郎とその娘に手を出さないことか。ああ、約束は約束だ。必ず守る。私のように人の上に立つ者にとって信頼は重要だからな。心配するな」

「一応、その言葉を信じますよ」

截は意味ありげに石井の後姿を見ると、オカッパ男、伊藤の後を追った。

「あつた、麻醉銃だ！」

翠は医療室で麻醉銃を発見した。すかさずその残りの弾数を確認する。猛獣が人を襲うような万が一の場合の為に中央エリアに備えられていたもののようなだが、頻繁に整備されているらしく、まるで新品のように輝いている。

「残り三発か、三上の奴随分弾を無駄使いしてくれたな。まあ、いい。今は急がないと」

翠は弾数の少なさに溜息をつく、医療室を出て階段を急いで上がっていった。

直ぐに朝奈ら三人に鉢合わせるだろうと思ったが、何故か二階、三階のどこにも彼女らの姿はない。一体どうしたというのだろうか。翠は僅かに不安になった。

園長室に足を踏み入れてもみたが、案の定そこには誰もいない。

「どこに行った!?」

部屋の中を探索しながら何気なく窓から外を見てみた。すると自分の相棒である截がイミューニティーと共に赤鬼と戦闘している姿が目に入る。

「截!? 何してんだ、連絡も入れずに!」

翠は截の生存ではなく彼が連絡を入れなかったことに驚き、その姿を見つめた。

その時、窓の下で何かが動いた気配がした。翠が素早く銃口を窓の下に向けると朝奈、本、三上の三人が二階の窓から林の中へと降りようとしている姿が目に入った。

いや、正確には降りようとしているのは朝奈だけで、他の二人はそれを止めようとしているのだが。

「っおい、お前ら一体何してんだ!？」

思いつきり叫ぶ翠。その声に朝奈が気がついた。

「翠さん! 截さんが危なかったから助けようと思って!」

「馬鹿か、お前らが行っても邪魔にしかないから。直ぐに非常階段の裏へ行け! 截の援護は私がする」

「でもっ……!」

朝奈は納得がいかなそうに何かを言いかける。

翠は再び説得の言葉を吐こうとした。だが、その前に石井が朝奈に向かって柵の向こう側から呼びかけた。

「おい、お前たち。何か手伝いたいって言うのなら協力しろ。私たちはこの柵に流れている電流を利用して赤鬼の動きを封じようと考えている。お前、電力室に行つて電力を上げてこい」

「電力？」

「今の電力がどれほどかは知らないが、動物を気絶させるほどの威力しか流れていないはずだ。赤鬼にとってそれぼっちの電力は何の効果も無い」

「……電力をあげればいいんだね。分かった……！」

朝奈は石井の説明通りに電力を上げるため、窓から乗り出していた身を戻し、素早く電力室を探しに行った。

「……能面、何考えてる？ 何故截と一緒に行動している？」

朝奈が素直に走つていった姿を上から見ていた翠は、不機嫌そうに石井に呼びかけた。

「ふん、あの時の黒服か。一時的な休戦だよ。詳しくはお前の相棒に聞け」

「截は変に素直なところがあるからあんたの言葉を信用したかもしれないが、私は騙されないぞ。一体何を考えてる」

「疑い深いな。ふふ、その用心さは立派だ。今度私が雇つてやるのか？」

「ちやかすな、誰があんたの仕事なんか受けるか。早く言え！」

「だから言つただろ、相棒が全て知つてる。彼から聞くまで待つんだな。知りたかつたら精々そこから彼の援護をすることだ」

石井は僅かに笑いながらそう言った。

「赤鬼より先にあんたにこいつを撃ち込んでやろうか？」

翠が麻醉銃を構えて脅しをかける。

「撃ちたいなら撃て。其処まで馬鹿な人間だつたらな」

「……——っち……！」

翠は奥歯を噛み締めながら石井を睨んだ。

「ふふふ、それでいい。今は赤鬼が先のはずだ。無駄撃ちはするべきじゃない。赤鬼捕獲後に相手なら幾らでもしてやる」

「……覚悟しとけ、何か妙な真似を見せたら、悪魔よりも先に迷わず殺してやる」

「出来ればな」

射殺するとはかりに視線を投げつけてくる翠を軽くあしらうと、石井は截や伊藤の戦闘場所に目を移した。

紀行園正面入り口前 午後6：39

「またイミュニティーと名乗ってる連中が来ただど！？」

密集しているテントの中、宮川警部は素っ頓狂な声を上げた。

それも当然と言えるだろう。事件発生直後中に入った三人を省いて全く連絡を見せなかったイミュニティーが、突然今頃大型のヘリでやってきたのだ。驚かない方が可笑しい。

「もう、テントの前まで来ています。どうしますか？」

若い警官が宮川警部のご機嫌を伺うようにそう言った。

「また偽者じゃないだろうな。まったく、こっちは永遠とマスコミの対応をさせられ忙しいっていうのに」

文句を垂れながら、手で中に入れるようにと合図を送る宮川。部下はその指示の通り外に待たせていた人間を中に引き入れた。

イミュニティーの戦闘服である紺色の軍服を着ているものの、それがあまり似合っていない背の低い太った男だった。髪は短髪を上

に向かって立て今風の若者のようにセツトしており、目の前には真丸の黒サングラスを掛けている。

「それで、ご用件はなんですか？ わざわざあんな大きなヘリで来るなんて……マスコミになんて説明すれば良いんですか」

宮川警部が聞いた。

「これは申し訳ありません。ですが、あのヘリは中に入った者たちが捕獲した生物を運ぶのに必要なものでして」

だみ声で返す達磨のような男。

「生物？」

「はい、かなり極秘の内容なので大きな声では言えませんが……今回の事件はテログループが撒いた生物兵器が原因なんです。そこで私たちイミューニティーはワクチンを作るため、大量にその生物兵器のサンプルを持ち帰る必要があるのです」

「……それで、私にどうしろと？」

「そのうち中に入っている者たちから連絡があると思いますので、その時に私とこのヘリが紀行園の中に入る許可を下さい。何、ご迷惑はかけません。荷物を積んだら直ぐに紀行園から立ち去ります」

バツハハと下品な笑い方で達磨のような男は笑った。

「どの道、上の命令ならば私は逆らえない。好きにしてください」

「ありがとうございます」

その瞬間、達磨男がしてやったりと微笑んだのだが、宮川は全く気づかなかった。

「ぐああああ!？」

伊藤は恐怖の声を上げた。

もう少して中央エリアの建物が見えなくなると言う所で、後ろから赤鬼の攻撃を受けたからだ。

クリーンヒットはしなかったものの、赤鬼のその巨大な腕は伊藤の足を掠めた。その所為で足の肉が抉れ、伊藤はとても歩けるような状態ではなくなってしまった。

真っ赤な血がだらだらと流れ落ち、白い骨が覗いている。一般人ならいつ気絶しても可笑しくないほどのグロテスクな光景だ。

しかし、苦しんでいる伊藤の姿になどお構い無しに、赤鬼は三日月の光をバツクにしながら悠々と近づいて来た。

「ぐおおお……ここまでかつ!」

伊藤の口から諦めの声が漏れる。

赤鬼は何のためらいも無くその腕を振り下ろしにかかった。

巨大な爪が伊藤の上半身を吹き飛ばそうとしたその直後、追ってきた截が投げた短ナイフが見事に赤鬼の頸動脈に命中した。

「ウゴオオオオオオ!？」

流石に痛みを感じたのか、湧き出るように流れてくる自分の首本血を見ながら、赤鬼は苦しむような声を上げる。

「こつちだ!」

截は伊藤の両脇を抱えると、赤鬼から引きずるように離し木の影にその腰を寝かせた。

「ぐ……ちっ、しくじった。はあ、はあ……!」

自分の状態に苦笑いする伊藤。

「直ぐに止血します。この傷なら死ぬことはない」

截はそのグロテスクな傷に怯むことなく、自分の所持していた携帯用の道具で伊藤の足に応急処置を施した。

「やめろ、治療は自分です。お前は石井さんの命令通り、赤鬼の

注意を引いてる」

「……分かりました。出来ればここから離れてください。あいつの攻撃はメチャクチャだ。こんな近くにいたら、いつ流れ攻撃に当たるかも分からない」

「へ、分かったよ。まさかこの俺が足手まといとはな。こんなこと国鳥友と仕事した時以来だ」

伊藤は何かを思い出すように言った。

「……友？」

截はその言葉に思わず聞き返す。

「ああ、俺の同僚だよ。中々のやり手だな。周囲の環境や道具を全て自分の武器に変える凄い奴なんだ。仲間内じゃふざけてトリッて愛称で呼ぶ奴もいる。名前が国鳥だけにな。——何だ、知り合いか？」

神妙に聞き入っている截を不思議がったのか、伊藤が怪訝な顔で聞いた。

『俺は国鳥友、お前は？』

『……分かった。怖いが俺も協力するよ』

『川から行くべきだ。エスパー君には悪いがな』

「……いや、知りません」

截は伊藤から離れ立ち上がると、背後、赤鬼の暴れている方へと向き直った。その表情は伊藤からは見えない。

「とにかく、ここから離れてください。ここからは僕の仕事です」

「ああ、分かったよ。任せる」

伊藤は頷いた。

それを見ると、截は振り返ることなく赤鬼の方へ駆け出した。頭

の中に動揺を抱えながら。

截が着いた時には赤鬼の首は既に全回復していた。まるで最初から怪我などしていなかったかのように、綺麗に傷が塞がっている。

「あの傷すら治るのか……あと約一分、死なずに上手く注意を引き付けられるといいけど」

元氣一杯の様子で木々をなぎ倒している赤鬼の姿に、かなりの不安を抱きつつ、截は意を決して交戦を再開した。

赤鬼はその大きな両腕がもつとも危険な武器だ。それにさえ気をつけていれば、ある程度致命傷を避けることが出来る。

截も当然その法則にしたがって二本の巨大な手を避け続けた。

超感覚を持つ、しかも黒服の訓練を受けた截にとつて、本能のままに暴れる化け物の攻撃をかわすことは容易い。赤鬼の攻撃は掠めることはあつても一撃も截に命中することは無かった。

だが、優位な状態にも関わらず截は得体のしれない不安感を抱いていた。

圧倒的な違和感。

それが原因だろう。

赤鬼の攻撃は事前に危険を察知することで、確かにかわすことが出来る。しかし、戦い始めた頃と比べて段々とその攻撃が知的戦略を帯びたものへと変化していたのだ。

暴走し意識の無いはずの赤鬼がフェイントを使い、こっちの避ける先を予測し、まるで追い込むような攻撃をしてくる。明らかに無意識ではなく狙つての行動だ。

「こいつ……？」

截は赤鬼のその変わりように疑問を持った。

最初の頃と比べてかわすのも必死になっていく。

「やっぱりおかしい、動きが段々熟練の戦闘員みたいに——……」

赤鬼の巨大な拳が截の目の前の地面を割った。破片が飛び散り周

囲に埃を撒き散らす。截は衝撃と風圧で後ろに倒れこんだ。

「うわっ——！？」

その隙を赤鬼は逃さなかった。

倒れた截に止めを刺すように両手を交互に使い、追撃を連続して繰り返してきたのだ。

截はゴロゴロと地面を転がるようにし、死ぬ気でそれを避け続けた。その顔にはもはや先ほどまでの余裕はなく、完全に必死そのものといった表情だ。

突然転がろうとした先が何かで塞がれた。赤鬼の左腕だ。これでは截は攻撃を避けることが出来ない。

「ゴオオオオアアアア！」

赤鬼は必殺の一撃を出す漫画の主人公のような気合で、右腕を截に振り下ろそうとした。

バキューンッ！

赤鬼の側頭部に何か命中した。翠の放った麻醉銃の弾丸だ。赤鬼の気が一瞬截から逸れ、その体がぐらつく。かなり強い麻醉だったのか前進に回るのが速いらしい。

「今だ、逃げる！」

六十メートルほど遠く、中央エリアの三階から翠が叫んだ。

「……………さすが！」

截は翠に小さく親指を立てて礼をすると、飛び上がり赤鬼から離れた。

「もう一分経ったな。あとは石井のところまで逃げるだけだ」

正直、截は赤鬼に勝てる気がしなかったので、その時間経過の事実にはっとした。直ぐに走り出す。

「グオオオオオオオ！」

赤鬼はそんな截に食いつがるように腕を伸ばした。物凄い速さで巨大な手の平が、截の頭を包み込もうと伸びる。

バキューン！

すかさず翠の援護がそれを妨害した。見事なタイミングだ。

「あいつ、麻酔の効果すら僅かな時間で回復するのか。あと一発しか撃てない。截、急げ！」

銃身のレンズから汗を流して走る截を見て、翠は心配そうにそう呟いた。

「電力室……電力室……——あ、あったこれね！」

一階に戻った朝奈は地図で電力室の場所を探していた。それによると、どうやら電力室は地下にあるらしい。もちろん隠しエリアとは別の只の普通の地下室にだ。

「ここからならすぐに着けるわね」

本が時間を計算して言う。

「おい、ちょっと待てよ、お前らマジで電力室に行く気なのか。おれは御免だぞ。やっと逃げられそうだっていうのに、何でそんな真似しなきゃ何ねーんだ。どうしても行くってのならあの指紋認識機の扉を開けてから行けよ！」

三上は二人が正気でないと訴えるようにそう言った。

「このままじゃ、截さんが——私の知り合いが殺されそうなの。それに、あの赤鬼をどうにかしないときつと地下の隠し施設にまで追いかけてくる。倒せるときに倒すべきだよ。」

「あんな化けもん倒せるわけねーだろ！」

朝奈の言葉に半ば怒り気味で三上は怒鳴った。

「はあ、まったくちっちゃい男ね。朝奈さん、行きましょう。こうしている間にもどんどん時間は過ぎて言っている」

「な、おい、待てよ！」

朝奈の腕を引いて歩き出した本を見て、慌てて三上は二人の前に

立ちふさがった。一步もこれ以上先へは通さないといった表情だ。
「……分かった。三上さん、先に地下施設の入り口をあけるから……
……それでいい？」

このままではキリが無いと思った朝奈は、三上の要求に応じることにした。

「ああ、早く行け」

三上は半信半疑だったものの、朝奈が承諾したので僅かに嬉しそうにそう言った。

「はい、これで良いでしょ」

朝奈は感覚からマスターコードを知り、それを入力することで指紋認識式の扉を開けた。

「悪いな」

三上は明らかに悪いとは思っていないような顔でそういうと、すぐにその扉の先にある階段を下りて行き姿を消した。

「現金な奴……さあ、朝奈さん。さっさと電力を上げに行きましょう」

「うん、でもちょっと待って。万が一悪魔に追われた場合に直ぐに逃げられるように、ここの扉を開けたままにしたいの」

朝奈は本の催促を制し、別の部屋から持ってきたパイプ椅子で扉を開けたままに固定した。

「はい、これで大丈夫。行こう、本さん」

「そうね」

本は腕を組んだまま頷いた。

猛牛が通り過ぎて行った。そう錯覚させられるような猛烈な腕の一振りが顔を掠める。

爆弾が地面を吹き飛ばしたんじゃないか、と不安になるような振動が起こる。

身の毛もよだつような、体中が凍りつくような、おぞましい声が空気を震わせる。

殺そうと。

破壊しよう。

潰そうと。

その命を目の前から消す為に。

赤鬼は死の斧を縦横無尽に周囲の空間へ走らせた。

右へ、左へ、前へ。

突いて、薙いで、振り下ろして。

ただ相手を殺す、それだけの為に。

「うおおおおおー！」

截は無意識の中で大声で叫びながら走っていた。

目に映る柵を目指して。

感覚を持っていなかったのなら何度も死んでいたであろう攻撃をかわし、一目散に石井が仕掛けたであろう罠の元へ急ぐ。

距離にしてはそれ程長い訳ではないが、截は数十キロも走り続けたような顔をしていた。

自分がこれまで会った化け物の中でもっとも強く、もっとも利口な敵。どんな攻撃も無効化し、一撃で全ての存在を抹消する。

何の隠れる場所もないこの林の中、そんな存在に背を向け逃げるという截の恐怖心は生半可なものではなかった。

「逃げ！」

建物の上から翠が心配そうに急かす。截はその声に応じるように

無我夢中で足を動かした。

「ゴオオオオオオオ！」

赤鬼が腕を振り上げ、截に叩きつけようと動作に入る。

それが後頭部を吹き飛ばす直前、截はとうとう石井の目の前まで到着した。

と同時になにやら危険を感覚が知らせてくる。赤鬼から感じられる脅威とはまた別の危険だ。截はそれが石井の設置した罠のものと瞬間に判断した。

——まずい、このままだと俺ごと……！

咄嗟にバックステップで急ブレーキをかけて下がると、截は赤鬼の股の下を抜けるように石井から遠ざかった。

「ふふふ、入ったな！」

石井は眼前の赤鬼の姿を嬉しそうに見ると、片手にもったワイヤーのような物を高圧電流が流れている柵に向かって投げた。

するとワイヤーを通して赤鬼の下に引いてある金属製の網に、一瞬にして数万ボルトの電流が流れ、その電子の刃を自由気ままに走らせた。

「——……ッグオオオオオオオオオオオオ！」

いきなり自分の体に走った強烈な痛みに思わず動きを止め、苦痛の叫び声を上げる赤鬼。

その体は細かく痙攣しながら黒い煙を立ち上らせている。恐らく重度のやけどを負っているはずだ。

「どっからあんな網を持ってきたんだ？」

截は一息つくとそんな疑問を口にした。

「オオオオオオオオオオオ……！」

赤鬼はその電流から逃れたいのか、物凄い音量で声を発し続けているが、電気によって体が網に接着させられてしまっているため、動けず煙を吐きながら腕を振り回すことしか出来なかった。

「どうやらさっきの奴ら、上手く電力を上げたらしいな。これならば十分赤鬼の動きを止められる」

あとは罖を解除して抗イグマ剤の注射を打つだけだ。

「何!？」

その瞬間、赤鬼の腕が柵を吹き飛ばしたのだ。

大本の柵が消えたことで、ワイヤーを通して電流を得ていた網はただの網へと戻り、赤鬼の拘束も自然と解ける。

——まずい……！

赤鬼から一番近い位置、建物の園長室にいた翠は、赤鬼の血走った視線が自分を睨んでいることに恐怖を感じ、思わず窓際から離れた。

野球のピッチャーのように腕を振りかぶると、赤鬼はそれを三階の翠目掛けて一気に伸ばした。

「嘘だろ!？」

その大きな腕は翠の立つていた周囲の全ての壁や廊下を粉碎し、外からみると爆弾で吹き飛んだような外観を建物に作り出した。

「うわっ！？」

間一髪でそれを避けた翠だったが、足場が吹き飛ばされているため自然と三階から落下を始める。

「翠！」

翠が骨の一二本を失うかと覚悟した時、截が滑り込むように真下に入り翠を受け止めた。

「ズシッ」　つという強い衝撃が二人の体を襲う。截は翠の体を支えきれずに一緒に地面の上に倒れこんでしまった。

「中央エリアに入る気なのか!？」

石井は赤鬼が今度は一階の壁を粉砕しようとしている姿を見て目

を見開いた。

普通のイグマ細胞を媒体にした化け物なら、目の前にいる自分たちを放つて態々（わざわざ）建物の中へ入るわけが無い。明らかにおかしい。まるで自分の意思を持っているかのようだ。

「……なるほど、デイエス・イレめ。知能を持ったまま身体機能や再生機能を上げる研究をしていたのか。赤鬼が暴走していなかったら、イミユニティーにとってはよくない状態になっていたな。この性能は使える。なんとしてでも我々の手に入れなくては」

改めて赤鬼を手に入れる事の重要性に気がつくと、石井は急いで截のいる方へ向き直った。

赤鬼が建物の中へ入ってはこちらも避けるのが厳しくなる。電流のダメージが完全回復していない今なら、まだ動きは鈍い。抗イグマ剤を打ち込むには今を逃しては他にない。まさに最後のチャンスだった。

「おい、いつまで抱き合ってる！ 早く起きろ、赤鬼が中に入るぞ！」

倒れこんでいる翠と截に向かって怒鳴りつける石井。

「煩い。腰が物凄く痛くて立てないんだよ！」

截は石井に聞こえないような小声で文句を言つと、翠の手を借りて立ち上がった。

「動きが大分のろくなってるな。今しかチャンスはなさそうだ」

翠がふらふらと壁に近づいている赤鬼に視線を向け、呟いた。

「翠、俺が注意を引きつける。その隙に後ろからこいつを打ち込んでくれ」

「何これ？」

「抗イグマ剤だよ、これを打てば仮死状態にさせられる」

「分かった、任せて」

翠は注射器を受け取ると頷いた。

それを確認すると、截は二本のナイフを抜きながら赤鬼に向かって突撃した。

赤鬼が気配に気づき、振り向く。

例えダメージを与えられないとはいえ、電流の効果からの回復を遅らせることにはなる。

截は先ほどと同様に赤鬼の腕をかわすと、踊るような綺麗な動きで刃を走らせた。

「なっ!？」

刹那、截の体は中を舞った。

截は超感覚を持っているにも拘らず、その攻撃に気づけなかった。自分が赤鬼の腕に吹き飛ばされた今この瞬間ですら、事態を理解出来てはいない。

一体誰が予想できただろうか。

赤鬼は截の感覚を利用したのだ。そう、截やキツネが好んで使う囷という技を使って。

危険を感じると言う截の感覚は、その危険度が強ければ強いほどはつきりと感知することが出来る。だが、それは危険度が弱い攻撃には気づき難いということを意味していた。

赤鬼はその特性を利用した。まるで超感覚者という存在を知っていたかのように。

右の腕を大きく振りかぶり、截の感覚の注意を最大まで引き付け、その隙に左の腕で押すように截を攻撃したのだ。

爪が胸を貫く直前、截は二本のナイフを本能的に前に掲げたおかげで、遠くに吹き飛ばされるだけで済んだ。しかしその衝撃は計り知れない。

全身に雷が落ちたような痛みと不快感が走り、目の前の景色が歪む。截は全く動けなくなっていた。一对一の勝負だったのなら完全な敗北と言える状態だ。

「ゴオオウウウウ……」

赤鬼はよろよろと歩を進めながら、草の上に横たわっている截に近づいていく。

「截っ!」

翠はすかさず最後の麻醉銃を打ち込んだ。それはしっかりと首本に命中したが、赤鬼は一瞬ぐらついただけで直ぐに動きを再開した。「まずい、このままじゃ本当にまずい……！」

截に対し双子の兄弟、自分自身のような感覚を抱いている翠にとって、この状態は耐えられるものではない。自然と興奮気味になっていった。

截を助けようにも麻醉銃の弾はもうないし、超感覚の無い翠では截のように赤鬼を真正面から引き付けることも出来ない。

また近づけば直ぐに気配を読まれるため、後ろから注射器を打ち込むことも出来なかった。

「くそっ！」

一か八か運にかけようと翠が黒柄刀の柄に手を伸ばしかけた時、あるものが目に入った。

「これは……！」

大地を踏みしめる音が聞こえる。

力強く、慎重に、威圧感のある足音が。

截はぼやけた視界で迫り来る赤鬼の姿を見上げた。

先ほど吹き飛ばされた時の衝撃の所為で体の自由が利かず、ただ視線を自分の命を刈り取るうとしている相手に向ける事しか出来ない。

感覚が無慈悲にも絶えず警告を送る。

お前は死ぬと。

『 庄 平 え え ー ！ ！ ！ 』

『 …… 分かってます。社会的にゾンビになろうと、俺たちはまだ生きています。生きていればチャンスはある。行動することが出来る。…… — 安形さん、ありがとう。おかげで、少しだけ楽になった気がします。一緒に…… 頑張りましょう 』

『 悟くんっー！ 』

截の頭の中に数年前の記憶が甦る。

何故自分がここに居るのか。

何の為に黒服に入っただのか。

何を成し遂げるために、自分の法的な死を認めたのか。

截は首からぶら下がっている小さな銀色の十字架を見つめた。

両親の不仲、悟の頃の思い出、そして庄平と鈴野の死苦という記憶の詰まった十字架を。

「まだ、死ねない。俺は…… まだ……」

截は気力で体を動かすと、必死に立ち上がろうとした。

自分にはまだやらなくてはいけないことがある。

成し遂げなくては行かないことがある。

その為にはここで死ぬわけにはいかない。

生を諦めるわけにはいかない。

自分は庄平と鈴野の思いを背負っているのだから。

あの二人の敵を討つまで、決してどんな大怪我を覆うとも安らかに寝ることは許されない。

絶対に。

截は健気とも思えるような様子で何とか体を持ち上げた。

だが、その瞬間、赤鬼の拳が視界を塞いだ。

「あぎやあああああつ!？」

突然大きな悲鳴が聞こえた。先ほどの指紋認識扉の方からの様だ。朝奈と本はそれが三上の声だと直感で分かった。

「三上さん!？」

廊下の中ほどで朝奈が立ち止まる。

「ただ事じゃない様子だったわよ……!」

本が怯えた表情を作る。

今の声は明らかに断末魔の叫びだ。

こ　ういった命を懸けたサバイバルの状況に慣れていない二人でも、三上の尋常ではない声から感情を読み取れた。

そう、恐怖という感情を。

「な、なんかかなりやばそうね。外もそうだけど……。朝奈さん、どうする?」

「三上さんが死んだとは限らないよ。た、助けに行こう」

「正気?　あの声を聞いたでしょ、あれはどう考えても殺されたわよ」

「でも、実際に見たわけじゃないし……助けられるなら助けるべきだよ」

もうこれ以上自分の関わった人間に死んで欲しくない。朝奈は恐怖を感じつつも道を戻りだした。

「ちょ、ちょっと!　外の赤鬼はどうするのよ?」

「もう電力は上げたし、截さんなら強いから大丈夫だよ。私たちは行っても邪魔になるだけだと思う。だったら先に地下に降りて脱出手段を探そう」

「行かない方がいいと思うけどなあ……」

本はそう言いつつも、一人で行動するのが怖いのか、朝奈の後を

着いて行った。

「截さんなら大丈夫、絶対に死ぬわけが無い……！」
朝奈は本心からそう信じた。

「……止まった？」

截は眼前で震えながら停止している拳を見つめた。
ようやく戻ってきた体の自由を活かし、赤鬼から離れその全様を
見る。

「ゴオオツ——オオオオオオオ……」

赤鬼は痙攣しながら何かを必死に耐えているようだった。

「あれは……」

截はその背に抗イグマ剤の注射器が刺さっているのを見つけた。

「翠？」

しかし周囲のどこにもそれを打ち込んだであろう人物の姿はない。
一体どうやって注射したというのだろうか。

「ゴガッ、ガガガ……ガッ……」

赤鬼は恨めしく截を睨むと、ふらつと倒れこんだ。

ドシンツという音と共に地面に横になる赤鬼。

どうやら抗イグマ剤の作用で完全に機能停止したらしい。

一般的な悪魔なら即死するような状態なのだ。当然といえば当然
の結果だろう。

まだピクピクと痙攣しているものの、赤鬼が目を覚ますことは無
かった。

「截、大丈夫か？」

建物の下の方から翠は駆けて来た。

先ほど落下した場所から動いていなかったらしい。

「翠、どうやって注射を？」

「ああ、これか。打ったんだよ。この麻醉銃で」

「は？」

「この注射器、病院なんかで使用されてる物と違って、麻醉銃の弾丸みたいに注射筒になってるんだよ。だからもしかしたら銃で撃てるんじゃないかとおもってさ、やってみたら出来た」

「やってみたらって、もし銃に対応してなかったら大切な抗イグマ剤を失ってたんだぞ？」

「あの時はそんなこと考えてる時間が無かったんだ。結果は出たんだ。もういいだろ」

翠は少しふて腐れたように言った。

「……キツネが居なくてよかったな。あいつが居ればお前は首だよ」

「は、あいつが私を無理やりあんたの相棒にしたんだぞ？ そんなことはありえないよ。ま、多少は嫌味を言われたかも知れないけど」

「そうだったな」

截は自分と翠が初めて会った時、そして翠と一緒に死にかけたときのことを思い出した。

「とにかく、これで赤鬼はもう行動不可能だ。あとは博士を探して朝奈さんと共に逃げるだけ。急ごう」

「ああ」

翠は頷いた。

「良くやった」

石井が反笑いしながら柵の吹き飛んだ場所を跨いで歩いてきた。

「これで約束は果たした。もう俺たちに用はないだろ。行っているのか？」

すかさず截が聞く。

「確かに、お前たちは十分良くやってくれた。見事な働きといえる結果だ。だが……」

その場の雰囲気が一変した。

「だからこそ、ここで死んでもらう」

「なっ!？」

突然石井はナイフを懐から取り出すと、それを截と翠に向かって突き出してきた。間一髪でそれをかわす二人。

「能面……やっぱりあんたは気に食わない女だな!」

翠は石井を睨みつけながら黒柄刀を一薙ぎし、その刃を伸ばす。

「翠——」

「截、あんたは疲れてるだろ。この女の相手は私に任せろ」

「分かった。気をつけろよ」

截は石井が構えているナイフを見たことがあった。

高圧冷却ガスナイフ。

柄の中に内蔵した高圧冷却ガスを刃の切っ先から噴出することで、どんな動物でも一撃で即死させることが出来るという代物だ。

一度その機能を使えば、マガジンを交換しないかぎり二度と使えはしないが、その一度を使われたらこちらには勝ち目が無い。

ある意味、これをもった人間を相手にすることは悪魔と戦うことよりも危険と言えるだろう。対人戦には絶対に使用してはいけない武器なのだから当然だ。

「利用だけ利用して捨てるのか。さすが天下のイミューニティー様だな」

翠があざ笑うように言う。

「ふふふ、お互い様だろ。お前の相棒だって私を利用していたぞ？ 上手くごまかしてはいたが何度もイミューニティーの内状や六角行成について探りを入れてきた。もっとも大した情報は教えていないがな」

「ふん、前々から気に食わないと思ってたんだ。丁度いい、ここで殺してやる」

「物騒なセリフだな」

石井はナイフを目の高さまで掲げた。

その瞬間、翠は黒柄刀を上段に上げ、真っ直ぐに切りかかった。相手が人間であることに何のためらいも迷いも無く。ただ、憎しみを込めて。

<第十三章> ”赤鬼” (後書き)

サファリパークなのに動物の悪魔が殆ど出ていないと言つことに氣づいた今日この頃・・・。

<第十四章>超感覚者とは

<第十四章>” 超感覚者とは ”

翠がナイフでは無く折りたたみ式の黒柄刀を使用しているのには、三つの理由がある。

一つは間合いの優勢、一つは非力を補う為。そして最後の一つはその高い技術を生かす為だ。

孤児だった翠は両親の死後直ぐに黒服の人間に拾われ、そこでその一員として育てられてきた。

当時まだ七歳だった翠にとって、黒服での訓練や知識の勉強は苦痛以外の何物でもなかっただろう。だが、根を吐かずに翠は必死に修行した。ひとたび泣き言を言えば「使えない人間」として処分されてしまうから。

黒服は実力至上主義の集団だ。どんなに性格が狂っていても、幼くても、常識を持ち合わせていなくても、与えられた仕事を完全にこなし、生き残れる力があればその存在を認められる。

これは逆に言えば一定の知能や判断力、適応能力、実力が無ければ、黒服には居られないことを示していた。

翠は生き残る為に他者を蹴落とし、欺き、落とし、腕を磨き、知識を吸収しあらゆることを行った。

その過程で身につけた最大の武器が剣術だ。ナイフでも短刀でも投撃術でもない、純粋な刀を振る技術。筋力的にどうしても他の男性メンバーに劣る翠にとって、サバイバルともいえる黒服の中で普通にナイフを使っているだけでは生き残ることなど出来ない。

だが、剣術を身に着けることでそれは変わった。

男性には無いしなやかな鋭く素早い動き、力任せに叩きつけるのではなく、相手の攻撃を流すように切り刻む。

この技術のおかげで、翠は黒服の中でも上位の後衛としてその地位を確立させた。

しかもそれはキツネの部下となった今、キツネ自身の技術と截の戦い方の影響により、黒服きつての白兵戦のプロと呼べるまでのものとなっていた。

一般的なイミュニティーやディエス・イレの人間は勿論、黒服のメンバーですら翠の攻撃を避けたり防ぐのは難を要する。それは超感覚を持つ截にすら言えるほどだ。

「食らえっ！」

翠はその技術を余ることなく活かし、音速のような素早い一太刀を振り下ろした。

避けられる訳が無い。

防げる訳が無い。

截 やキツネでも、ましてや黒服ですらないイミュニティーの人間が。

翠はそう確信していた。

カキーン！

だが、石井はいとも簡単にその翠の一振りを防いだ。

「なっ！？」

一発で勝負がつくと高を括くくっていた翠は、その石井の反応に驚く。「中々やるな」

石井は余裕のある顔を浮かべるとまではいかなかったが、かなりリラックスした表情で翠を見た。

「——っち！」

翠は続けて斬撃の雨を浴びせる。その様子はまるでマシンガンを連射しているかのようにだ。だが石井はその攻撃すらも完全に防ぎきった。

「さすが黒服のメンバーだ、大した腕前だな。普通の連中なら歯が立たないだろう。だが、残念だったな、私はイミュニティー総合監察官——下っ端とは違う」

言い終わると同時に今度は石井が翠を攻めだした。

突く、刺す、そういった動きに特化させた、フェンシングのような戦い方だ。一瞬でも翠が隙を見せれば、すぐにでもナイフに内蔵させた冷却ガスを発射させる気なのだろう。

石井の攻撃の全てが急所を狙っていた。

「翠！」

見かねた截が駆け寄ろうとする。

「――截、赤鬼とのダメージが抜け気ついてないお前が来ても、邪魔なだけだ。下がってろ！」

だが翠はそれを一蹴した。

「素直に手伝ってもらえばよかったものを！」

石井は口元に笑みを浮かべると、激しい突きを繰り出し続けた。翠はそれを何とか防ぐ。いつの間にかほぼ防戦一方になってしまっている。先ほどから翠は一切攻撃を出せてはいなかった。

「あつ！？」

石井の攻撃に気を取られていた翠は足元の窪みに気づくことが出来ず、後ろに下がった瞬間に大きく体制を崩してしまった。最悪のミスだ。

「残念だったな、あの世で後悔しろ！」

石井はナイフのトリガーに指を掛けた。高圧冷却ガスを射出させる気なのだ。

『ここがお前の新しい家だ。――いや、牢獄といった方が正しいかな』

『クスクス、君が各務翠か、よろしく。僕はキツネだ』

『俺にとって、お前は娘見たいなものだよ』

翠の頭の中に、これまでの人生の映像が一気にフラッシュバックした。死ぬ前頭の中に走馬灯が駆け巡るように。

「翠っ！」

その瞬間、状況を先読みしていた截が白柄ナイフを石井目がけ投げつけた。

それは石井がナイフのトリガーを引くよりも早くその手に命中し、ナイフを叩き落とした。

「何！？」

截が手を出さないと思い込んでいた石井は、完全に不意を疲れてしまったらしい。その攻撃によって思わず無防備になってしまった。

「うあああああー！」

翠がその隙を逃すわけがない。よろめかせた体を起こす勢いに乗り、翠は渾身の力で黒柄刀を切り上げた。

薄暗い廊下。

朝奈と本はゆっくりとそこを歩いていた。

地面に引きずられたように残っている血の後を追いつながら。

「三上の奴、こんだけ出血してんだから絶対に生きてないわよ。朝奈さん、今ならまだ悪魔も居ないし、戻りましょう」

二人の足音以外一切の音のない廊下に不気味さを感じながら、本は朝奈に呼びかけた。

「しっ、ちよっと待って」

そんな本のことを無視し、朝奈は感覚に集中する。
すると直ぐにノイズ交じりの映像が頭の中に浮かんできた。

この廊下を歩いている二つの影が見える。

一体は赤鬼の腕と足の大きさを反対にしたような奇妙な外見をしていおり、もう一方は血だらけで確証は持てないが三上のようなうだ。ピクピクと痙攣しているものの、まだ息はあるらしい。引きずられている途中に絶えず嗚咽のような声を漏らしていた。

「まだ三上さんは生きてる。今ならきつと助けられるよ」

朝奈は確信したように一人頷くと、先へ歩き出した。

「本気で先へ進むの？」

本は呆れたような顔をしつつもしつかりと朝奈の後を着いていく。しばらく進むと、二人の前に一つの扉が現れた。

DIES・IRA
ディエス・イレ

怒りの日、その日はダビデとシビラの予言の通り世界が灰燼に帰す日。
かいじん

審判者が現れ全てが厳しく裁かれる時、その恐ろしさは計り知れない恐怖をもたらすだろう。

「何かしらこれ？」

本はそこに書かれていた言葉の意味が分からず、首をかしげた。

「つ——……六角と白居……白居って誰？」

扉を見た瞬間、頭に入り込んできた長いキツめの癖毛の男の言葉。朝奈は東郷大儀の強い憎しみを感じ、思わず座り込んだ。

それを見た本が不安気に尋ねる。

「どうしたの？」

「な、何でも無い」

朝奈はイメージを振り払うと何とか立ち上がった。

今はこんなことに気を取られている場合ではない。三上の命が掛かっているのだから。

六角と白居という二つの人間のことはかなり気になったものの、それを頭から振り払うと、小さな手を伸ばし扉を開けた。

すると直ぐに大きな荒廃した部屋が目飛び込んでくる。

赤鬼が地上へ脱出したためか、天井にはかなり大きな穴が開いていた。

「ここには居ないみたいだね。先へ行こう」

朝奈は一通りその部屋の中を確認すると、先へ歩き出そうとした。だが、次の部屋の扉を見た瞬間、固まってしまった。

超感覚者研究室

「超感覚……ディエス・イレでも研究を？」

朝奈は部屋の中に悪魔がいる可能性も考えず、扉を押し飛ばすように開け放つと、一気にそこへ飛び込んだ。

すると機械工学実験室のようなその部屋の中に二人の人間が立っているのが目に入った。

「朝奈！」

その内の一人が驚いたように大声を上げる。

「——お父さん！」

朝奈は目に涙を浮かべて声の主、高橋志郎を見つめた。

大西を追っていた志郎はその後あっさりと撒かれ、一端自分を狙っている赤鬼から逃れるためにこの部屋へと戻ってきていた。三上が赤鬼に襲われたのはその時だ。

「そうか、悟くんに頼んで……しかし、あの冷静な悟くんがお前の我が儘に耳を貸すとは思わなかったよ」

朝奈との感動の対面の後、志郎は何故朝奈が截と逃げずにこの中央エリアへと侵入してきた理由を聞いた。

聞く前までは截が大怪我でも負って逃げられなくなったのかと思っていたが、いざ聞くと截自らが依頼内容を見捨てて自分を助けようとしていると分かり驚いた。

「お父さん、一緒に逃げよう。お父さんが何かを恨んでいたことは知ってた。例えばお父さんがまだ復讐をしたくても、ディエス・イレに心酔していても私は構わない。お父さんの命さえ無事ならいい」

「朝奈……」

志郎は愛娘を複雑そうな顔で見つめる。

「今……止めることは出来ない。僕は十分真実に近いところまできているんだ。何故お前の母さんが僕を選んだのか、イミユニティーが何をしようとしているのか、何故黒服が作られたのか」

「そんなことどうでも良いじゃん。例えばお父さんが復讐してもおば

さんは喜ばないんだよ？」

「分かってるよ、これは只の僕のエゴだ。でも、だからこそこです止めるわけにはいかない。僕は知ってしまった。六角行成の計画をこのままだとこの国に自由は無くなる。全ての人間が奴隷と化す世界がやってくる。『あの時』は気づけなかったけど、『彼』が僕に言ったのはこういうことだったんだ。僕は責任を果たさなくてはならない。『彼』のためにも」

「彼？」

——東郷大儀のこと？ いや、あの言い方は年下のことを言うてみたいだった。——……誰？

朝奈は志郎が突然わけの分らないことを口張り出したため、訝しんだ。

「高橋博士、メモリーの挿入終わりましたけど」

二人の横で本と共にパソコンに何やら打ち込んでいた雅子が、話しかけずらそうに志郎に声をかけた。

「あ、ああ。ありがとう雅子さん。ご苦労さま」

「雅子さん……？」

志郎の答えに朝奈ははっとした。

「私がどうかしたの？」

不思議そうに朝奈を見る雅子。

『雅子に、伝えてくれ……こんなこと、人前で言うのは抵抗あるけど……愛してるって……』

健太の最後の言葉が思い出される。

朝奈は今これを言うべきか迷ったが、いつ誰が死んでもおかしく無い場所なのだ。覚悟を決め話し出した。

「あなた、健太さんの恋人の雅子さんだよね？」

「え、そうだけど……健太を知ってるの!？」

健太という名前が出た途端、食いつくように朝奈に視線を合わせ

る雅子。朝奈はその様子にかなり胸を痛めながらきりだした。

「健太さんとは逃げてる途中で一緒に行動してたんです。優しくて強い人でした」

「でした……？　　どういうこと、あいつは今どこにいるの？　無事なの？」

朝奈の過去形の言葉に不安感を募らせた雅子は、連続して質問を浴びせてくる。

朝奈はその雅子の様子を見ると、健太の死を答えることが出来なかった。

「あの人は死んだわ」

代わりに本がきつぱりと大きな声で言い放った。

「そ、そんな！？」

信じられないといった表情で顔を歪ませる雅子。

きつと健太と再会できることを心の頼りにして今まで生きてきたのだろう。その健太が死んだとあつては穏やかな心情でいられるはずが無い。

いきなり大声で鳴き始めた。

「うわああああああ——……！」

「……今は放っておいて上げましょう」

朝奈が健太の最後の言葉を伝えようとしていると、本が肩に手を置きその行動を止める。朝奈は黙って頷いた。

「……雅子さんは僕がこの地下施設を歩き回っている間、監視カメラからの誘導やら何やらでいろいろと助けをしてくれた。少し休ませてあげよう」

志郎は本の言葉に同調すると、パソコンの画面に向き直った。

「朝奈、これを見てくれ。本当なら悟くに渡そうと思っていたけど、お前も超感覚者だからね。渡す前に知っておいた方がいい」

「何これ？」

「デイエス・イレが調べ上げたBASN計画の全様さ。この部屋で再現実験が行われていた」

志郎は真剣な表情でそう言った。

「BASN計画の詳細レポート（研究結果）」

山崎虎輔

タヌキこと鳥島宗助からの情報や他のスパイらの活躍により、超感覚者の全様がほぼ完全に明らかになった。

まずは我々技術者にとって一番重要な超感覚者の作り方をここに記述する。

超感覚とは一般的には空気を読む力だと言われている。

人間は他人に対し雰囲気などで性格の良し悪しを判断出来ることがある。また事故が多発している洞窟などに行くと、そこが事後多発場所だと知らなくても嫌な気分になったりすることもある。

これは別に勘や超能力などではなく、無意識のうちに相手の体の動きや表情などの動作、事故によって出来た道路の傷や凹みなどの細かい変化から判断しているだけだ。

超感覚とは言わばその延長で、人が気づき難い微小な周囲の変化や動きを敏感に気づく事の出来る力のことを言う。

簡単な言い方をすれば感受性が尋常でなくらい高い人間ということだ。

では、彼らが感じ取っている物とは一体何なのか。
今度はそれについてまとめてみる。

音が振動として物質を伝わっていくように、周囲の微小変化も何らかの影響を伝導する。超感覚者はその伝導をはっきりと感じ取っているのだ。

ある者は危険を。ある者は相手の感情を。ある者は過去に起きた微

小変化の軌跡を。

超感覚者の能力は一定の機能に定まらず、実に多種多様なものとなった。それには実は超感覚者の製作方法が大いに関係していた。

超感覚者を作る為には細かい条件がある。

その中でももっとも重要な条件は実験対象が母体の体内にいる胎児であると言っただ。

胎児は言わば五感による感覚を殆どシャットアウトされた存在であり、多くの感覚器官も未発達だ。つまり胎児の状態で超感覚者へと調整すれば、かなり高い確率で実験は成功する。

我々が得た情報によると、イミュニティーは自分たちの研究員の多くの女性に子供を孕ませ、超感覚者製作の実験を試みていた。しかし、何故かそのどれもが失敗に終わっている。この第一世代超感覚者の成功者は指の数ほども居ない。それは何故なのか。答えは簡単だ。

遺伝子である。

例えば超感覚者化の手術が成功しても、遺伝的にその素養が無ければ全て失敗となってしまう。超感覚者を作るには潜在的に、遺伝的にその超感覚と相性のいい人間を使わなければ決して成功することは無い。

そこでイミュニティーはかなり大胆な行動を取った。自らの組織と何の関係も無い一般男性を利用したのだ。

学校や会社などで行われる定期健康診断、病院の検査、それらに混ぜて超感覚者の親としての適正判断を気づかれないように強引に行った。

そして適した男性が見つかり、研究員や組織が強引に実験材料として利用した女性を送り込み、愛のない人工的な仕組まれた恋を育ませる。超感覚者を生み出す為に。

今存在する殆どの第二次世代超感覚者はこの成果ともいえるだろう。イミュニティーの無謀ともいえるこの行動は意外にも大成功を収めた。

我々もそれを真似し、相性のいい男女の身体で独自に超感覚者を製作しようと試みてみた。しかしがどういいうわけか上手くはいかなかった。

相性の問題ではない。どうやら手術事態に問題があるらしい。

超感覚者の手術とは簡単に説明すると「同調変化」を引き起こすことと言える。

超感覚に似ている感覚を持った蜘蛛や動物、偶然生まれた自然の超感覚者——所謂第ゼロ世代超感覚者などの体内電波、電流、調子を胎児の細胞に同調させるのだ。その過程は様々で媒体の細胞を一時的に胎児に埋め込んだり、特殊な機器で細胞同士をシンクロさせるなどといった、実に多くの手段がある。

我々はその段階でイミューニティーに劣っているらしい。

一体何が足りないのかは現在も分かってはいない。噂では例の「あの細胞」が関係しているという話もあるが、定かではない。

イミューニティーが何のために多大な時間とお金をかけ超感覚者を製作しているのかは分からないが、ろくな考えが元による行動でないことは確かだろう。

それを食い止めるため、突き止めるためにも我々が超感覚者を独自に製作することは必然事項だ。

東郷大儀代表の為に、我々は一刻も早くこの秘密を突き止める必要がある。

「……お父さんは、知ってたの？ お母さんがイミューニティーの間だった」

読み終わるとすぐに、朝奈は志郎にそう聞いた。

ショックや驚きもあったが、一度截と共に東職員用エリアでこれ

よりも古い報告書を見ていたため、何とか平常を保てたのだ。

「僕が和江の正体を知ったのは十五年前だ。こつちの世界で「白夜事件」と言われているあの時にね」

「それって……アヤメ叔母さんが亡くなったあの山火事のことだよね？」

「ああ、そうだよ。アヤメは……あの時に死んだ。でもそれは事故でも火事の所為でもない。イミユニティーに殺されたんだ。イミユニティーの研究員が漏らしたイグマ細胞があの中に拡散し、宿に止まっていた客を悪魔にした。——酷い最後だったよ。今でも毎日夢に出る」

「お父さん……」

「あそこで僕は全てを知った。イミユニティーの存在、黒服の存在、イグマ細胞の存在……。そして、和江が何故僕に近付いたのかも」

志郎はパソコンからメモリーを抜いた。

「和江はどうだったか知らないが、僕は本当に心から和江を愛していたんだ。最高の妻として、最愛の存在として何よりも大切に思ってた。でもそれがまさか演技だったなんてね」

「私はお母さんはお父さんのことを本当に好きだったと思うよ。二人で居る時何時もお父さんとの昔話を嬉しそうに話してくれたもん」

「和江と僕の間には愛があっても、一度完全に信頼を失えばそれを修復することなんて出来ないんだよ。僕は今でもあいつを愛している。でも、だからこそ長年騙されていた、裏切られていた悲しみも深いんだ。一緒にいれば居るほどそれは伴う。それに……僕がイミユニティーと戦う決意をしている以上、和江と結婚したままだと彼女の立場は危うくなるからね。ある意味、これがもっともお互いにとって一番幸せな結果なんだよ」

「そんなの……おかしいよ」

朝奈は悲しそうな表情で父、志郎を見つめた。

「朝奈が悲しむことはない。これは僕たちの問題だ。……この話はもう止めにしよう。他に聞きたいことは無いかい？ 自分は人間な

のかとか？」

「えっ、私って人間じゃないの？」

朝奈はあっさりと聞いた。

「ははは、随分軽く聞くね。安心しなよ、お前は真正銘人間だ。このレポートを読んだだろ。超感覚者は同調作用によって作られる。例えばその手術中に一時的に他の細胞を埋め込まれようと、それはあくまで情報伝達の媒介に過ぎない。身体的には殆ど普通の人間でしかないよ」

「そうなんだ……なんか截さんとかが凄いから、超感覚者ってみんな人間じゃないのかと思っちゃった」

「悟くんは朝奈とは過程が違うけど……身体的には彼も普通の人間の筈だよ」

「過程が違うって？」

「ああ、彼は……」

「ちよつと、博士！ これ脱出用の出口じゃ無い！？」

志郎の言葉を遮り、監視カメラの映像を見ていた本が叫んだ。志郎が映像をハックし、別のパソコンで見れるようにしていたのだ。

志郎、朝奈、雅子がパソコンを覗くと、大西が動力室の給水用タンクの後ろの壁に何やら細工をしている姿が見えた。隠し扉を開けるコードでも打っているのかもしれない。

「まずい、もうあそこまで……急がないと逃げられなくなる」

「どういうこと？」

本が志郎の言葉に聞き返した。

「あの大西のことだ。自分の後を追えない様にきつと何か仕掛けをするはずだ。隠し通路に爆弾を設置するとか」

「確かにやりそうだね」

朝奈は頭を抱えながら頷いた。

「急ごう、早くしないと本当に後がなくなる。朝奈、このメモリーを持っててくれ」

志郎は超感覚者レポートが入ったメモリーを朝奈に渡した。それ

を受け取りながら朝奈が聞き返す。

「截さんたちに知らせに行かなくていいの？」

「悟くんたちなら心配ない。彼なら自力で何とかするさ。さあ、行くよ！」

志郎は駆け出した。それに本と雅子も続く。

朝奈は截に伝えたいという気持ちがあつたためか、僅かに躊躇つたが、自分が大西の策を無効化すればいいと考え、直ぐに志郎の後を追いつづけた。

黒い刃。

いや、黒い羽と言った方がその様子を正しく示しているだろうか。翠の腕から真っ直ぐに伸びた黒柄刀は石井の右腕を垂直に切り落とした。

「っぐがあああああっ！？」

冷却式高圧ガスナイフを握り締めたまま飛んでいく己の腕を片目に、石井はその傷のあまりの痛みに倒れこんでしまった。

血液が小さな池溜まりを作り出し、その湧き出る本の傷口はどくどくと脈打ちながら、尚も赤い液体を吐き出している。どう見ても翠の勝ちだ。

「能面、残念だったな。お前のくだらない人生もここで終わりだ」
翠は勝ち誇った顔を作ると、黒柄刀を一気に石井の脳天目掛けて振り下ろした。

カキーンッ！

だがその刃が石井の眉間を貫く直前、白い柄を持った刃が飛び出し、それを受け止めた。

「何すんだ！」

翠は白柄ナイフで黒柄刀を受け止めている截を睨み付けた。

「この人はもう行動不可能だ。止めを刺すことは無いだろ。俺たちは殺人鬼じゃない。これ以上の攻撃は必要ないよ」

「馬鹿かお前、こいつの性格を知ってんだろ？　ここで殺しとかないと何をするか分からないぞ！」

「イミユニティーと黒服の間では任務外の個人的な攻撃はご法度だ。何も出来やしないさ。もししたら自分で自分の首を絞めるだけだ。総合監察官ともなればそんなことは熟知しているはず」

截は真っ直ぐに翠を見つめ話し続けた。

「それに、この仕事の後この人と出会う確率も殆ど無いだろ。黒服の戦闘員は五十人以上もいるし、この人はイミユニティーの高官だ。間違いなくもう会う事はないさ」

翠は黙って地面の上に転がっている石井を睨みつけた。

「翠」

截はそんな翠の瞳を見て妹をしかる兄のように名前を読んだ。

「……っち、分かったよ。どうせ片腕のこいつなんか相手にはならないしな。ES細胞である程度の修復は出来るけど、それなりにリハビリに時間もかかるし、仕様がな。イミユニティーの他の連中から仕事が来なくなってもこまる。今回は截に免じて見逃してやるよ」

誰もそこまで聞いていないのに、翠は長々と止めを刺すことを止めた理由を一人で話した。

「よし、じゃあもう行こう。朝奈たちがあれから戻ってこないのも気になる。俺の『カラカル』はどうした？」

「……西の中央エリア入り口に置いて来た。って、お前あれ持っていくのかよ」

「当たり前だろ？ 給料叩いて買ったんだ。こんな場所に捨てていけるか」

「ぶつ、確かにあれだけじっくり改造してたバイクをそう簡単には捨てられないよな」

翠は截が熱心にバイクを整備している姿を思い出して笑った。

「お前もそうやって笑ってれば可愛いのにな」

「う、煩い！ 早くバイクを取って来い」

截の言葉に翠は顔を赤くして怒鳴った。

二人が完全に消えたのを確認すると、木の影から一人の男が石井に近付いてきた。

オカッパの男、伊藤だ。

尚も苦しみ続けている石井の姿を見ると、伊藤は苦笑いしながら呼びかけた。

「……石井さん、だいぶやられましたね。今手当てします」

伊藤は足を赤鬼に挟られて居たため、片足でケンケンするように石井の横に移動する。

「あああ——ぐううう……伊藤かつ……」

苦しみながら伊藤を見る石井。

伊藤は日頃の恨みもあつたが、目の前で傷ついている人間に辛く当たる事は出来ない。素早く丁寧に石井の傷口を糸で縫いとめた。

「あ、ちよつまだ動かないで下さいっ!？」

縫っている途中に立ち上がろうとする石井の行動に驚く伊藤。

「煩い、お前は黙って作業を続けている」

手当てをしてきている相手である伊藤を一蹴すると、石井は携帯電話を取り出した。

「はあ、はあ……私だ。赤鬼を捕らえた。直ぐに紀行園の中にヘリを入れる。……はあ、ああそうだ。中央エリアだ」

紀行園の外で待機しているであろう仲間に連絡を入れると、石井は気力が尽きたように倒れこんだ。

「い、石井さん！」

心配そうに見る伊藤。

「くそっ……あの黒服め！覚えていろ。この腕の仕返しは必ずしてやる。だが……今回はもう無理だ。こんな体だからな……はあ、はあ……」

「赤鬼が手に入ったんです。十分な結果ですよ」

慰めるように伊藤が声をかけた。

ブルルルルルッ――

しばらくそのまま寝ているとヘリの音が聞こえてきた。赤鬼を運ぶためか、かなり大型のヘリだ。

ヘリが止まると中からは小太りの達磨のような男が出てきた。どうやら搭乗者はこの男一人だけらしい。

「……一人か……？」

石井はやや不審気に聞いた。

「ええ、申しわけありません。殆どの人員が水憐島に赴いていますので……」

「ふん、まあいい。さっさと赤鬼を運べ」

「はっ」

達磨のような男は素直に従った。

「必ず、必ずし返してやる……覚えていろ。キツネの人形どもめっ！」

達磨男と伊藤がワイヤーと板を使い、赤鬼をヘリの中へと運んでいく光景を見ながら、石井はそればかり考えていた。

強い憎しみと、怒りと、悔しさを抱きながら。

「行くわよ」

本が背後の人間たちを見て覚悟を決めたように言った。

志郎、朝奈、雅子がそれに頷く。

それを確認すると、本はゆっくりと隠し扉、動力室の給水パイプの後ろの扉を開けた。周囲の壁と同じような色合いに加工されているためぱっと見て分かることは無いが、近付けばはっきりと扉があると理解出来た。

朝奈は何故大西がこの扉のロックを解除したままにしていたのか若干不安感を持っていたものの、意を決して中へ踏み込んだ。

<第十四章>超感覚者とは（後書き）

もうかなり終盤なので、次回更新時の後書きで番外編の予告を入れたと思います。

最初は尋獄シリーズを一端止めようかと思っていましたが、そうすると考えていた展開やストーリーを忘れてしまうという重要かつ当たり前のことに今更ながら気づいた為、続けて番外編を書くことに致しました。

友が主要登場人物として出る水憐島事件と、安形が登場人物として出るスラム暴動事件の2本のストーリーを予定しております。

この尋獄2を読み終わった方は良ければそちらの方もごらんになって見て下さい。

<第十五章>自由の肖像（前編）

<第十五章>”自由の肖像（前編）”

最初は普通の子供だと思っていた。

何の変哲もないごく一般的な家庭の子供。

普通に遊び、普通に暮らし、普通に生きる。彼は自分の娘の人生をそう信じていた。

彼が大学からスカウトされ、研究機関に入って直ぐにその子は生まれた。

そのころはまだ世界的な地位など何も無いただの有望な研究員でしかなかった彼にとって、自分では手の届きそうにない高値の花のような女性と恋に落ちたことは、まるで夢を見ているかのようにだった。

それが仕組まれた恋だとも知らずに。

彼は娘に名前を付けた。

朝奈。

始まりを意味する朝と、疑問、つまり深い思量ある人間になることを願って奈、『自分で新しい道を考える』という意味だ。

その子は彼の願い通り立派に成長していった。

勿論、彼や妻の英才教育も影響していたのだが、多くは自分自身の力で高い学力、身体能力を身につけた。

彼はそれが当然のことだと思っていた。自分の「あの妻」の子なのだからと。

だが、ある日彼は知ってしまった。

娘の秘密を。

朝奈は確かに高い知能を持ってはいたが、通常では考えられない

ほどの知識や知るはずもないような情報を知っていることが多かった。

彼は朝奈が中学生になった頃に、遂にそれが不自然だと気づいた。知りすぎていると。

自分と妻が昨日の夜に部屋で行った会話すら知っているのだ。確かに朝奈は何度も自分たちの部屋に行き来することはあるが、決して深夜に来ることはない。絶対に知らないような内容を彼女は知っていた。

妻は全く気にする素振りを見せることなく寧ろ喜んでるように見えたが、彼にとっては朝奈のその言動は不気味なものでしかなかった。

研究者であつた彼にとって朝奈の言動の秘密、異常な知識、それらは一度疑問に持てば頭にくつ付いて離れることは無い。

盗聴器にでも興味を持つてふざけ半分で仕掛けたのか、何か悪霊が取り付いたのか、外で立ち聞きしたのか、超能力を身につけたのか、ありえないことまで彼は調べ尽くした。それは傍からみれば異常さを感じさせるほどだ。

そんな彼の話が伝わったのだろう。

ある日彼の元にとある情報が入った。政府の研究や裏情報に詳しい昔の大学仲間の男からだ。

その男の話を聞く中に、彼は超感覚者という存在を知った。何でも特別な感覚を持つ人間のことらしい。

彼は男の紹介でその内容を詳しく聞くために、偶然一緒になった妹のアイメと共に北海道のある研究所を尋ねることにした。

だが、あまりにも酷い吹雪のため、彼はその途中で沖田山荘という所に泊まった。研究所のかなり近い場所にある民間の宿だ。

そして、彼はそこで全てを知った。

自分の娘が何なのか。

妻がどういった人間なのか。

何故自分が呼ばれたのか。

「……何も居ないね。建物のどこにも研究員の悪魔がいなかったから、ここに居るのかと思っただけど……良かった」

朝奈は隠し扉の先にある短い階段と、その先の長い無地の廊下を見てホッとした。

それを聞いて志郎は気を引き締めるように言う。

「安心は出来ないよ、悪魔は鼻が利く。この建物に居た悪魔は僕やデイエス・イレの人間がほぼ倒したけど……時間が経てば臭いを嗅ぎ付けて外の悪魔が集まってくる。そろそろLV.3が出るくらい時間も経過しているし、出来るだけ用心はしていた方がいいね」

「どっち道急がないと行けないんでしょ？ さっさと行きましょう。立ち止まっている方が何か怖いわ」

二人の間を掻き分けるように本が進んでいく。

「それもそうだね……行こう、お父さん、雅子さん」

一番後ろをとぼとぼと歩いていた雅子の手を引くと、朝奈も階段を下りた。

たくま
遅しくなった。

志郎は数年ぶりに会った朝奈のその様子に感心した。

この紀行園での経験がそうさせたのか、それとも自分が家から離れた所為か分からないが、確実に朝奈の精神は強くなっている。

——自分の知らない中に、これほどまで……。

「苦労かけたね、朝奈……」

志郎はこれまでの自分の行動と朝奈のことを思い、すまなそうに下を向いた。

「何してるの？ お父さんも速く！」

不思議そうに志郎を振り返る朝奈。

「ああ、今行くよ」

志郎はその顔を複雑な表情で感慨気に見つめると、歩き出した。

自分が朝奈をここに呼んでしまった。

自分がこの世界に巻き込んでしまった。

自分の所為で苦労をかけてしまった。

朝奈の後姿を見ながら、志郎は何かあっても彼女を守ると心に刻み込んだ。

自分の愛する娘。

世界一大切な存在。

例え自分の命を犠牲にしようとも、絶対に死なせるわけにはいかない。

そう、何があっても。

四人の前に大きな両開きの扉が現れた。

何の変哲もないただ取っ手が付いているというだけの扉だ。

「開けるわよ」

本は背後の面々の顔色を確認すると、ゆっくりとそれを開けた。

扉の向こうに出て彼らが最初に目にしたものは、洞窟の工事現場のような開けた場所だった。壊れた機械や、何年も使われていないようなシャベルなどの道具が無数に散乱している。さらにその先には奥が全く見えない長いトンネルのようなものがあり、線路と一台のトロツコとその制御版が設置してあった。

「大西さん……！」

朝奈はトロツコの前で立ち往生している人物を見つけ、その名を大声で呼んだ。

大西は面倒臭そうに振り向く。

「まったく、しつこいね。年寄りをいじめてそんなに楽しいのかい」
「ちよと、何か仕掛けをしたのなら直ぐに解除しなさいよ。もう逃げられないんだから覚悟しなさい」

本は相手が老人であるということ、大勢で追い詰めたということ、とで元気になり、かなり強気にそう言った。

「あたしやー何も仕掛けてなんかいないよ。——もうそんな気なんか毛ほども起きないしね。殺したいのなら好きにしな」

「どうということ？」

朝奈は大西のあまりの変わりように驚いた。

「私が……この紀行園をディエス・イレに売ったのも、東郷大儀を裏切ったのも、全ては夫の文雄のためだった。ディエス・イレに入ること、で存続の資金を得、ここでテロを起こすことであの人の身を守ろうとした。……あの人はね、本当は癌で死ぬはずだったのさ。治療したくてもお金が無かった。もうここまでだと諦めていた。そんな時に、ここを売れば莫大な資金を渡すと東郷に持ちかけられたんだよ。断る方がおかしいだろ？」

大西は両手を横に広げ、かなり大げさなジェスチャーをした。

「私はその金を使いあの人を治療した。おかげであの人はだいぶ良くなったよ。ディエス・イレの医学的協力もあつたしね。例えば私のやっていることに反対しようとも、何時かは分かってくれると思っていた。何時かはまた愛し合えると思っていた。でも……もうあの人はいない。化け物になってしまった。私がディエス・イレに入ったのも、無事にあの人と共に生きるために東郷を殺させようとしたのも……すでに無駄になってしまった」

「東郷を殺させようとした？ それが二人で無事に生きる為？ わけが分からないよ！」

朝奈が疑問をぶつける。

「東郷はイミューニティーへの総攻撃を計画していたんだよ。そのためにここの優秀な人員を全て別のアジトへ移そうとしていた。あいつは勝つ気満々だったが、あたしにはそうは思えなかった。ディエ

ス・イレとイミュニティーじゃあその戦力さは明らかだからね。もしデイエス・イレが敗北すれば、今までのように高い施設での治療も、それを可能にするあたしの地位や立場もなくなる。だから……あたしはここでバイオハザードを起こすことで東郷の計画を阻止し、あいつを殺そうとしたのさ。あいつさえ死ねば紀行園を失おうともデイエス・イレが無くなることも、あたしの地位が無くなることもないからね」

「じゃあ、東郷大儀はこの紀行園に居たの！？」

「ああ、居たよ。いや、今はもう居ないかも知れないけど。後でお前の父にでも聞くんだね。それについてはあたしよりも詳しく知っているから」

「お父さんが？」

朝奈は大西の言葉に混乱しながら志郎を振り返った。それに構わず何かが吹っ切れたように大西は話を続ける。

「デイエス・イレの掲げる本当の自由なんて……あたしから言わせれば実に馬鹿げてる理想だよ。『あたしは貧乏なのにあの人は金持ちの子として生まれて不平等だ』、『あいつは政治家だから優先して手術を受けれたんだ』……そんな風に考えてる奴らをみると、あたしは反吐が出そうになる。『人は生まれもって同じ生き物なんだ、平等なんだ、だから貧しい人々を援助しよう！』……なんて叫んでる連中も同様さ、実に滑稽だよ。人は完全に平等、自由だからこそ金持ちになる者、貧しくなる者に分かれるんだ。努力の末大金を手にした男の息子が例え何の苦勞も知らなくても、それは自由によって父が稼いだ結果でしかない」

大西は一息ついた。

「全ては過去の行動に基づいた連続される『自由』、『平等』の結果なんだ。もし誰もが等しく金を持ち、家族を持ち、仕事をすればそれは苦痛でしかないだろうよ。それは共通という名に束縛されただけで自由とは全く対極に位置している。卑しい社会を良くしたい、貧しい人々を助けたいからこそ援助するのであって、自由平等だか

ら援助するわけじゃない。自由だからこそ選択により人生において失敗もするし、成功もする。今の社会はそのまま既に完全な自由平等の世界なんだよ」

「何分けわかんないこと言ってるのよ、こんな事件が平気で起きる社会が自由なわけないでしょ！」

本が怒ったように叫んだ。

「お前みたいな頭の足りない人間には分からないさ。この世は自由だ。だからあたしはこの災害を起こすことが出来たし、……だからこそ大切な夫を失ってしまった」

朝奈は大西の背後から「どんどんっ」と何かを叩く音を聞いた。

「何の音……？」

直ぐに視線を向けると、倉庫のような小さな小屋の扉が大きく歪み、音と遭わせるように段々とそれが大きくなっていくのが見えた。その音に一向にかまわず大西は最後のセリフを放った。

「そして、これも自由だからこそその結末だよ」

ガガアーンッ！

大西の背後にあった小屋の扉が勢いよく開き、そこから赤鬼もどきと化した文雄が飛び出した。どうやら大西が上手くそこに閉じ込めていたようだ。

人の死体でも使っておびき寄せたのだろう。かなりきつい臭いがそこから中に、急激にあふれ出し始める。

「ま、またあれ！？」

「きやあああああああ！？」

本と雅子は恐怖に歪んだ高い悲鳴をあげた。

赤鬼は真っ直ぐに大西に駆け寄ると、何の躊躇もなくその鋭い大きな片足の爪を突き出した。両腕で地面を支え、片足で攻撃するという奇妙な光景だ。

「ごふっあっ……！」

大西は自分の胸を貫いている巨大な足を無視し、口から湧き水のように大量の血を吐きながらじっと赤鬼の瞳を見つめた。

まるで文雄の面影を必死に探しているかのように見える。

そしてそのまま満足するように歪に微笑むと、その長い人生を静かに終えた。

「逃げるよ朝奈、トロツコまで走るんだ！」

志郎は赤鬼が大西の亡骸を投げ捨てた姿を横目に、朝奈の腕を強く握り締めると、一目散にトロツコ目掛け走り出した。

「ゴオオオオウウウ！」

赤鬼は逃げる朝奈、志郎、雅子、本に視線をすえると、その巨大な足を振り回しながら、小さな両腕を交互に動かし、恐るべき速度で四人に近付いていく。

「なっ、鍵が必要なのか!？」

トロツコの前まで辿りついた志郎だったが、制御版を操作し、トロツコを動かすには鍵が必要なようだった。鍵が無ければ赤鬼を撒くことも、この紀行園から脱出することも出来ない。

「——みんな、散らばってっ！」

赤鬼がかなり近くまで走ってきたのを確認し、朝奈は慌ててそう叫んだ。

「ゴガアッアアアッ！」

赤鬼の大きな足が振り下ろされる。

朝奈と雅子は左に、志郎と本は右にそれを直前でなんとかかわした。同時に大きく碎けるトロツコ前の地面。

——このままじゃ全員殺される！

朝奈は本能的にそう感じた。

「朝奈、こいつは純粋な赤鬼よりは再生能力に遅れをとる。間隔を

開けないで攻撃し続ければ倒せるはずだ。何か使えるものを探そう、こんな場所だ、きっと何か良いものがあるよ」

「分かった、お父さんも気をつけて！」

赤鬼を間にはさみながら、朝奈と志郎はお互いに呼び掛けた。

赤鬼は足を地面の凹みから引き抜くと、そのまま志郎と本の方へ体の向きを変える。そして高らかに不気味な大声で叫ぶと、その人間の頭を一撃で吹き飛ばすことの出来る巨大な足を突き出した。

「こつちだ！」

志郎はそれが本の脳髓を消し飛ばすより早く、彼女を引っ張り赤鬼の腕が直撃するのを避けさせると、この広間の右へ、右へと走り出した。

「雅子さん、あそこの赤鬼が閉じ込められていた小屋の中を探して私は工事用の道具を当たってみる」

雅子が返事をしないことにも構わず、朝奈は一方的にそう言うので、すぐに左端に散らばっている壊れた道具やトロツコなどの山の中へ駆け込んだ。

「ちよつ、朝奈さんつ——！」

雅子は不安そうに遠のいていく朝奈の背を見たが、しばらく呆然とした後に小屋の中の方が安全だと判断したのか、素直にそこへ駆け出した。

「くそつ……僕一人ならまだしも、一般人が多すぎる。これじゃ、守りきれない！」

志郎は唯一この場で悪魔との戦闘方法を学んだ人間として、他の人間を守るための責任感と恐怖感を感じていた。

「まったく、僕が生み出した化け物に殺されるなんて御免だよ！」

「志郎さん、あそこ！」

愚痴を言っている志郎の注意を突然本が引き付けた。どこかに向かって真っ直ぐそのしなやかな指を伸ばしている。

志郎がその指の先に目を向けると、小さな小さな洞窟のようなものが目に入った。洞窟というよりはただの凹みといった方が正しい

かもしれないが、三、四メートルくらいはありそうな深さと、縦横一メートルほどの幅を考えれば、洞窟でも問題は無いだろう。

志郎と本はそこに飛び込むように身を潜ませた。

その直後、赤鬼の太い足が二人目掛けて猛烈な速度で伸ばされた。

「きゃあああああつ!？」

本が絶叫を発する。

だが、赤鬼の足は辛うじて二人に届くことはなかった。長さが足りなかったのだ。

「ゴオオウツ、ゴウウオオツ!」

赤鬼は夢中で二人を引きずり出そうと、その足を洞窟の中で暴れさせたが、どうしてもそれが届くことはない。いくら頑張ってみても精々引つかき傷を与えることが精一杯だった。

「お父さん……!」

朝奈はそんな志郎らの様子をピンチだと勘違いした。遠くから、しかも悪い角度から見たことが影響したらしい。

急いで近くに散らばっていた物を組み立て、そしてそれを赤鬼に向けると、朝奈は一直線に全速疾走をしながら押し出した。

朝奈が押しているそれを簡単に言えば槍付きトロツコだ。広間の右端、制御版側から見て左端に置いてあった古いトロツコに、落ちていた木の破片やシャベルなどを紐で結びつけ、特攻用の戦車を作ったのだ。その中には無数の瓦礫やゴミなどを入れ、重さを上げている。これが命中すれば、幾ら赤鬼とて少しはダメージを受ける筈だ。

「お父さん逃げてー!」

朝奈は志郎達に逃げるように促すと、その押していたトロツコを力いっぱい赤鬼の背中に押し付けた。

「ズブリッ」っと鈍い不快な音と共に赤鬼の背から黒っぽい血が噴出す。どうやら括り付けていたシャベルがかなり深くまで刺さりこんだらしい。

「ゴアアアアアッ!？」

赤鬼と化した文雄はこれまで感じたことのない、身を裂くようなあまりの痛みに大声で鳴いた。

「お父さん、早く！」

朝奈はその隙に小さな洞窟の方へ行こうと試みた。だがその瞬間、赤鬼の巨大な右足が真後ろから朝奈の後頭部目掛けて繰り出された。前を向いている朝奈は全くそのことに気がつかない。完全に命中するコースだ。

「朝奈っ!？」

志郎は小さな洞窟の中からその光景を目にし、一瞬思考が飛ぶ。

「え!？」

だがその攻撃は命中しなかった。

奇跡的にも、先ほど朝奈が背中に差し込んだ槍付きトロツコの重さと痛みの所為で、赤鬼が体勢を崩したようだ。赤鬼の右足は朝奈の髪を霞め、志郎と雅子の隠れている小さな洞窟の入り口の上に当たった。

「——っ……お父さん！」

雪崩のように崩れ落ちる洞窟の入り口。朝奈はそれを見た瞬間思わず声を漏らした。

あの狭い洞窟のことだ。最悪の場合は志郎と本は瓦礫で頭を打ち死んでしまっているかもしれない。一刻も早く助ける必要がある。

しかし朝奈が二人を助けることは出来なかった。赤鬼が動きを再開したからだ。折角朝奈が付けた背中の傷ももう殆ど回復し、ほぼ無傷といった状態になっている。

奪取——逃げないと……殺される！

茶位色の鋭い瞳で睨みつけられ、朝奈は背筋に冷たい電気が流れるのを感じた。

「……っ——……!」

赤鬼が再び片足を上げた瞬間、朝奈は走り出した。ただ何も考えず、真っ直ぐに距離を遠ざけようと必死に足を動かす。

すると目の前に雅子が調べているはずの小屋が目に入った。

「雅子さん、開けて！　お願い早く……！」

朝奈は神頼みするように叫んだ。

「なに……？」

小屋の開けっ放しの扉から雅子が訝しそくにこちらを覗く。二人の視線が交差した。

これでとにかく一息つける。朝奈はそう安堵した。

バンッ！

だがその瞬間、雅子は怯えた表情でいきなり力強く扉を閉めた。

「な、何してんのっ！？」

——いくら赤鬼が直ぐ後ろにいてもそれはないよ！

朝奈は冷や汗を流しながら、扉を強引に開けようと腕に力を込める。しかしその行動の効果は全くなかった。その間も着々と迫る赤鬼。

「雅子さん、開けてえっ！」

朝奈は扉をどんと叩きながら涙声でそう言った。

「ごめん、無理よおお！」

だが、雅子は小屋の中でただひたすら涙を流すだけで、全く扉に近付こうとはしない。完全に開ける気がないらしい。

「ゴオオオオオオッー！」

赤鬼は小屋の前に立ち往生している朝奈を目掛け、渾身の蹴りを繰り出した。

——死ぬ！？

朝奈は恐怖と相手の攻撃の速度から、赤鬼の攻撃を見極めることが出来ず、咄嗟に頭を抱えるようにしゃがみこんだ。

赤鬼の足は朝奈の首を吹き飛ばし——……はしなかった。

運が良いことに、咄嗟にかわしたおかげで朝奈には掠^{かす}っただけで済んだのだ。

ドゴオオオオー！

しかしその代わりに、朝奈の背後の小屋の入り口は吹き飛んでいた。全体がまるで戦車の砲弾を受けたように歪に歪んでいる。

「きゃあああああつ!?!」

安全地帯だと思っていた場所がいきなり危険地帯となり、雅子は鐘の音のような大きな声を上げた。

「——っう!」

朝奈は赤鬼が再び攻撃を出すような素振りを見せたので、急いで小屋から離れ、赤鬼の左側へと逃れた。

そうなるとう当然赤鬼は自分に近い場所に居る雅子に狙いをつける。
「い、いや! 来ないで……!」

雅子は足をガクガクと震わせながら小屋の隅っこへ後退していく。それが自分で自分を追い込んでいることだと気づきもせず、ただ無我夢中で隅にへばりついた。

「そこじゃ逃げられない……早く前に飛んで、早くっ!」

「助けて……助けて! 誰か、お願いっ……!」

朝奈は何とか雅子を助けようとしたが、肝心の雅子はパニックを起こしているためか、朝奈の声など毛ほども耳に入っては居なかった。

朝奈は一か八かで赤鬼の注意を引き付けようとした。

だが、その瞬間。赤鬼の足が一気に小屋の中へ突き出された。

「何だここ? 超感覚研究室って書いてるから、どんなもんがある

かと思えば……ただの理科実験室みたいだな」

翠はつまらなそうに唇を尖らせた。

その後ろからはぜいぜいと息切れする声が聞こえる。

「……截、お前ホントそのバイク置いてけよ。邪魔でしかないだろ」
「今は邪魔でも役にたつかもしれない。何かあるか分からないんだ。はあ、はあ……もしかしたら隠し出口の先は道路があるかもしれないし」

「ふん、道路なんかあるわけないから。あんたはただそのバイクを捨てたくないだけだろ？ まったく、黒服のくせに物に執着しやがつて……だからあんたはいつまで経ってもキツネの下から抜け出せないんだ。少しはあいつを見習え。物も人もゴミクズみたいに捨てて行くぞあいつは」

「はあ、はあ、あいつの名前を出すな……胸糞が悪くなる。ただでさえ今日は石井に散々聞かされたんだ」

「はは、相変わらずキツネが嫌いなんだな」

心底憎そうな表情でバイクを押す截を見て、面白そうに翠は笑った。

「——ん？ 翠、その画面……」

截は翠の背後で光っているパソコンの画面を見つめた。志郎が最後にチェックしたまま電源が消えていなかったらしい。

「何だ？ 朝奈たちでも居たか？」

「いや、それだったら良かったよ」

「な、何だこれ！？」

画面を見た翠はゾツとしたように両手をビクンと体に近づけた。

「……どこかで見たことがあるような展開だな」

暗い、怒りに満ちた顔で画面を見つめる截。

『逃げろおおおおおっ！』

『まるで神話に出てくる悪魔そのものだな』

『下田さん、俺があいつらを食い止めます。その間にへりを飛ばし

てください』

『……鈴野……』

「悪魔LV.3が……来る……！」

截は静かに呟いた。

その視線の先にある画面には、無数の悪魔LV.3が中央エリアへと物凄い速さで走り込んでいる姿が映っていた。

まるで群れを成す魔物の大群のように。

餌に群がる蟻のように。

人、犬、猿、牛、鹿、ハイエナ……

おびただ夥しい数の悪魔LV.3が、この中央エリアを目指して集まりつつあった。

「雅子さん！？」

朝奈は叫んだ。

だが、一向に返事はない。まるで小屋の中にはもう「生きた」人間が居ないかのようだ。

赤鬼がゆつくりと足を小屋から引き抜くと、それは真っ赤な血で染まっていた。

「そんな……」

朝奈は思わず口を押さえた。

「グオオオオウウウウッー！」

嬉しそうな大声を上げる赤鬼。それを聞いて、朝奈は雅子が死んだと確信した。

その時だ。

「……うう……？」

「——雅子さん！？」

突然小屋の中から声が聞こえ、朝奈は我が耳を疑った。すかさず小屋の中に目を向けると、二人の人間がうずくまっている姿が見える。

雅子と三上だ。

雅子は赤鬼の足が腹部に命中したらしく、お腹から真つ赤な鮮血を流しながら必死にその痛みに耐えている。一方三上も、赤鬼にこの隠しエリアへ引きずり込まれた時に出来た怪我の所為で殆ど動ける状態ではないにしろ、まだ辛うじて生きていた。

純粋な赤鬼ではなく感染体のため、筋力が通常体より弱かったおかげかも知れない。

二人とも瀕死の重症には違いないが、間違はなくまだ生きていた。

「……ゴオオオオ……」

そのことに気がついた赤鬼は眉間に皺を刻み、不機嫌そうに小屋の中を睨んだ。

「——っ止めて！」

朝奈は西洋風ナイフを取り出すと、後先考えずに無意識の中にそれを赤鬼の左足に刺した。

「ぎゃあっ！？」

だがそんなものは勿論、赤鬼にとっては爪楊枝つまようじで刺されたような感覚でしかない。案の定、朝奈は思いつきり吹き飛ばされ、広間左のゴミ溜まりの中へ身を沈ませた。

結果として赤鬼の注意を引き付けられたことは良かったが、今度は逆に朝奈がピンチとなってしまった。

「ゴオオオオオオオツ！」

頭から湯気が出ているかのような恐るべき表情で、痛みから身動きの取れない朝奈に迫り寄る赤鬼。その迫力は尋常ではない。例え相撲取りのような大男の殺人鬼が両手に包丁を持って笑顔で走ってきて、ここまでの迫力はでないだろう。

体が吹き飛ばされた衝撃で動けない朝奈は、より一層その赤鬼の迫力に恐怖した。

死の象徴のような真つ赤な怪物が自分を目指して駆けて来る。

茶色の瞳に溢れんばかりの憎悪と苦しみを燃やししながら。

「……お父さん……！」

朝奈は目を瞑り、死を覚悟した。

数年間、全く連絡の無かった父からの連絡は心臓が爆発するのではないかと思うくらいビクリした。

生きていると知って本当に嬉しかった。

また会えると思ってわくわくしてこの紀行園に来た。

小さい頃の父との思い出がたくさん詰まっているこの紀行園に。

一緒にお土産を選んだシヨップングモール。

麒麟に餌を上げた草食獣ゾーン。

ライオンの顔が怖くてずっと父にしがみ付いていた猛獣ゾーン。

ありとあらゆる思い出が鮮明に頭に浮かんでくる。

あのときはいつも笑顔だった。

誰もが笑顔だった。

自分も、お父さんも、母も。

幸せだった。最高に楽しかった。

「何で……こんなことになったの……？」

間近に迫った赤鬼の全様を見ながら、朝奈は一筋の涙を浮かべた。こんな目に遭うためにここに来たはずじゃない。

また父に会えるから、また家族仲良く暮らせると思ったから。例え元通りの仲良し家族とまでは行かなくても、全員がそろって朝ごはんを迎えられると思っていたから。

だから、朝奈はこの紀行園に来たのだ。

嬉しさと、期待と、喜びと複雑な思いを胸にしながら。

ただ家族との再会を望んで。

それだけのために。

涙目のまま朝奈は顔を上に上げた。

「ゴオオオオオオオ！」

その瞬間、赤鬼は渾身の力で左足を朝奈の頭上に振り下ろした。

赤子の鳴き声が手術室に木霊した。

高い生き生きとした大声が部屋の隅々に溢れかえる。

そんな赤子とそれを大切そうに抱く女性を見ながら、彼は本当に嬉しそうにずっと笑顔で微笑んでいた。

自分と愛する妻の子供。

身を分けた自分たちの結晶。

大切な、大切な存在。

彼は女性に確認をとると、割れ物を触るような優しい、そつとした手取りで慎重に赤子を抱えた。

その感触はまるで大きなプリンを抱いているかのようだった。

少し力を込めるだけで壊れてしまいそうな、消えてしまうような、

そんな感覚が彼の腕に溢れる。

彼の様子があまりに慎重すぎたため、ベットに横になっていた彼女はおかしそくに笑った。

本当に幸せそうに、楽しそうに。

愛情に溢れた瞳で愛する夫と自分たちの子を見つめながら。

彼はそんな妻の笑顔が好きだった。

その笑顔を見るだけで疲れが吹き飛び、全身に暖かい光が満ちてくる。

いつかはこの子もこんな素敵な笑顔で笑うのだろうか。

彼は娘の成長した姿を想像し、ふにやけた笑顔でぼーっとした。

そして、彼は決断した。

何があってもこの笑顔を守ろう。たとえどんなに辛いことがあるうとも、決してこの子には暗い顔をして欲しくはない。

妻のように明るい笑顔で、毎日ずっと笑い続けて欲しい。

「絶対に、僕が守ってあげるよ」

彼は何度も言い聞かせるように腕の中の赤子へ呼びかけた。
自分の愛する、大切な娘に向かって。

「朝奈っー！」

赤鬼の足が空気を切る直前、志郎は朝奈を吹き飛ばした。

「——あっ！？」

朝奈はいきなり横から来た衝撃にビックリし、目を見開く。

「生きるんだ……！」

志郎は優しい微笑みで朝奈を見た。

そしてその直後、その顔は真っ赤な何かに上から押さえつけられ、

朝奈の視界から消えた。

あっさりと、あっと言う間に。

何の間もなく。

「い、いやああああああ！？」

朝奈の悲痛な悲鳴が広間に響き渡った。

<第十五章>自由の肖像（前編）（後書き）

Ⅱ 番外編予告Ⅱ

尋獄E1（DEGAUSS JAIL）

水憐島。

そこは巨大な水族館としての面を持つ人口島だった。

ここでアルバイトをしていた沖田悠樹はある日双子の弟である敏と父大助を呼んだ。バイト中に手に入れたチケットをあげたのだ。

だが、彼は知らなかった。それが自分達の運命を大きく変えてしまうことに・・・。

悪魔ではない全く新しい感染生物、新たな敵、セカンドブラックドメインの存在。

バイオハザードが発生したこの島で、果たして彼らは生き残ることが出来るのだろうか。

イミユニティーの国鳥友も参戦し、ストーリーは大きく進んでいく。尋獄2と同時に起きていたもう一つの尋獄2、是非ご覧下さい！

尋獄E2（BLOODY STORAGE）

誰も受けることがなかった身元不明の男からの依頼。

黒服のメンバー安形はそれに興味を持ち、指定されていた場所へと赴いた。

だが、一方で他の黒服メンバーにも別の依頼が入っていた。それは安形の依頼主の捕獲という仕事だった。

黒服対黒服。

スラム街で発生する謎のバイオハザード。

悪魔ではない”何か”に感染した襲い来る”人間の集団”。

依頼主を助けようと奮闘するうちに、安形は黒服の闇、依頼主の本当の正体、そして白居学という男の存在を知るのだった。

尋獄4の重要なつながりとなる話です。こちらも見てください。
一応同時連載を予定しております。

＜第十六章＞自由の肖像（中篇）（前書き）

次は後編と思いきや、まさかの中篇です。

<第十六章>自由の肖像（中篇）

<第十六章>”自由の肖像（中編）”

大量の瓦礫を掻き分けながら、志郎は洞窟の中から這い出た。赤鬼の攻撃によって崩れた部分は洞窟の入り口付近だけだったらしい。本も志郎もどこにも怪我はなくほぼ無傷の状態で外に出ることが出来た。

周囲を見回す志郎の耳に聞きなれた声が聞こえてくる。

「雅子さん、開けてえっ！」

朝奈の叫び声だ。

それを耳にした瞬間、志郎は無意識の中に駆け出していた。

「朝奈ー！」

這い出したままの埃まみれの体に一切構うことなく、ひたすら一心不乱に足を動かす。

「止める化け物、朝奈ー、朝奈ー！」

目の前に朝奈とそれに近寄る赤鬼の姿が見えた。赤鬼は今にも足を振り下ろそうとしている。

志郎は何も考えず飛び出した。

渾身の力を込めて朝奈を赤鬼の攻撃から遠ざける。

「えー？」

「生きるんだ……！」

志郎は自分の最後を悟り、悲しさと悔しさ、朝奈を助けること出来た喜び、それらの入り混じった複雑な表情で微笑んだ。

そしてその瞬間、赤鬼の大きな足が志郎の背中に振り下ろされた。「い、いやあああああ！？」

僅かな蛍光灯の明かりに照らされた広間に、朝奈の悲痛な声が木

霊した。

「ギユアアアアッ！」

紀行園中央エリア一階。

今そこに無数の悪魔が溢れていた。

そのどれもが人間とか離れた姿をしている。

S字のように曲がった背骨、四足動物のような逆間接の形を作った腕と足。そして大きな丸サングラスを掛けているかのようなギョロツトした、眼球の浮き出た血走った赤い目。その頭部の額は頭蓋骨が皮膚を突き破り、まるで角のように盛り上がっている。また耳は先が鋭く尖り、後頭部も骨盤のような形に肥大化し、背中には鬣のような真つ黒の毛が生えていた。

普通の悪魔や四足悪魔よりも一層黒に近い色になった悪魔LV3の集団だ。

そしてまさに今、地下施設へと通じる非常階段の裏の開いたままの扉をその内の一匹が見つけた。

「ギユワツ……！」

その悪魔は短い声を発した。

声を合図にするように他の悪魔たちも一斉に扉に目を向ける。

何かの気配を感じ取ったのだろうか。

それとも生存者の臭いを嗅ぎ取ったのだろうか。

悪魔たちは同時に一気にその扉目掛けて走り出した。

志郎は自分の背に圧力が掛かるのを感じた。

長年の経験から、これまでの数々の戦いから、志郎はその瞬間咄嗟に腰を回転させ、赤鬼の足を受け流すように身をくねらせた。

その動作がかなり速かった所為か、朝奈の目には志郎が押しつぶされたように見えた。だが、志郎は生きていた。赤鬼の攻撃を辛うじてかわしたのだ。

「朝奈、走るんだ！」

志郎は起き上がりながら朝奈の肩を掴むと、強制的に彼女を走らせた。

「え、お父さん！？」

朝奈は死んだと思った父が突然元気に立ち上がり、しかも自分を掴んで走り出したことに我が目を疑った。

「朝奈、大丈夫かい。逃げるよ！」

緊張感あるしつかりとした目で見つめてくる志郎。それを見た朝奈はすぐに現状を理解した。

「雅子さんと三上さんが……！」

「後だ、今は赤鬼をどうにかしないと、どっち道全員死ぬよ。手を貸してくれ」

「何か良い案でもあるの？」

「……——あれを使おう！」

志郎はトンネルの左に止まっている、トラック二台分のような大きな機械を指差した。円柱状の本体の先に、扇風機の羽のような無数の刃が付いた形をしている。俗に言う掘削機というやつだ。

「あれ、操縦出来るの？」

「操縦したことは無いよ。でも、構造理論は知ってる。何とかなるさ！」

「何とかなるって……はあ、じゃあ私は赤鬼をあれの前にまでおび

き寄せればいいんだね？」

走りながら朝奈は不安そうにそう聞いた。

「ああ、頼むよ。もう動けるのはお前と本さんしか居ない。二人で何とか赤鬼をあれの前にまで引き付けてくれないかい？」

「……動けるかぎりはやってみる」

上手くいくとはあまり思えなかったが、ただ逃げているよりは良いと朝奈は判断し、頷いた。

「すまない。じゃあ、頼んだよ。僕はあれの操縦桿を探す。お前は直ぐに本さんと合流してくれ」

「分かった」

その会話を最後に、志郎はそのまま真っ直ぐトンネルの方へ、朝奈は先ほどの洞窟の方へ向きを変え足を速めた。

いい加減逃げることも限界だ。恐らくこれが生き残る最後のチャンスになる。朝奈は意を決して走った。

「朝奈さん、こっち！」

本がこの広間の入口の前から朝奈に手を振りながら叫んだ。どうやら一端上に逃げてやり過ぎす気らしい。

確かに良い案だが、朝奈はその意図を組むつもりはなかった。

志郎から聞いた話では時間が経てば経つほど悪魔はこの中央エリアに集まってくるとのことだ。もう隠れている時間なんか全くないし、上に行けば悪魔の大群がいる。

例えば悪魔が赤鬼より弱くても、大軍となるとその脅威はたった一体の赤鬼とは比べ物にならないほど危険だ。

朝奈はどうしても今ここで決着をつけたかった。

「本さん、もう上には行けないんだよ。あれで赤鬼を倒すから手伝って！」

朝奈は掘削機を顎で指した。

「あ、あれえ？ちゃんと使えるんでしょうね！？」

「今お父さんが操縦桿を探してる。私たちで赤鬼をあれの前まで引き付けよう」

「引き付けるって、あんな狭い所に？」

本は朝奈の言葉を疑った。

掘削機はトンネルとトロツコ制御盤の左横、それも左の壁際を向いて置いてある。赤鬼をあれて倒すには壁際の方へ向いているドリルと壁の間に赤鬼本体を引きつける必要があった。

簡単に言えば、掘削機は長方形の空間の左上の隅に、左向きに置いてあるという状態だ。

確かに自分たちを囲にしておびき寄せることは可能だろうが、一度あそこに入れば赤鬼と壁に囲まれ自分たち自身が逃げなくなり、もろに掘削機のドリルの餌食になってしまう。

本は朝奈が正気でないというように強張った表情を浮かべた。

「ドリルの横に僅かだけだけど隙間があるの。そこに隠れれば巻き添えを食うことはないよ。本さんが嫌だって言うのなら……私だけでやる。本さんはどこかに隠れててね！」

朝奈は本の心情を察し、そう言った。

それを聞いた本は自分のプライドが許さなかったのか、怒ったように声を荒げた。

「わ、私もやるわよ。二人に分かれたら私の方に赤鬼が来るかもしれないし、それに……もうどこにも隠れる場所なんてないから」

「ゴオオオオオー！」

「来た！ 本さん、じゃあ行こう！」

朝奈は自分を追ってきた赤鬼の姿を確認し、立ち止まっていた足を再び動かし始めた。本も慌ててそれに続く。

この作戦が失敗すればもう自分達に生き残る術は無い。

これは最後の賭け。

最後の希望。

最後の命綱だ。

朝奈は唇を噛み占め、目の前の掘削機を見据えた。

空調管理室前の廊下。

隠し出口へと通じる動力室の二階上の場所。

截と翠はそこで不快な鳴き声を聞いた。

「……………アアア……………」

すかさず翠が反応する。

「今……………何か聞こえなかったか？」

「……………聞こえた。多分、悪魔LV.3だ。くそっ、もうこんな所まで……………」

截は脂汗を流しながら答えた。

「……………ギユウウォオオオオ……………」

段々と声の音量が大きくなってくる。

「もうそこまで来てるぞ、截バイクに乗れ！」

「え、こんなところで？」

翠のリクエストに驚く截。

まだ隠し出口までは二つの階段とそれなりの数の部屋がある。それら全てをバイクで通過するなんて並みの腕では不可能だ。

だが翠はそんな事などどうでもいいと言うように、勝手にバイクの前部席に跨った。

その瞬間、一匹の悪魔LV.3が二人の背後の扉を開け放ち廊下に飛び出した。その姿を見た截は思わず驚く。

「LV.3！？ 速すぎる。まだ事件発生から一日だぞ！」

「デイエス・イレがイグマ細胞の改造でもしたんだろ。とにかく今は逃げるぞ！」

感覚が強い危険を体に送る。

截はまだバイクに乗っていないにも拘らず、アクセルを握るとバ

イクを走らせた。そのままバイクの横にぶら下がつて運転を続ける。
「ギユウウアアアアッ！」

悪魔LV3は二人を見つけると嬉しそうに高く、それでいて低い声で雄叫びをあげ、猛スピードでバイクを追いだした。

「翠。飛び乗るぞっ！」

截は叫びながらバイクの側面を蹴り、鮮やかにバイクの後部座席に腰を乗せた。

その直後に目の前に急な傾斜が現れる。階段だ。

「うつ——……ああああああ！？」

截と翠はハモリながら同時に大声で叫んだ。

「ゴオオオウウアアアアアー！」

赤鬼はかなりイラだった声で大きく鳴いた。

「あと……十メートル……間に合って……！」

背中を襲う異常なプレッシャーと圧力に恐怖感を抱きながら、朝奈は直線上の掘削機を目指した。

息は荒く、目は充血し、額からは夥しい量の汗が流れ落ち、全身から血が染み出している。

仲間の死。

自分の命の取り合い。

父の安否。

この短い間に一体どれだけの恐怖を感じただろうか。

どれだけの悲しみを背負っただろうか。

普通なら気が狂うかもしれない。

絶望するかもしれない。

普通の女子高生が決して体験しないような異常な苦しみを味わってきた。

何度も死にかけ体中が傷だらけになった。

目が赤く腫れもう涙が出ないくらいに泣いた。

だがそれでも朝奈は諦めなかった。

父に会いたかったから。

一緒に帰れたかったから。

また家族みんなで笑い合いたかったから。

その思いが朝奈を強くした。

ここまで生き残らせた。

頭の良さでもない、運動神経の良さでもない。

その意思の強さこそが朝奈の最大の生存力だった。

「……はあっ……はあっ！」

前を見据えたまま朝奈は唇を強く結び、歯を噛み締めた。

絶対にこの機会を逃すわけにはいかない。

絶対に失敗するわけにはいかない。

赤鬼を倒す為に。

生きて帰る為に。

朝奈は走った。

あと……ハメートル、七、六……四……

徐々にその距離が近付いていく。

……三メートル、二メートル……一メートル……

とうとう掘削機の間を通過する。

朝奈は志郎のことを信じ、最後の一步を踏み出した。

掘削機と入り口から見て正面の壁の隙間、そこに二人は自分たちの身を滑り込ませる。それと同時に赤鬼も掘削機の正面に飛び出す。

あとは志郎が操縦桿の始動スイッチを押すだけだ。スイッチさえ押せれば勝てる。この悪夢を終わらせることが出来る。

「神様……！」

二人は抱き合うようにその隙間で体を寄せ合った。

「ゴオオオオオツ！」

だが、無常にも赤鬼は傷一つ無い状態で二人の目と鼻の先に立ち、その大きな、大きな右足を振り上げていた。

「そんな、——お父さん!？」

朝奈は絶望し、隙間から父の姿を探す。

しかし志郎の姿は影も形も無い。上から降りてきた悪魔に殺されたのだろうか。それとも二人を囲にして逃げたのだろうか。

朝奈の頭には無数の考えが一瞬で浮かんでは消えていった。

そしてその答えを知る間もなく、赤鬼が最後の命を刈り取る攻撃を繰り出しに入る。

真っ赤な斧。

真っ赤なハンマー。

真っ赤な鉄槌。

その巨大な足はまさにそういった言葉のままに、二人の頭を砕き、かち割り、その命を奪い去ろうとする。

非情に。

あっさりと。

機械的に。

それは一瞬で振り下ろされた。

ヴィイイイイイイイイ……

金属音が鳴り響いた。

円形の大きなドリルがゆつくりと回転を始める。それがあまりに静かだったためか、誰一人その事実には気がついてはいない。

それは次第に大きく、速く、力強く回転していく。

ありとあらゆる土を掘り、岩盤を砕き、人が通るための道を生み出してきた大きな刃が、その機能を数年ぶりに開始した。

赤鬼の足は朝奈と本の頭に命中する一歩手前、横から突然飛び出したドリルに弾き飛ばされた。

「ゴアアアッ!？」

渾身の力を込めた足が簡単に退かされ驚く赤鬼。だがその事実について考えている時間は無かった。

硬い大きな扇風機のような刃が、全身を押しつぶすように迫り来る。

ドリルに食い込むかのように壁に押し付けられると、赤鬼に出来ることはもう無かった。

そう、ただ死を待つだけだ。

最大の武器であり、自身の象徴でもある大きな足が無残にも醜く歪められ、引きちぎられるように崩れていく。

地面を支えていた筈の二本の腕はグチャグチャに折れ曲がり、もはやそれが腕だったのかすら分らない形になっている。

高い再生能力もここまで連続して繰り出される攻撃には全く効果が無いようだ。

「ゴアアアアアアアアアッ!？」

グロテクスな光景をかし出しながら、赤鬼の体はどんどん、どんどんバラバラになっていった。

オイルのような赤黒い血液が、飛沫を撒き散らしながらあちこちに飛び跳ねる。

摩り下ろされたような肉片が中を舞う。

高い音を奏でながら骨が粉々に碎ける。

「……アアアアアアア……」

まるでミキサーの中に入れられた肉のように、赤鬼の体は分散した。

朝奈が目を開けたときには、既に壁に埋まっている掘削機のドリ

ル部と、無数の肉片が散乱している以外、動くものは一つも無かった。

赤鬼は完全に死んだのだ。

それを見た二人は糸が切れたようにその場に崩れ落ちた。

——助かった！ これで脱出できる……！

安堵感と共に生きてこの紀行園から出れるという希望が湧いてくる。朝奈は尻餅を付いたまま本に微笑みかけた。同じような笑顔を本も返す。

これまで張り詰めていた緊張や恐怖感から開放され、二人とも一気に力が抜けたのだ。

「朝奈」

志郎が片手で大きなリモコンのような物を抱えたまま歩いてきた。どうやらそれがこの掘削機の操縦桿らしい。

朝奈の無事を見てほっと溜息を漏らすと、志郎は間を置かず二人を急かしだした。

「さあ、二人とも行くよ。休んでいる暇はない。まだ悪魔が沢山いるんだ。奴らがここに来る前に何とかしてトロツコを動かさないと」その言葉に忘れていた事実を思い出す二人。

「そ、そうよ！ トロツコの鍵が無いんだった。これじゃ……逃げられないじゃない！」

本がバツと立ち上がりながら声をあげる。

「ああ、雅子さんと三上君も余り長くは持ちそうに無い。僕たち三人で何とか鍵を見つけよう。この場所であればいいんだけどね……」

志郎は眉に皺を寄せながらそう言った。この状況で小さな鍵を見つけることは絶望的だ。誰しもが暗い気持ちになった。

だが数分後、意外にも鍵はあっさりと見つかった。

三上が持っていたのだ。どうやら園長室に有ったらしい。

「へへ、あの……園長室に居た男が……大西を逃がさないように隠してたんだろうな。ラッキーだったぜ……！」

傷の痛みの所為か途切れ途切れに話す三上。大怪我なのにも関わらず、意識ははっきりしている。

「とにかく早く鍵を入れて。もうこんな所一秒も居たくないわ」
本がトロッコに乗り込みながら言った。

トロッコの中は既に雅子と三上が寄りかかるように座っているため、殆どスペースが無い。本はかなり動きずらそうにトロッコの先頭部に陣取った。

「お父さん、私が鍵を入れるから先に入ってて」

「ああ、任せるよ」

朝奈は父の体の事を思い、トロッコには乗らずに制御版の前に立った。その間に志郎はトロッコの中央部に足を移動させる。

「え」と……これがあれで……これが……」

感覚の助けもあり、朝奈は鍵を入れると直ぐに制御版を完璧に操作した。ガクンツという音と共にトンネルの中へトロッコが動き出す。

「朝奈さん、早く！」

トロッコの速度が思っていたよりもかなり速いので、本が慌てて叫んだ。朝奈は志郎の手を掴むと、跳び箱を跨ぐように鮮やかにトロッコの中に飛び乗った。

……ダダダダダダ……

突然何かが階段を駆け下りてくる音が聞こえた。音の様子からしてかなりの速度のようだ。

「何だ！？」

志郎は用心しながら、既に遠ざかりだしている広間の入り口を見

つめた。

大きなバウンド音を響かせながら、一台のバイクが飛び出す。真つ黒なツインアイのバイクだ。

「截さん、翠さん！」

その搭乗者を見た瞬間、嬉しそうに朝奈は声を上げた。

「朝奈！」

朝奈の生存を知れて截は安心したように口元を緩めた。

「截、来たぞっ急げ！」

そんな二人に構わず、翠は黒く長い髪を靡かせながら珍しく怯えたように叫んだ。

朝奈たちは一体何故翠がそこまで切羽詰ったような表情をしているのが理解出来なかった。トロツコは動いた。だから後はただここから出れば良いだけだ。何に怯える必要があると言っのだろうか。ギョウウウオオオオオオオッウ！」

その疑問はあっさり解消された。無数の悪魔の声が鳴り響いたからだ。

「速い！ もう来たのか」

志郎は広間の入り口から飛び出してくる悪魔の集団を見ながら毒付いた。

トンネルを高速で走っているトロツコの真後ろに翠がバイクを付けると、截は志郎の顔を見た。

非常時のため二人ともただ頷くように顎を下げ、無言で挨拶を交わす。

「截、代われ。私があいつ等を撒く！」

翠は片手でバイクを操縦しながら、もう片手で腰の黒柄刀に手を当てた。

それを見た截はあることを思い出しこっ言った。

「いや、俺が悪魔の相手をする」

「は？」

截の言葉に翠は疑問の目を向ける。

『あ、あと一つ。これからは悪魔LV・3に会う機会が増えると思うが、出くわしたら戦わないでとにかく隠れる。あれは三本腕の幼体並みの強さがあるからな。まともに戦っても今のお前じゃ相打ち覚悟でもない限り勝てない』

「俺にやらせてくれ」

——今の自分なら悪魔LV・3とも戦えるはず。

截は三年前、悪魔LV・3との戦闘から逃げたことを思い出し、そう静かに言った。

截の気持ちを察してくれたのだろうか。翠は黙って運転に意識を戻した。

すぐに截は二本のナイフを引き抜き、悪魔の大群に備えた。

あの時はただ時間が過ぎるのを待つことしか出来なかった。

ただ怯えて逃げるしかなかった。

でも今は違う。

自然と截の腕に力が籠る。

「来い！」

高速で走り続けるバイクの後部座席で、截は強い眼差しを追って来る悪魔の集団に向けた。

先頭の悪魔LV・3が押し掛かるように飛び出す。截はそれを確認すると、悪魔の腕が自分に当たるよりも速く先にその腕を切り裂いた。

「ギューウアッ!？」

先頭の悪魔LV・3は截の極限まで集中された動きに反応しきれず、あっさりとその腕を吹き飛ばされ、驚きの鳴き声をあげた。

高速で移動する中四肢の一本を失うことは致命的だ。その悪魔は見る見るうちに後ろに見えなくなっていく。

だが今度はそれと同時に追いつがる集団の中から三体の悪魔LV・

3が飛び出してきた。

「——っ、しまった！」

截は自分を目がけて突撃してきた悪魔LV、3に気を取られた事で、バイクの左右を通過していく二匹の悪魔LV、3を止めることが出来ずに先へ、つまりバイク前方を走っているトロツコの方へ行かせてしまった。

「この！」

志郎は汗を流し、横から強襲してくる悪魔LV、3を殴り飛ばそうとしたが、当然そんな攻撃が当たるわけではない。悪魔LV、3はあっさりと拳をかわすと、トロツコの中に飛び乗り志郎に覆いかぶさった。

「お父さん！」

「朝奈さん、後ろっ——来てるわよ！」

朝奈の背後、トロツコの手すりに飛び乗った悪魔LV、3を見て本が叫んだ。

「ギユウウオアアア！」

「きゃああっ!？」

朝奈は背中から思いつきり悪魔に突き飛ばされ、座っている雅子の上に倒れこんだ。

「痛たっ……!」

その衝撃に雅子は苦しそうに声を漏らした。

「博士、朝奈……——くそっ!」

——すぐにこの目の前のLV、3を殺して二人を助けないと……一瞬でやるしかない。

截は二本のナイフを持ったまま、ボクシングの構えのようなポーズを取った。

悪魔LV、3の腕力は当たり方によっては一撃で人間の頭蓋を粉碎する。これはまさに一瞬の勝負だ。

截は左腕をコンパクトに動かし、ほぼノーモーションで鋭い隼のような突きを繰り出した。

だが、それは簡単に避けられてしまった。恐るべき反射神経といえるだろう。悪魔LV3は截が突きを出してからにも関わらず、完璧にそれを避けた。

そのまま悪魔LV3は己の豪腕を振ろうとする。超感覚がある截でもバイクに乗った固定された状況では、頭意外を狙った攻撃を避けることなど出来はしない。

悪魔がそれを振りぬけば、死は確定だった。

「ギユウワツ!？」

しかしその瞬間、悪魔の心臓を白柄ナイフが貫いた。

「左手は囷だ!」

截は冷たい表情でそう叫ぶと、ナイフを引き抜いた。キツネ直伝の部分囷だ。

おびただ夥しい血を撒き散らしながらその悪魔は地面を転がり直ぐに消えた。

直後に、截の目に志郎の大ピンチが映る。

「くうおおおお!」

志郎はトロツコの中で、悪魔に組み伏せられたまま必死に暴れている。しかし幾ら志郎が暴れようともその腕力の差は歴然だ。

悪魔LV3の顔がどんどん志郎の喉本に近付いていく。その前歯が、志郎の首の肉に僅かに刺さった。

「ぐうう——!？」

志郎は痛みに顔を歪めた。

「志郎さん!」

志郎のピンチを見た截は所持していた最後の小型ナイフを、その悪魔の側頭部に投げた。志郎に気を取られていた悪魔はその攻撃に気づくのが一歩遅れ、銃で撃ちぬかれたようにナイフに貫かれる。

だが、強化された体の所為か、大きな形の所為か、その攻撃のダメージは皆無だった。

「ギユウウアアアアア!」

何事も無かったように自分の顎に力を込め続ける。

——くそ、これ以上は……頸動脈に届く……！

志郎は最後の力を振り絞り、刺さったままの截の投げた小型ナイフを掴んだ。

「……——っうおおおおおおお！」

そしてそれを刺さったまま、全力で自分の体の方へ引き寄せた。ズザザザという様に大きく切り裂かれる悪魔の頭。

「ギユウウツアアッ!？」

さすがに痛かったのだろうか。悪魔LV3は思わず体を大きく仰け反らせた。

志郎はその隙にナイフを引き抜き、悪魔の心臓に一気に突き出す。悪魔の目と志郎の目が一瞬交差する。

「ッギユウオオオアアア!？」

志郎のナイフはしっかりと、見事に悪魔の心臓を貫いた。

志郎は悪魔の最後の雄叫びには一切構う事なくその体を蹴飛ばし、トロツコから突き落とす。

「朝奈！」

そして、自分の後ろでピンチにあっていであろう愛娘の方を振り返った。

「うつ!？」

倒れた状態のまま背中を悪魔LV3に踏まれ、朝奈は思わず痛

みから小さな悲鳴を漏らした。

ギシギシとトツロコの床が軋む。

自分の背中の骨がミリミリと僅かな音を奏でる。

前を見ても、後ろを見ても、截も志郎もまだ悪魔と戦闘中だ。自分で何とかするしかない。

「ギユウウオオオオ」

悪魔はそれが分かっていているからなのだろうか。いやに間を置きながら、ゆっくりと朝奈のうなじにその黄色い歯を近づけていく。

「朝奈さん！」

トロツコの先頭部に居た本は、歩き回れる人間の中で唯一悪魔に襲われていなかった。朝奈のピンチを知るやいなや志郎を飛び越え、朝奈の背中を踏んでいる悪魔LV3に、トロツコ内にあった鉄パイプで殴りかかった。

これは丁度截が志郎を救うために小型ナイフを投げたとの同時期だ。本は截が志郎を助けようとしているのを見たことで朝奈の救出を優先した。

鉄パイプが幾ら頭に叩きつけられようとも、悪魔LV3は何もされていなかのように、尚も朝奈に顔を近づけていく。

「くそ、もう投げられるナイフが無い、翠、借りるぞ！」

「え、ちよっ!？」

截はバイクを運転している翠の服に手を入れ、内臓されている小型ナイフを抜き取った。上腕部の裏と、太股、に内臓された二本の小型ナイフだ。

截はそれを朝奈に襲い掛かっている悪魔に投げようとした。

「ギユウウアア！」

しかしそれは出来なかった。真後ろから別の悪魔LV3が飛び掛ってきたからだ。感覚のおかげで攻撃は避けられたものの、截はその悪魔の攻撃を避けることに精一杯で、とてもじゃないが朝奈を助けることなど出来なかった。

「うつつうつ——あ………！」

苦痛の声を漏らす朝奈。段々と悪魔の顔が寄ってきているのが自分でも分かる。

「朝奈！」

パイプで今だ悪魔を殴り続けている本を押し退けると、志郎が朝奈の目の前に飛び出した。直ぐに手にしたナイフで悪魔LV3の頭を狙う。

だが、今度は先ほどのように上手くは行かなかった。

これだけ多くの人間が集まってくると誰でも気が散る。志郎のナイフを片腕で防ぎながら、悪魔LV3は煩そくに本の鉄パイプを掴んだ。

「え！？」

驚く本。

「きゃあ！？」

「うおおあ！？」

そしてその状態のまま悪魔は腕を横に薙ぎ、本を志郎に押し掛からせるように転ばせた。

「ぐうつ、朝奈あー！」

倒れながらも志郎は声を張り上げる。

「光だ！」

翠が三百メートルほど前方のトンネルの出口を見て呟いた。夜なので太陽の光ではなく月明かりなのだが、トンネル内が薄暗いためうやに明るく見える。

「ギユウウアアウアアア！」

これ以上時間をかけるのは危険だと考えたのだろう。朝奈を踏みつけていた悪魔LV3は腰を屈めると、一気にその歯を朝奈の首に押し当てた。

上 下の鋭い刃が朝奈の肉を抉り取ろうと、挟みこむように動く。
絶体絶命だ。

「……………！」

朝奈は自分の死を覚悟した。

バキッ！

その時、奇妙な音と共に背中 of 異物感が消えた。

わけが分からないまま目を開ける朝奈。すると自分の下にいたはずの雅子が、必死に悪魔の頭を両足で遠ざけている姿が目に入った。

「雅子さん！？」

激しい動きをしている所為で、腹部からだらだらと血が流れ出ている。その雅子の姿に朝奈は驚いた。

「あなたは、健太が命を懸けて守ったのよ。こんな所で死なせたりはしない。健太が……私の大切な人の死を無駄にしないためにも……！」

その顔は苦痛で一杯だったものの、はっきりとした口調で雅子はそう言った。

「こいつっ！」

雅子のおかげで起き上がる時間が出来たらしい。志郎と本は立ち上がると悪魔LV3の両腕を封じた。

「今だ朝奈、僕たちが十秒感染する前に早く止めを！」

志郎が叫ぶ。

「朝奈さん！」

本が強い眼差しで朝奈を見る。

「健太の……ためにも生きて……！」

雅子が両腕で朝奈の腰を押した。

朝奈は雅子に押される勢いのまま立ち上がった。懐から西洋風ナイフを取り出し、一直線に悪魔LV3に向かって構える。

「……お父さんは死んだと思ってた。何で、何でこれまで連絡してくれなかったの？」

「わ、私感染したのね……嫌よ！ 嫌！ 死ぬことは怖くなかったけど、化け物になんてなりたくない……！ 朝奈ちゃん助けて……！」

『雅子に……伝えてくれ……こんなこと、人前で言うのは抵抗あるけど……愛してるって……』

「いい加減に、私たちの前から消えて！」

朝奈は目を見開き勢い良くナイフを突き出した。

その銀色の刃はしっかりと、確実に、まるで朝奈の魂が竦っているかのように、悪魔の心臓を貫いた。

「ギユウウオウアアア!？」

苦しみの声を上げる悪魔LV3。

「みんなっ——捕まれ! トンネルから出るぞ!」

翠が大声をあげる。

しかしその直後に截が辛そうに叫んだ。

「——駄目だ間に合わない!」

刹那、追ってきていた無数の悪魔が、一気にバイクとトロツコに覆いかぶさった。

<第十六章>自由の肖像（中篇）（後書き）

前半、あれだけ死ぬような雰囲気をもし出していたのに・・・普通に志郎生存しましたね（笑）

さあ、残す所あと二話（後編とエピソード）のみです。
是非最後までお付き合い下さい！

<第十七章>自由の肖像（後編）

<第十七章>”自由の肖像（後編）”

「きゃああああー!？」

激しく横転しながら転がるトロツコから、朝奈は振り下ろされたトンネルから出た直後にある草の上に体を強くぶつける。

「……—うう、みんな……!」

朝奈がトロツコの方へ視線を向けると、トロツコを挟んで反対側に尋常では無い数の悪魔LV3が群がっていた。

その直ぐ近くでは截のバイクも同じように転がり、近くで截と翠が共に倒れている。

「いやああああー来ないで!」

雅子が叫ぶ声が聞こえた。

——雅子さん!

立ち上がろうとしたが体が全く言うことを効かない。腰から下の感覚が一切無いのだ。

朝奈はそれでも何とか体を動かし、そこへ視線を向け続けた。僅かにトロツコの向こう側にはみ出ている腕が見える。三上のもののようにだ。

「みんなを、助けないと……」

朝奈は必死に腕の力のみで体を前進させた。こんな状態の自分が行っても、何の役にも立たないことは分かりきっているはずなのに、どうしても行かずにはられない。

やっと紀行園から出れた。

地獄から抜け出せたのだ。

こんな所で、ここまで来て死ぬなんて許せるわけが無い。

認められるわけが無い。

「三上さん、本さん——翠さん、截さん……」

仲間の名前を呼びつつ、朝奈は汗を流しながら腕を動かし続けた。

「お父さん……！」

自分のここに来た理由であり、愛する家族の名前を呟く。

だが、返事は無かった。

三上も、本も、翠も截も志郎も——いつの間にか雅子の声すら消えている。

「お願い……みんな生きてて……！」

朝奈は藁にも縋る^{すが}気持ちで祈った。

なんとかトロツコまで辿りつくと、トロツコの反対側——つまり内側の方から、朝奈の耳に不快な、背筋の青くなるような声が聞こえてきた。

グチャグチャ、バキボキ……

明らかに何かを痛めつけている音だ。

それが何かは考えたくも無い。朝奈は吐き気を覚えながらも、両手をトロツコの上に乗せた。そしてそのままゆっくりと体を起こしていく。

徐々に反対側の景色が見えてくる。

遠くにまで広がる緑色の草。

金色の三日月。

星がはつきりと映った明るい夜空。

そして、トロツコのまさに目の前で、朝奈は信じられないような光景を見た。

紀行園北 6 k m 地点 午後 8 : 1 1

綺麗な金色の月明かりに照らされた茶色の髪を風になびかせながら、朝奈は真つ黒な海を見つめた。

どこまでも永遠に続いているような先の見えない濃い海だ。

静か過ぎるぐらいに波の音以外何も聞こえない。

朝奈はしばらくそれを十分に眺めると、目の前の小船に向かって一歩を踏み出した。

足を乗つけた瞬間、僅かに揺れる船。

だが朝奈はそんなものには全く構うことなく平然と船の上に降り立つと、ゆっくりと後ろを振り向いた。

そのまま背後の草原に立っていた二人に向かって寂しそうな微笑を浮かべる。

「これで……良いんだな」

その微笑を見つめながら、截は静かに問いかけた。

「うん。お父さんと一緒だし、私にはこれが一番良い選択だと思う」
朝奈は迷いの無い目で即答する。

「黒服に入れば、イミユニティーから逃げ続ける必要は無いんだぞ。別に戦闘員以外にだって私らが推薦すればなれるんだから」

截の横に立ったまま翠が残念そうに言った。

「ありがとう翠さん。でも、私はもう決めたから。私は黒服にもイミユニティーにもディエス・イレにも入らない。お父さんと一緒に自分たちのやるべき道、自分たち自身で考えた『自由』のために生きるよ」

「後悔しないんだな。もう今までのようには生きれないんだぞ？」

「分かってる。真剣に考えたから……」

翠の脅すような確認の言葉にも一切動じず、朝奈は頷いた。

「そうか。そこまで言うのなら私はもう何も言わないよ」

朝奈の確かな意思を感じたのだろう。翠は軽く首を傾けながら、僅かに微笑んだ。

「朝奈、出発の用意が出来たよ。もう二人にお別れの挨拶をしない」
い

船の操縦室から出てきた志郎が三人を見て言う。

「博士、あの三人の様子は？」

截が真剣な顔で聞いた。

「大丈夫、心配ないよ。本さんも、雅子さんも、三上さんも無事だ。今は疲れが溜まってたのか、全員船室で寝てるよ。まあ、無理も無いけどね」

「そうですか。全員無事みたいで良かったです」

その言葉に安心したような素振りを見せる截。

志郎はそんな截を手招きで船の近くにまで寄せると、自分も船の端にまで歩き、他の人間には聞こえないような小声で呟きだした。

「悟くん。本当にありがとう。おかげで娘を助ける事ができた。全部君のおかげだ。感謝してもしきれない」

「そんな……僕は殆ど何もしてませんよ。朝奈が生き残れたのは彼女自身の力です。僕はただその補佐をしたただけだ。寧ろ礼なら彼女にして下さい。あなたを助けたのは彼女なんですから」

截は照れたように言った。

「いや、本当なら君を巻き込むべきじゃなかった。……悪かったね、水憐島に行く筈だったんだろう？ 僕の所為でキツネに大目玉だね」
「別に構いませんよ。それに、運良くキツネが水憐島で死んでるかもしれませんし」

「君は……まだキツネの事が憎いんだね。当然といえば当然だけど」
「当たり前ですよ。あいつは僕の全てを壊した。大切なものを奪っていった。絶対に許せるわけがありません。今でも隙あら殺したいくらいですよ。まあ、その隙なんて見たこと無いですけどね」

「……——君の為に一言言っておく」

志郎は真剣な表情で截を見た。

「キツネを憎む気持ちは分かる。僕も同じ立場だったら許すことは出来ないだろう。だけどね……一つの憎しみに囚われすぎて周りを見えなつては駄目だ。君の憎しみはもつともだが、頑張つてそれを押さえ込み、よく周囲の様子を観察して見るんだ。きっと色々と分かってくるものがあると思うから」

「……どういう意味です？」

截は志郎の意味深な言葉が理解出来なかった。

「まあ——……今の君にはまだ無理か。でも僕の今の言葉を心に忘れずに刻んでいてくれ。いつかきつと君の助けになるから」

「……分かりました」

志郎があまりに真剣な顔で言うので、截は疑問の言葉を飲み込み頷いた。

「ああ、そうだ。忘れる所だった。朝奈に超感覚者のデーターがつまっているメモリーを持たせてる。後で受け取ってくれ。きつと君の役に立つと思う」

「超感覚者のデーター……すぐに貰います」

截は翠と話している朝奈を横目で見ると、そう言った。

「もう一つ。これは正直言っても良いのか迷う所だけど、君を信じて言っておくよ」

「何です？」

「イミユニティのボス、六角行成の居場所だよ」

截は耳を疑った。

「東郷さんが強襲計画を立てていたからね。その際に知ったんだよ。

……六角行成は「常世国」に居る。彼はあそのオーナーだ」

「常世国？ あの内都市の……？」

截は志郎の言葉に驚きの声をあげた。

「そうだよ。表向きには別名で名乗っているかも知れないけどね。

ほぼ間違いなく六角があその所有者だ」

「なぜそれを僕に？」

「君は『知っておくべき』だと思ったからだよ。この言葉をどう捉えるかは君次第だ。これについては僕は多くは語らない。あとは自分で考えて自由に行動してくれ」

志郎は截がどうするか分かっていながらも、敢えてこんな言い方をした。

「六角行成は……キツネに劣らず僕にとっては憎むべき対象だ。あなたがそれを僕に教えるということは何を狙っての事が容易に分かる。はぐらかさないで下さい」

「はぐらかしてなんかいないよ。僕はただ事実を教えたただけだ。六角行成は超感覚者計画の発案者であり、常世国は超感覚者研究の中心だった場所。きっと何か得るものがあるんじゃないかい？」

——そして、気づいて欲しい。この世界の裏に、イミユニティ、デイエス・イレ、黒服の本当の關係に。

志郎はその言葉を最後に、截から離れた。

「いいかい、さっきの言葉を忘れ無いでくれよ。憎しみを乗り越え、良く周りを見るんだ」

最後に駄目押しのように言うと、船の中へ戻っていった。

「周りを……見る……」

截はその言葉を頭の中で何度も反芻させながら船を見つめた。

「截さん！」

だが突然、朝奈が後ろから声をかけてきた為思考を中断させられた。

「もう時間だから、私そろそろ行くね」

「……そうか。短い間だったけど、これでお別れとなると寂しくなるな。お元気で、朝奈さん」

截は右手を差し伸ばした。握手をしようと思ったのだ。

だがその瞬間朝奈は截に抱きついた。

「ちよつ——……朝奈さん！？」

「截さん。截さんが居なかったら私はここまで頑張れなかった。諦めてた」

「そんな事無いよ。朝奈さんは俺が居なくても十分にやれたじゃないか」

「うっん、截さんが最初に助けてくれたから頑張れたんだよ。あの時截さんに会わなかったら、きっと直ぐにお父さんを助けることを諦めて悪魔に殺されてたと思う」

「朝奈さん……」

「だから、言っておくね。截さん、本当にありがとう。感謝してます」

「ははは、親子そろって大げさだな」

截は自然に笑った。

その笑顔は作り笑いでも、愛想笑いでもない、正真正銘の笑顔だ。かつて、庄平や鈴野という親友に向けていたような――

截から離れると朝奈は翠にも抱きついた。

「ありがとう翠さん」

「あ、ああ。元気でやれよ！」

何故か截以上にあたふたした反応を見せながら、翠も笑った。めったに見せる事のない暖かな笑顔で。

あの時朝奈が見たものは、悪魔Lv.3の集団が苦しみ暴れている姿だった。自分の体を地面や岩にぶつけながら気が狂ったように彼らはもがいていた。

「……なんだ？ 寿命にしては速すぎる……どうなってるんだ？」

悪魔の叫び声で今日が覚めたのだろうか。寝転んだままバイクの横で、截が疑問の声を漏らした。

「これは……抗イグマ剤……！」

同じように目を覚ました志郎がトロツコの中で呟く。

「イミュニティー……！ 周囲五キロ全てに抗イグマ剤を撒いたのか。幾ら人手が無かったとはいえ随分慎重にやったもんだね……！」

「お父さん！」

朝奈は志郎の声を聞き、嬉しさと安堵感のあまり涙を流した。

「おいおい、何泣いてるんだい朝奈。僕はどこも怪我なんかしてはいないよ」

照れくさそうに、嬉しそうに朝奈の頭を撫でる志郎。

「ギユウウアアアア……ア……」

段々と悪魔の声が小さくなっていく。

朝奈はその姿を物思い気に見つめた。

元は人間だった者。

自分たちと同じように生きて普通の暮らしを送っていた存在。

それがたった僅かな細胞によって変わってしまった。

「悲しいね……」

誰に呼びかけるでもなく朝奈は声を漏らした。

「ああ、悲しいね」

志郎がそんな朝奈の言葉を復唱するように頷く。

「朝奈、僕にはまだやらなくてはいけない事がある。こういった人たちをこれ以上生み出さないためにも……。だから――」

「一緒にはいられない？」

朝奈は僅かに強い声で聞き返した。

「ああ、そうだ。僕についてくればお前を危険な目に合わせるし、国からも追われる事になる。そんな目には合わせたくないんだ」

「今更何言ってるの？　ここまで巻き込んでおいてそれは無いよ！」

「すまない。今回の事は本当に僕が悪かった。でも——」

「お父さん。お父さんが居なくなってから、私は一人ぼっちだった。もちろんお母さんは居たけどいつも仕事で家に居る事が殆ど無かった。また私を一人にする気なの？」

「朝奈、分かってくれ、僕は……」

「お父さん、私はもう子供じゃないよ。自分の事は自分で判断するし、どうするかも自分で見つける。だから……お父さんが何を言っても私の気持ちは変わらない」

「本当に、僕に付いてくる気なのかい？」

志郎は信じられないといった表情で朝奈を見た。

「当たり前じゃん。どんな事をしてでも付いていくよ。あ、でもお母さんもちゃんと連れて行ってね。大切な家族なんだから」

「……分かったそこまでお前が言うのなら……もう僕は反対はしないよ。和江も、無事に身を隠せるようになってから、上手く連れ出そう」

朝奈の覚悟を理解したのだろうか。志郎は何かが吹っ切れたように頷いた。

「もう決してお前を一人にはしない。今回のことではつきり分かった。僕はまたアヤメのように家族を失うのが怖かった。だからお前と和江の下を離れた。——でも、今思えばただ逃げただけだったのかもしれない。朝奈、僕はもう逃げないよ。誰かを失うことが怖ければ、失わないように強くなればいい。誰かを守りたければ死ぬ気で守ればいいんだ」

「それでこそ私のお父さんだよ！」

朝奈は満面の笑みで志郎の顔を見上げた。

「博士、紀行園から出たのはいいいけど……これからどうするんだ？　私らは黒服に戻るけど……一緒にくるか？」

バイクを立てながら翠がずけずけと聞く。

「いや、僕は実は元々逃走手段を用意してたんだよ。この先二キロほどに小船を置いているんだ。もちろん偽名でね」

「またディエス・イレに入るんですか？」

翠の横に立つた截が、神妙な顔で聞いた。

「そんな気はないよ。僕は好きでディエス・イレに入ったわけじゃないしね。これからは……自分自身の力で戦うよ。ディエス・イレで知り合った色々な伝手もあるし、心配しないでくれ」

志郎は朝奈の顔を振り返りながらそう言った。

遠ざかっていく陸地を見ながら、朝奈は今日一日のことに思いを馳せた。

父を探しに紀行園に来たこと。

いきなり悪魔が現れてフリーゾーンに隠れたこと。

截と一緒に麒麟と戦ったこと。

フリーゾーンの面々を救えなかったこと。

翠とともにライオンの化け物と戦ったこと。

健太が死んだこと。

父と共に生き延びたこと。

信じられないような経験をたった数時間の間に味わった。

それが自分にとって良かったのかは正直分からない。知らなければ良かったという気持ちも無くは無い。でも、こうして無事に生き延びれた。父再開出来た。

だから朝奈は後悔はしていない。自分で決めたことなのだから。

「朝奈さん、いいの？」

いつの間に後ろに起きたのだろうか、船の後部から截らが居る場

所を見つめ続ける朝奈に、心配そうな顔で雅子が呼びかけた。

「あの人のこと、好きだったんでしょ？」

今まさに朝奈が考えていたことをずばり言い当てる。

「うん……」

朝奈は静かに頷いた。

「今ならまだ引き返せるし、ちゃんと自分の気持ちをつた方がい
よ。私みたいにいつ生き別れになるかも分からないんだから」

「……いいの。截さんは……なんだか心に決めた人が居るみたいだ
った。無意識かもしれないけど、私を見るとときもいつも誰かと重ね
るように見てた。きつと、私が思いを伝えても……結果は見えてる
よ」

「朝奈さん……」

「あ、そうだ、健太さんから伝言！」

朝奈は話を変えるように明るく声を出した。

「健太が？」

健太という響きに一瞬くらい顔を浮かべる雅子。

「健太さんは最後の最後まで雅子さんのことを思ってた。愛してる
って言ってた。きつと……会えずに終わっちゃったけど……雅子さ
んとはいつでも繋がってたと思う。だから、きつと今もどこかで雅
子さんのことを見てるよ。俺の分まで生きるとかカッコ付けながら
ね」

「……そうだったら、嬉しいね」

雅子は星空を見上げながら呟いた。月明かりの所為か、涙の所為か、
その瞳は美しい光を放っている。

きつと健太との楽しかった思い出を思い出しているのだろう。
星の数に負けないくらいたくさんさんの思い出を。

朝奈は雅子を一人にしそつと船室に入った。

船室では志郎が疲れた顔で舵を切っている。

「朝奈、もう寝たらどうだい。疲れてるだろ？」

「うつん、大丈夫。お父さんこそ寝たら？ 私が操縦するから」

「おいおい、お前に任せたら折角生き伸びたことが無駄になっちゃうよ。操縦は僕に任せて素直に寝なさい」

志郎は子供に言い聞かせるような口調でそう言った。

「ふふふ、分かった。じゃあ、お言葉に甘えて寝るね」

朝奈は下の根室へと通じる梯子に手を掛けた。

そのまま一気に降りる事はせずに志郎の背中を見つめる。

小さい頃からずっと自分を守ってくれた。

助けてくれた。

大きな背中を。

この先何が待っているかは分からない。

どんな人生を歩むかも分からない。

明日には死ぬかもしれないし、生きているかもしれない。

でも、それが人生というものだ。

自由というものだ。

大西は、この世は既にこの世であるだけで、完全自由な世界だと言っていた。

それはある程度真理を突いているだろう。

でも、朝奈はそれが全て正しいとは思わなかった。

自由とは自分で決めるものであり、決められるものではない。

自分自身が判断し、己を導いていくものだ。

いわば、目標に向かって突き進むその心の存在こそが、本当の意味での自由だと思う。

これからの自分たちの未来を考えながら、朝奈はそつと呟いた。
「おやすみなさい、お父さん」

「行つたな」

暗い海を見ながら截が言った。

「雅子や本とかは、どっかの港に着いたときに下ろすそうだ。あいつらは志郎と違ってイミユニティーに敵対していないからな。放つておいても大丈夫だと考えたんだろ」

「志郎さんが行く前に言っていた。六角行成の居場所を」

「六角行成の居場所？ …… どうするんだ？」

答えが分かっているはずなのに聞く翠。

「翠、俺は……これから本格的に行動に入る。もしかしたらもう黒服にも居られなくなるかもしれない」

「黒服にも探りを入れるのか？」

「ああ、最近やっと気づいてきた。こつちの世界の力関係は何かがおかしい。そもそも黒服の存在理由自体が分からない」

「あまり深くまで首を突っ込むと殺されるぞ？」

翠は脅すように、心配するように截の顔を見つめる。

「俺はもう三年前に死んでいるんだ。今更どんな脅しも怖くは無い。

翠——…俺、やるよ。もうイミユニティーを倒すとかじゃなく、真実を見つけないんだ。一体何が起きているのか。イミユニティーが何をしようとしているのか」

「……本気なんだな」

翠 は溜息をついた。

「あんたがいつかは何かする気だつてことは知ってた。パートナーになったあの時からな。じゃあ、私たちの関係もこれで終わりか…」

……

「そうなるな。俺は……出来るだけバレない様に行動する気だけど、上手く行く保障はない。だから……」

「キツネに頼んで相棒を解消しようってか？——ふざけるなよ！
これだけ一緒に行動しておいて、今更別れたって上が信用するはずがないだろ。……付き合ってたやるよ。どこまでも」

「翠……？」

「私も個人的に知りたい事があるんだ。お互い、利害は合ってるだろ？」

「後悔しても知らないぞ？」

「誰が後悔するか、私が自分で決めたことなんだ。例え直ぐに死ぬ事になっても、あんたについていくよ。……相棒だからな」

翠は最後の部分だけ僅かに照れたように声を落として言った。

「……分かった。一緒にやろう。この世界の真実を、この不条理な世界を変えてやろう……！」

庄平や鈴野、イグマ細胞に関係して死んでいった多くの人のためにも、やるべきことがある。それまでは何がなんでも死ぬわけには行かない。

截は決意を胸にバイクに跨った。翠もその後ろに腰を落ち着かせる。

「しっかり捉まって振り落とされるな！」

「誰が、振り下ろされるか。お前こそ運転をミスって事故るなよ」

截はアクセルを力いっぱい握った。

まるでこれからの自分の決意を表すように。

覚悟を決めるように。

ただ、真っ直ぐ先に先に見える三日月を目指して。

<エピソード>

<エピソード>

一台のヘリが飛んでいた。

軍用のものなのか、かなり大型のヘリコプターだ。

「あとどれくらいで着く？」

その中で補助席に座っている、能面のような顔をした女性が操縦士に聞いた。

「今…… 大体静岡県を出たところですので、まだ結構かかりますよ。お休みになつてはいかがですか？」

達磨のような小太りの操縦士が、あからさまに作った笑顔で答える。

「こんなに気が高ぶっている状態で寝れるものか。くそ、伊藤を紀行園の警察相手に残しておくべきじゃなかったな。八つ当たり相手が居ない」

石井は心底残念そうにそう言った。

ガタンッ！

何かが石井の耳に聞こえた。丁度真後ろから鳴ったようだ。

今このヘリに乗っている人間は自分と達磨のような子男だけ。背後から音が聞こえるはずが無い。

石井は気の所為だと、確認もせずに自分を納得させた。

そのままふと思い出した様に独り言を話した。

「高橋志郎をディエス・イレに引き渡したのは間違いなくキツネだ。あの男め…… イミュニティーに内緒でそんなことをするとは……」。

昔から怪しい奴だとは思っていたが、やはり何かたくらんでいたか。まるで六角行成と高橋志郎の接触を防いだかのようだ。あいつの立

場からして六角行成に敵対するとは思えないんだが……まあいい。全ては私が六角に話せば明らかになる。それまでは、じっくりこの事実を楽しもう」

ザッ……ザッ……

今度は明らかに足音のような音が背後から聞こえた。

流石に石井もこれが気の所為とは思えなくなつた。

——ヘリが飛び立つ前にディエス・イレのスパイでも紛れ込んだか？

前を向いたまま懐のナイフを片手に持ち、シートベルトをこつそりと外す。

ザンツ！

足音がまさに自分が腰掛けているシートの真後ろにまで来た瞬間、石井は勢い良くナイフを突き出し、振り返つた。

そして——そのあまりにも予想だにしない、ありえない光景に愕然とする。

「——ばっ、馬鹿なっ！？ 何故お前が……！？」

長い強めの癖毛に高い身長。石井の目の前に東郷大儀が立っていた。

「何故だと？ 俺はずっとここに居た。お前が俺をこのヘリに運び込んだんだからな」

口元を緩ませながら面白そうに笑う東郷。その右腕は赤く大きくなり独特の形を形成している。

「ま……まさか……！ 東郷、お前！？」

「そうだ、赤鬼は俺だ」

その言葉と同時に、東郷は石井の心臓を真つ赤な右腕で貫いた。「がっ——！ ぐあっああ……！？」

尋常では無い量の血がヘリの床に流れ落ちる。

「くっ、そ……おい、操縦士、ヘリを落とせ……こいつを殺すんだ……！」

僅かに残った意識で石井はそう呟いた。だが——

「何故ですか？ 私の仕事は赤鬼、つまり東郷さんを運ぶことです。何で落とす必要があるんですか？」

「なっ、何だとお前！？」

「煩い。さっさと去れ！」

東郷は石井の体をへりから投げ捨てた。

瞬く間に見えなくなる石井の姿。

そんなものには一切構うことなく、東郷は操縦士を見た。

「……タヌキ、ご苦労だった」

「いえ、とんでもない。私は東郷さんのためならどんな事でも出来ます」

「すまないな、お前には本当に感謝している」

「これからどういたしますか？」

「決まってるだろ。イミユニティーを潰す。既に準備は整っているんだ。俺の体の暴走も大分収まってきたことだし、もう問題は無いはずだ」

「かしこまりました。では……直ぐにアジトへ向かいます」

タヌキは笑顔で操縦桿を倒した。

「ふふふ、待っている六角行成……もう直ぐ、もう直ぐ……ふはははははっ！」

三日月の出ていた空は曇り始め、大きな不快な闇だけが空を満たしだしていた。

まるで東郷の心を表すかのように。

ただ暗黙と……。

<エピソード>（後書き）

ご愛読ありがとうございました！

これにて尋獄2は完結です。

いつになるかは分かりませんが、番外編の2本をそのうち投稿いたしますので是非御覧下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0916g/>

尋獄 2 (SURGE GARDEN)

2010年10月8日13時18分発行